生きる証

岩手県大槌町　東日本大震災記録誌

岩手県大槌町 東日本大震災記録誌

生きる証

岩手県 大槌町

題字は安渡出身の永井さん
「尊い命に感謝」

表紙と大扉の題字「生きる証」の墨跡は、町立大槌学園出身で県立盛岡第一高校1年生の永井瑚夏（ながいこなつ）さん（16）の作品。毛筆を執る際、「生きる」ということに深く思いをはせたという。

震災当時、永井さんは安渡地区在住で町立安渡小学校（2013年閉校）の1年生。校庭で大津波を目撃し、「黒い煙」が町をのみ込んでいく光景や、大人たちに手を引かれながら土手の斜面を駆け上って避難したことを今も「鮮明に覚えている」。

かわいがってくれた近所のおばさんや身近な人たちが津波で亡くなり、ショックを受けた。「『生きる』という震災記録誌の題名を聞いて、前向きな印象を受けました。亡くなった人たちの顔を思い出し、改めて感謝の気持ちが湧き起こりました。私もまた尊い命を生きています」

書道は震災の年、避難先の八幡平市で母・麻起（まき）さん（40）の勧めもあって本格的に始めた。「私はこれから感謝の気持ちや自分の願いを大切にして人生を歩んでいきたい。そして、いつか誰かを支えることができる人間になれれば」。こんな思いを胸に日々、書に向き合う。盛岡一高でも書道部に属し、腕を磨く。

●表紙絵／東日本大震災の津波と火災で、多くの尊い人命を失い、壊滅した私たちの町。震災から9年目、城山の頂上付近から眺望した中心街の町方地区と大槌湾の風景をモノクロのイラストにした。何もなくなった町には徐々に住宅や商店が建ち、町文化交流センター「おしゃっち」も2018（平成30）年に完成した。この町に色を付けるのは、町民の皆さん一人一人――。表紙絵に、そんな思いを込めた。

記憶の中で生きる、私たちのふるさと

―参加者―

田中 正道
佐々木 結菜
佐々木 慎也
三浦 拓也
松橋 郁子
越田 征男
臼沢 望鈴

（敬称略）

臼沢望鈴さん

2018（平成30）年11月、末広町の町文化交流センター「おしゃっち」に集まったのは、10代から60代の町民の皆さん。東日本大震災以前の町内の写真を並べ、それぞれの記憶に残っているふるさとの風景を選び出した。子どもの頃に遊んだ場所、通学途中の思い出の風景、にぎやかに町を練り歩くお祭り行列……。

参加した年長者は、選んでいる間に、その風景にどんな思い出があるかを語りだす。そして、同じく参加した高校生たちは、その言葉に耳をじっと傾けている。自然と世代間交流が行われた。かつてここにあった建物、風景、そして、人の暮らしは、新鮮な響きを持って、高校生たちの心に響く。それは大人たちから若者たちに対して行われた「町の歴史」の授業のようでもあった。

町方地区（末広町）／末広町商店街

友達の家へ遊びに行く時によく通った道。
「よ市」で買い物を楽しんだ記憶がある。
（三浦拓也さん）

町方地区（大町）／町立図書館

城山から見下ろす市街地と大槌湾

町を高台から撮影していて、
感じ取れるものがたくさんあった。
遠くにひょうたん島（蓬莱島）も写っているのがいい。
（佐々木結菜さん）

町方地区（上町）／旧大槌小学校前歩道橋

町方地区（上町）／小鎚神社

町方地区（本町）／大槌駅

高校生の頃、列車で通学していた。
列車の中から見えた大槌駅のホーム。
青春時代を思い出します。
（松橋郁子さん）

吉里吉里地区／吉里吉里漁港

漁港の昔の写真を初めて見た。
（佐々木慎也さん）

上町

全ての写真に思い出があり
選ぶのが難しかった。
祭りの行列も本当に懐かしい。
（越田征男さん）

安渡地区／漁港付近水門

吉里吉里地区／吉里吉里フィッシャリーナ

祖父と散歩に来ていた思い出の場所。
小学校の頃も「まち探検」で来ていた。
（臼沢望鈴さん）

浪板地区／浪板海岸　大寒みそぎ

町方地区（上町）／大槌小学校

町方地区（大町）／図書館付近

浪板地区／
浪板海岸から望む野島の朝日

町方地区（本町）／大槌郵便局裏

友達の家の裏。
この坂を登っていくと中央公民館につながっていた。
よくこの辺りでかくれんぼや缶けりをして遊んだ。
（田中正道さん）

大槌高校復興研究会が見つめてきた

大槌町の風景

東日本大震災で、県立大槌高校は避難所としても大きな役割を果たした。その大槌高校の生徒たちが、2013（平成25）年に立ち上げた復興研究会。町内約180カ所で定点観測を行い、町の変化を写真に収め続けている。若者たちが見つめてきた震災前と震災後の町の風景の変化をここに紹介する。

震災前

2014年4月

2019年5月

浪板海岸駅（なみいた）
（浪板地区）

駅舎はなくホーム上に待合室がある無人駅。2019年3月23日、JR東日本から三陸鉄道に移管され、列車の運行が再開された。

～高校生の感想・思い出～
駅のことを思うたびに
小さい頃を思い出す。

震災前

2014年4月

2019年5月

吉里吉里海岸（きりきり）
（吉里吉里地区）

吉里吉里の地名の由来は、アイヌ語で「白い砂浜」の意味。砂の上を歩くと「キリキリ」と鳴るからという説もある。夏には海水浴客でにぎわう。

～高校生の感想・思い出～
朝5時に集合して
清掃活動を行っていた。

震災前

2013年9月

2019年5月

蓬莱島（ほうらい）
（赤浜地区）

「ひょっこりひょうたん島」の愛称で呼ばれる。東日本大震災の津波で一度失われた灯台も再建され、大槌湾にかわいらしい姿を浮かべている。

～高校生の感想・思い出～
大槌と言えば！

震災前

2014年9月

2019年5月

大槌稲荷神社
（安渡地区）

毎年9月下旬には、大槌稲荷神社と小鎚神社の例大祭が行われている。2018年には、震災後は行われていなかった大槌湾での引き船が復活した。

～高校生の感想・思い出～
盛大な祭りをした。
鳥居が欲しい。

2014年4月

2018年12月

震災前

末広町周辺（すえひろ）
（町方地区）

かつての商業の中心地。常連が集う飲食店や多くの商店が立ち並んでいた。

～高校生の感想・思い出～
盛り土が進んでいた。
電柱が増えた。

震災前

2014年9月

2019年5月

上町古廟橋付近（かみちょうこびょうばし）
（町方地区）

町方の住宅街と大型商業施設をつなぐ道路。多くの町民が行き交い、バスの乗降にもよく使われていた。

～高校生の感想・思い出～
住宅の建築を進めて、
住民の日常の生活を
取り戻してほしい。

2013年4月

2019年5月

震災前

大槌駅
（町方地区）

町の玄関口。主に釜石方面への通勤・通学客が往来した。三陸鉄道リアス線の新しい駅舎のデザインは町民投票を行い決定した。

［高校生の感想・思い出］
列車が通るのを
楽しみにしていた。

はじめに

町のシンボル蓬莱島を背に集った町民の皆さんと平野公三町長（左から2人目）

今、これからを「生きる」

大槌町東日本大震災記録誌『生きる証』の発刊に当たり、まずは震災でお亡くなりになった870人の方々に心から哀悼の意を捧げるとともに、現在も行方不明である416人の方々が一日も早くご家族の元へ帰られることを願ってやみません。

東日本大震災津波から8年が経過し、復興が進む一方で、当時の惨状と記憶を風化させず、事実と教訓を確実に後世に伝えていくことが震災で生き残ったわれわれ町民の重要な責務であると強く感じており、この記録誌に寄せる思いは並々ならぬものがあります。

震災記録誌の作成に当たり、町の被災と復興の過程を克明に書き記すことはもちろん、町で生きていく方々の力強い声や、ご支援への心からの感謝を「町民自身の言葉」として伝えることを大きな柱に据えてまいりました。

そして、表舞台には出なくとも、縁の下の力持ちとして復興に貢献された町内外の方々にも登場していただくなど、本誌は町民や支援者が主役の「血の通った」記録誌と言うことができるかもしれません。「あの日から今を生き、これからも生きていく」――。そんな感慨を込め、この震災記録誌を『生きる証』と名付けました。

未だ復興のさなかにある大槌町ではありますが、世界中から手厚い支援を頂き、着実に前進しております。新しいまちづくりに関わってこられた全ての方々一人一人に、心から感謝の気持ちをお伝えしたい思いでいっぱいです。

この記録誌が多くの方々の目に触れることにより、震災の教訓と反省を後世に継承し、今後起こり得るあらゆる災害で一人も犠牲者を出さないことの一助になれば、と切に願っております。

2019年（令和元年）7月
大槌町長　平野 公三

目次

岩手県大槌町 東日本大震災記録誌 生きる証

002 記憶の中で生きる、私たちのふるさと
008 はじめに
010 目次

第1章 013 大槌町とは

014 町の概要
016 町の歴史
018 【Episode file】あのころの大槌　内金﨑 大祐さん

第2章 019 東日本大震災とは

020 地震・津波の概要と被害
024 【Episode file】大槌の津波　小林 正人さん

第3章 025 私たちを襲った津波

026 「平成の大津波」襲来
028 大槌町の被害
030 津波火災の猛威
032 各地区の被害
　吉里吉里地区／浪板地区／赤浜地区／安渡地区／町方地区／沢山・源水・大ケ口地区／小枕・伸松地区
046 【Episode file】大槌の津波　小國 峰男さん

第4章 047 震える、惑う 緊急期の町

048 発災直後
　1日目／2日目／3日目
062 町民の証言
　越田 征男さん／高木 正基さん／髙橋 和夫さん／赤﨑 仁一さん

第5章 069 逃げる、救う 応急期の町

070 災害対策本部の設置
072 避難の状況
　吉里吉里地区／赤浜地区／安渡地区／町方・沢山地区／小枕・伸松地区／桜木町／金沢・小鎚地区
085 在宅避難者の状況
086 支援物資分配
087 医療活動
088 救助・捜索活動
090 燃料・電力の確保
091 犠牲者への対応
092 遠野市の後方支援
094 【Episode file】避難所の日々　真壁 香利さん

第6章 095 直す、立ち上がる 復旧期の町

096 がれきの撤去
098 道路
100 水道・ガス
102 教育
104 医療
106 心のケア
108 応急仮設住宅
110 災害公営住宅
112 水産業
114 農林業
116 商工業
118 仮設商店街・事業所
120 郷土芸能・祭り
122 応援職員の活動
126 立ち上がる人々
　おおつちありがとうロックフェスティバル／一頁堂書店／大槌陣屋／はまぎく若だんな会／おらが大槌復興食堂
136 【Episode file】広報おおつち

第7章 137 集まり、支える ボランティアの活躍

138 ボランティアセンターの運営
142 初期の状況
144 中期の状況
146 後期の状況
148 支援者はあの時
　トヨタ自動車東日本株式会社岩手工場／認定NPO法人グッドネーバーズ・ジャパン
150 明治学院大学の活動
152 【Episode file】ボランティア　巖洞 秀樹さん

第8章 153 「新しい町」をつくる

154 町民主体のまちづくり
　吉里吉里地区／赤浜地区／安渡地区／町方地区／沢山・源水・大ケ口地区／小枕・伸松・浪板地区
166 新しい町の取り組み
　町文化交流センターおしゃっち／小中一貫教育／復興まちづくり大槌株式会社／コミュニティー形成支援
172 【寄稿】坂口 奈央
　おらほのまちは、おらほで――大槌町の復興まちづくり
174 【Episode file】まちづくり　中井 祐さん

第1章 大槌町とは

気候や地理、産業などの特色から大槌町を紹介。
縄文時代までさかのぼるこの町の歴史をひもとき、
かつて襲来した津波についても触れる。

町の西端に位置する新山（しんやま）高原はレンゲツツジの名所。背景は風力発電の風車

第9章 この町と、人と 175

176 この町で生きていく
大槌高校生が聞いた16人の東日本大震災
髙橋 英悟さん／佐藤 壽さん／煙山 佳成さん／東梅 守さん／東梅 英夫さん／芳賀 正彦さん／齊藤 和希さん／菅野 祐太さん／芳賀 博典さん／金﨑 伊保子さん／一般社団法人おらが大槌夢広場／おおつちおばちゃんくらぶ／末広町商店街／一般社団法人Tsubomi

206 【寄稿】指導者はこう思う
この町を心に
前川 剛大さん／平野 恵里子さん／ノリシゲさん

214 【Episode file】東北大学社会学研究室

第10章 「ありがとう」を今こそ 215

216 あの日、あの時の小中高生から
218 みんなからありがとう
220 今、伝えたい 感謝の言葉
222 言葉以上の恩返しを 東 あずささん

第11章 忘れず、伝える 223

224 旧庁舎で何があったか
240 風化に抗う
納骨堂／鎮魂の森／生きた証

242 【寄稿】坂口 奈央
旧庁舎へのまなざし――保存と解体、二つの論理の背景にあるもの

資料編 245

246 被災概要
250 復興の歩み ―大槌町の8年―
254 参考文献・取材協力・制作スタッフ

凡例

- 震災の被害に関する各種データは町役場発行の「東日本大震災津波 大槌町被災概要」による。
- 記事中の人物の満年齢や肩書きは原則として取材当時。ただし、第11章の「旧庁舎で何があったか」で証言した役場職員の肩書きは震災当時。
- 記事に登場する現役の役場正職員は敬称略。

町の概要

■ 総面積
200.42km²

■ 人口
11,766人
2019年5月末日現在

■ 震災前の人口
16,058人
2011年2月末日

東日本大震災前の大槌町

大槌町各地区位置図

太平洋に面し豊かな漁場

大槌町は、岩手県の沿岸南部に位置し、北は山田町、南は釜石市、西は宮古市、遠野市と接しており、東は太平洋に面している。町の総面積は200・42平方キロメートルで、総人口は1万1766人（2019年5月末日現在）を数える。町域の大部分を北上山系から成る山岳が占めており、東南の太平洋へ開く大槌湾に注ぐ大槌川、小鎚川の両河川の土砂が堆積してできた平野を中心に市街地が形成されている。

太平洋に面した町の東側は、北の船越湾、南の大槌湾と共にリアス海岸が発達し、沖合では親潮と黒潮が交差する豊かな水産資源に恵まれた漁場となっている。また景勝地としても活用され、その海岸風景は、岩手県沿岸北部から宮城県気仙沼付近までを範囲とする三陸復興国立公園（旧陸中海岸国立公園）の一部として指定を受けている。海水浴場やサーフィンのメッカとして名高い浪板海岸や吉里吉里（きりきり）海岸が船越湾沿いに広がり、大槌湾には人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルとされる「蓬莱島（ほうらいじま）」がある。古くから地元漁家の守護神である弁財天がまつられ、今回の東日本大震災の津波で被災したものの、今なお町のシンボルとして優美な姿で湾内に浮かぶ。

盛んな水産業や複合農業

町の基幹産業は現在も水産業であり、サケやマス、スルメイカ漁などの沿岸漁業を中心にワカメやホタテガイ、カキなどの養殖漁業が震災後早々と復活した。また大槌川・小鎚川沿いから山間地に至る金沢（かねざわ）・小鎚方面では水稲を中心に野菜やシイタケ、花き、畜産などを組み合わせた複合経営が行われている。

町の歴史

縄文、弥生の遺跡点在

大槌町の歴史については、古くは縄文時代にまでさかのぼることができる。各時代の特色を示す遺跡も数多く存在し、縄文時代早期の土器などが出土する崎山弁天遺跡や弥生時代の住居跡が発見された夏本（なつもと）遺跡、そして奈良・平安時代の製鉄遺跡として著名な櫓沢（やぐらざわ）遺跡などが点在する。当町の歴史は、中世に入り繁栄の礎を築いたといえる。1334（建武元）年、阿曽沼氏の一族、遠野次郎（後に大槌氏を称す）が沿岸治世のために遣わされ、当地を拠点として築城したのが大槌城であった。天然の要害といわれる大槌城は1437（永享9）年、三戸南部氏の大軍による攻撃を受けたが、堅固さを強みにこの危機を脱し、以後、南部氏の影響下で三陸の水産資源などを大いに利用して栄えた。

海水浴客でにぎわう震災前の浪板海岸（2007年8月撮影）

代官所置かれ沿岸の中心に

しかし、江戸時代に入り、その繁栄に脅威を感じた南部藩は1616（元和2）年、時の城主大槌孫八郎政貞を大船建造などの罪状で捕え自害させ、嫡子三徳丸をも仕置きし、大槌氏の約280年も続いた隆盛は幕を閉じる。その後、藩は城代を置き、1632（寛永9）年、大槌代官所が設置され、沿岸28カ村の政治、経済の中心地として栄えていく。中でも、吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛は代々にわたって、この三陸はもとより、藩の産業経済にも大きな役割を果たし、後に「海の豪商」「みちのくの紀ノ国屋文左衛門」と呼ばれるようになった。

江戸幕府の崩壊とともに藩の代官所制度は廃止され、それに伴い大槌代官所も解体され、一時、江刺県治下に置かれた。1889（明治22）年4月に地方自治制が発布されると、大槌村、小鎚村、吉里吉里村を合して大槌町となり、1955（昭和30）年には隣村の金沢（かねざわ）村と合併し、現在の大槌町が誕生した。

繰り返す津波災害

大槌町は、豊富な水産資源の恵みを受ける一方で、明治以降、2度の三陸大津波（1896年、1933年）やチリ地震津波（1960年）などの大きな自然災害に見舞われている。2011（平成23）年3月11日に発災した東日本大震災の大津波でも多くの人命を失い、壊滅的な被害を受けた。この震災から既に8年の歳月がたつ今、大槌町は、各方面からの惜しみない支援と町民のたゆまぬ努力によってさらなる復興の歩みを続けている。

年表

縄文早期	崎山弁天遺跡（吉里吉里）から早期末ごろの尖底深鉢土器出土
奈良・平安時代	夏本遺跡から8世紀前半の住居跡を発見
869（貞観11）年	巨大地震が起き、陸奥国を大津波が襲ったと伝えられる
1334（建武元）年	大槌氏が大槌城を築城したとされる
1611（慶長16）年	三陸沿岸大地震・大津波（大槌・津軽石で死者多数）
1616（元和2）年	大槌氏が滅亡したとされる
1632（寛永9）年	大槌城代を廃し代官を置く。大槌代官所が設置される
1692（元禄5）年	四日町（上町）の浄土宗見生山大念寺が開創
1706（宝永3）年	前川善兵衛2代富永、930両を南部藩に献金
1726（享保11）年	古廟山を開山した菊池慈泉が生まれる
1738（元文3）年	第7代南部藩主・南部利視が大槌巡見。前川善兵衛宅に宿す。この時の巡見で安渡浦を巡航し、珊瑚島を蓬莱島と名付ける
1753（宝暦3）年	日光東照宮修復のため、前川善兵衛4代富昌、藩から御用金を命ぜられる
1764（明和元）年	菊池祖睛が御社地に東梅社創建
1802（享和2）年	田鎖丹蔵が改良建網の「たんぞう」を完成させ、漁場開拓に乗り出す
1853（嘉永6）年	藩の悪政に対し農漁民らの一揆起こる（三閉伊一揆）
1869（明治2）年	大槌通は江刺県治下に含まれる
1873（明治6）年	大槌郵便取扱所開設
1889（明治22）年	市町村制実施。小鎚村・大槌村・吉里吉里村合併新大槌町となる
1896（明治29）年	大津波来襲（明治三陸大津波）。死者599人、損害高32万7千円余
1909（明治42）年	御社地に町営のサケ人工ふ化場が開設され、放流事業を開始
1923（大正12）年	大槌郵便局電話交換業務開始
1933（昭和8）年	大地震・大津波来襲（昭和三陸大津波）。波の高さ13尺。死者62人、流失倒壊戸数622戸
1945（昭和20）年	釜石、米国海軍の艦砲射撃と空襲受ける。大槌町にも艦載機が襲撃
1955（昭和30）年	大槌町、金沢村と合併
1960（昭和35）年	チリ地震津波来襲。罹災者6,542人
1972（昭和47）年	国道45号全線開通
1981（昭和56）年	井上ひさし氏の小説『吉里吉里人』がブームに
1990（平成2）年	町制施行100周年記念式典
1997（平成9）年	第17回「全国豊かな海づくり大会」が天皇皇后両陛下ご臨席のもと開催
2005（平成17）年	米国フォートブラッグ市と姉妹都市提携締結
2011（平成23）年	東日本大震災発生

過去の津波

明治三陸地震津波　1896（明治29）年6月15日

総人口7,027人のうち
死者／599人
総戸数1,172戸のうち
罹災／526戸

明治29年　津波被害（安渡）

37年後

昭和三陸地震津波　1933（昭和8）年3月3日

死者／39人
行方不明者／23人
家屋被害／
倒壊225棟
流失397棟
床上浸水201棟
床下浸水122棟

昭和8年　津波被害（大須賀）

27年後

チリ地震津波　1960（昭和35）年5月24日

震源地／チリ
地震発生から23時間後、
三陸一帯に津波到達
罹災者数／
6,542人（死者0人）
家屋被害／
全壊36棟、半壊187棟
流失44棟、床上浸水345棟

昭和35年　漁船木材が散乱（雁舞道）

8年後

十勝沖地震津波　1968（昭和43）年5月16日

漁船、漁具、養殖施設など約3億円の被害

43年後

東日本大震災津波　2011（平成23）年3月11日

死者／870人　行方不明／416人（うち死亡届出数415人）
震災関連死／52人　家屋被害／全壊・半壊・一部損壊4,375棟

第2章

東日本大震災とは

東日本大震災の大津波は、先のチリ地震津波から51年を経て、被災の記憶が薄れた三陸沿岸を直撃した。津波による福島第一原子力発電所の爆発事故が追い打ちを掛け、震災はより複合的な災害となっていく。全国で1万8千人に及ぶ犠牲者を出し、35万戸以上の建物が全半壊した震災の概要を記す。

東日本大震災の大津波は低地部に広がる大槌町の市街地をことごとく水没させた（2011年3月14日撮影）

Episode file
～あのころの大槌～

若い世代が中心になって もう一度活気ある商店街へ

内金崎自転車商会
内金崎（うちかねざき） 大祐（だいすけ）さん

大槌町のにぎわいを支えてきた商店街。そのにぎわいの中で生まれ育った内金崎大祐さん（44）は、東日本大震災で失われた商店街の再生に挑む。活気と笑顔を生み出すために。

― 昭和の商店街で記憶に残っていることは？

旧大槌町役場の近くには、二つの商店街があったんです。その一つは末広町商店街。昔は「横に長い百貨店」といわれていました。いろいろなお店が連なっていて、ここに来れば何でもそろう。だからそういうふうに呼ばれたのでしょう。私の所はかつて大町商店街という名前だったのですが、いくつかの商店街が合併して中央商店街という名前になった。たくさんあるお店の一つとして、うちの自転車屋がありました。子どもの頃の思い出ですが、浪板観光ホテル（現・三陸花ホテルはまぎく）に年1回旅一座が来ていて、商店街でポイントを集めると、その一座の公演を見られるというキャンペーンもやっていましたね。あとは商店街で「よ市」とかも定期的にやっていました。

― 今と比べると、にぎやかな感じですか。

昭和の話ですが、今と比べれば、ずいぶんとにぎやかでしたね。商店だけじゃなく、飲み屋さんとかもあって、老若男女が楽しめる。そういう「社交場」的な部分も担っていたんです。用はなくても、お茶っこ飲みに来るんです。ここに来れば誰か知っている人に会えるだろうみたいな感じだったんでしょう。ただ、津波をきっかけにして、高齢で店を閉めてしまった人もいる。お店の数もだいぶ減りました。だから自分たちの世代が盛り上げていかなければと思っています。

― 商店街として新しい取り組みも始まったと聞きました。

自転車とカフェが融合したスタイルの「チャリカフェ」というお店を2018（平成30）年3月16日にオープンしました。時間がかかったけれど、元のお店があった場所に戻ってくることができました。

今は月1回、「おしゃっち横丁」というものをやっています。町文化交流センターおしゃっちの駐車場に屋台がずらっと並ぶんです。やっているこっちも楽しいし、お客さんに喜んでもらえる。何よりも町の中心部に人が集まってくるのがいい。まあ、いいことずくめです。今は中心市街地といっても、平日の昼間は人がほとんどいない。だから、こういうイベントが始まることで、人が集まる仕組みをつくっていきたい。ただ問題といえば、人は来るんですが、この「おしゃっち横丁」で完結してしまうこと。新しいお店もできているので、イベントに来たついでに、もっといろいろなお店にも行ってほしいと思う。次に目指すのは回遊してもらうこと。町の新しい魅力を見つけてほしいと思っています。

震災後は町の在り方も変わった。それもしょうがないこと。こうなればいいという理想はあるけれど、思ったとしてもそういう形にはならない。嘆いてもしょうがないし、現状に合わせた形にしていけばいい。そして、そのために自分ができることをやっていければと思っています。

（取材／2018年10月）

地震・津波の概要と被害

広域で大地震相次ぐ

2011（平成23）年3月11日午後2時46分ごろから3分間足らずの間に、大地震が相次いで起きた。これらの大地震は、岩手県久慈沖から千葉県九十九里沖に至る北北東―南南西方向に約500キロメートル、それに直交する西北西―東南東方向に約200キロメートルの日本海溝に沿った広大な範囲が震源であった。この範囲を震源域と呼び、大槌町は震源域の北西の端に位置する（図2-1）。

震源域の中では断層が動き、複数の大地震が発生した。断層が動き始めた点（震源と呼ばれる）は、北緯38度06・2分、東経142度51・6分で、大槌町の南東約160キロメートルの地下24キロメートルと推定されている（表2-1）。地震の規模を示すマグニチュードは9・0とされた。気象庁によるこの地震の公式名称は「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震（英語名The Great East Japan Earthquake）」である。

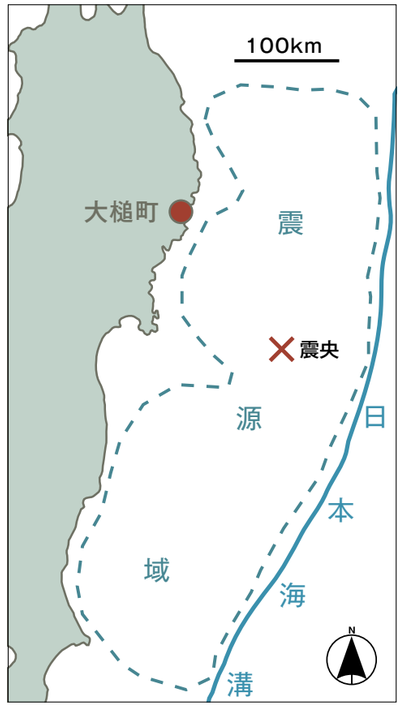
■ 表2-1　東北地方太平洋沖地震の概要

地震発生時刻	2011年3月11日14時46分
発生場所	震央：三陸沖 （北緯38.06.2度、東経142.51.6度）
震源の深さ	24km
規模	マグニチュード　9.0
最大震度	宮城県栗原市　震度7 大槌町の最寄り観測地点:震度6弱 （釜石市）
警報の発表	2011年3月11日14時49分

プレート大きく動き

東北地方太平洋沖地震は、震源域である日本海溝の軸に沿う場所でプレートが動いて発生した。日本海溝では北米プレートの下に太平洋プレートが沈み込んでいる。同地震は北米プレートと太平洋プレートとの境界で、北米プレートが平面的には東南東方向に移動、垂直的には持ち上がる動きをしたことで発生したとみられる（図2-3）。

プレートが動いたことで海岸から約100～200キロメートル沖の海底も水平・垂直方向に動いた。水平方向では東南東に数十メートル、垂直方向には最大6メートル余り隆起した。さらにこの西側の海底から東北地方東半部～関東地方東海岸の陸地にかけて、東南東に数メートル～数センチメートル移動しつつ、垂直方向では沈降した。大槌町の沈降量は約0・6メートルであることが、浪板海岸北方から古廟（こびょう）坂トンネル北口付近にかけての国道沿いおよび当時の町役場玄関前に設置されていた計五つの水準点の標高変化（マイナス59～マイナス62センチメートル）から分かる。



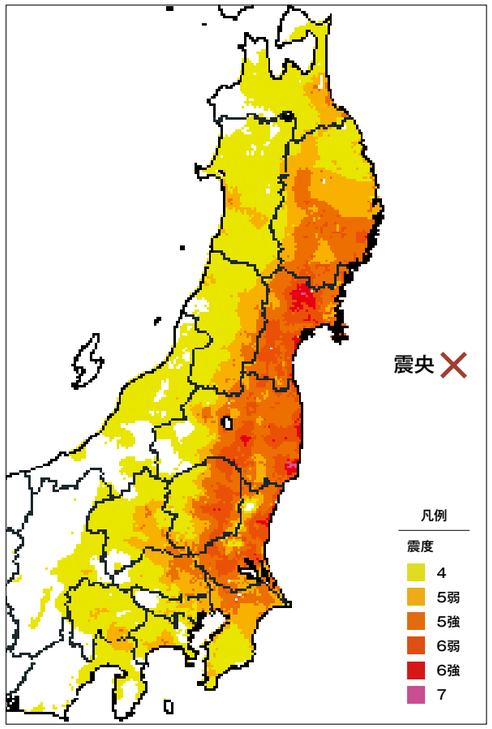
■ 図2-1　東北地方太平洋沖地震の震源域
気象庁はじめ各種資料を基に作成

大槌は震度5程度か

東北地方太平洋沖地震により、北海道から九州まで震度1以上の揺れが伝わり、青森県から長野県・静岡県までの範囲に震度5弱以上の地点が出現した（図2-2）。大槌町内の大半では最大震度5程度であったことが、釜石や山田での観測値から推定される（大槌町役場の震度計は津波で被災）。大船渡で記録された地震波形によると、地震発生から約45秒後に極めて大きな揺れがあり、その後も強弱を繰り返しながら数分間揺れ続けた。

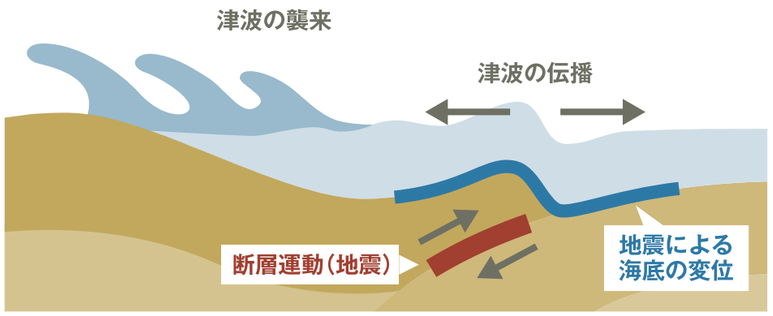
岩手県内の主な震度

【震度6弱】　大船渡市、釜石市、滝沢村（現滝沢市）、矢巾町、花巻市、一関市、奥州市、藤沢町（現一関市）
【震度5強】　宮古市、山田町、盛岡市、八幡平市、北上市、遠野市、平泉町
【震度5弱】　久慈市、普代村、野田村、二戸市、雫石町、葛巻町、岩手町、軽米町、紫波町



■ 図2-2　推計震度分布図　気象庁ホームページ掲載データを基に作成

前述のプレート境界にある幾つかの断層で海底面が急激に変位（水平・垂直方向に動いた）した。このため、それぞれの変位を波源として複数の津波が発生し（図2-3）、重なり合って日本列島の東海岸を広く襲ったほか、アメリカ大陸西岸にも達した。釜石沖の水深千メートル地点および1600メートル地点に設置されていた海底津波計の記録から、三陸南部海岸沖100～150キロメートル辺りの海底で発生した波高2メートル程度の津波が先に、さらに100キロメートルほど東の海溝軸付近で発生した波高5メートルを超す津波がその数分後に、それぞれ東日本の海岸に達したと推定される。大槌町一帯の海岸には、午後3時20分ごろから津波が繰り返し押し寄せた。



■ 図2-3　日本海溝プレート断面図　瀬戸真之・福島大学客員准教授作成

津波の発生

海底下の断層運動（地震）の結果、海底に地殻運動が発生し、その上の海水を押し上げる。この押し上げられた水の塊が津波となり四方に広がっていく。

犠牲者1・8万人超

警察庁によると、この津波による岩手・宮城・福島3県の死者・行方不明者は1万8389人、同じく建物の全半壊は35万7793戸だった（表2-2）。

津波は一般に水深が浅くなると波高が高くなる。広く見ると海岸と波源との位置関係により、今回は宮古市付近から陸前高田市付近に至る三陸海岸中部で特に高い傾向にあった。細かく見ると海底・海岸の地形により大きく異なった。

津波や陸地の高さ（標高）は潮が満ち引きする中で海面高さの平均値をゼロとして表される。ところが、この平均値は日本各地で同じではないため、通常は東京湾での値を用いており、その高さを表す場合にはT.P.（東京湾平均海面）との高度差で表すこととなっている（図2-4）。この震災記録誌でも以下ではT.P.との差で表記する。

■ 表2-2　東日本大震災による被害の概要

	死者（人）	行方不明者（人）	全壊（戸）	半壊（戸）
北海道	1			4
青森	3	1	308	701
岩手	4,673	1,126	19,595	6,570
宮城	9,541	1,237	82,998	155,129
秋田				
山形	2			
福島	1,612	200	15,140	78,361
東京	7		15	198
茨城	24	1	2,629	24,369
栃木	4		261	2,118
群馬	1			7
埼玉			24	199
千葉	21	3	801	10,149
神奈川	4			41
全国	15,893	2,567	121,771	277,846

警察庁緊急災害警備本部広報資料（2015年11月10日）から作成

吉里吉里地区ではT.P.16～19メートル、大槌漁港付近ではT.P.11～17メートルの津波痕跡が発見されている。この津波で、大槌漁港とその西に隣接するT.P.3メートルにも達しない中心市街地一帯、および吉里吉里漁港とその西のT.P.十数メートル程度以下の低地に広がっていた集落で甚大な被害が引き起こされ、ほとんどが農地であった浪板川沿いの低地にも浸水が及んだ。

原発で深刻な事故

福島県の太平洋沿岸に立地する東京電力福島第一原子力発電所では、津波により非常用電源を全て喪失した。この結果、原子炉が水素爆発を起こし、広範囲に放射性物質が拡散するという事故に至った。

放射性物質とは放射能（放射線を出す能力）を持つ物質のことを指す。このため、放射線は放射性物質から発射されるといえる。その強さは、cpm（1分間に放射線がいくつ放射されるか）、ベクレル（放射線を出す能力＝放射能の強さ）、シーベルト（放射線を受けたときの人体に与える影響の強さ）などの値で示される。放射線が人体に当たると害を及ぼすことがある。なお、人体でも臓器や部位によって放射線への強度が異なる。それぞれの値を毎回求めることが困難なので、シーベルトという単位は人体全体への影響の強さを表すようになっている。

放射能（放射線を出す能力）は時間経過とともに減衰する。最初に持っていた放射能が半分に減るまでの期間を「半減期」と呼んでいる。半減期は放射能を持つ放射性物質によって異なり、それは数秒あるいはそれ以下の短いものから数億年かかるものまで多様である。今回の原子力発電所事故で問題となっているものはセシウム137と呼ばれる物質で、その半減期は約30年である。

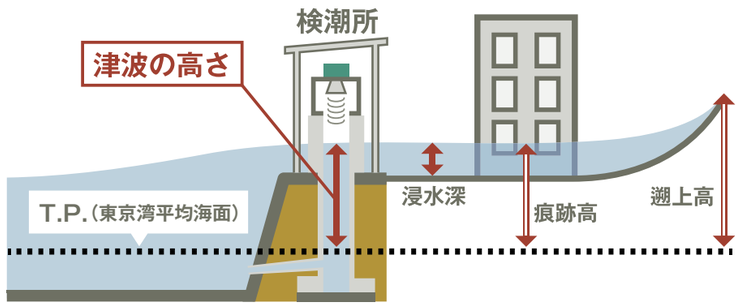
大槌にも放射線被害

福島第一原発で起きた爆発事故により汚染濃度が高かった福島県の一部地域では全町・全村避難となり、避難解除の見込みが立ち難い地域が残るなど深刻な事態となった。大槌町でも、福島第一原発から拡散した放射性物質によって原木シイタケのほだ木や牧草が汚染される被害が出た。

地震や津波に加えて、福島第一原発が事故を起こしたことで極めて大きく複雑な被害が、岩手・宮城・福島3県をはじめ広い範囲で発生した。その災害全体を指し、「東日本大震災」と呼ぶ。

（田村俊和・東北大学名誉教授、瀬戸真之・福島大学客員准教授）

吉里吉里地区を襲う津波



■ 図2-4　検潮所における津波の高さと浸水深、痕跡高、遡上高の関係　気象庁ホームページ掲載データを基に作成

第3章

私たちを襲った津波

大槌町を襲った大津波。
その被害の全容はどのようなものだったのか。
地理学的な見地から町全域の被害状況を
いま一度振り返るとともに、町を七つの地区に分け、
より細部にわたる状況を明らかにする。

浸水した町方地区。津波の直後、町内各所で火災が発生した

Episode file
～大槌の津波～

徒歩で釜石から大槌へ戻る 消え去っていた古里の町

岩手県信用漁業協同組合連合会
釜石大槌支店　支店長
小林（こばやし） 正人（まさと）さん

岩手県信用漁業協同組合連合会の小林正人さん（45）は津波の翌日、通勤先である釜石市から徒歩で大槌町へと歩きだした。惨状を目にするたびにつらい気持ちになったが、消防団員としてすぐさま合流。復旧活動に加わった。

―震災時に、釜石市から大槌町まで歩いて帰ったそうですね。

自宅のある大槌町から釜石市の職場に通っており、地震が起きた時も、私は釜石市の事務所で働いていました。海のそばにあった事務所は津波で流され、跡形もなくなりました。震災当日は釜石市で夜を明かし、明るくなってくるのを待って大槌町に向かって歩き始めました。釜石市から大槌町までは20キロくらいの距離があります。結構な距離ですし、余震も続いていましたが、それでも釜石市にとどまって様子を見ようとは思いませんでした。家族も大槌町にいましたし、一刻も早く戻りたいという気持ちが強かった。戻る途中の釜石市両石（りょういし）町には親戚が住んでいます。高台にある家だったのですが、その家さえも流失してしまっていました。高台から見渡すと、慣れ親しんだ町がなくなっていた。その衝撃は今も忘れられません。

―大槌町に戻ってからはどんなことをしたのですか？

私は地元の消防団に所属しているのですが、大槌町に戻った夜には消防団に合流して、消火活動に参加しました。大槌町は震災発生時からあちこちで火事が起きていました。私が所属している消防団のポンプ車両が無事だったこともあり、消火活動をすることができたのです。震災発生からの2週間の出来事は今も鮮明に記憶に残っています。

昼はご遺体の搬送、夜は消火活動。その繰り返しです。消火活動は、目の前の近い所を消していく。山の上の方にはホースが届かないですし、水の供給もままならない状態。延焼をぎりぎり防ぐという感じです。ご遺体の搬送は、正直、抵抗感がありました。正視できませんでしたし、最後まで慣れることはありませんでした。消防団員の中には、途中で来なくなった人もいた。やり切れなくなってしまうんですよね。それでも誰かがやらなければならないこと。その気持ちで乗り越えていきました。避難所で暮らしていましたが、夜になると、これからの暮らしのことを考えてしまって、どうなるか不安でなかなか寝つけませんでした。

―震災を経験して、強く感じたことは何ですか？

東日本大震災を経験して思うのは情報伝達の大切さです。そして伝達する情報の優先順位です。誰が生きているのか、どこにいるのか、それが分からない。私が妻や家族に会えたのも震災発生から約1週間たってからです。分からないから不安も増してくる。大事な情報を選んで、ちゃんと伝えていく。そういうシステムが必要なのだと痛感しました。

それと、消防団をやっていて本当に良かったと思いました。自分の中にも郷土愛があったことを実感できましたし、もう一回、この町を立て直したいという気持ちにもなりました。このごろは若い団員も増えてきて、雰囲気もいいんです。地域との人のつながりは大切にしていきたいと思っています。

（取材／2018年6月）

2011年3月11日15時20分過ぎ
「平成の大津波」襲来

町を襲った大津波がいかにすさまじかったのかを物語る、ほぼ1分の時間差で撮影された同じアングルの写真がある。

あの日、中心街の大町で内科医院を開業する植田俊郎（うえたとしろう）さん（64）が地震の揺れに見舞われたのは、午後の診察の最中だった。隣接する須賀町の高齢女性が家の前で倒れているとの知らせを受けて往診した後、歩いて自宅兼医院の玄関先に戻った。周辺を点検していた妻の美智子（みちこ）さん（64）が声を上げた。「あ、水が（向かって来るのが）見える」。大槌湾に注ぎ込む小鎚川の河口から医院までの距離は約350メートル。急いで4階の居室まで駆け上がる。日頃から小型のデジタルカメラを携行する美智子さんが、窓際であわててシャッターを切った。津波は河口付近に密集する家屋をなぎ倒してもうもうと土煙を上げ、海岸から真っすぐに延びる県道をはい上がって医院の約150メートル手前まで迫っていた。

植田さんも部屋にあった一眼レフのデジカメをとっさにつかみ、屋上に上がった。眼下はすでに一面の海で、どす黒い波が激しく荒れ狂い、至る所で渦巻いている。「悪夢だ……」。先刻の美智子さんと同じく、震える手でレンズを河口方面に向けた。灰色の空に半島がぼんやりと稜線を描き、ファインダー越しに見える建造物は、河口の水門と近くの3階建てアパートの最上階、2階建ての歯科医院の屋上部分のみ。「平成の大津波」が町に襲い掛かり、すっかりのみ込んだ瞬間を捉えた。年末に購入したばかりで時刻合わせ済みのカメラには、「午後3時22分」と記録されていた。

植田さんは津波を目撃してすぐ、登山用のザイル3本を浸水しなかった居室から屋上に持ち出す。「もっと高い津波が来ても、ザイルを結び付けてつかまればきっと助かる。何とか生きてやろうと思ったんです」。共に取り残された家族と職員、向かいの農協や町社会福祉協議会の職員ら計18人は翌朝、航空自衛隊三沢基地の大型輸送ヘリに救助され、寺野地区の屋内運動場に避難した。

（取材／2019年3月）

植田美智子さんがほぼ同じアングルで約1分前に撮影。津波の先端がJR山田線（当時）の踏み切りに達している。直後、町は水没した

どす黒い津波にすっかりのみ込まれた大町、須賀町の一帯（植田俊郎さん撮影）

大槌町の被害

■ 図3-1　大槌町の東日本大震災津波と過去の津波のおおむねの浸水範囲　瀬戸真之・福島大学客員准教授作成

市街地の半分が浸水

2011(平成23)年3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震により、大槌町は大きな揺れとそれに続く津波に襲われた。この地震の震央は三陸沖で、地震の規模を示すマグニチュードは9・0(モーメントマグニチュードでの表記)、隣接する釜石市では震度6弱を記録した(大槌町役場にあった地震計は津波で流失)。

東北地方太平洋沖地震による津波は東日本太平洋側に広く到達した。三陸沿岸は海岸線が入り組んだリアス海岸である。このため、湾口の向きや広さが多様であり、津波の被害にも大きな影響を与えた。大槌町全体を見ると、①大槌湾に面した地区②船越湾に面した地区③大ケ口や桜木町といった町内でも大きな河川(大槌川、小鎚川)に面した地区――が津波被害を受けた(図3-1)。①と②の湾に面した地区が海からの津波に直接さらされたのに対し、③の大きな河川に沿った地区は、川を遡上(そじょう)した津波が堤防を越え、内陸部にありながらも被害を受けた。国土地理院によると、町内で最も高い津波が観測されたのは吉里吉里港東側で22・2メートル、役場付近の津波高は10・7メートルだった。この津波による浸水面積は町全体で4平方キロメートルに達し、これは大槌町の市街地・住宅地面積の52%に相当する。

人口の8%が犠牲に

津波による死者・行方不明者は震災関連死の52人を含め、町全体で1286人。関連死を除くと、町の人口の7・7%が犠牲になった(表3-1)。地区別に見ると、小枕・伸松15・4%、町方14・7%、安渡11・1%、赤浜9・6%の順で死亡者率が高い(表3-2)。人的被害の大半は海に面した地区で発生し、河川津波に襲われた内陸部では比較的少ない。

建物被害は全壊・半壊・一部損壊を含めて大槌町全体で4375棟に及び、全家屋の68・2%が被災した(表3-3)。小枕・伸松で全ての家屋が被災したほか、町方や桜木町・花輪田で被災した家屋の割合が高い(表3-4)。建物被害が大きかった理由は、大槌湾・船越湾に面した地区で津波の波高が高かったことや、内陸部まで津波が河川をさかのぼったことによる。

農林水産施設や商工業施設、観光施設などの産業被害額は約217億円で、道路・海岸施設、上下水道、学校や社会教育施設、役場庁舎や消防署などの公共施設被害が約579億円。産業被害と公共施設被害を合わせた物的損害は約796億円に達した。

原発事故の被害も

津波以外の被害では、道路ののり面の崩壊や舗装の破損が見られた。さらに東京電力福島第一原子力発電所事故の影響により、特産の原木シイタケ栽培のほだ木(菌を植え付けた木)や牧草から国の基準値「100ベクレル/1キログラム」を超える放射線が検出された。

シイタケは12(同24)年4月に出荷制限がかけられたが、3年後に一部解除された。19(同31)年4月現在、海外23カ国で日本産品に輸入規制措置を継続しており、岩手県産の水産物については、青森・宮城・福島・茨城・栃木・群馬・千葉の各県と共に韓国への出荷ができない。

大槌町は地震による揺れ、津波、原子力発電所事故という3種類の複合的な災害に襲われた。この後には長期避難を余儀なくされた。避難所は津波発生当日の3月11日に城山公園体育館などに設置され、ピーク時の同月16日には38カ所に6173人が身を寄せた。

(瀬戸真之・福島大学客員准教授)

■ 表3-1　死亡者および行方不明者数

区分	内容(人)
身元判明者	818
行方不明者	415
死亡者合計	**1,233**
行方不明者数(死亡届未受理)	1
関連死	52
合計	**1,286**

※2019年6月現在

■ 表3-2　地域別の死亡者および行方不明者数(単位:人、%)

地域	人口	身元判明者	行方不明者	死亡者数	死亡者率
町方	4,483	389	271	660	14.7
桜木町・花輪田	1,421	21	2	23	1.6
小枕・伸松	272	32	10	42	15.4
沢山・源水・大ケ口	3,104	61	13	74	2.4
安渡	1,953	170	47	217	11.1
赤浜	938	55	35	90	9.6
吉里吉里	2,475	72	23	95	3.8
浪板	404	14	10	24	5.9
小鎚	499	4	3	7	1.4
金沢	509	0	1	1	0.2
合計	**16,058**	**818**	**415**	**1,233**	**7.7**

※2019年6月現在
※関連死を除く

■ 表3-3　被害状況別棟数

被害区分	棟数(棟)	被災率(%)
流失	3,350	52.2
全壊	229	3.6
大規模半壊	486	7.6
半壊	102	1.6
一部損壊	208	3.2
被災あり(計)	**4,375**	**68.2**
被災なし(計)	**2,042**	**31.8**
合計	**6,417**	**100**

※2014年度に再集計を実施。事業所等を除く
※地震被害を含む

■ 表3-4　地域別被害棟数(単位:棟)

地域	全壊	半壊	一部損壊	合計
町方	1,690	4	1	**1,695**
桜木町・花輪田	197	346	7	**550**
小枕・伸松	100	2	0	**102**
沢山・源水・大ケ口	197	162	99	**458**
安渡	665	18	17	**700**
赤浜	272	6	11	**289**
吉里吉里	395	38	34	**467**
浪板	63	4	12	**79**
大槌	0	0	5	**5**
小鎚	0	6	21	**27**
金沢	0	2	1	**3**
合計	**3,579**	**588**	**208**	**4,375**

※全壊は流失を、半壊は大規模半壊を含む

津波火災の猛威

がれき漂着して炎上

町に大津波が襲い掛かった直後、あちらこちらで火と煙が上がった。やがて大規模な火災に発展し、市街地を紅蓮の炎に包む。火の付いたがれきが山際に打ち寄せるなどして燃え広がる「津波火災」。大槌のようなリアス海岸の地形に高い津波が到達すると、特に発生しやすいという。あの日、消防署が被災して機能を失った町で、命がけで延焼を食い止めようとする町民たちの姿があった。

浸水した町に漂う着火したがれき（2011年3月11日午後3時31分、植田俊郎さん撮影）。城山のふもとの上町付近からは煙が立ち上っている

「あんなふうに火が流れていくのか」。津波の時、内科医の植田俊郎さん(64)は大町にあった4階建ての医院の屋上に駆け上がって避難。眼下の水没した町をがれきが燃えながら漂い、遠ざかっていくのを目撃した。植田さんはデジタルカメラで克明に津波の動きを撮影しており、最大波からわずか2分後の午後3時24分、対岸の安渡地区に立ち上がった大きな炎を捉えている。

同じ時間帯に小鎚川河口の伸松地区にいた当時町消防団長の煙山佳成さん(80)は、浸水した上町と末広町の蓮乗寺付近で火が燃えているのを観察した。植田さんのデジカメの記録では午後3時25分に上町で黒煙が、同33分に同寺付近で火の手が上がった。中心街の町方地区を広範に焼いた火災の西端が上町、東端が同寺付近に当たり、煙山さんは「風にあおられて二つの火災がつながったのではないか」とみる。

東日本大震災の津波が原因で起きたと思われる火災159件を全て調査した廣井悠・東京大大学院准教授(都市防災)によると、町方地区の延焼面積は東京ドームほぼ3個半分に当たる約16ヘクタールと推定される。全被災地で最大の火災被害を出した山田町中心部の約17ヘクタールに次ぐ広さだ。

山際に沿って燃える

廣井さんら研究グループは震災から2週間後に大槌町を訪れ、焼け跡の残骸を調べたり、消防関係者に聴き取りを行ったりした。「(背後に山が迫る)リアス海岸の地形で発生した典型的な津波火災。高い津波で火の付いたがれきが山際に集積して燃え上がり、山林火災に発展して釜石方面まで延焼した」と廣井さんは解説する。

「津波火災」の概念や用語は比較的新しい。震災後、研究者らが津波の被災地で特徴的な火災の存在に気づき、発生要因や形態を類型化した。大槌町のケースは「斜面がれき集積型」と呼ばれ、市街地の延焼範囲を見ると、上町や末広町の背後に控える城山のすそ野に沿って燃え広がったのが分かる。がれきの中にはプロパンガスボンベや燃料の詰まった自動車などの危険物が大量に含まれ、火気と接触して爆発と炎上を繰り返したとみられる。

桜木町への延焼防ぐ

町方地区の激しい火災に立ち向かった消防団員たちがいる。そのうちの一人が、同地区を管轄する町消防団第1分団の一兜大志さん(44)＝現・同分団長＝だ。国道45号の大槌バイパス南口の交差点に配備していた午後6時ごろ。ボーン。大きな爆発音と共に上町の県道大槌小鎚線沿いにあるガソリンスタンド付近で、「きのこ雲のような煙が上がった」。小鎚川に架かる古廟橋の先の上町はすでに火の海で、赤々と城山の山肌を照らしていた。町役場に隣接する大槌消防署は津波で全壊した後で、ほとんどの消防車両が被災して駆け付けられない。

第1分団と小鎚地区管轄の第4分団の消防団員らがパワーショベルでがれきをかき分け、消防車3台が古廟橋西詰まで進み出た。団員らはホースの筒先を手に橋を渡って火災と対峙、周辺にたまった津波の海水や小鎚川の水を吸い上げて放水した。約20人が明け方まで活動し、上町の北西に隣接する桜木町の住宅街への延焼を防いだ。

大槌湾の入り口に近い赤浜地区でも大きな火災が起きていた。赤浜二丁目で工務店を営む阿部長祐さん(65)は従業員らと避難した裏山で、浸水した町に漂着したがれきが一気に炎上するのを見た。火は山手の家々にも迫ってきた。阿部さんは所有する小型のパワーショベルを駆り、火の付いた家屋を壊したり、斜面の土を削って火に覆いかぶせたりして、消火を試みる。「あまりにも熱くて、何度もくじけそうになった」。従業員の大工たちも鉄パイプやバールで平屋の木造アパートの壁や屋根を破壊、ポンプで地下水をくみ上げ、蛇口に家庭用ホースをつないで水を掛けた。

高台に消防拠点を

津波火災の被害を拡大させないためにどうしたらいいのか。廣井さんは、上町で階上が津波の避難先になり得た大槌小学校に延焼したことが「衝撃的だった」と言う。「避難の基本は徒歩で高台に逃げ、間に合わなければ高いビルに上がる。その場所で火災に遭わないために、二次避難する経路を確保すべきだ」。幸い、大槌小の児童は地震の後、すぐに背後の城山に避難して無事だった。

大槌町の地形を考えれば、次の大きな津波でも山際で火災が発生する恐れがある。廣井さんは「高台に水利と設備、人員を集め、津波火災に対する消防戦術を確立することが大切だ」とアドバイスする。

（取材／2019年3月）

大槌町中心部の浸水範囲（黄色）と延焼範囲（赤色）
日本火災学会　2011年東日本大震災火災等報告書（完全版）から
© 2011Google-画像、© 2011 GeoEye、地図データ© 2011 ZENRIN、国土地理院

赤浜地区の延焼範囲
日本火災学会　2011年東日本大震災火災等報告書（完全版）から

各地区の被害 吉里吉里地区

低地部やJR山田線（当時）より東側の市街地が大きな被害を受けた吉里吉里地区（2011年3月14日撮影）
※写真中の情報は震災当時。方位は目安

線路より東側が浸水

吉里吉里地区は船越湾の南西端に位置し、地形は海に面した砂浜とその背後に広がる海岸低地、山麓部の緩斜面および埋立地から構成される。同地区の中心地は国道45号よりも西側に広がる山麓緩斜面の上に立地している。すなわち、海岸から見て次第に標高が高くなる地形をしている。震災前、海岸低地の大部分は水田として利用されていた。埋立地は地区北西部にあり、フィッシャリーナ（プレジャーボートの係留施設）などの港湾施設が立地する。

吉里吉里の中心部で浸水した範囲は、JR山田線（当時）と国道45号とに挟まれた場所である。ここは山麓緩斜面に当たり、吉里吉里四丁目付近から東に向かって張り出している。吉里吉里地区での津波浸水深は吉里吉里三丁目で16・2メートルであった。津波遡上（そじょう）高を見ると、中心部の郵便局近くで14・1メートル、吉里吉里駅の南で18・7メートル、吉里吉里地区東側の集落で19・2メートルがそれぞれ記録された。JR山田線より西側は浸水しなかった。この範囲は山麓緩斜面でも特に山に近い場所であり、標高が高かったためである。

■ 表3-5　吉里吉里地区の被害状況

人的被害	身元判明者	72人
	行方不明者	23人
	合計	**95人**
	死亡者率	3.8%
建物被害	全壊	395棟
	半壊	38棟
	一部損壊	34棟
	合計	**467棟**

広範囲で防潮堤流失

岸壁などがある地区の西側に防潮堤の建設が始まったのは、1960（昭和35）年のチリ地震津波の後である。この津波は、岸壁の西の砂浜付近にあった倉庫のT.P.（東京湾平均海面）3・9メートルの高さに痕跡を残している。防潮堤は当初、天端高（てんばだか）（最上面の高さ）がT.P.3・9メートルであったが、1970年代に入ってから順次かさ上げされ、1993（平成5）年にはT.P.6・3メートルに統一された。全て表面にコンクリートを張った土構造の傾斜堤である。東日本大震災では、高さ16～19メートルの津波がこれら全ての防潮堤を越流した。岸壁に近い270メートルの区間では、防潮堤が陸側に転倒した後、引き波で海に流され、閘門（こうもん）の門扉6基も流失した。これらに伴い、低地部の集落は大きな被害を受けた。

建物などはないが、地区より東側の海岸線は海が山を削ってできた海食崖となっている。この海食崖の基部はほぼ全てが浸水し、この中には弁天島、松島、野島、二才島（毛無島）および丸島も含まれる。また、弁天島の対岸では22・1メートルもの津波浸水高を記録した。

半壊、一部損壊多く

建物被害は全壊395棟、半壊38棟、一部損壊34棟で、被災した建物のうち全壊が大半を占める。他方で、例えば全壊の数が圧倒的に多く、半壊や一部損壊の数が極めて少なかった町方、赤浜、安渡、小枕・伸松の各地区と比べると半壊や一部損壊した建物が多い。この理由は建物の多くが山麓緩斜面にあり、地区全体が浸水せず、場所によって津波が到達しなかったからである。

人的被害は地区の全人口2475人に対して死亡者が95人。死亡者率は3・8%で、町方など同率が10%を超えた大槌湾に面した地区と比べると相対的に低い。この理由は地区の中心が山麓緩斜面上（高台の上）に立地していたことだと考えられる。地震発生後すぐにJR山田線よりも西側の山へ向かって避難すれば、結果的に命が救われたと思われる。他方で、地区東側の集落では低平地と山との距離が近く、避難するためには短時間で急勾配を登る必要があったため、津波発生後の避難が難しかった。

（瀬戸真之・福島大学客員准教授）

※32～45ページ「各地区の被害」記事中の津波高は古今書院刊『東日本大震災津波詳細地図』による

被災した国道45号（写真手前）の周辺（2011年3月25日撮影）。山麓緩斜面に立つ吉里吉里小学校（後方の白い建物）は浸水を免れた

高台の老人ホーム「らふたぁヒルズ」から見た、吉里吉里海岸に押し寄せる津波（2011年3月11日撮影）＝堤福祉会提供

海岸から至近で津波にさらされた大槌町漁協吉里吉里支所（写真奥、2011年3月13日撮影）

各地区の被害 浪板地区

浪板川（写真中央）に沿って高い津波がさかのぼった浪板地区（2011年3月14日撮影）
※写真中の情報は震災当時。方位は目安

■ 表3-6　浪板地区の被害状況

人的被害	身元判明者	14人
	行方不明者	10人
	合計	**24人**
	死亡者率	5.9%
建物被害	全壊	63棟
	半壊	4棟
	一部損壊	12棟
	合計	**79棟**

川沿いで津波高く

浪板地区は船越湾南部に位置し、吉里吉里や町方とは異なり、太平洋から到達する津波をさえぎる山や島（半島）はない。この地区は鯨山（くじらさん）、小鯨山を源流とする浪板川が土砂を運んできて河口部にできた低地と、山麓にできた傾斜の緩い斜面（山麓緩斜面）の上に立地している。低地のさらに海側は砂浜となっており、この砂は主として浪板川から供給されたものである。土砂が堆積してできた低地と砂浜とからできているので、地形としては山麓緩斜面の部分を除き低平である。海岸から浪板川を約500メートルさかのぼると低地の上端になるが、この場所の標高は22メートルである。

津波遡上（そじょう）高は海岸付近で18・8メートル、三角州の上端付近で17・6メートルである。この津波遡上高は大槌町の中で吉里吉里漁港付近と並んで最も高い。浸水範囲は低地とその海寄りにあった砂浜全域に及び、これは浪板地区の大部分を占める。浪板地区北方のJR山田線（当時、現・三陸鉄道リアス線）よりも北側の範囲にある山麓緩斜面は浸水しなかった。低地の上端付近に当たる浪板川と山田線が交差する付近では、より上流まで浸水した。この理由は何らの障害物もなしに浪板海岸に到達した津波が地形（浪板川）に沿って遡上し、低地の部分ではより標高の高い地点まで津波が到達したためである。この津波は浪板川に沿って上流方向に向かったが、地区を浸水させた水は浪板川の氾濫水というよりも海から侵入した水であるので、河川津波ではなく、海からの津波であると考えられる。

かつて多くの観光客でにぎわった砂浜は、震災による地盤沈下で消失し、海水浴場として利用できなくなった。

国道付近の建物被災

建物被害は全壊63棟、半壊4棟、一部損壊が12棟であった。全壊家屋が目立つ一方で、一部損壊となった家屋が12棟と大槌町の中では数が多い。津波で被災した家屋の大半は国道45号とJR山田線とに挟まれた範囲に立っていた。また、浪板川が作った低地の最奥部付近でも浸水した建物があった。浪板地区の建物は低地の範囲とそれより北側（およそJR山田線より北側の範囲）に集中している。ただし、低地の範囲とその外側とで建物の数が変わるわけではなく、地形と集落立地は一致していなかった。

人的被害は地区の人口404人に対し、死亡者24人、死亡者率5・9%であった。大槌町の中でも津波遡上高が高い浪板地区で大槌湾沿岸での10%を超える死亡者率を下回った理由は、浸水範囲がほぼ低地に限られているためである。すなわち、低地の外側（多くの場合、山麓緩斜面）にいた人や、そこに避難できた人は比較的被害に遭いにくかったことが推定される。一方で低地にいた場合、より標高が高い浪板川の上流に向かって避難したとしても浪板川沿いを遡上した津波の被害に遭ったと思われる。

（瀬戸真之・福島大学客員准教授）

浪板川にかかる国道45号の浪板橋が津波で損壊したため、補修した（2011年3月22日撮影）。河口付近に広がっていた砂浜は消失した

倒木やがれきが散乱する浪板海岸（2011年3月22日撮影）

浪板観光ホテル（当時）周辺に押し寄せる津波（2011年3月11日撮影）

JR山田線（当時）の北西側の家屋は残った（2011年3月22日撮影）

各地区の被害 赤浜地区

標高の低い扇状地に宅地が広がっていたため、広範囲で浸水した赤浜地区（2011年3月14日撮影）
※写真中の情報は震災当時。方位は目安

■ 表3-7　赤浜地区の被害状況

人的被害	身元判明者	55人
	行方不明者	35人
	合計	**90人**
	死亡者率	9.6%
建物被害	全壊	272棟
	半壊	6棟
	一部損壊	11棟
	合計	**289棟**

山陰だが高い津波

赤浜地区は大槌湾の入り口にある筋山（すじやま）の南西麓に立地している。地区の地形は筋山から流れ出る小河川が作った扇状地と海沿いにあった浜から構成されるが、浜の部分は人工的に埋め立てられている。この埋め立て地はかつての海岸線よりも海の方に向かって拡張されており、港湾施設や東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターなどがある。同地区には筋山山麓の緩やかな斜面を削って造成された平坦地があり、ここは住宅地である。

大槌湾の湾口は東北東方向に向かって開いているが、赤浜を含めた大槌町は湾北岸の北東から南西に位置している。すなわち、東北東に広がる湾に侵入する津波に対して、大槌湾北岸は南西に延びている。さらに大槌湾に侵入する津波に対しては、筋山や七戻崎（ななもどりざき）の山の陰に当たる。このため、例えば釜石市の鵜住居（うのすまい）地区と比べると津波の力はさほど強くなかった。

しかしながら、赤浜地区では、東大大気海洋研究所付近で10・7メートル、地区中心部の郵便局近くで12・6メートルの津波浸水高を記録した。津波遡上（そじょう）高は最も山に近い赤浜一丁目では14・6メートル、赤浜二丁目の山沿いで13・2メートルであった。いずれも家屋の高さを大きく超えており、浸水範囲内の人的・物的被害は甚大であった。ただし、緩傾斜面を削って作った人工的な平坦地と赤浜一丁目の山麓部に当たる部分は浸水しなかった。

500メートル奥まで浸水

建物被害は全壊272棟、半壊6棟、一部損壊11棟であった。大槌湾に面した小枕・伸松・町方などと同様に全壊家屋が圧倒的に多い。これは浸水範囲の大部分が扇状地末端の極めて緩やかな傾斜の土地と、その前面で海に向かって埋め立てられた土地であったことが原因である。さえぎるものの無い低平な地形に立地する赤浜地区に侵入した津波は、扇状地末端と埋め立て地をほぼ全て水没させた。この時の津波浸水深は10メートルを超えており、押し波や引き波および津波に含まれる大型の漂流物によって建物が大きく損壊した。

人的被害も甚大であり、人口938人に対して死亡者数90人、死亡者率は9・6%であった。10%前後の高い死亡者率は大槌町内でも大槌湾に直接面した地区で記録されており、赤浜地区も含めて津波遡上高や津波浸水深が高かったことが原因である。赤浜地区では海岸から最大で500メートルの範囲が浸水しており、浸水区域外に短時間で避難することが難しかった。筋山や七戻崎が海をさえぎっているため、大槌湾に来襲した津波を早期に視認することが困難だったことも人的被害が拡大した原因の一つだと思われる。

また、赤浜二丁目の山際に火の付いたがれきが流れ着いて火災が起き、住宅地が広範に焼けた。

（瀬戸真之・福島大学客員准教授）

埋め立て地に押し寄せた津波（2011年3月11日、中村公男さん撮影）。沖合では町のシンボルの蓬莱島が水没しつつある

灯台や弁天神社が崩壊した蓬莱島（2011年3月25日撮影）

地形が低平で多くの家屋が全壊した赤浜地区（2011年3月25日撮影）

高い津波が襲い、火災も発生した一帯（2011年3月13日撮影）。民宿の屋根に釜石市の観光船「はまゆり」が乗り上げているのが見える

各地区の被害 安渡地区

低地や埋め立て地が大部分を占め、甚大な津波被害を受けた安渡地区（2011年3月14日撮影）
※写真中の情報は震災当時。方位は目安

津波被害受けやすく

大槌湾北部に沿って北西―南東方向に細長く伸びる安渡地区は北西部の安渡一丁目で河川津波、中央部の安渡二丁目や南東部の安渡三丁目で海からの津波に襲われ、安渡二丁目では山の近くまで広く浸水した。安渡二丁目付近は大槌湾北部の山地から流出する二つの小河川が作った低地の上に立地している。ただし、大槌川の旧河道や海岸を人工的に埋め立てて土地を大幅に拡張しており、港町や新港町は埋め立て地の上にある。

■ 表3-8　安渡地区の被害状況

人的被害	身元判明者	170人
	行方不明者	47人
	合計	**217人**
	死亡者率	11.1%
建物被害	全壊	665棟
	半壊	18棟
	一部損壊	17棟
	合計	**700棟**

大槌港は安渡地区に位置し、やはり人工的な埋め立てにより港湾施設の土地が造成されている。また、安渡三丁目から赤浜地区に至る海岸線もほぼ埋め立て地で、自然の地形は安渡地区と赤浜地区との間にある小河川が作った低地のみである。道路などの地物（地上に存在するあらゆる物）や地形から判断して、現在の安渡地区はその大部分が埋め立て地である。このような土地の性質上、安渡地区は津波の被害を受けやすい。

安渡一丁目付近は海に面しておらず、海水の進入路は海からよりも大槌川を遡上した河川津波が主であった。この場所では11・4メートルの津波浸水深が記録されている。安渡二丁目より南東では海からの津波が侵入し、新港町で12・9メートル、南東部の安渡三丁目で14メートルの津波浸水深を記録した。津波遡上高は安渡地区で最も標高が高い安渡二丁目の神社付近で12・3メートル、安渡三丁目では17・7メートルであった。また、安渡地区は津波によりほぼ全域が浸水した。このように津波被害が甚大であった理由は、埋立地に地区が立地していることにある。さらに安渡三丁目から赤浜に至る範囲は海岸線と山地が接近しており、津波浸水深が地区の中でも高くなる傾向にあった。

埋め立て地で被害大

安渡地区の建物被害は全壊665棟、半壊18棟、一部損壊が17棟であった。大槌湾に面した他の地区と同様に被災した建物は、ほぼ全て全壊している。この最大の原因は埋め立て地の面積が広いため、標高が低くて津波をさえぎる物のない平らな地形の上に多くの建物があったことである。

1960（昭和35）年のチリ地震津波の痕跡高は安渡でT.P.（東京湾平均海面）3・6メートル、大槌川河口付近右岸や安渡対岸の白石でT.P.3・8メートルだった。

大槌港の防潮堤は同津波の当時、すでに小規模なものが存在したが、建設が本格化したのはその後で、1960年代前半に安渡地区の中央部に天端高T.P.4・3メートルで造られ始めた。同年代後半以降、白石地区にT.P.6・4メートルの防潮堤が新設され、安渡地区の一部に既設のものも6・4メートルにかさ上げされた。その後、1999（平成11）年までの間に、安渡地区の残りの区間や赤浜地区でも同じ高さで順次整備されていった。いずれもコンクリート造の直立堤である。

また、大槌川・小鎚川沿いの、少なくとも国道45号付近より下流では、JR山田線（当時）の橋梁部を除き、T.P.6・4メートルの津波高に対応する土構造の傾斜堤（表面にコンクリート枠または芝が張り付けてある）が、72（同47）年以降順次整備された。小鎚川河口に水門が設置されたのは2003（平成15）年である。

ほぼ全域が浸水

従って、11（同23）年の津波が来襲した時には、大槌漁港周辺や中心市街地一帯（大半がT.P.3メートル以下）はほとんどT.P.6・4メートルの防潮堤・河川堤防が取り巻いていた。ただし、JRの大槌川橋梁は、左岸でT.P.6・3メートル、右岸で4・8メートルと、周囲の堤防より、それぞれ0・1メートルおよび1・6メートル低かった。また、地震発生時の沈降で、これら全体が0・6メートル程度低くなっていた。このため、地区のほぼ全域が浸水した。

人的被害を見ると、安渡地区の全人口1953人に対し、死亡者数は217人で、死亡者率は11・1%であった。低平な埋立地に地区が立地し、人口密集地となっていたことが多くの人的被害が出た原因である。安渡三丁目など地区の南東部は海と山との距離が近く、避難路の勾配が急なため避難には不利な土地条件であった。また、港町や新港町、大槌港の港湾施設は大槌湾内に侵入した津波が最終的に到達する地点であったので、津波の破壊力が大きかったと推定される。

（瀬戸真之・福島大学客員准教授、田村俊和・東北大学名誉教授）

海からの高い津波が押し寄せた安渡二丁目、同三丁目付近（2011年3月12日撮影）。大槌川河口近くの埋め立て地では火災も発生した

各地区の被害 町方地区

大槌湾の最奥部にあり、二つの河川に挟まれた町方地区は、高い津波に襲われて壊滅した（2011年3月14日撮影）
※写真中の情報は震災当時。方位は目安

大津波、海と川から

町方地区は大槌湾の最奥部に位置し、大槌川と小鎚川の両河川の河口がある。この地区では最大で12・2メートルの津波浸水高を記録した。津波浸水高の記録を見ると、およそ7～11メートルの高さに達している。町方地区で大槌川と小鎚川の河口に挟まれた低く平らな土地は、大槌町の中でも最大の面積である。このため、町役場や公共施設が立地したり、集落が広く分布したりするなど、大槌町で最も人口が多く、中心街を形成している。

この低平地は、大槌川と小鎚川が上流から運んできた土砂が堆積してできた地形である。津波は海底の深さが浅いほど波高が高くなり、速度が遅くなるという性質を持っている。町方地区は大槌湾内に侵入した津波が最後に到達する場所であり、湾内の水深が浅いため、津波の波高が高くなる傾向が特に強かったと思われる。

これに加えて、大槌川、小鎚川に沿って津波が遡上（そじょう）し、両河川の堤防を越えて町中に流入した。つまり、町方地区は海からの津波だけでなく、河川からの津波にも襲われた。例えば小鎚川をさかのぼった津波は、町方に隣接する桜木町で6・9メートルの浸水高を記録している。町方に到達した津波は大槌川と小鎚川をそれぞれさかのぼって大槌川では大ケ口まで到達し、8・2メートルの津波遡上高を記録した。津波は大槌川右岸の河川堤防を破壊したり、越流したりして、住宅が密集する須賀町や大町、末広町方面に一気に流れ込んだ。

小鎚川では三枚堂付近まで津波が遡上したが、その水が小鎚川の堤防を越えて住宅などに被害を及ぼしたのは桜木町付近までである。このような、河川を遡上した津波は「河川津波」と呼ばれ、東日本大震災では各地で大きな被害をもたらした。

■ 表3-9　町方地区の被害状況（桜木町・花輪田を含む）

人的被害	身元判明者	410人
	行方不明者	273人
	合計	683人
	死亡者率	11.6%
建物被害	全壊	1,887棟
	半壊	350棟
	一部損壊	8棟
	合計	2,245棟

全壊建物極端に多く

この津波により、桜木町・花輪田を含む町方地区の建物被害は1887棟が全壊、350棟が半壊、一部損壊は8棟で合計2245棟に及んだ。建物被害の特徴として、全壊した数が半壊や一部損壊よりも圧倒的に多いことが挙げられる。大町付近で10メートルの津波浸水高を記録したことからも、町方地区の建物は津波到達時の押し波や引き波、および津波に伴う大型の漂流物によって激しく損壊したと推定される。また、町方地区は大槌町内でも特に建物が多かったため、数百棟の被害があった大槌町内の他地区よりも被害の数字が1桁大きい。建物被害の中に当時の町役場庁舎が含まれ、この場所で多くの人的被害が出たことは後の大槌町の復興に大きな影響を及ぼした。

人口の1割強犠牲に

震災当時の町方地区の人口は5904人（桜木町・花輪田の1421人を含む）と大槌町内でも最多であった。このうち、今回の津波による死者数は683人（同23人を含む）で、これは人口の11・6％に相当する。この数値は同じく大槌湾北部の赤浜地区や安渡地区、小枕・伸松地区と近い。いずれの地区もほぼ全域が浸水し、その浸水高は10～12メートルであった。浸水高を考えると、当時の地域防災計画の定める緊急避難場所が地区の背後にある城山の周辺に集中していたことなどから、避難する場所や時間の確保が難しかったことが容易に推定される。

町方地区の被災の特徴は、大槌川、小鎚川で河川津波が発生したり、地区が大槌湾最奥部に位置するため、津波が高くなったりしたことであり、このような津波を背景として甚大な被害が発生した。また、最大波の直後、上町や本町、末広町と境を接する城山のすそ野などに火の付いたがれきが打ち寄せられ、大規模な火災に発展、約16ヘクタールを焼いた。

（瀬戸真之・福島大学客員准教授）

大槌川の河口付近をさかのぼる津波（右が海側、2011年3月11日撮影）。直後、河川堤防を越流する

大津波の後、火災に見舞われた末広町一帯（2011年3月19日撮影）。左手前の建物は、多くの住民が逃げ込んで流された曹洞宗江岸寺

各地区の被害 沢山・源水・大ケ口地区

扇状地と河成段丘から成る地区一帯は、大槌川をさかのぼる津波に襲われた（2011年3月14日撮影）
※写真中の情報は震災当時。方位は目安

■ 表3-10　沢山・源水・大ケ口地区の被害状況

人的被害	身元判明者	61人
	行方不明者	13人
	合計	**74人**
	死亡者率	2.4%
建物被害	全壊	197棟
	半壊	162棟
	一部損壊	99棟
	合計	**458棟**

川沿いに広く浸水

沢山・源水・大ケ口（おがくち）地区は大槌川に面しており、地区背後の山から流れ出てくる土砂と大槌川が運んでくる土砂によってできた平地である。山の近くは扇状地であり、大槌川に面した部分は同川の元河床で階段状の台地になった「河成段丘」である。沢山・源水・大ケ口地区が立地するのは、このように扇状地と河成段丘とが合わさってできた平地で、沢山地区は扇状地、源水地区と大ケ口地区は河成段丘の面積がそれぞれ大きい。

これらの地区を襲ったのは、大槌湾に押し寄せた津波が大槌川を遡（そ）上（じょう）したものである。このような津波は河川津波と呼ばれており、東日本大震災では東北各地の河川で被害をもたらした。大槌川を遡上した津波は辺津ケ沢（へんつがさわ）と大槌川の合流点付近と屋敷集落付近まで大槌川を氾濫させた。津波が到達した最上流部は大ケ口二丁目付近で、この場所での津波遡上高は8・2メートルであった。

なお、沢山地区対岸の新町では8・9メートルの浸水高を記録している。大槌川と山地斜面とに挟まれた場所に立地する沢山・源水・大ケ口地区は、津波の侵入場所である大槌川河岸と集落との距離が近く、この点で他地区よりも避難が困難であった。また、津波は川に面した河成段丘の部分を越えて扇状地（山と接している部分）までを幅広く浸水させている。

猛威振るう河川津波

この津波がもたらした建物被害は全壊197棟、半壊162棟および一部損壊が99棟であった。全壊と半壊の建物数はほぼ同じであり、一部損壊も少なくない。このことは大槌湾に直接面した地区とは大きく異なる。例えば小枕・伸松地区ではほぼ全ての建物が全壊であった。沢山・源水・大ケ口地区を襲った河川津波の特徴として、海に面した地区と比べて破壊力が小さいことが挙げられる。ただし、河川と山とに挟まれた比較的小さな面積の土地が浸水するため、被害は小さくない。特に大石前・源水・屋敷の各地区は集落の大半が河成段丘の上に立地しており、河川津波の被害を大きく受けた。また、地震による津波が非常に大きかったため、河川津波とはいえ、沢山地区では川沿いの低地を津波がさかのぼり、山地斜面近くまで浸水した。

3地区の人口は3104人で、このうち死亡者は74人であった。死亡者率は2・4%である。大槌湾に面した地区では約13%の死亡者率であるので、単純に比較すれば人的被害は少なかったといえる。ただし、海に面した場所での津波ではなく、河川津波であったことを考えると決して小さな被害と言うことはできない。人的被害が出たことや、大槌川河口から源水地区まで津波が遡上し、集落が浸水したこと、沢山地区では山地斜面近くまで河川津波が押し寄せて浸水したという事実は河川津波の脅威を端的に伝えている。

（瀬戸真之・福島大学客員准教授）

国道45号から見た沢山付近の被災状況（2011年3月12日撮影）。写真中央奥の建物は県立大槌病院

河川津波は大ケ口の住宅街まで及んだ（2011年3月11日撮影）

大ケ口一丁目の町水道事業所付近の大槌川をさかのぼる河川津波（2011年3月11日撮影）

源水地区の大槌中学校は1階の天井付近まで浸水したとみられ、火災の痕跡も確認できる（2011年3月16日撮影）。当時同校にいた生徒たちは城山方面に避難して無事だった

各地区の被害 小枕・伸松地区

地形的な条件から小枕には海からの高い津波が、伸松には河川津波が押し寄せた（2011年3月14日撮影）
※写真中の情報は震災当時。方位は目安

■ 表3-11　小枕・伸松地区の被害状況

人的被害	身元判明者	32人
	行方不明者	10人
	合計	**42人**
	死亡者率	15.4%
建物被害	全壊	100棟
	半壊	2棟
	一部損壊	0棟
	合計	**102棟**

伸松は河川津波

小枕地区は、すぐ南側に隣接する白石も合わせて、谷の出口部分が山地斜面から出てきた土砂で埋め立てられてできた低平地である。小枕地区は、この低平地の前面（海側）をさらに人工的に埋め立てて港として利用している。白石の南側の海岸は海が山を削って作った海食崖であり、集落はない。伸松（のべまつ）地区も小枕地区と同様に谷の出口にできた低平地であるが、小鎚川の河口に位置するので、川が運んできた砂が堆積している。いずれも面積は小さいものの、山がちな大槌町の海岸線の中では貴重な生活の場である。

東北地方太平洋沖地震による津波は、小枕地区の最奥部で13・7メートルの津波遡上（そじょう）高を記録している。小枕地区北部でも13・5メートル、白石で13・6メートルを記録した。津波浸水高は明確ではない。伸松地区の津波遡上高は小鎚川河口の最先端部で11メートル、集落のうち最も山に近い場所で8・6メートルであった。伸松地区の津波遡上高は小枕地区や白石と比べて若干低かった。なお、この地区においても津波浸水高は明確ではない。

小枕地区や白石は大槌湾に直接面しており、湾に侵入した津波を直接的に受けた。一方、伸松地区は直接海に面しておらず、小鎚川の河口に面している。また、伸松地区は北側が小鎚川に面しているため、津波は北側から南側へ向かって侵入した。このように伸松地区では津波は小鎚川から侵入したので、津波が河川を遡上し、河川を氾濫させることで起こる河川津波の性格が強い。このことが、小枕地区よりも伸松地区が約2メートル津波遡上高が低い主な原因であると考えられる。このように地形とその配置が津波被害に大きく影響し、海からの直接の津波被害と河川津波の両方が隣接する地区で発生した。

津波高く避難困難

小枕地区と伸松地区とを合わせ、建物被害は全壊100棟、半壊2棟であった。被災した建物のほぼ全てが全壊しており、半壊はごくわずかである。すなわち、小枕・伸松両地区では津波の集落への到達がほぼそのまま建物の全壊につながっており、津波の破壊力が大きかったことが分かる。津波到達時には建物の大半が浸水し、押し波や引き波および津波に伴う漂流物によって建物が大きなダメージを受けた。このことは両地区の最も山に近い場所で、それぞれ13・7メートル、8・6メートルの津波遡上高を記録したことからもうかがえる。

人的被害は両地区の人口合わせて272人のうち、42人が犠牲となった。死亡者率は15・4％の高率に達し、これは町方や安渡など他の大槌湾に面した各地区よりさらに高い。特に大槌湾に面した地区では津波の遡上高や浸水高が高く、他の地区と比べて避難が困難であったことが推察される。

（瀬戸真之・福島大学客員准教授）

伸松側から見た小鎚川河口付近で逆巻く津波（2011年3月11日撮影）

大槌湾に面し、津波の破壊力が大きかった小枕地区（2011年3月19日撮影）

津波にさらされた大槌町漁協小鎚川サケ・マス人工ふ化場（2011年3月11日撮影）

小枕の集落は最も奥に立つ2軒を除いて全て被災した（2011年3月19日撮影）

第4章

震える、惑う 緊急期の町

2011年3月11日午後2時46分。
その時間を境に、大槌町は混乱と不安に包まれた。
津波の後、町の人たちは何を考え、行動し、
いかにしてこの難局を乗り切っていったのか。
災害対策本部が置かれた中央公民館と
町最大規模の避難所だった城山公園体育館で
震災発生からの3日間に何が起きていたのかを振り返る。

城山公園体育館の避難所に設けられた「拾得物コーナー」（2011年3月27日撮影）。町中で見つかった家族写真などが届けられた

Episode file
～大槌の津波～

津波の後には、火災の恐怖 昼夜関係なく行われた消火活動

大槌町消防団第二分団　分団長
小國（おぐに） 峰男（みねお）さん

小國峰男さん（69）は震災発生の翌3月12日から、消防団として活動を開始。変わり果てた町で消火活動に携わりながら、被災した町と向き合ってきた。そして、次の世代へ思いをつないでいく。

― 地震の衝撃は、やはりすごいものでしたか？

3月9日にも地震があったんですが、大きな津波が来なかったんですね。3月11日も津波が来たとしても大したことないだろうと思っていました。地震の後、釜石市の会社の外の広い所でうろうろしていたら、偶然通りかかった消防団の人から「すぐ逃げろ」って言われたんです。それは大変だっていうことで、社員それぞれ自分の車に乗って高台に逃げました。津波が来たんですが、海に近かった会社は一気にのみ込まれました。釜石から大槌へ帰ろうとしましたが、途中で道路も通れなくなっていて、そこで車を乗り捨てた。それからは山を伝って徒歩で帰ってきました。電気が消えているから道は暗い。その一方、遠くで爆発音が断続的に聞こえる。怖かった。

― 戻ってきて、すぐ消防団に合流したということですか？

安渡地区の自宅に戻る途中に、偶然、うちの消防団のポンプ車が高台の所で赤灯を回していた。そこで消防団に合流しました。その日は翌日の作業に備えて、ポンプ車の中で寝ました。とても寒かったことを覚えてますね。翌日から消火活動を始めたのですが、本当にいろいろなことがあった。結局、その日から5日間は、いつ出動要請が来ても大丈夫なようにポンプ車で寝泊まりしていました。

― 夜が明けて、町の様子を見た時の印象は？

明るくなって、いろいろなものが見えてきた。正直、こんなふうになったら、もう立ち直れないんじゃないかって思いました。火事で焼け落ちた町は、本当に爆弾でも落ちたんじゃないかって思うほど。焼けて、骨だけになっているご遺体もあった。それほど悲惨な状態でした。津波もすごかったのですが、その後の被害の広がりも大きかった。消火活動をしていましたが、こっちを消したと思ったら、また別の場所が燃えているという連絡が入る。その繰り返しでした。山から下がってきた火が家に近づいてきたから助けてくれって、夜中に出動したことも一度や二度じゃない。結局、大槌町で鎮火宣言が出たのは5月に入ってからですよ。

― 地域における消防団の役割は重要ですね。

消防団に入ってくる人は、強い使命感を持っている。それは自分たちの住む地域を自分たちで守っていこうという気持ちです。東日本大震災では、高齢者を助けようとして亡くなった団員もいます。そういう人たちに報いるためにも、消防団という組織は維持していかなければという気持ちがあります。新しい屯所も間もなく完成します。そして、東日本大震災を経験したことで結束も強まってきている。これからの大槌町を担う若い人に消防団に入ってもらって、この思いを引き継いでいってほしいと思っています。

（取材／2019年4月）

発災直後

土煙の向こうに津波が見えた
そして、その津波は猛烈な勢いで
町をのみ込んだ

末広町を襲う津波。土煙が上がり、もやに包まれたような状態となった

1日目――発災から翌朝まで

2011(平成23)年3月11日、東日本大震災が起きたあの日。かつて経験したことのない揺れと大津波は、人から冷静さを奪う。この混乱のさなか、人は何を思い、どのように行動したのか。翌12日に町災害対策本部が置かれる町中央公民館や、大規模な避難所になった城山公園体育館で起きていた出来事を聞き取りながら、解き明かしていく。〈記事中の人物の年齢は取材当時、町役場の現職員は敬称略〉

一瞬で町が消えた

3月11日は曇り空。まだまだ春は遠いと感じさせる寒い日だった。地震が起きた午後2時46分、教育委員会学務課主任(当時)の小笠原純一(46)は、同課のある大槌町小鎚の中央公民館で仕事をしていた。今まで体験したことのない揺れの大きさと長さにただ事ではないと直感したという。高台にある中央公民館からは町が見渡せる。揺れが収まって少し経過した後、窓を開けて外の様子を見た。

「建物の倒壊もなく、見た目にはいつもと変わらない町の風景でした。ただ、すでに避難を始める人たちで県道大槌小鎚線では渋滞が起き始めていた。徒歩で逃げる人たちが道にあふれ、車のクラクションがあちこちで鳴っていました」

その時、大槌町役場産業振興課主事(当時)の臼澤洋喜(41)は、小笠原が見下ろしていた町の真っただ中にいた。公用車で移動していたが渋滞に巻き込まれ、一向に前に進む気配がない。同乗していた上司に運転を任せ、徒歩で中央公民館に向かうことにした。非常時には避難路で町民の誘導を行うのが臼澤に与えられた役割。厳しい寒さの中での任務になることから、臼澤は防寒着を取りに一度自宅に戻っている。

大槌小鎚線を歩いていると、「もや」の向こうに大きな波が見えた。押し寄せる津波は堤防を軽々と越えて、町はあっという間に津波にのみ込まれていく。臼澤は歩く人たちに向かって「逃げろ、早く逃げろ」と声を掛けながら駆け出した。自身は当時の町立大槌小学校(現大槌町役場庁舎)校門脇で「旧跡大槌城址」の石碑が立つ、小さな岩山に全速力で駆け上がり、すんでのところで難を逃れた。

「携帯電話を見ると友人から『大丈夫か?』とメールが入っていました。それがちょうど午後3時25分。津波の第1波が来たのがその前です。第2波は石碑の中ほどの高さまで来ました」

臼澤はこの石碑の上に立ち、津波の猛威を目の当たりにした。大きな家が次々に流されていく。ぶつかり合った家がバリバリと大きな音を立てる。水に濡れ電気系統が故障した車からは、クラクションが鳴り続けていた。どうすることもできず、ただ立ちすくんでいた。

「津波を見ていた人にはいろいろな感情があると思います。私の場合は『呆然』という感情。ついさっきまであった町が黒く濁った水に覆われて、全部なくなってしまった。何が起きたのか分からない。そういう感じでした」

まだ水は町の中から引き切っていなかったが、暗くなってからでは身動きが取れなくなる恐れがある。臼澤は石碑のある岩山から下り、中央公民館に向かって水の中を歩きだした。水位は腰の辺りまであったという。

まずは中央公民館と隣接する城山公園体育館へ行き、避難所としての機能を整えなければならない。それは小笠原、臼澤ともに考えていたことだ。この時、大津波が直撃した役場庁舎などで上司や同僚ら39人が犠牲になったことなど知る由もなかった。

次々起こる難題

これから多くの人が避難してくることを予測し、町職員の姿を探したが、この時点で見知った顔はない。そのうちに大槌小学校の児童や、町立大槌中学校の生徒たちが次々に避難してきた。小笠原は中央公民館の裏手にある駐車場に子どもたちを集めていた。津波の様子を見せないためだ。小笠原はその日のことを思い返す。

旧大槌小と中央公民館の位置関係。住民は中央公民館まで急坂を上り、避難した

「子どもであっても、あの大きな津波であれば、人が流されていることは予想できるはず。駐車場の真ん中に集め、なるべく津波が見えない場所に誘導してくれるように大槌小学校の先生にお願いしました」

中央公民館に避難する町職員が徐々に増えてきたことで、次の行動に移ることができた。移動式防災無線の装置の組み立てを指示し、バケツ、ペットボトルを集め、飲料水の確保を行う。体育館の中にイベントなどに使う発電機があったが動かない。ちょうどその場に居合わせた高木電機管理事務所の高木正基さん(56)に修理を依頼した。残りの職員は津波で流された人の救助に向かった。水浸しになり歩けなくなった人はテーブルを担架代わりにして運ぶ。車ごと流されてきた人はフロントガラスを石で割って助け出した。その瞬間、その瞬間で判断していった。

「あの震災は誰も経験したことのないもの。普段通りにやろうとしては駄目なのだなと実感しました。本来の命令系統であれば、起案して、上司の指示を待つ。しかし、それを伺う管理職がいなかったこともあり、目の前で起きていることを即座に判断して解決していかなければならない。そうしなければ手遅れになっていたと思います」

生涯学習課主事だった平舘豊さん(38)は地震発生後、城山公園体育館に避難者が押し寄せることを予測し、受け入れ準備をしていた。その動きは非常にスムーズだったと記憶している。公共の施設ということもあり、半年ごとに災害を想定した防災訓練をしていたことが大きく役立った。さらには、この2日前に大きな地震があったことも「心の準備」につながったと平舘さんは振り返る。

「普段から災害を想定した訓練をしていたので、こういう事態で自分がどのように行動すべきかが分かっていました。右往左往するようなことはありませんでした。2日前にもかなり大きな地震がありました、3月11日の地震はそれよりもはるかに大きかったし、時間も長かった。これは大変なことになるなと思いました。自分は施設管理が仕事でしたので、公民館や体育館の館内を見て回りました。体育館は天井から板が数枚落ちていましたが、それ以外に目立った被害はありませんでした。だから、体育館の中に避難してきた方々に入ってもらいました」

地震発生から時間がたち、辺りはすっかり暗くなっていた。この時点で、中央公民館に集まってきた町職員の数は12人。手分けして、避難者の対応に当たった。避難者の中には衣服が濡れたままの人もいた。もちろん着替えの用意がないため、少しでも体を温める必要がある。いす席で800人収容の体育館に避難していたのはおよそ千人。防災備蓄倉庫に保管されていた毛布を出してきたが200枚くらいしかない。体育館にあった暗幕を切り分けて毛布代わりにしたが、それでもまだ数が足りない。

避難者は体育館だけでは収まり切らず、中央公民館の廊下やエントランスにまであふれていた。修理を依頼していた発電機はまだ動く気配がなく、電気が使えない状況は続いている。外気温とさほど変わらない室温の体育館の中には、知り合いを見つけ、無事だったことを喜び合う人、一方で家族の安否が分からず不安げな様子の人がいた。余震が起きるたびに、体育館のあちこちで悲鳴が上がる。

城山体育館に迫る火

電気の問題を残しつつ、さらにもう一つの難題が持ち上がっていた。津波が来た直後から、大槌町内では火災が発生していた。そして、その火は中央公民館の裏山、そして坂道の下の両方向から迫って来ている。避難していた元消防署職員に小笠原が相談すると、駐車場に避難してきたタンクローリーをまず移動させることを提案された。火が近づいてきて、車に引火すればさらに被害が広がってしまう。そのことを心配してのアドバイスだった。中央公民館の裏手には、非浸水域に通じる林道城山1、2号線と合流する町道が通っていた。地元の人もほとんど通ることのないこの道が、自衛隊や物資運搬の救援車両の経路となり、人の命をつないだ。自家用車で避難していた人たちに、同町道を伝って山間の方へ車を移動してほしいと声を掛ける。混乱した状況では連絡がうまく行き渡らない。

吉里吉里中学校から撮影した、吉里吉里海岸の防潮堤を軽々と越えて押し寄せる津波

押し寄せた津波の力によって、鉄筋の建物でさえ骨組みだけになってしまった

館内放送もできないため、予想外の事態が起きる。小笠原は言う。

「車が続々と移動し始めたことで、ここも危ないのではと思う人がそれぞれ避難行動を始めた。走る車を無理やり止めて同乗させてもらったり、歩いて山を越えようとしたりする人も出てきた。そういうことが起きると、もう止めようがない、12人の職員で千人を抑えることはできませんでした」

風にあおられたことで、火が近づいて来るスピードが上がる。坂道の下から迫る火をまず食い止めようと考え、10人ほどの男性職員が集まり、空のペットボトルに建物内の貯水槽からくみ置きした水を入れ、ガードレール沿いに並んで、一斉に枯草に水をまくと、上ってくる火の勢いをかなり抑えることができた。しかし、裏の山から伝ってくる火については手の打ちようがない。ここに火が回ってきたら、いよいよ逃げ道がなくなる。時計は午後8時を回っていた。

仮の災対本部編成

「本来の災害対策本部が、この時間になっても動き出さない。ということは、職員は庁舎の屋上に避難していて、ここに来られる状況ではないと考えるようになりました。自分たちは自分たちで避難してきた住民を守らなければならない。そこで仮の災対本部をつくろうという話になり、中央公民館にいる12人の町職員で編成しました」

避難者の名前を聞き取る係、状況を確認する係と役割を分け、それぞれ対応を始めた。小笠原をはじめとする男性職員は、状況を確認する係として軽自動車で林道を走った。指定避難所などにどれだけの人数が避難しているのか、さらにはどんなことで困っているか、情報を集めた。車の中でラジオを付けると、大槌町の情報がなく、状況がつかめないとアナウンサーが告げている。情報を集めて発信しなければという思いが強くなった。

「金沢（かねざわ）支所に衛星携帯電話があることを覚えていた。あちこちの避難所に立ち寄りながら、金沢支所を目指しました。金沢支所で衛星携帯電話を使って県庁に電話してみたのですが、話し中でつながらない。一緒にいた町職員が元広報担当で、たまたまNHK盛岡放送局の電話番号を記憶していました。運よく通じたので大槌町の現状を県庁に伝えてほしいとお願いしました。金沢支所から戻る途中にラジオで『大槌町は全滅』みたいなことを言っていましたが、生きている人もいるんだけどなと思っていましたね。ちゃんと伝え切れなかったという気持ちもありました」

中央公民館では、高木さんに依頼していた発電機の修理が終わり、電力が戻ってきていた。避難所を回る中で、さまざまな情報が得られた。その中でも緊急対応が求められたのは、津波で流された時に海水を飲んで腹痛を起こしている、あるいはいつも飲んでいる薬がないなど、健康面に関わる問題だった。中央公民館には医師の道又衛（みちまたまもる）さんが避難していた。どうすればいいのか対応方法を聞き、それを避難している人たちに教えることができた。中央公民館にさまざまな職種のプロフェッショナルが集まっていたことは幸運だった。しかし、難題が次々に持ち込まれる。全てに対応することは無理だった。

「体力のないお年寄りや服の濡れたままの人たちがいました。保健師たちの間で林道の先に老人ホームがあるので、そちらに移したほうがよいのではという話になった。金沢支所に向かう途中で、その老人ホームに行けることも確認していたので、ピストン輸送で人を運び続けました」

小笠原と共に車を運転する役割を担った臼澤は、その夜のことを思い起こす。

「林道は真っ暗闇。町の中は水浸しではあったけれど、不気味に明るいんです。船とか、車から燃料が流れ出る。流れ出した油は水より軽いので水面に浮かんでいる状態です。バッテリーやプロパンガスを介し、その油に引火して火が上がる。石油系の激しい燃え方でした。それが一昼夜にわたり燃え続けた。街灯がなくても、外が明るく感じられる。プロパンガスの爆発も続いていました。1、2分に1回は大きな音を立てて爆発する。それが恐怖心をあおるんです」

恐怖と不安を抱えながら、夜は更けていく。人を運んでいるうちに、今度は物資の調達の方法を考えなければ、ということになった。被災を免れた小鎚の大槌リサイクルセンターに4トンと2トンのトラックがあり、中央公民館にあった方が便利だろうという判断で移動した。そして、日付が変わろうという時間になって、自衛隊のジープが中央公民館を訪れる。災害対策本部はどこかと問われ、本部が置かれるべき役場庁舎は津波被害を受けているので、中央公民館にいる町職員が代行していると説明した。ほどなくして中央公民館内に自衛隊の現地本部が立ち上がった。混乱と不安が入り混じったあの日のことを、小笠原は鮮明に覚えており、説明する言葉にもよどみがない。

「覚えているというよりも忘れられない。一つ一つが強く心に残り続けている。目の前の難題を乗り越えるために、知恵を絞る、行動する。そうしたら、いつの間にか朝になっていた」

3月12日の朝に12人の職員が集まり、中央公民館でミーティングが行われていた。午前9時過ぎに自衛隊のヘリが飛来し、役場の屋上に避難していた人が救助されたという一報が届く。その中の1人である町教育長（当時）の伊藤正治（いとうしょうじ）さん（69）が昼過ぎに中央公民館に戻ってきた。「生きて帰ってきたぞ」と涙する伊藤さんの姿が小笠原は忘れられないという。

3月11日 15:38

3月11日 17:14

3月11日 19:36

3月12日 0:22

城山公園体育館から見た津波当日の光景。中央公民館にいた小笠原純一職員が携帯電話のカメラで撮影した。津波が押し寄せて水没した町、城山の山際で発生した火災を克明に捉えている

2日目——

数少ない職員で対応

長い夜は終わり、朝が訪れた。小笠原はその日の朝のことをはっきりと覚えている。頬に吹き付ける風は冷たく、痛みを感じるほど。真冬の防寒着がなければ過ごせない寒さであり、例年の3月に比べればかなり気温が低い。しかし、真っ青な空が広がっていた。

「発災当日は星がきれいな夜でした。憎らしいくらいきれいだった。そして夜が明けると、すごくいい天気。いい天気過ぎて腹が立ちましたね。これは何だよと」

どこにもぶつけようのないやるせなさ。青空から目線を落とせば、大槌の町は白く煙っている。それは火事のせいだった。あちこちで発生した火事はいまだにくすぶり続けている。高台にある城山公園体育館の中では、次々に難題が生まれていた。

第一にはトイレの問題だ。水がなくなることに備え、くみ置きをしておいたが、いつ足りなくなるか分からない状況。給水タンクの水は一滴も無駄にできないという気持ちがあった。水洗トイレのドアに「水を流さないでください」という張り紙をすると、便器には排泄物が山のように積み上がっていく。避難者から苦情が寄せられた。

「衛生上よくない。病気になったらどうするんだと。役場の職員たちが軍手の上にビニール袋をはめて、排泄物をすくい上げ、穴を掘って埋めていたんですが、それも限界がある。水で洗い流すことができないので、室内に臭いは残る。それに対しても苦情が来る。一つの問題を解決しても、また別の問題が持ち上がる。その繰り返しでした。避難者の方々に、トイレの担当、給食の担当など、役割担当を決め、交代しながらやってほしいと伝えたのですが、なかなかうまくいきませんでした」

この時点では正確な情報はつかめていないが、地震と津波の規模、そして避難状況から、かなりの人数の町職員が命を落としているであろうことが推定された。少ない人数では、どんなにがんばっていても、物資調達、安否確認などに手が回らない。そこにも苦情が寄せられる。受け止め切れない状況に陥っていた。何とかしたいけれど、何ともできないもどかしさがあった。

「印象に残っているのは、腎臓疾患で透析をしなければならない方。3月12日に透析をする予定だったらしいのです。『どうにかしてほしい』と言われるのですが、連絡手段がないし、病院だって正常に機能していない。僕ができることは保健師さんに相談するくらい。住民の方にお願いされたことに応えるのが役場職員というものの、それに応えられないのがつらかったですね」

周囲が明るくなってから、職員による情報収集も再開された。臼澤が担当した安渡、赤浜方面は、大津波の翌日ということもあり、がれきが道をふさいでいる所も多くあった。車が通れない場所もあったため、途中で車を降り、徒歩で進んでいった。どこにどれくらい避難しているのか、何が不足しているのか。それらの聞き取りをしながら、町の被害を目の当たりにした。

「民宿の上に船が乗っているのも見たし、これは大変なことになったと思いました。情報収集はしていたんですが、紙やペンもなかった。目で見たものを口で報告する。そういう感じでした」

困難を乗り切る知恵

通信手段がなかったことも、よく覚えている。発電機が稼働したことで、パソコン、コピー機などが使えるようになった。避難者には紙に名前を書いてもらい、それをパソコンで入力し、印刷したものを各避難所に配った。携帯電話は宮古市か遠野市まで行かないとつながらない状況だった。大槌町の状況を広く発信するために活用されたのがアマチュア無線だった。

「元役場職員の方がやってくれました。普段のことができない状況では、人間は知恵を絞るようになります。それぞれが持っている知識やスキルを生かすことも大事です。それで乗り切れることは少なくありません」

そう語る小笠原は大型自動車の運転免許を持っていた。普段はあまり運転しないが、震災の非常時では、燃料の運搬などの作業に携わり、被災者を支えた。

つらい安置所の仕事

震災2日目には、徐々に被害の状況が分かってきた。小笠原は目の当たりにした風景を忘れられない。それは悲しさとつらさの繰り返しだった。

3月12日に撮影した町方地区。被害の状況が明らかになってきた

ヘリコプター内部（植田俊郎さん撮影）。救助された人たちが肩を寄せ合う

自衛隊のヘリコプターが飛来し、屋上などに避難している人を救助（植田俊郎さん撮影）

震災後の町方地区。かつての町の風景は失われた

「道路には、泥まみれになっているご遺体がありました。また、避難所の近くの家で知り合いのおじいさんが亡くなっている。それを見た人は見捨てておけるわけがない。避難していた人たちが、そのご遺体を中央公民館に『連れて』くるのです。本来、自治体の職員は遺体に触れてはいけないルールになっています。警察と自衛隊しか触れてはいけないのですが、あの時はそういうことを言っている状況じゃない。放置はできないので引き取ってきました。そういう役割も職員が担っていました」

同時期に中央公民館にいた生涯学習課社会体育施設班長(当時)の中村一弘(なかむらかずひろ)さん(62)もつらい経験をしてきた。小笠原の言葉を継いで、当時のことを語り始める。

「遺体安置所の担当は精神的にもつらい仕事です。人が足りない中で、最初は交代しながらやろうという話だったのです。しかし、そうこうしているうちに、時間をかけて引き継ぎの作業をするよりも最初に担当した者が続けたほうがいいんじゃないかという考えになってきました。でも、人間は誰も同じではないんです。メンタルの強い人間もいるし、弱い人間もいる。それを責めるなんてできないですよ。続けているうちに精神的に参ってしまう人も出てくる。それぞれの安置所に担当を付けて、毎朝出ていくのですが、徐々に口数が少なくなっていく。職員たちもだんだん会話がなくなって、朝になっても起きられなくなる職員が出てきた。だんだんメンバーも減っていきました。残ったメンバーもつらいこと、言いたいことはあっただろうけど、ぐっと胸にしまいこんで、淡々と業務を全うしていました」

自衛隊による遺体搬送

搬送された遺体は検視に回される。これについても大槌町職員が駆り出された。小さい町だけに顔見知りも多い。遺体の確認作業を行い、名前を書いた紙を付けていった。また、泥にまみれた遺体については、正確な検視を行うためにきれいに洗い流された。これも職員たちがバケツで水を運んで行った。

3月下旬からの話になるが、大槌町では火葬に関しても苦労があった。大槌の火葬場では、通常1日4体の火葬を行っていた。だが、東日本大震災では遺体の数が多く、1日6体の態勢へと切り替えたことで、機械が壊れてしまった。火葬ができない状態となり、他の自治体に協力を呼び掛けざるを得なかった。身元が分からない遺体については、検視を経た後、職員が立ち会い、火葬を行ったという。また、火葬が滞る状況下で土葬も検討されていた。

「400体くらいのご遺体があったのですが、火葬できなかったため、町内の山手の所を仮埋葬地に決めていました。広さは400平方メートルくらいです。実際に準備も進めていて、いつでも土葬できるという状態になったのですが、他の自治体の火葬場で受け入れてもらえる体制ができ、実行直前で土葬は中止になりました」

シーサイドタウン・マスト近くの風景。がれきが積み上がっている

「帰る場所がない」

震災発生から2日目。被害の状況が少しずつ明らかになったことで、次から次へと問題が生まれた。そして、それら全ては急を要するものばかりであり、解決したくても圧倒的に人員が足りない状況だった。城山公園体育館に避難した人々は、どんな思いで、2日目の夜を迎えていたのか。津波当日に釜石から帰宅する途中で渋滞に巻き込まれて車中で夜を明かし、徒歩で大槌町に戻った野沢文雄(のざわふみお)さん(74)の言葉を紹介する。

「泣き叫ぶとか、そういう状態ではなかった。多くの人が高台から町の状態を見て、腹を決めたという感じでした。諦めにも似た感情でしょう。自分にはもう帰る場所がない。だから、ここで避難生活を続けるんだと。皆さん、落ち着いていたと思います」

城山公園体育館の避難所。震災直後は千人を超える避難者がいた

中央公民館に設置された災害対策本部の関係車両。右から3台目はNTTの災害伝言設備の車両

3日目——

動き始めた災対本部

津波発生の日に役場庁舎の屋上で夜を明かした職員は翌12日朝、自衛隊のヘリコプターに救助された。さらに他の避難所に散らばっていた職員が徐々に中央公民館に集まってきたことにより、その日の昼過ぎには本来の災害対策本部が立ち上がった。災対本部が最初に取り組んだのは、組織の立て直し。各セクションのリーダーを担うべき職員の多くを津波で失い、通常ルールに沿ったやり方では成り立たない。そのため役職の枠にとらわれることなく、求められる復旧作業に適した職員をリーダーに選び、さらに残りの職員に役割を振り分けていった。3日目を迎えたころから、災対本部の活動はより活発になっていった。

震災直後から大きく変わったのは「情報の多様性」だ。職員が町内の状況を把握するために、避難者がいる場所を訪ね歩いた結果、さまざまな情報が集まるとともに、次々と新しい課題が浮かび上がってきた。小笠原は先頭に立って避難所を繰り返し訪問し、問題に向き合った。

「避難者から要望を寄せられ、予想外のことも新たな問題として顕在化してきました。これからどうやっていけばいいのか。そんなことばかり考えていました」

孤立していたり、山間地にあったりする避難所については、十分な物資が届いていないことが分かった。とりわけ困難を極めたのは在宅避難者への対応だったと小笠原は振り返る。

「夜、建物に電気がついていれば、あそこに人がいるんだなということが分かるのですが、まだ停電が続いている状態。津波が来ていない家でも、基本的に中を確認しない方針でした。人員が限られ、在宅避難している人たちの情報は正直拾い切れなかった。避難所にいる方には物資を届けられるのですが、在宅避難については、われわれが見落としてしまう場合もありました」

業務さばき切れず

状況が明らかになるにつれ、小笠原は避難者に一刻も早く分け隔てなく物資を受け取ってもらえるようにしなければならないと強く感じた。一方、県内外から個人的に物資を届けてくれる人が増えてきた。これは予想外の出来事だった。大槌のために役立ちたいという人が車に物資を積んで、中央公民館や各地区に駆け付けてくる。中央公民館では、支援物資は会議室に保管されていた。その量は徐々に増え続け、保管場所を埋め尽くすほどになった。届けられた支援物資は多種多様であり、人員を割り当てて、仕分け作業を行うようにした。

震災発生から3日目以降、日がたつにつれて危機的状況からは脱しつつあったが、やるべきことは日に日に増えていった。遺体安置所の管理運営や避難者のリスト作成に始まり、燃料の管理・運搬などについても職員たちが担当していた。これらの作業を行うにはあまりにも人が足りなかった。

「物資配分やインフラの復旧も大切ですが、やはり避難所の人たちの対応に重点が置かれました。避難所では職員を2人1組にして、1日交代、半日交代という形で常駐させていました。そっちに人が割かれるので、救護を担当する係、死亡届を受理する係、道路を切り開く係など、本来の災害対応には圧倒的に人が足りない。それぞれがオーバーワークになっていました。災害規模が大き過ぎるので、仕事をさばき切れないのです。災害時のマニュアルには、職員で全てをまかなうのではなく、民間業者の協力を得て対応するようにと書かれていました。

しかし、東日本大震災では、道路復旧に携わる建設業者や食糧を供給する米穀店など、協力を仰ぐべき業者も軒並み被災していた状況。マニュアルに書いてあるような対応はとうてい望めません。町全体が壊滅的な被害を受け、どうにもならない状態でした」

大槌町が震災以前に指定していた、中長期的な避難生活に対応する「収容避難施設」は29カ所。震災時には、畑の納屋や在宅避難などを含めると、避難所は優に100カ所を越えていた。これは想定をはるかに上回る数であり、避難所によって、必要とされる物の内容も違う。

避難の状況を正確に把握し、支援物資を的確に配分するためには、各自が持つ情報の共有が不可欠だった。それを実現するために、災対本部のミーティングは、1日に朝と夕の2回実施。役場職員、消防、警察、自衛隊が集まり、朝は、その日1日にすること、あるいは前日に入ってきた情報の共有。夕は、

大槌小学校（現大槌町役場）は、津波後に起きた火災によって大きな被害を受けた

その日にどんな対応をしたか、何で困ったか、そして次にどのように対応していくべきかが主な議題となった。ミーティングを行う部屋には全員が入り切れず、廊下まであふれた。ここに飛び交う情報から、避難者への対応の活路が開かれることも少なくなかった。

「3日待てば助かる」

「誰がどの避難所にいるのか、次第に分かってきました。例えば、電気に詳しい人があそこにいる、あるいは、大工さんがあの避難所にいる。そういう情報が役立ちました。避難している人たちにも協力を依頼することで、オーバーワーク気味だった役場職員の仕事量を軽減でき、さらには他の業務にも人員を配置できるようになりました」

小笠原は「情報」のありがたみを感じるとともに、注意しなければならない点もあると言う。

「行政の職員というのは、役割ご

東日本大震災前の大槌町の航空写真（2002年3月13日撮影）

東日本大震災後の大槌町の航空写真（2011年4月18日撮影）

とに縦で線引きするのですが、避難所に行けば、そんなことを言っていられない。避難者の方々は、同じ役場の人間という捉え方をするので、普段とは接し方も変えなければなりませんでした。例えば寄せられた要望をメモする。それを持ち帰って、情報共有ミーティングで、要望に応えられる専門家へとつないでいく。ただし、口頭やメモだけで情報が行き交うので、錯綜して伝わりづらくなるという部分も否めない。情報が増えることで、混乱が起きてしまうということもありました」

情報を集めることは必須だが、それを整理していくことがさらに重要だと小笠原は語る。

「震災対策本部の『本部日誌』ができたのは震災から4日目でした。時を同じくして、NTTドコモの携帯電話が一部地域で使えるようになったことで飛躍的に情報の整理が進みました。避難所から直接災対本部に連絡できるようになり、タイムロスがなくなりました。支援物資についても、大槌町では何を必要としているのかを発信できるようになり、せっかく送ってもらった物資を無駄にしてしまうことがなくなりました」

東日本大震災。巨大な自然の猛威の前で、人間の力は限りなく小さい。その事実を突き付けられた。小笠原と共に復旧作業に当たった臼澤も、それを強く実感した一人だ。

「最初の3日間が一番苦しかった。もちろんそれ以降も大変なんですが、どんどん慣れていくというか、まひしていく。今まで当たり前にあった電気、車、携帯電話、それらが一瞬で全て駄目になった。何もなくなった状態では、人間は何もできないし、役場も動きようがない。では何を大事にするかと言ったら、やはり『命』です。避難所という場所に限定すれば、焦らずに、周りと協力しながら、助けを待つこと。3日間待てば、誰かしらから救いの手が差し伸べられる。それを信じるしかありません」

この第4章では、東日本大震災の発災から3日間、中央公民館や城山公園体育館で何が起きていたのかを記した。この記録を小笠原の言葉で締めくくる。

「避難所の対応に当たった役場職員は、自分のことは後回し。落ち着いてきて、身内の安否確認をしてみると、妻や肉親が亡くなっていた職員もいた。混乱の時期を乗り越えられたのは、常日頃から職員は住民の生活を支えるのが役割という考え方を持つ人たちがいたからだと思います」

慌てず、騒がず、人の役に立つことを その思いが避難所に「光」をもたらした

城山公園体育館で始まった避難所生活。子どもから高齢者までが共に暮らすことになった。消灯時間を巡って意見がぶつかり合った時、越田さんのアイデアが多くの人に安らぎを与えてくれた。

越田さんはあの日の地震の瞬間、経営する本町の「越田商店」にいた。日用雑貨を扱いながら、家電などの簡単な修理も請け負っていた。近隣に暮らす人たちにとってなくてはならない店だった。

町立大槌小学校（現在の町役場）脇の坂道を下れば、県道大槌小鎚線にぶつかる。そのすぐそばにあったのが越田商店だ。越田さんは持ち込まれたストーブの修理をしていたという。奥の茶の間には近所のお年寄りがお茶を飲みに来ており、にぎやかな声が聞こえていた。

午後2時46分、経験したことのない揺れが襲う。その場にいては危ないと感じ、思わず外へ飛び出した。ほどなくして、大槌小鎚線には車が連なり始める。中央公民館に避難する人たちで渋滞になっていた。

「津波で亡くなったのは、海からちょっと離れた所に住んでいた人が多い。ここまで来ないだろうという気持ちがあったはず。海の様子が見えていないので、避難するまでもないだろうと思っていた人もいたと思う。山も近くて、いざとなれば、すぐ逃げられると思ってしまう。実際、町方地区は、大槌町で亡くなった人の半数以上に当たる660人が命を落とした」

越田（こした） 征男（ゆきお）さん

1945（昭和20）年3月、大槌町向川原（現在の末広町）生まれ。東日本大震災時には、大槌町役場（旧町立大槌小学校）前の石碑に駆け上がり、間一髪のところで津波の難を逃れた。日用雑貨を取り扱う「越田商店」を経営していたが、津波により被災。その後、2018（平成30）年に同じ場所で再開した。

津波は、もうすぐそばまで迫っていた。木造の家はバリバリと音を立てて流されていく。鉄骨の家は骨組みだけが残った。それほどの威力を持って津波は町に流れ込む。越田さんは大急ぎで大槌小の校門の脇にある石碑の立つ小高い場所に駆け上がった。

「その場所に上がったところで、津波の第1波が来た。石碑の高さまでは来なかった。ところが第2波はどんどん水位を増すので、私は石碑の上に立ち上がった。水は石碑の上端から15センチ下くらいまで来た。うちの店の向かいにあった文房具店、設計事務所の旦那さん2人は流されて亡くなった。津波の直前にも声を掛け合った2人が亡くなり、なぜ、自分が助かったのか。その理由は分からない。運が良かったと言うしかない」

越田さんは石碑の場所から動くことができず、地震発生から2時間ほどをその場所で過ごしている。家屋が流されていき、爆発の音とともに火が燃え広がっていく。大槌小の校庭では大きな渦ができ、車がズブズブと沈んでいった。勢いを増した火が冷たい空気を温める。越田さんは寒さを感じることはなかったという。そして、目に映ったものを一言で表現する。

「地獄の光景だったよね、あれは」

城山公園体育館には、千人を超える住民が避難していた。大声を上げるような人はいなかったが、積もり積もった不安が口からあふれ出る。この町はどうなってしまうんだろうという声があちこちで聞こえていた。津波直後に起きた火事はさらに勢いを増し、大槌の町に広がっていた。そして体育館にもじわじわと迫りつつあった。多くの人が別の場所へと移っていく中、越田さんはそれでもとどまり続けた。

「津波が来ても、すんでのところで助かった。『ここで無理することねえべ』って思ったんだよね。バタバタしてもしょうがないと思った」

大槌町の火災は、2日目も続いていた。十分な消火活動ができない状況もあり、手をこまねいていた。

大槌町で最大の避難所であった城山公園体育館では、民間の人々が避難者の「取りまとめ役」として活躍していた。越田さんをはじめ、この場所に避難していた多くの人々が、避難所を支え続けたことは間違いない。越田さんには城山体育館での避難生活で記憶に残っていることがある。それは生活の明かりに関することだ。

「夜になると、早く寝る人と、遅くまで起きている人が出てくる。お年寄りというのは早く寝るし、子どもたちが騒いでいるのがうるさいわけよ。消灯の時間でもめた」

一計を案じた越田さんは、釜石市に出掛ける人に白熱電球を買ってきてほしいと頼む。消灯時間になると蛍光灯は全部消して、代わりに電球を付けた。この柔らかな光が避難所に安らぎを与えた。

「昔ながらのあったかい光。ポワッとした明るさで何だか落ち着くんだよね。これはいいとみんなが納得したんだよ。明るさでいえば、蛍光灯の方が断然明るい。新しい物、便利な物に人間は目が行きがちなんだけど、避難所のような特殊な環境で、人の心を和ませたのは、昔ながらの電球だったということは印象に残ってるね」

震災時に越田さんのアイデアで武道場につるした電球は、今も残っている

城山公園体育館の武道場。震災時、200人近くが暮らしていた。もはやその痕跡を見ることはできないが、その武道場の天井には、越田さんがつるした白熱電球が今も残っている。

震災当日から電気の復旧に全力
どんなに働いても疲れを覚えなかった日々

城山公園体育館に避難した高木正基さんは、電気保安技術のプロフェッショナル。震災が起きたその日から、電気の復旧に向けて動き出していた。要望があれば駆け付け、復旧作業に尽力しながら、避難所で暮らす人たちを見つめ続けた。

城山公園体育館には、発災当日に約千人が避難していたといわれる。その後、他の避難所に移る人も増えていったが、同体育館は常時約300人が避難生活を送る、大槌町最大の避難所だった。そこに避難していた人たちの中に高木電機管理事務所の高木正基さんもいた。

地震発生時、高木さんは大槌川上流の柾内（まさない）地区にいて、車の中で作業報告書を作成していた。今まで経験したことのない揺れの大きさ、そして長さだった。ラジオ番組は中断され、地震に関する内容になった。アナウンサーは「津波に注意してください」と繰り返していた。まず頭に浮かんだのは自宅のことだ。大槌川と小鎚川の両河川の流域にある家は、確実に津波にのみ込まれるだろう。家族が無事、逃げていてくれることを祈った。

「わが家は（共倒れを防ぐために各自で逃げる）『津波てんでんこ』を日頃から実践していて、家族には、大きな地震があったときには指定避難所の城山公園体育館に逃げろと言っていました。家にいないことを祈りましたね。私が言った通りに行動してほしいという思いで、体育館に向かいました。ただ市街地ではひどい渋滞が起きていて、全く車が進まない。Uターンして車を駐車場に止め、歩いて避難することにしました」

高木（たかぎ）　正基（まさき）さん

1961（昭和36）年8月、大槌町本町生まれ。東日本大震災時は城山公園体育館に避難。発災当日の夜から活動を開始し、停電状態だった大槌町の電力復旧に尽力した。2011（平成23）年12月から、小鎚の仮設商店街「わらびっこ商店街」で営業再開。18（同30）年9月、新しい事務所でスタートを切った。

避難路の途中には、姉と弟が営んでいた家電店があった。古い建物だけに倒壊の心配もある。幸い倒れることなく店はあった。姉と弟に避難を促した。そして、偶然居合わせた若者に見せられたワンセグ携帯電話の映像に衝撃を受ける。それは、釜石に押し寄せる津波の様子だった。これは大槌にも来る。それも桁外れの大きさの津波が。

現在の大槌町役場の近くまで来た時に後ろを振り返ると、土煙が上がっている。その向こうに水の壁が見える。近づいて来る津波は、まるでドミノ倒しのように電信柱をなぎ倒していく。あわてて全力で体育館に続く坂道を駆け上がる。後ろで「助けて」という声も聞こえた。でも、振り返ることはできなかった。あっという間に流れ込んだ水は、町立大槌小学校（現在の町役場）の校庭で渦を巻いていた。そして、車が巻き込まれていく。クラクションの音が鳴りやまなかった。城山公園体育館には、もうすでに避難者が押し寄せてきている。「てんでんこ」の教えを守った妻、5人の子どものうち小中学生と幼児の3人とは、体育館に隣接する中央公民館の駐車場で会うことができた。高校生だった長男と次男は、津波が及ばない場所にいて無事だった。

夜が迫ってきていた。高木さんの奮闘が始まる。発電機の修理や配線の延長など、次々と寄せられる要望に応えていった。避難時にヘルメットやテスター、工具などを腰に巻いていたことは幸運だった。すぐに作業に取り掛かることができた。自衛隊が、後に災害対策本部が置かれる中央公民館に到着したのは発災当日の深夜。高木さんは、その夜、町中が火事でほの明るかったことや我慢強かった避難者たちの姿を鮮明に覚えている。

「パニックになるような人はいなかった。案外みんな冷静だなと思いました。緊迫した状態では思った以上の力が出る。人間は強いものだと思いました。配給のおにぎりをもらう時も、ちゃんと整列して待っていた。日本人は大したものです」

食事が配給になったのは、翌12日の夕方だ。

「ゴルフボール大のおにぎりと紙コップに半分入ったみそ汁でした。量は少なかったけれど、中央公民館にいた役場の人たちが農家を訪ね歩いて調達してきたものでした。ありがたかった」

工具を腰に巻いていた状態で避難。その当時の道具を、歳月を経た今も使用している

突然始まった集団生活。それはまるで「小さな町」だったと高木さんは振り返る。そして、城山公園体育館にはさまざまな職種の人が避難していた。体育館と中央公民館は町の復旧の拠点。ここから町内各地へ仕事に出掛けて行き、消防団、自衛隊も集まる機会が多かった。また、大槌町内には大槌高校という大きな避難所があった。

「大槌高校は生徒たちががんばった。城山公園体育館には比較的若い人は少なかった。その代わりにお年寄りが張り切って働いていた。生き生きしていた」

高木さんは地震発生からの濃密な1カ月が今も強く記憶に残っているという。そして、あれだけ忙しい日々を過ごしながら、疲れを感じることがなかった。

「何かに動かされている感じがしました。目の前に電気が付いてないなら、付けてあげようという気持ち。そういう使命感を背負って、一日一日を過ごしていました」

大槌高校の外観は当時のまま。生徒が学ぶ教室も避難所として使われていた

東日本大震災は、つらく悲しいもの しかし、生徒たちを大きく成長させた

県立大槌高校には、生徒だけでなく、近隣住民が数多く避難していた。不安が渦巻く環境の中で、献身的に避難者の対応に当たっていたのは高校生たち。彼らは東日本大震災を経験することで大きく成長していった。

3月11日。その日の大槌高校は午前授業。午後の学校に残っていたのは、1、2年生の部活動をしている生徒だった。そこに今まで経験したことのない揺れが襲う。地震が収まったものの、すぐに大津波警報が発表された。当時の大槌高校校長・高橋和夫さんは、校門のそばに立ち、その後の様子をうかがっていた。そこに女性の教職員が「津波だ！」と言いながら駆け寄ってきた。学校の敷地から町を見下ろせる場所に行ってみると、町はすでに津波にのみ込まれていたという。

「現実のものと思えなかった。これが津波かというのもありました。いろいろなものが目の前で流されていく。そして、もやがかかっているような感じ。舞い上がった土煙でクリアに見えないんです。ぼんやりと見えていて、現実感に乏しい光景でした」

校舎の渡り廊下のつなぎ目にひびが入っていた。余震が続いていたこともあり、生徒たちを中庭に集めて待機させた。津波を見せたくないという気持ちもあった。その光景を見た生徒たちがどんな反応を示すかが予想できなかったからだ。程なくして大槌高校には大勢の避難者が押し寄せてきた。大槌北小学校の児童、みどり幼稚園の園児に加え、車で避難してくる人など、地震当日500人を超えるほどになっていたという。日が落ちると気温もぐっと下がる。外で待機させておくこともできず、体育館に避難者を誘導し、そこで夜を明かす準備を始めた。

避難所となった大槌高校は、生徒たちの避難者に向けた献身的な行動が際立っていたことで知られる。それは、震災当日の行動からもうかがわれた。

「学校のそばにセミナーハウスがありました。その中に部活動で合宿する時に使う布団が40組くらいありました。高齢者に優先的に使ってもらうようにしたのですが、数が全然足りない。大槌高校にはインターアクト部というボランティア活動をする部活があるのですが、彼らがダンボールをたくさんストックしていた。そのダンボールを配って、敷き布団代わりにしました。掛けるものはないですから、暗幕とカーテンを使いました。暗幕は1枚を何人かで使ってもらいました」

停電していて、懐中電灯も限られた数しかない。トイレに行くのも大変な状況だったが、インターアクト部の生徒たちが、湯のみやコーヒーカップにろうを溶かして芯を立て、ろうそくを作ってたくさん持っていた。それは先生に指示されたものではなく、生徒たちが自発的に始めたものだったという。やがて、インターアクト部だけでなく、生徒たちが避難者の世話をするようになっていった。例えばトイレの水。足りなくなれば、学校のプールの水をバケツで運んだ。例えば炊き出し。全員に行き渡るだけのおわんがない。食べ終わったものを回収し、生徒たちがきれいに洗い、次に食べる人に渡した。お湯が出ないため、冷たい水で洗っていた。高橋さんは生徒たちのがんばりをたたえながらも、それは人間に本来備わっている性質ではないかと考える。

「古代思想家・孟子に『人に忍びざるの心』という言葉がある。人の不幸を見過ごすことができないということですね。人間は不幸を見過ごすことができない。これは大槌高校の生徒だからということではなくて、誰でもそういうものを持っていて、非常時に発揮されるんじゃないかって思うんです。それにしても、生徒たちはがんばってくれたと思います」

大槌高校が学校を再開したのは、4月20日。その後も避難者はここにとどまり、8月7日に避難所としての役割を終えた。その間に、避難者、そして、自衛隊との間にも数々の交流が生まれ、生徒たちは多くの人たちの温かい心に触れてきた。

「5月下旬の夕方です。吹奏楽部の女子生徒が自衛隊に向かって演奏していた。何曲か演奏しているうちに、自衛隊の方もみんな出てきて直立不動で聴いていたそうです。最後は『ふるさと』を演奏したみたいで、自衛隊の隊員も全員敬礼してね、そうしたら吹奏楽部の女の子たちもそれに合わせて敬礼した。彼女たちなりの『感謝の演奏』だったのでしょう」

震災は事象だけ見ればつらく悲しい出来事だ。しかし、生徒たちの心に大切なものを残した。あの時の大槌高校の生徒たちだけではなく、被災地の子どもたちの立ち振る舞いは素晴らしかった。高橋さんは、そういう子どもたちを育てていこうという気持ちになったと語る。人づくりは「岩手の未来づくり」なのだといえる。

髙橋（たかはし） 和夫（かずお）さん

1954（昭和29）年8月、岩手県二戸市生まれ。県立雫石高等学校、県立一関第一高等学校などで教壇に立ち、2010（平成22）年に校長として県立大槌高等学校に着任した。東日本大震災時には、大槌町最大規模の避難所となった大槌高校校舎で、生徒と共に力を合わせ、難局に立ち向かった。15（同27）年から、岩手大学教職大学院特命教授として活動。

第5章 逃げる、救う 応急期の町

東日本大震災が発生した直後の大槌町。
町民たちの避難所での生活、自衛隊の救助活動、
遠野市からの支援など、さまざまなテーマを設けながら、
当時の町の様子を掘り下げる。

海上で行方不明者の捜索活動に従事する自衛隊員（2011年4月1日撮影）

役場庁舎の屋上に避難
自然の猛威を前に覚えた無力感

地震が起きた後、すぐさま駆け付けた役場庁舎で津波に襲われた。避難した屋上から目撃した津波の猛威。

3月11日は町議会定例会の会期中。平成23年度予算特別委員会を立ち上げ、午前中で休会となっていた。当時、大槌町役場に勤務していた赤崎仁一さんは、午後2時から時間休を取り、腰を痛めた母を病院に連れていったという。そして、その治療中に大きな揺れが襲った。これはただ事ではないと思い、母を車で家に連れて帰り、自転車で役場へ向かった。

通常なら2階総務課に災害対策本部を設置するところだが、余震が続き、老朽化した庁舎は倒壊の危険があるという判断から、本部設置は庁舎前の戸外で行われることになった。その準備をしている最中に、屋根よりも高い黒い壁のような波が煙を巻き上げて近づいてきた。無我夢中で逃げることだけを考え、気が付いたら屋上に上がるはしごのところに来ていた。

屋上には22人が避難していた。赤崎さんはそこから見た光景を今も鮮明に覚えている。町は海面のようになっていた。轟音と共に家々や船などが流されていく。自然の猛威にさらされ、無力感を覚えるだけだった。

厳しい寒さの中、屋上で一晩を過ごすことになった。夜になると雪が降り出し、寒さが一段と増してきた。22人全員で丸くなり、体を寄せ合いながら、励まし合った。さらに時間がたってからは、水が引いた庁舎2階に行き、流れ込んできたがれきの板や柱を運び、燃やして暖を取った。真っ暗な町のあちらこちらで火の手が上がる。末広町の松の下方面の火は山に燃え移り、強風にあおられて上町方面からも火が上がり、町中が火の海となった。あちらこちらでガスボンベが爆発し、そのたびに火の勢いが強くなり、家の燃えて崩れる音がする。まるで地獄絵のような光景だった。

不安な夜は終わり、朝が近づいてくる。周りが明るくなって町の姿が見えてきた。津波が破壊し尽くした町は、現実として受け止め切れないほどの衝撃。夢を見ているような感覚で、ただ呆然とするのみだった。

それから自衛隊のヘリコプターで、赤崎さんを含め、庁舎の屋上に避難していた人たちは救助された。空から眺めた町は、まだ海水が引き切っておらず、あちこちで煙が立ち込め、がれきの山や大型船が無残な姿でゴロゴロ転がっていた。広範囲を見渡すと、災害と被害の規模の大きさが分かり、大槌の町がなくなってしまったことを再認識したという。

赤崎（あかざき） 仁一（じんいち）さん

1951（昭和26）年4月、大槌町八日町（現・本町）生まれ。2012（平成24）年3月まで大槌町職員として勤務し、災害で苦しむ町を支えた。同年4月には、社会福祉協議会に移り4年間勤務した。同協議会在籍時には震災記録誌の編さんなども手掛けた。

災害対策本部の設置

発災の翌日、災害対策本部が中央公民館内に設置された

城山に代替本部

東日本大震災の発生直後、各市町村の行政機関に災害対策本部が設置された。しかし、大槌町では、地震直後に役場庁舎前に設営中だった災害対策本部が大津波に流され、当時の加藤宏暉町長や幹部を含む39人の役場職員が犠牲になった。災害対応に必要不可欠な庁舎や設備、物資なども流失してしまった。本来であればリーダーとなって本部運営を行うはずの町長が不在、職員の安否も正確につかめない中で災害対策本部を新たに設置しなければならない状況だった。

発災後、津波に追われながらも助かった職員らは、逃げ延びた役場庁舎の屋上で不安に包まれた一夜を過ごし、救助を待った。翌朝、自衛隊の大型ヘリで救助された。当時の伊藤正治教育長、東梅政昭副町長をはじめとする職員約15人は、本部の代替設置場所となる城山の町中央公民館へ向かった。すでに集まっていた役場職員30人と自衛隊、岩手県警察、消防隊員と合流し、12日夕、災害対策本部の設置に至った。

職員疲弊、体制改善

町長不在のため、現町長で当時の総務課主幹の平野公三が陣頭指揮を執り、本部が動き出した。本部内で「食料調達」「遺体収容」「避難所対応」の三つの班を設けたが、対応しなければならない問題が山積していたため、班の業務以外にもその場にいた動ける者が目の前の対応に追われる状態だった。

発災から3日が経過した時点で、町職員、自衛隊、警察、消防署、消防団、ボランティア、応援職員などを合わせて800人以上が応急対応に携わっていた。日々変化していく現場のニーズに合わせて、「救護」「清掃」「公務」などの班体制を増強した。しかし、被災者の要望や苦情が集中し業務が追いつかず、休みなく動き続けていた職員は疲弊していった。そこで、自衛隊や警察の協力を得て、より効率的な対応ができるように業務進行の方法の改善に努めた。まず、おのおのがスムーズに動くために、1日2回のミーティングや災害対策本部日誌の作成などを行い、情報を共有。現状を把握し共通認識を持つことでおのおのの役割が明確化された。また、防災関係機関との業務調整を図り、本部で業務の大枠を決定し、その後の細かい調整や実務作業を現場の関係者に任せるなど、役割を分担した。このように情報の共有と体制の整備を行いながら、町の被災状況の把握や資源の調達・分配、対応方針の決定、町内および外部への情報発信などを行った。

復興へ向け組織再構築

4月以降は、応急業務から復興業務への移行を進めた。状況に合わせて臨機応変に対応していた状態から、町地域防災計画に基づく各課の責任体制へと戻った。人事異動や災害復興室の新設などを経て新しい組織が構築された。

4月25日に、当時の町立大槌小学校校庭に仮庁舎が設置されたことにより、最低限の作業環境が整った。情報端末の使用も徐々に復旧していった。発災から1カ月の間に試行錯誤で行った業務がノウハウとして蓄積し、それが業務内容の明確化、効率化につながった。しかし、部署間での業務の偏りや、人員不足などの問題が残った。それらの問題を解消するために適宜調整を行い、復興対策に向けた動きへとシフトした。

大槌バイパス南口付近で打ち合わせをする消防隊員ら

■ 表5-1　災害対策本部各班の対応

業務	内容
避難所対応	避難者名簿作成、食料確保、避難者ニーズの収集等
物資調達	救援物資の配布、避難者ニーズの把握、他機関へ要望提出等
遺体収容	遺体搬入、検視立ち会い、火葬手配等
情報共有	災害対策本部日誌の作成・配布等
福祉部局	傷病者・要援護者・精神状態の不安定な避難者からの相談受付等

■ 大槌町が検討した今後の防災対策の方向性

- 防災計画での本部移行の判断基準を明確化する。
- 危機管理体制を構築する。
- 実践的な防災訓練を企画し実施する。
- 通信機器及び情報の収集、伝達体制を整備する。
- 地震・津波への想定を固定化しない。
- 3・11の教訓をまとめ、伝承する。
- 職員らへの啓発・研修を強化する。

「大槌町東日本大震災検証報告書平成25年度版」から

Interview

多くの幹部を失い想定外の対応を覚悟

大槌町教育委員会　前教育長
伊藤 正治さん

あの日の地震直後、庁舎の外に机を並べて災害対策本部を設営していたところに津波が襲ってきました。私自身も波にのまれましたが職員に助けられ、庁舎の屋上で一夜を過ごしました。翌日、代替の災害対策本部となる中央公民館へ向かうと、本来、災害時に指揮を執るべき役職の十数人を失い、幹部の中で生き残ったのは私を含めて3人だということが分かりました。その時、地域防災計画の通りにはいかないのだと覚悟しました。

私は教育長ですから本来は教育関係の対応に当たるべきでしたが、本部の対応を優先するしかない状況で、教育現場の復旧はほかの職員に任せました。ご遺体が流されないように漁船配備などの対応をして水門を開け、物資の受け入れや要望の収集、情報の発信なども行いました。職員は災害対応未経験者ばかりでしたが、とにかく分担して臨機応変に対応していました。応援職員や自衛隊、その他多くの皆さんに助けられました。本当に感謝しています。

避難の状況　吉里吉里地区

寺社や民間施設に

地震の後、吉里吉里地区の国道45号を挟んで南西側のエリアの住民は、背後の高台に一時的に避難。町立吉里吉里中学校の生徒たちは、特別養護老人ホームのらふたぁヒルズに、吉里吉里漁協付近にいた人々は海岸近くの高台に逃げ込んだ。

国道45号より北東側の地域住民の主な避難先は、天照御祖神社、町立吉里吉里小学校、吉里吉里地区体育館（通称・古中）、堤乳幼児保育園（当時）、ＪＲ山田線（当時）の線路上付近だった。

吉祥寺住職の高橋英悟さんは、防潮堤を越えてくる津波の大きさと勢いを見て、吉祥寺の下にある吉里吉里小学校へ急行。当時の校長の佐藤良さんに対し「第１波が軽々と防潮堤を越えた。第２波が来ると小学校も危ないので、高台に逃げましょう」と伝えた。佐藤さんは児童と避難してきた住民全員を一時的に同寺に避難させた。

吉里吉里地区で特に被害が大きかったのは、二丁目付近。ここは昭和三陸地震津波（１９３３年）以降に高台移転先として宅地が造成された地区だった。また、震災前の岩手県ハザードマップでも、浸水区域外とされていた。

行政に頼らず対応

震災当日の夜、吉里吉里小学校に避難していた地域住民の有志は、今後の対策について話し合った。その結果、行政に頼らず、地域で自主的に災害対応を行う必要があるとの認識で一致。翌日には同地区災害対策本部を立ち上げた。地域内のほかの避難所や在宅避難者からの要望も聞き取り、物資の配給などを行った。

災害対策本部として初めにヘリポートを整備することに取り掛かり、物資の受け入れと重病・重症患者の移送を可能にした。町立吉里吉里中学校下の農村センターをヘリポートとするため、被災を免れた重機を活用し、同広場へ続く道路のがれきを撤去した。

一方、重機を使用するためなどの燃料の確保は必要であった。地区内にあったガソリンスタンドが提供し、地下タンクのふたを住民自らが開け、くみ上げて給油した。この燃料は個人使用は認めず、避難所運営などの活動に限定して利用された。

また、震災前からの地域のつながりを基にした支援活動もあった。特に、１９８５（昭和60）年から交流事業が続いていた紫波町は、震災後3月14日に吉里吉里小学校避難所に第一弾の支援物資を届けた。また、3月22日には高齢者や病弱な人を中心に吉里吉里地区住民80人が同町の公民館や個人宅に避難した。

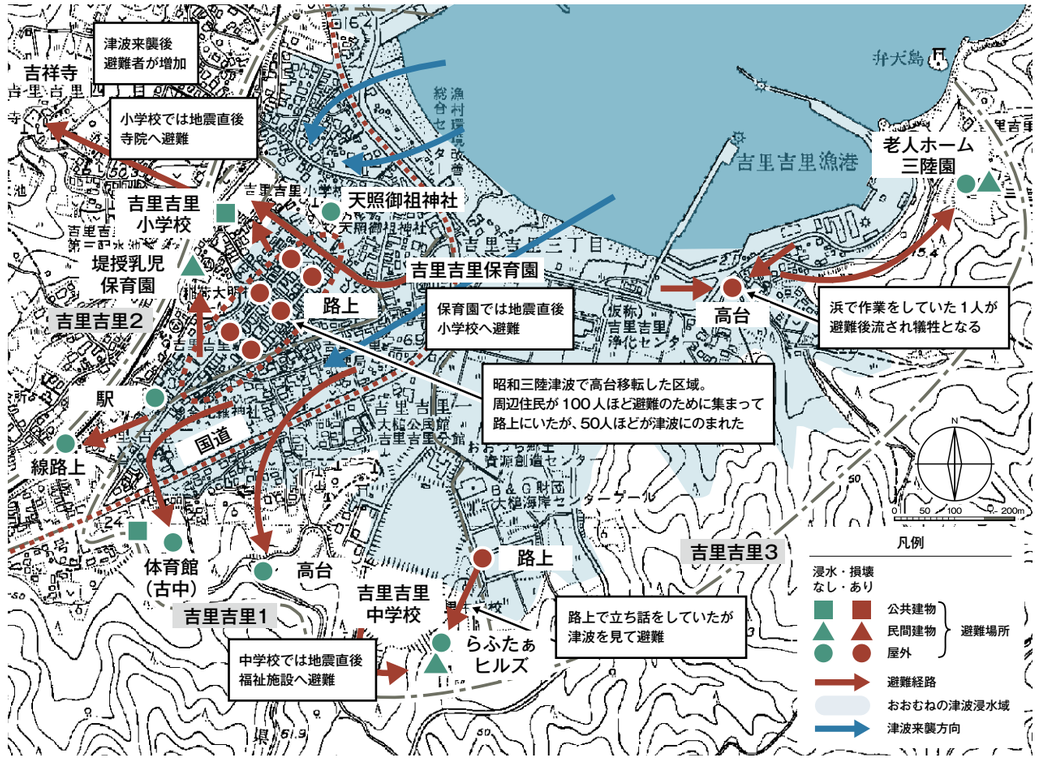
吉里吉里小学校が避難所として使用されたのは、２０１１（平成23）年4月30日までであった。当時、同小以外の町内の小学校4校が全て被災したため、教育の場として使用できるのは吉里吉里小学校のみであり、大槌町全体での早期授業再開のため、そのうちの3校が教室や体育館を間借りした。以降は避難所が地区体育館に移り、8月11日まで運営された。

自主防災計画を策定

13（同25）年3月から、吉里吉里地区自主防災計画策定検討会が設置された。震災の教訓を基にした地域の自主的な防災計画を定めるため、住民を中心に、学識経験者や防災コンサルタントを交えて自主防災についての検討を進めた。翌年6月までに計8回の検討会を重ね、吉里吉里地区自主防災計画としてまとめられた。同計画では、「避難すること」と「自分の命を守ること」を大原則とし、避難する前から避難した後まで行動のルールとして八つの中原則を設けた。また、町が指定している避難場所・避難施設5カ所のほかに、検討委員会案として新たに6カ所の避難場所・避難施設を設けることが定められた。

隣接する浪板地区の浪板観光ホテル（当時）には、秋田県五城目町と井川町からのツアー客ら43人がいたが、従業員がＪＲ山田線の線路より上の高台に避難誘導し、全員無事だった。

避難所となった吉里吉里小学校体育館



■ 図5-1　吉里吉里地区の避難場所と避難経路

国土交通省「東日本大震災による被災現況調査（岩手3）、B-5避難実態調査、地区・集落代表者避難行動調査結果概要（株式会社東京建設コンサルタント・株式会社邑計画事務所共同提案体）」を基に作成

Interview

新しい町に合った防災のあり方を目指す

吉里吉里地区自主防災計画策定検討会　会長
藤本俊明さん

吉里吉里地区では自主防災計画を策定しましたが、これから防潮堤ができ、新しい町ができていきます。その中で、町内会や公民館活動と合わせて、自主防災組織の再編も行い、新しい町に合った防災のあり方を模索していくことが必要になると思っています。

吉里吉里地区には二丁目と三丁目、四丁目に自主防災組織がありますが、震災後活動が停滞している状態です。今度、新しくできた公民館活動には自主防災組織の核となる総務防災部を設け、公民館活動が地域の防災活動の中心的役割を担います。

津波の際は「いち早く逃げる」、「高い所に避難する」という極めて基本的なことが重要ですが、今回の津波では、このような意識が希薄になっていた。年齢が高くなるにつれて、自力で避難することが難しくなる面もあります。吉里吉里でも、逃げなかった高齢者の多くが亡くなっています。今後、高齢者はさらに増えるので、その対応も課題です。

避難の状況　赤浜地区

避難場所も浸水

赤浜地区では避難場所として、町立赤浜小学校（現在は閉校）と福祉作業所のワークフォローおおつち（旧赤浜児童館）、三丁目の高台広場が知られており、避難住民はその3カ所に集中した。赤浜公民館長（当時）の神田義信さんは地震発生時、同公民館にいた。大津波警報が発表されたという内容の防災行政無線の放送を聞き、すぐに事務所内のハンドマイクを持ち出し、車で住民に対して避難を呼び掛けた。

3カ所の避難場所のうち、赤浜小学校に津波が到達し、校舎は2階まで、体育館は1階床上まで浸水した。当時、同小学校には多くの避難者がおり、体育館2階のギャラリーにも数十人が避難し孤立状態となったが、屋外から他の住民がはしごを架け、救出した。

体育館から避難した住民のうち、50人ほどはさらに高台にある三協印刷に避難した。三協印刷では建物を開放し、主に高齢者や病人を中心に屋内で受け入れた。

また、赤浜地区には漁船の停泊場所があり、津波の影響が少ない沖合まで船を避難させる「沖出し」も行われている。さらに、八幡宮下で津波発生のすぐ後に火災が発生した。

赤浜小学校の児童と職員は地震直後、体育館や校庭に避難していた。当時の校長が防潮堤を越えた津波に気付き、全員で学校から500メートルほど離れた裏山まで、津波に追いつかれそうになりながら走って避難した。全児童36人、全教職員11人は無事であった。

自主的にがれき撤去

震災の日の夜、三協印刷に集まっていた住民有志は、今後の対策を協議した。水の確保と道路のがれき撤去を最優先で進めるという判断に至った。その日のうちに地区内にある沢水をくんで水を確保。翌12日、浸水した赤浜小学校付近から被災を免れた旧赤浜児童館までの区間の県道吉里吉里釜石線のがれき撤去に取り掛かった。赤浜小学校付近と旧赤浜児童館の上下二手に分かれて、被災しなかった重機を活用してがれきの撤去作業が行われた。

一方、安渡地区の惣川地区に無線を所持している住民がおり、12日、無線から隣接する山田町の航空自衛隊山田分屯基地に赤浜地区が孤立していることが伝わった。同基地からは、ヘリコプターで物資を輸送するためのヘリポートの整備の要請があり、住民たちは海岸の一角を仮設のヘリポートとするためにがれき撤去を行い、そこが物資の供給基地となった。

3月14日から、浸水した赤浜小学校のがれきや土砂の撤去が行われ、避難所としての運営が本格化した。また、翌15日に赤浜小学校に赤浜地区の災害対策本部が立ち上がり、避難所の運営、物資の受け取りと配給、地区外部や地区間の情報共有などの拠点となっていく。各避難所間の連絡には、トランシーバーが用いられた。

自主防災会の備品活用

赤浜地区では2008（平成20）年に自主防災会が組織されており、10（同22）年に補助金を活用し、工具・消火器・発電機・照明・ハンドマイク・トランシーバーなどの防災用品を購入していた。震災8日前の11（同23）年3月3日に行われた避難訓練時に、地区内3カ所の避難場所の代表者にトランシーバーが配られており、これらが各避難所との連絡調整に役立った。

4月4日、災害対策本部は赤浜地区の避難所運営の円滑化のため「赤浜自主防災会避難生活維持体制組織」として再編された。会長、副会長の役職のほか、3カ所の避難所の代表者とそれぞれの機能を持った班体制を構築し、役割分担を行った。

避難所となった赤浜小学校

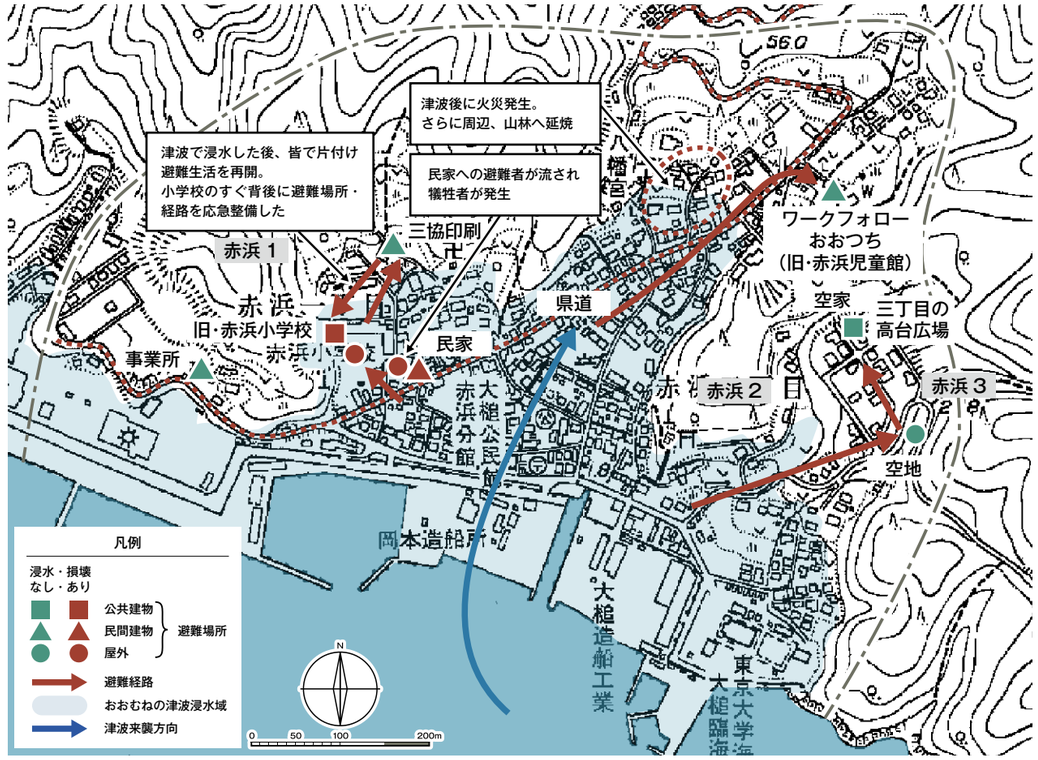
Interview

情報収集・発信のシステムづくり必要

赤浜公民館運営委員会　委員長
中村公男さん

赤浜地区でまず行動したことは、道路を開くことでした。毎日水をくみに行かなければならないから、誰でも歩けるように、道路を確保しました。人を探すより、生きている人のための道路や水の確保を最優先にしましたね。とにかく、「生きるため」にがんばりました。住み慣れた場所を失い、生活環境の変化により心労も大きく、大変な思いはするのだけれど、赤浜地域のみんなで助け合ってやってきました。

震災直後、テレビやラジオ、電話や、防災無線など、あらゆる情報の収集や発信の手段がありませんでした。あれから8年もたっているのに、ハード面の復興はできても、情報受発信の上では何も変わっていないのではないかと感じます。できるだけ早く、情報網の体制や手段を確保してほしい。各マスコミが視聴者から情報を収集するように、役場でも、情報収集や発信のシステムづくりが必要ではないかと思います。



■ 図5-2　赤浜地区の避難場所と避難経路

国土交通省「東日本大震災による被災現況調査（岩手3）、B-5避難実態調査、地区・集落代表者避難行動調査結果概要（株式会社東京建設コンサルタント・株式会社邑計画事務所共同提案体）」を基に作成

避難の状況　安渡地区

渋滞した県道に津波

地区西側の新港町と安渡一丁目では、大徳院や町立安渡小学校（現在は閉校）、大槌稲荷神社などの高台が避難場所になった。一方、昭和三陸地震津波（1933年）で浸水しなかったとされるJR山田線（当時）の線路上に避難して犠牲になった住民もいた。

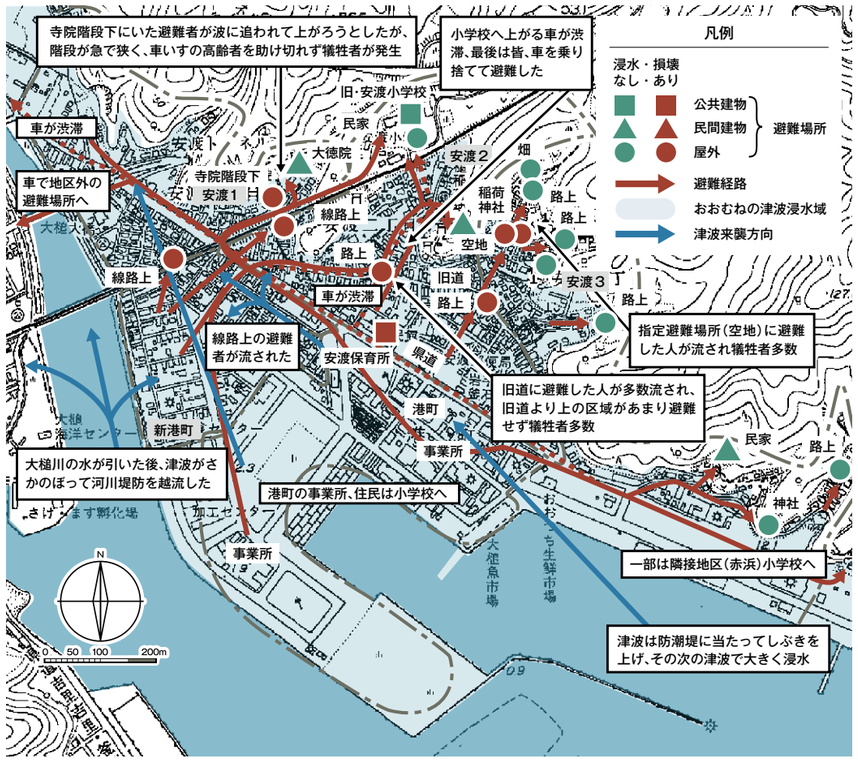
地区東側の港町、安渡二丁目、同三丁目の住民は、安渡小学校や大槌稲荷神社、三丁目の高台などに避難した。しかし、チリ地震津波（1960年）で床下浸水程度だった旧道沿い付近に避難していた多くの住民は犠牲となった。さらに、旧道より上に位置し、避難場所とされていた空き地にも避難者が集まっていたが、津波に襲われ犠牲者が出た。

地区の海側の新港町や港町には水産加工施設などが多くあり、安渡小学校に多くの従業員が避難した。県道吉里吉里釜石線は渋滞が発生し、身動きが取れなくなった人々が津波にのまれた。

当時安渡二丁目町内会長で自主防災組織の本部長だった佐藤稲満（さとういねみつ）さんは地震直後、対策本部を設置するため指定避難場所の安渡小学校に行ったが、低地部にある安渡保育所が心配になり、坂を走って下りた。

「道の角を曲がったところで、園児が先生と一緒に自主防災役員に誘導され、坂を上って避難してくるのが見えて、ほっとしたことを覚えています。保育園は年5回避難訓練をしていましたので、その成果かもしれません」

その後、高齢者や障害者の安否を案じながら、避難誘導をした。佐藤さんのほかにも自主防災組織の役員を中心に避難を呼び掛け、「一人でも多くの住民が避難できるように必死に行動した」という。



■ 図5-3　安渡地区の避難場所と避難経路

国土交通省「東日本大震災による被災現況調査（岩手3）、B・5避難実態調査、地区・集落代表者避難行動調査結果概要（株式会社東京建設コンサルタント・株式会社邑計画事務所共同提案体）」を基に作成

情報共有を意識

安渡小学校には震災の夜、500人ほどの避難者が集まっていた。当時は雪が降っていたため、午後5時ごろ、気温低下による避難者の体調を考慮し、学校長と協議した後、校舎と講堂も避難所として開放した。安渡地区の各避難所から報告された避難者数を合わせると、約1170人となった。翌12日には、安渡二丁目町内会自主防災事業部として避難所運営を開始。13日、各町内会の役員が安渡地区全体の今後の対応を検討し、同地区津波対策本部が発足した。佐藤さんは避難所運営について「特に意識したのは情報の共有。震災直後から町内には何の情報も入ってこなかった。毎日の朝礼の時に、町や県、国は今どう動いているのかを避難者に伝え、情報の共有に努めた」と振り返る。

また、避難生活の長期化による健康管理が懸念されたため、大槌病院に勤めていた地区在住の看護師が保健室を立ち上げて対応した。

要援護者の避難支援

安渡地区は震災前から避難訓練や炊き出し訓練などを行い、町内でも防災に関する取り組みが先進的だったが、震災で217人が犠牲になった。この数は震災前の地区人口1953人の11・1％に当たる。震災の教訓を生かそうと、翌年6月から町内のほかの地区に先駆けて地区防災計画の見直しに動き出した。2012（平成24）年6月2日、町内会役員を中心に、大槌町や外部専門家で構成する「安渡町内会防災計画づくり検討会」を設置。その後、計8回の検討会を重ね、安渡地区防災計画が策定され、翌年度に大槌町地域防災計画にも収載された。

特徴としては、災害時要援護者支援のルールが挙げられる。支援の時間の目安を地震後15分以内とし、内容を限定することとした。また、徒歩避難が難しい要援護者に限り、地震発生から早い時間であることなどを条件に車での避難を認めた。避難所運営に関しては、津波到達後3時間程度、3～24時間程度、24～72時間程度など、時間による状況の変化を踏まえたルールづくりを盛り込んだ。

14年（同26）年3月2日には、防災計画の検討内容を生かす取り組みとして、大槌町と合同で避難訓練を実施した。防災計画の検証を兼ねて、要援護者の搬送で車やリヤカーを用いるなど複数のケースに分け、具体的な方法で避難を支援した。

さらに、東日本大震災や過去の津波のさまざまな記録に基づく「安渡アーカイブ化プロジェクト」にも取り組んでいる。

Interview

高齢化進む地区で災害弱者の把握を

安渡町内会防災計画づくり検討会　会長
佐藤（さとう）稲満（いねみつ）さん

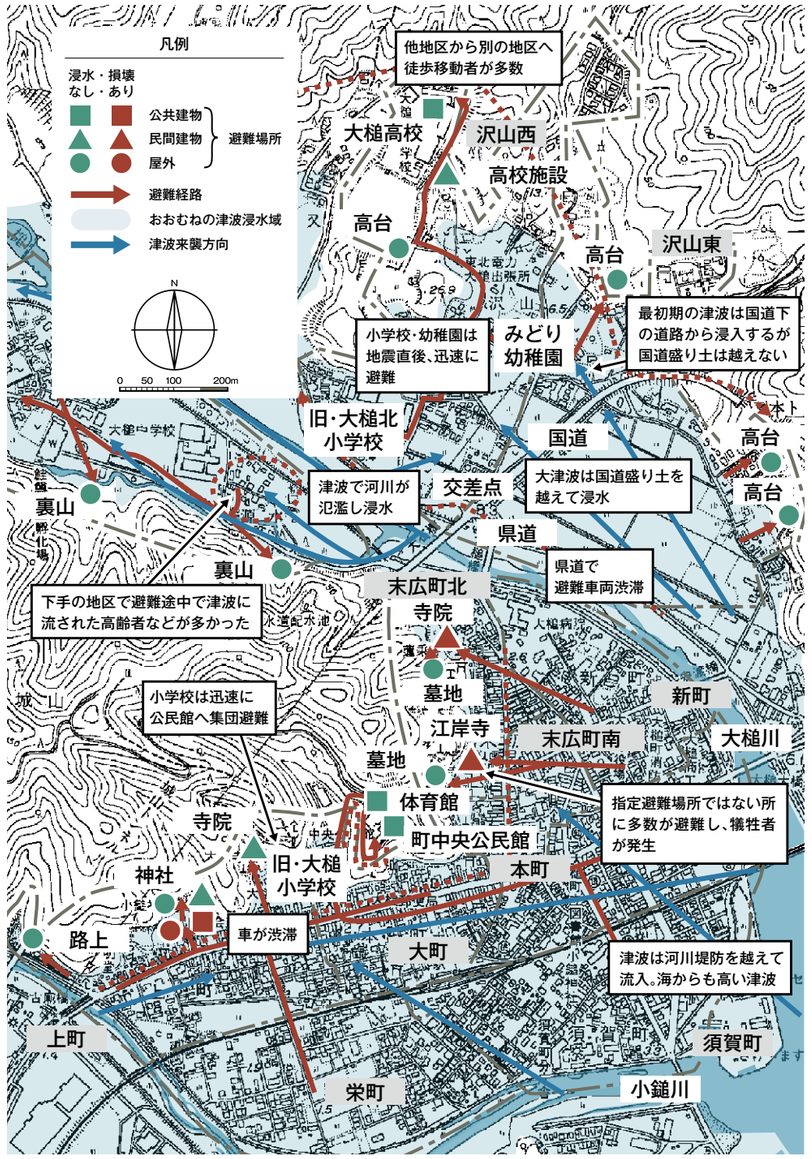
安渡地区では、震災前から避難訓練などに取り組んできましたが、今回の震災で多くの犠牲者を出してしまいました。

地区の防災計画づくりの検証で話題になったのが、大槌弁で「こすばる」と言う行動についてです。これは、高齢者が家を守る意識が高く、家から避難しないことを意味する言葉です。今回の津波でもこのような行動を取って亡くなった方や、一緒に避難しようとして逃げ遅れた方がいました。

みんなが無事に避難するためにはどうすればよいのか考え、安渡地区の防災計画では、要援護者の避難のルールを設けるなど工夫しました。今後、安渡は高齢化がどんどん進みます。高齢者などの災害弱者を事前に地域で把握し、災害時にはすぐに避難誘導をしないといけません。

地震が起きたら、津波が来ることを想定してすぐに高台に避難することが鉄則です。そのためには、地区の自主防災組織などを通して、みんなでこの土地の防災を考えていくことが重要です。

避難の状況　町方・沢山地区



■ 図5-4　町方・沢山地区の避難場所と避難経路

国土交通省「東日本大震災による被災現況調査（岩手3）、B-5避難実態調査、地区・集落代表者避難行動調査結果概要（株式会社東京建設コンサルタント・株式会社邑計画事務所共同提案体）」を基に作成

住民1割強が犠牲に

中心市街地の町方地区は、大槌川と小鎚川に挟まれた三角州状の低地で、住宅や商店が密集し、町の人口の3割近くが居住していた。津波時の指定緊急避難場所5カ所（当時）は、地区の背後にある城山（標高141メートル）の中腹付近に偏在していた。

住民の一定数は地震直後に声を掛け合い、高齢者らの避難を補助しつつ、迅速に高台などへ避難。一方で、津波の規模はそれほどでもないと考え、避難の呼び掛けにもかかわらず自宅にとどまったり、津波が来たら2階へ上がればよいなどと考えたりして、避難しないケースが多かった。当時の地区住民の14.7%に当たる660人が亡くなり、ほかの地区と比較して最も高率を示す。上町の町立大槌小学校では地震直後、児童と教員らがいち早く高台の町中央公民館に避難した。

両河川沿いや海側の街区では、指定避難所から距離があったため、高い建物に避難した住民もいた。指定緊急避難場所ではない江岸寺（こうがんじ）の本堂内外（ただし、墓地のある同寺高台は指定緊急避難場所）にも高齢者を含む多くの人が避難したが、津波が押し寄せて多数の犠牲者が発生した。また、城山などを目指して避難車両が集中し、主要道路で渋滞が発生した。

新町にあった役場庁舎にも津波が直撃し、町長ら職員39人（移動途中などの人を含む）が犠牲になった。

地区内には高台の緊急避難場所（江岸寺の墓地など）があったが、人口に対して不足していた。今後は山側の複数箇所を避難場所として積極活用し、そこへ上がれる経路の整備などが課題とされる。

また、主要道路沿いでは、避難場所周辺へ避難車両の集中を防ぐため、複数の車両退避場所を整備しておくことが望まれる。

独自に避難場所設定

大槌川河口から約1.5キロメートル上流の沢山地区では、集落ごとに、短時間で避難できる避難場所と避難経路を独自に設定し、津波避難用マップが全戸配布されていた。地区内に避難誘導看板も設置されていた。

住民の多くは、大槌川の対岸に津波が押し寄せて土煙が上がるのを目撃し、高台（県立大槌高校、裏山など）に避難した。この様子が見えない国道45号大槌沢山バイパス交差点付近の住民は浸水が始まってから避難したり、自宅などにいて流されたりすることが多かった。地区内の町立大槌北小学校、みどり幼稚園の人々は迅速に避難している。

地区では独自に複数の津波避難場所を背後の高台に設定し、避難看板などで周知、津波のときには各自で裏山に上がるという認識があった。犠牲者の多くは、津波は来ないと考えて自宅にとどまっていたとみられる。また、県道大槌川井線が津波襲来前に安渡方面から金沢方面に避難する車両で渋滞した。

津波後3日間ほどは、大槌高校の山側を抜けて歩いてきた地区外の避難者が、地区内の畑や民家の間など浸水していない高台を伝って別の地区へと絶え間なく移動し、地区住民が誘導に当たった。

沢山地区にある町指定の避難所、県立大槌高校は、最多で千人近くを抱える大規模な避難所となり、学校に避難していた生徒と教職員らが避難所運営に携わった。生徒らは避難当初から、水くみや炊き出し、物資運搬などを積極的に行った。同避難所は、学校が再開する直前の4月19日まで40日間にわたって開設された。

Interview

教訓を踏まえて
避難所のあり方再検討を

当時・県立大槌高校　校長
高橋（たかはし）　和夫（かずお）さん

あの日、私は学校から、町が津波で沈んでいくのを見ていました。現実のものとは思えなかった。子どもたちがどうなるか、学校がどうなるか、さまざまなことを考えていました。迎えに来た母親に引き渡して帰らせた生徒もいたので、無事に逃げたのかと気になっていました。生きた心地がしなかったです。

避難所運営では、生徒たちがさまざまな役割を担ってくれたんです。水くみや炊き出し、車の整理、物資運搬などですね。自分たちで仕事を探してやってくれたんですよ。生徒たちの思いやりや優しさがうれしかったです。

本当はもっと早く自治会を組織して、避難所運営を避難者の自主性に任せたかった。先生方や生徒を、早く学校のことに専念させたかったからです。大槌高校の場合はいろいろな地域からの避難者がいましたし、人数も多かった。なかなかまとまらなかったのです。災害時に備えて、避難所のあり方を再検討することが重要です。

避難の状況 小枕・伸松地区

「3日間」の決意

小枕地区では津波により既存の避難所が浸水、被災を免れた家屋は2軒のみであった。がれきが道をふさぎ、他の場所への移動も難しく、孤立する中で救援を待った。

小枕自治会の会長を務めていた三浦勝男さんは、自宅で地震に遭遇。その後、避難所として利用する小枕地区集会所の入り口を開放し、集会所より高い場所にある自宅付近で海の様子を見ていた。津波が防潮堤を乗り越えて迫ってきたため、すぐに地区最上部にある畑に避難した。

一方で、同地区中部付近の民家前に約10人の住民が避難していた。その後、津波はこの場所にも迫り、皆一斉に避難を開始した。しかし、避難途中の人の約半数が犠牲となった。

第1波が引いた後、三浦さんが避難していた畑には約90人の地区住民が集まっていた。避難者の中には、地区住民のほかに赤浜地区の住民、釜石市の市民などもいた。三浦さんは集まった避難住民に対し、「3日間はなんとかがんばろう。3日たてば救助が来る。こういう状況だから、みんな力を合わせてやろう」と元気付けた。

避難所に迫る火災

津波が引いた後、小枕地区には2カ所の避難場所が設けられた。避難場所ではがれきの中から木材などを集めてたき火をし、暖を取った。また、被災を免れた家屋のうちの1軒を高齢者や病弱者のために利用させてもらい、衣類や毛布などの防寒具をもう1軒や、被災した家屋で無事だった2階部分などから運び出した。食料は流れ着いた冷蔵庫などから取り出し、水は沢水を使用した。

小枕地区では火災が発生した。発災当日は集落から発生した火が小さく燃えていた。翌日の夕方から夜にかけて町方地区の火事が広がり、山を越えて迫ってきた。住民らは消防団の指導の下、バケツリレーをして消火活動を行った。消火活動は深夜までに5、6回行われた。家に避難していた人も、火が迫ってくるたびに地区最上部の畑に避難した。

また、津波の犠牲となった8人の遺体を、住民が毛布などで包んで運んだ。

小枕からの避難

3月13日の午前9時ごろ、小枕地区の住民は、孤立状態から抜け出すために約2・5キロメートル西北の寺野地区にある弓道場へ避難を始めた。普段使用する道路はがれきでふさがれていたため、集落北側の山すそに畳や段ボールを敷き詰めて、通行路を確保。徒歩で小枕地区から国道45号付近まで避難した。途中、高齢者や病弱者7人ほどが、救助に駆け付けたヘリコプターで搬送された。徒歩移動の人たちが国道45号に到達したのは午後1時ごろで、そこから軽トラックによるピストン輸送で弓道場に向かった。

寺野弓道場には大勢の避難者がいたため、小枕住民がまとまって過ごす場所を確保できなかった。そのため、弓道場に避難してからは各人で行動した。親戚の家に行った人や弓道場に残った人もいたが、それ以外の約40人は、13日夕方に城山公園体育館に移動し、避難生活を開始した。小枕地区の住民は1カ所にまとまり、「小枕地区」という看板を立てた。

伸松はすぐ地区外へ

伸松地区では、地震発生後にほとんどの住民が地区外へ自主避難した。

松村建設の高台には3世帯が避難。地区住民の祝田暁子さんは、「大津波の瞬間、引き波のすさまじい速さと暗闇に広がる炎の記憶は今も消えない」と当時を振り返る。水産加工場から流出した品物を見つけて、たき火であぶって飢えをしのぎ、十数人で一夜を明かした。翌日、小鎚橋からがれきの中を2時間かけて古廟橋まで歩き、寺野弓道場に2次避難した。

チリ地震津波の体験者が大半を占める同地区では、各自が素早い避難行動を開始したが、避難準備中だった1世帯2人が犠牲になった。

被害を受けたが、流失を免れた小枕地区の家屋

Interview

「ここなら安全」を過信せず危機感を持って行動

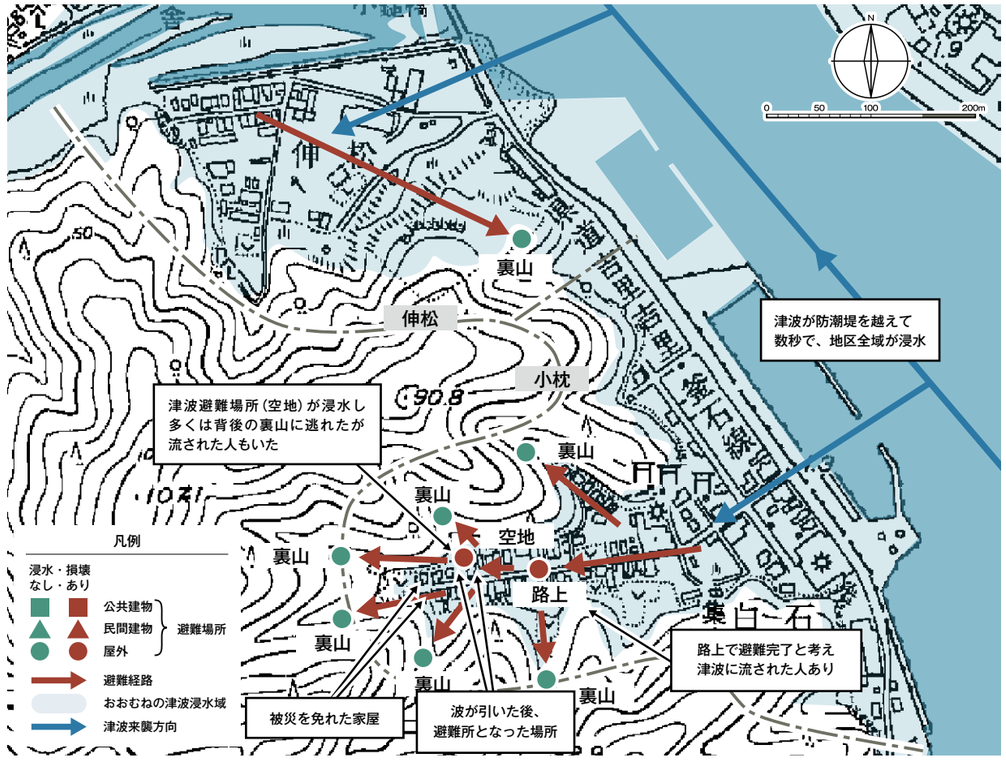
当時・小枕自治会　会長
三浦 勝男さん

小枕地区は1933(昭和8)年にあった昭和三陸地震津波の後に高台造成された住宅地。戦後に防潮堤も造られたため、小枕は大丈夫という過信がありました。ここなら津波は来ないだろうという意識は、駄目だと思いました。

私は今、大槌川上流の柾内という地域に住んでいます。津波の心配はないですが、洪水の危険性があります。津波で浸水しなかった地区でも、常に危機感は持つべきだと思います。

当時・小枕地区住民
澤舘 貴美さん

震災前に避難訓練はしていましたが、本当の訓練ではなかったように思います。津波はひたひたと水位が上がってくるものと思っていましたが、今回の津波は壁のように一気に押し寄せてきた。訓練では、高齢者をリヤカーに乗せて避難しましたが、そんな余裕はなかった。地震が来たら、すぐに高台に逃げることが大事。震災後、いつも危機感を持って行動するようになりました。「今、津波が来たらどこに逃げようか」と車を運転しているときにいつも考えています。



■ 図5-5　小枕・伸松地区の避難場所と避難経路

国土交通省「東日本大震災による被災現況調査（岩手3）、B・5避難実態調査、地区・集落代表者避難行動調査結果概要（株式会社東京建設コンサルタント・株式会社邑計画事務所共同提案体）」を基に作成

避難の状況　桜木町

火災近づき避難4回

桜木町は1960年代初め、日本製鉄（当時は富士製鉄）釜石製鉄所（釜石市）の勤労者のベッドタウンとして、小鎚川流域に新たに造成された街区である。河口から上流2キロメートルの距離にあり、川を遡上する津波の認識が薄く、津波の防災意識はあまり高いとは言えなかった。そのため自治会では、史実と最近の環境条件を基に独自シミュレーションを行い、「地震津波避難防災マップ」を作成。全戸に配布し、避難訓練を行うなど、ここ十数年で防災活動に熱心に取り組んでいた。

地震直後、指定緊急避難場所だった桜木町保健福祉会館に約150人の住民が避難してきた。同じ時間帯、防災行政無線の放送が大津波警報の発表を告げた。当時、自治会長だった中村盛観（なかむらせいかん）さんは、桜木町下流の小鎚川水門では最大6・4メートルの津波しか防げないことを知っていて、そのことを震災の1年前に発刊した自治会創立40周年記念誌にも記載していた。「このままでは保健福祉会館も浸水する」と考え、裏手の高台にある民家の敷地に高齢者や幼稚園児をはじめ全員を避難させた。避難直後、津波は河川堤防を越流し、足元の側溝のふたから下水道をさかのぼってきた泥水が噴出。あっという間に町全体が1・5～2メートル水没し、同会館1階部分も腰の高さまで水浸しとなった。

小鎚川沿いの集落が浸水し、町民らは高台へ避難した（佐々木英之さん提供）

夕方、中村さんと担当役場職員は、避難者数の報告や防寒対策、水・食料の確保のため、裏山のやぶをかき分けて登り林道に出て、町中央公民館に向かった。新町の役場庁舎が被災したため、同公民館が「災害対策本部」となっていたが、避難者で混雑していて本部の体をなしていない状態だった。そのため、桜木町の避難状況を職員に伝えて、暗闇の中、眼下の上町住宅などでがれきが燃えているのを気にしながら桜木町の避難場所に戻った。

3月12日未明、山林火災が拡大し、避難していた高台の民家も危険になったため、浸水していない同会館の2階に移動。さらに数時間後には、この場所にも延焼の恐れがあるという消防団の指示で、夜明けに小鎚川対岸上流の弓道場まで徒歩で避難した。

全員で避難所運営

弓道場の避難者は桜木町の自治会員が約7割を占めており、中村さんと自治会役員は自然に役場職員を助け、避難所の運営を手伝う体制となった。避難所での作業は、▽安否確認や尋ね人▽新規入所者への対応▽支援物資の受け入れと在庫管理▽水の補給▽調理・献立作成▽燃料配給や暖房機器管理▽清掃・健康管理▽マスコミや炊き出し支援団体への対応――など多岐にわたった。避難所全体を5～6班に分け、各班で運営世話人を選び、全員で運営する態勢が整えられた。

避難所という特殊な集団生活の場では、食事を受け取る順番や騒音などの問題もあった。一方、トイレ掃除は婦人部の女性たちが率先して当番を決め、流行歌の「トイレの神様（かぁさま）」ならぬ「トイレの母様」と呼ばれるなど皆で明るく振る舞っていた。このように、中村さんや運営世話人が率先してジョークを飛ばすなどして、できるだけ明るい雰囲気づくりに努めた。これらは震災前の日常生活で住民同士のコミュニケーションが図られていた証しといえる。

避難所となった寺野弓道場で行われた食事配布（中村盛観さん提供）

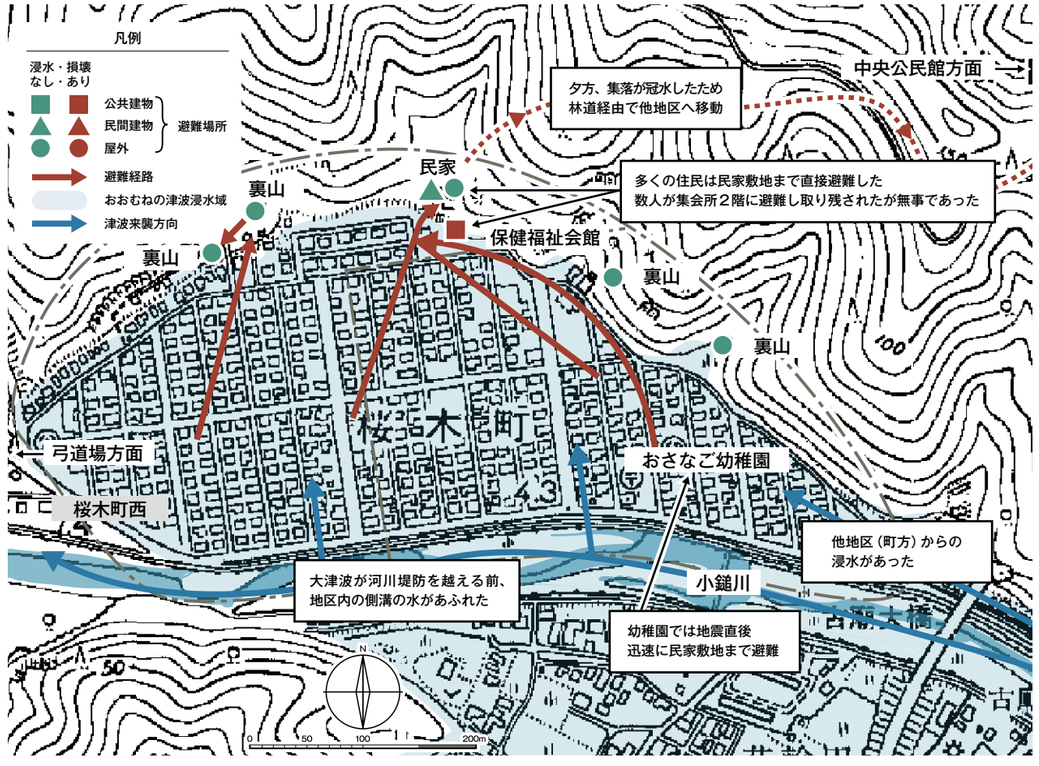
Interview

一人一人の備えが防災につながる

当時・桜木町自治会　会長
中村盛観（なかむらせいかん）さん

12歳年上の兄が町の消防団に入っていたため、小さいころからその姿を見ていました。兄から災害時の対応や行動を学んだ経験もあり、私自身、人一倍防災に対する意識は強かった。震災2カ月前の自治会新年交賀会のあいさつでも「今年は10年周期の事故災害の心配な年です」と話したほどでした。避難所では日頃の自治会組織や活動がうまく機能し、皆さんにスムーズに役割を振り分けることができました。

一方で、桜木町では震災前から津波避難訓練を頻繁に行ってきましたが、危機意識を住民に百パーセント浸透させることは難しいと思い知らされました。教訓といえば、やはり一人一人が普段から津波に対する備えの意識を持つことが重要です。地震や災害が起きたとき、自分がいる場所からどこにどう避難すべきなのか考えておくべきだし、訓練で担当した役割を、リーダーがいなくても各自全うできるようにしなければなりません。



■ 図5-6　桜木町の避難場所と避難経路
国土交通省「東日本大震災による被災現況調査（岩手3）、B-5避難実態調査、地区・集落代表者避難行動調査結果概要（株式会社東京建設コンサルタント・株式会社邑計画事務所共同提案体）」を基に作成

避難の状況　金沢・小鎚地区

他地区から避難者

町中心部から北西の山間部に位置し、津波による被災を免れた金沢・小鎚地区。浸水被害があった中心部の町方地区などから多くの避難者が集まり、避難所や民家などで受け入れた。しかし、電気や水道などのライフラインは停止状態で、避難所運営のマニュアルや備蓄食料が不十分であったため、一部で混乱を招いた。

金沢地区では、町役場金沢支所、旧金沢小学校、生活改善センターの3カ所が避難所となった。避難所では、発災から約1週間、当時婦人消防協力隊長だった故兼沢えつさんら地区住民が、備蓄米や自家米などをガス釜で炊いて、地区外からの避難者に提供した。停電の中、精米機を動かす発電機の燃料が不足して苦労したという。

避難直後から、地域住民が主体となった避難生活支援が続く中、避難者による自主運営への移行について、同月16日に話し合いを行い、避難者の中で、炊き出し班、救護班、支援物資班などの班体制を構築し、自主運営に向けて動き出した。

届かぬ物資、備蓄活用

津波被害のなかった金沢・小鎚地区では、外部からの物資支援が町方や吉里吉里などに偏っていたこともあり、他の地区よりも支援が遅れた。自衛隊による小鎚地区への救援は発災から5日目以降だったため、救援が来るまで備蓄食料でしのいだ。金沢地区では、物資が集まっていた旧金沢小学校体育館で在宅避難者分の物資を仕分け、各地区担当の民生児童委員6人が各戸へ届けた。また、避難者の中で持病の薬が不足している人は、保健師や日本赤十字社、DMAT（災害派遣医療チーム）などの巡回診療を受けた。

災害に備え、避難者の受け入れ先の検討や、避難所・避難路の整備を図り、災害発生時にスムーズに避難者を受け入れるための体制づくりを行うことが、金沢・小鎚地区の今後の課題とされる。特にも災害で各地の道路が寸断された中、県道26号大槌小国線が命をつなぐ道となった。内陸と結ぶ土坂峠トンネルの早期開通が望まれる。

旧金沢小学校給食室で食事の準備をする炊き出し班

Interview

地区住民の支援によってなんとかしのいだ数日間

町役場金沢支所　臨時職員
谷藤　邦緒

発災当時は金沢支所で仕事をしていた。津波が来た後、少しずつ町の方から避難してくる人がいた。翌日になると、山火事から逃れようと城山体育館から下りてきた人も集まってきて、避難者が増えた。金沢の親戚や知り合いを頼りにして来た人も多かったようだ。

それから支所は避難所になって、近隣の住民が炊き出しをしておにぎりを届けてくれたり、生活改善センターの調理室で持ち寄ったお米をガス釜で炊いて配ったりしていた。この地区は農家が多く備蓄米があったので、沢水が引かれていたからご飯を炊けた。しかし、停電で精米ができず難儀する中、3月13日に農協から支援米が届き、自衛隊などの継続的な物資が届くまでの数日間をなんとかしのいだ。

あの日のような緊急事態の中では、できることが限られている。その時の状況によって、自分で動かなければならない。必要最低限の物資の備蓄や避難用品をそろえておくなど、日頃の心掛けの大切さを伝えていくことが大事だと思う。

在宅避難者の状況

物資渡らず孤立

発災直後の大槌町には、津波による被害を免れて残った自宅や勤務先、民間企業の倉庫など、指定避難所以外で暮らす「在宅避難者」が多くいた。在宅避難者は「家が被災せずに済んだ人たち」という視点で語られることもあるが、家が残ったからこその苦悩が多々あった。

在宅避難者は所在が分散しており、行政の目が行き届きにくい。そのため生存者の確認さえも難しく、物資がうまく行き渡らないことが問題となった。何日も食べ物がなかったことに加え、高齢者用のおむつや赤ちゃんのミルクなどの生活消耗品の不足が続き、苦労が絶えなかった。また、指定避難所のような情報網がないため、生活していく上で必要な情報が得られず孤立状態が続いた。

在宅避難者であることが精神に与える負担も大きい。家族を亡くした人や自宅を失った人たちに配慮し、「自分は幸いなことに家が残ったから、家が流されてしまった人たちが優先だ」と考え、助けを求めにくい状況だった。中には避難所へ物資を受け取りに行く際に「家が残ったのに物をもらいに来ている人がいる」「避難所に直接物資を取りに来た人の分しか渡せない」など、厳しい言葉を受けて傷心した在宅避難者もいた。

事前対策や備蓄必要

物資不足や孤立の問題が起きた理由の一つとして、行政で在宅避難者への支援方法を事前に考慮できていなかったことが挙げられる。課題の解決に向け、自治体ごとに前もって緊急時の体制を共有・認識しておくことや、家庭や事業所などで備蓄の推進を図る必要がある。ある在宅避難経験者は「10日間の食事に困らない程度の備蓄を確保しておくとよい」と述べる。また、災害時には気付いた人がいち早く在宅避難者の状況把握のための名簿を作成し、情報・物資の供給をスムーズに行う必要がある。

精神面では、個々人の被災状況の違いによる人間関係の摩擦に苦しむ人が多かった。災害時にも相手の気持ちを考えた行動を心掛けることが望ましい。

在宅避難者の元へ物資を搬入する自衛隊

Interview

在宅避難名簿が物資依頼の根拠に

曹洞宗吉祥寺　住職
高橋　英悟さん

私は当時、吉里吉里で自分のお寺を開放して避難所運営をしていました。震災から2日ほどたち、用事があって町を歩いていると、誰にも認知されていないであろう在宅避難者の数があまりに多いことに気付いたのです。「これはなんとかしなければ」と早々に動き始めました。

まずは、町内会の会長さんや民生委員さんにお願いして、1軒ずつ残った家を訪ねていただき、在宅避難者の人数や誰がどこにいるのか分かるように名簿を作りました。360軒に1260人が身を寄せていることが分かり、名簿は「助けるべき人がこれほどいる」という根拠となりました。名簿を町災害対策本部に提出し、各家を避難所として認めてもらったおかげで、うちのお寺が窓口となって人数分の物資を受け取ることができました。

家が残った人は「空き巣」にも困っていて、夜警のボランティアが必要だと思いました。いろんなデマが流れることもあり、情報は慎重に見極めねばなりません。

支援物資分配

不足した防寒具

避難所運営で困難を極めたことの一つが、日常生活で最低限必要な物資の確保である。安渡地区では、アンケート回答者のうち45％の住民が、最も困ったこととして「生活物資の不足」を挙げている（2013年10月「安渡地区津波防災計画」から）。特に、寒さをしのぐための毛布が町内全ての避難所で不足。各地区で多くの被災者が車中泊を余儀なくされたほか、カーテンや暗幕を寝具代わりに使用した城山公園体育館や、入院患者用の寝巻を重ね着した大槌病院の例など、どの避難所も寒さ対策に苦慮した。飲み水は、安渡や赤浜、吉里吉里では地区内の沢水や井戸水を利用。灯油やガソリンなどの燃料は遠野市などから支援があり、初期は町中央公民館周辺に積んだドラム缶に貯蔵した。

町内の非常用物資の備蓄倉庫も被災し、必要物資は震災後の支援物資で賄うほかなかった。また、届いた大量の物資を管理する場所が限られた上に、その調達や配分、管理などを行う人員が不足していたため、供給や配分の体制を整えることが急務となった。

物資管理を改善

物資の集積拠点は、震災直後に中央公民館大会議室と吉里吉里地区体育館の2カ所に分かれていたものを1カ所に集約し、管理体制の改善を図った。国土交通省の協力を得て、町営野球場に設置した物資管理用テントを3月下旬にさらに大型のものに替え、支援物資の受け入れや要請の窓口を一本化した。

3月中旬、県は岩手県トラック協会の協力を受け、滝沢村（現・滝沢市）の県産業文化センターを物資輸送拠点として開設。大規模な物資管理の窓口ができたことで、大槌町から県への物資要請、また県から大槌町への物資輸送がスムーズになった。しかし、時間の経過とともに避難者のニーズが多様化する中、必要量を上回る救援物資が届く一方、衣類やハエ駆除の殺虫剤が不足するなど、現場の混乱は続いた。

適切なニーズ発信を

今後の対策として、海から離れた場所に防災倉庫を設置することや、衛星電話など災害の影響の少ない通信手段を町が平時から確保しておくことが挙げられる。

支援者の思いを無駄にしないために、被災者が適切にニーズを発信し、物資の需要と供給の不一致を防ぐことも大切だ。また、地区ごとの自主防災組織を中心とした住民組織で、物資分配の手順などを明記した避難所運営マニュアルを事前に作成しておく必要がある。

Interview

ニーズに応じて物資供給を効率化

大槌町産業振興課　課長
岡本 克美さん

発災後は主に支援物資の受け入れや依頼などを取りまとめていました。野球場に物資倉庫テントを設置し、一括管理できるように仕組みを整えるところまでを担当しました。陸路が悪い中、全国各地から多くの物心両面の支援が届き、ボランティアの方々が駆けつけてくださいました。支援を無駄にしないため、ニーズに合わせた物資の供給が必要であり、職員のみならず自衛隊をはじめ多くの方々に支えられました。

職員としてつらかったことは、物資が昼夜を問わず運ばれてくるため、家族が犠牲になったり、家が被災したりした職員に心を休める時間を与えてあげられなかったことです。

非常時の初動対応では、地元職員が必ず必要です。日頃の業務とは違う環境や内容にいかに対応し、業務分担するかが大きな課題でした。物資のニーズや供給されるものは時間とともに変化します。その時々に応じた業務や体制に変えて、物資の流れをスムーズにすることが大切です。

医療活動

医療拠点、全て被災

当時、大槌町にあった20カ所全ての医療機関が被災したため、医療救護活動の拠点すらもない状況であった。

町の医療機能は、平時から連携している釜石市をはじめ、全国から多くのサポートを受けた。しかし、災害時の医療活動に関する具体的な計画が事前に策定されていなかったため、発災直後は医療スタッフや通信手段、電源などを十分に用意できなかった。現場の状況で可能な応急処置をできる人々、できる場所で行うことで精いっぱいだった。

深刻な薬不足に悩む

4カ所の避難所（県立大槌高校、町中央公民館、寺野弓道場、町立安渡小学校）に救護所が設置されたが、場所の選定や医療物資の不足に苦しんだ。また、人工透析など継続的な処置や薬の投与を必要とする患者も多く、薬の不足は日を追うごとに深刻化し、医師や患者の不安が募っていった。

この状況を打破しようと、支援を待たずして自ら釜石まで薬を取りに行く医師や、町外から物資を届ける医療スタッフが現れ始めた。その判断力と行動力のおかげで、医療物資が徐々に整い、短期間で患者を助けるための体制を作ることができた。

災害時体制の構築を

症状に合わせて患者を町外搬送する場合もあった。しかし、町役場・消防・医療機関の連携体制が整っていなかったため、患者搬送先の決定や状況の把握、患者の個人情報の共有が困難になり、対応に多くの時間と労力を要した。

今後は、災害時の患者の受け入れ先の確保や救護所機能の充実のために、釜石医師会や各防災関係機関との連携体制を構築し、受援計画の策定や訓練の実施が必要である。

釜石医師会の医師らをはじめ、多くの町内外医療従事者の協力により備品や薬が集まった

Interview

机を並べただけの場所でできることをやった

植田医院　院長
植田 俊郎さん

3月13日、運よく難を逃れ寺野弓道場の避難所にいた私は、当時の県立大槌病院副院長である黒田継久医師から伝言メモを受け取りました。それには、「大槌病院は機能できないため解散予定です」とありました。事態の重大さを再認識し、背筋が凍りました。

その時、自分の役割を理解し、今できることをやってみようと思ったのです。そして、職員や家族と共に避難所に救護所を設けました。これは町民の一人として、自分にできることをしただけだと思っています。

机を並べただけの場所で医療活動を行い、生活空間と同居状態。そのような中でも、全国各地の医療チームから支援をいただき、なんとか救護所の役割を果たすことができたと思っています。

震災の記憶は徐々に薄れていくといいます。しかし、私にとっては今後一生続く「事実」です。できれば体験したくなかったことですが、多くの人々と出会い、助けられました。支援いただいた皆さまへ感謝を申し上げます。

救助・捜索活動

大津波の翌朝、町方地区の建物の屋上などにいた避難者を自衛隊のヘリコプターが救助した

水門閉鎖し避難誘導

地震発生直後、大槌消防署のポンプ車・タンク車・緊急車両隊1隊が小枕地区にある海岸水門の閉鎖に向かった。その後、各隊は潮位関連水門の閉鎖状況を確認しながら、住民の避難誘導、避難広報活動を行った。消防署に参集した職員は、防災行政無線による避難広報、消防無線による情報収集を行った。

津波襲来後、タンク車隊、救急2号車、本部広報車は末広町にある蓮乗寺（れんじょうじ）へ避難。職員らは、津波の後に発生した火災から同寺にいる多数の避難者を守るため、二手に分かれた。一方は移動可能な住民を城山へ避難誘導し、もう一方は移動困難な住民を安全な場所に集め、たき火で暖を取らせた。避難した消防車両3台はその後、火災で焼失した。

3月12日、津波の被害により全壊した消防署庁舎の屋上に避難し孤立していた13人の職員が自衛隊のヘリコプターで救助され、寺野地区の町営野球場に移動した。町中央公民館では、消防職員が消防団と協力し、自衛隊が搬送した遺体を会議室に移動させた。

3月13日から町災害対策本部に消防職員を配置。全国からの緊急消防援助隊が到着すると、職員は緊急消防援助隊と協力し、援助活動を実施した。また、自衛隊の捜索活動に職員を出向させ、遺体の身元確認に協力した。

3月14日、火災が町内各地に延焼し、至る所から林野火災の発生情報が入ってきた。消防ポンプ車や資機材の流失により、思うような活動ができず、主に救助活動と火災の延焼防止に当たった。その後、広範囲に延焼したため、鎮火には25日間を要した。

後に、寺野地区の町営野球場に通信設備を設置し、しばらくの間「大槌消防署」として使用した。

消防団と自衛隊の活動

地震発生直後、町内の消防団は直ちに消防ポンプ自動車で出動した。避難広報とともに、水門の閉鎖を行った。また、避難誘導中に住宅や車両などから逃げ遅れた住民の救助活動に奔走した。町内で発生した林野火災の消火活動に従事したほか、行方不明者の捜索、遺体の搬送、身元確認、夜間巡回パトロールなども実施した。

自衛隊は、3月12日から生存者の救出活動を開始した。7月24日の撤退まで、第5高射特科群（こうしゃとっかぐん）（青森県八戸市）や第9戦車大隊（岩手県）など、延べ30部隊が4カ月以上の長期間にわたって献身的な活動を展開した。主に、町内のがれき撤去や道路を切り開く復旧支援、避難所での給水や給食、物資輸送、防疫などを行った。

全国の警察が支援

発災直後から、生存者の救出のため各種部隊が出動した。警察、緊急消防援助隊などが協力し、しらみつぶしに現場を当たって救助・捜索活動を展開。がれきが道路をふさぎ車両の通行が不可能だったため、徒歩で行った。自衛隊合流後も、発災から1週間後まで生存者の救出に注力し、23人の生存者を救出した。

生存者の救出と並行し、行方不明者の捜索も行われた。3月16日、広島県と島根県警察機動隊約100人が浪板・吉里吉里地区での捜索活動を開始。それを皮切りに、全国の警察の機動隊が派遣された。以降、千葉県警察、大阪府警察、神奈川県警察など、北は北海道警察、南は福岡県警察の警察官が大槌町に派遣され、行方不明者の捜索を続行。捜索に従事した警察官は、2011（平成23）年11月22日現在で、17都道府県30部隊、総勢2381人に上った。

国道45号の大槌バイパスに並ぶ大阪府消防局の支援車両

Interview

水門閉鎖後、津波襲来
避難所でけが人の応急処置

当時・大槌消防署　消防司令補
現・副署長
三浦（みうら）　浩二（こうじ）さん

地震発生後、水門閉鎖を行い、消防車両を退避させている途中、ショッピングセンターマストの駐車場内に家屋ががれきと共に流れてくるのを確認し、寺野の弓道場付近まで移動しました。そこには自隊の消防ポンプ車1台と救急車1台のみが退避し、ほかの隊とは連絡が付きませんでした。

弓道場に避難者が集まってくる中、救急隊と共に傷病者の応急処置などを行いました。その後、地元の個人病院の医師が弓道場内に救護所を設置し、傷病者の診察を行いました。それからは、医師の指示の下、病院での治療が必要と判断された場合は、救急車で搬送しました。

また、緊急を要する傷病者は、防災ヘリや自衛隊ヘリで各医療機関に搬送しました。救助・捜索活動については、地元消防団や緊急消防援助隊、警察、自衛隊と共に行いました。その後も各関係機関の支援により、消防活動を維持できました。

燃料・電力の確保

鼻で嗅ぎ燃料判別

発災直後から燃料は常に不足した状況が続いていた。貴重な燃料を無駄にしないよう、建設機械には軽油、町を走り回る大槌町の車両はガソリンというように復旧作業の内容に優先順位を付けて配分を行った。燃料の支援は、海上自衛隊を通じて行われた。発災当初は町中央公民館を保管場所とし、届けられたドラム缶を次々に並べていった。自衛隊から提供される燃料は全て緑色のドラム缶に入れられており、その中に入っている燃料が何なのか判別が難しかった。原始的な方法だが、燃料を受け取った大槌町職員が鼻で嗅ぎ分けながら、内容を判別。ガムテープに「ガソリン」「軽油」「灯油」と書き、対応するドラム缶に貼っていった。なお、停電が長く続き、灯油は反射式ストーブでしか使えない状況。灯油を配給したとしても、それを使える暖房器具がないという事情もあった。

班立ち上げ電源確保

発災後、大槌町では停電状態が続いた。この事態を早急に打開するために、3月16日に、民間業者が中心となった災害対策本部電気班が立ち上げられた。同日、東北電力の高圧電源車が中央公民館に到着。発災当日から城山公園体育館で手動切替の非常用発電機を使用したことにより、城山公園体育館、中央公民館の応急電源が確保された。災害対策本部が置かれていた場所だけに、電気が戻ることにより、無線機、コピー機などの利用が大幅に改善され、作業の効率化につながった。

町内の電力復旧作業を行いながら、3月19日には火葬場の応急電気工事を実施。携帯用発電機を2台活用し、1台はボイラー用、もう1台は施設内照明用と振り分けた。3月20日から火葬が行われるようになり、さらに東北電力の配電復旧工事が完了した所が徐々に増えていった。4月に入ると変電所から離れた地域でも東北電力の電気が通じるようになり、その状況を踏まえ、5月の連休終了後に災害対策本部電気班は解散となった。

通信環境の整備

NTTドコモの携帯電話が使えるようになったのは、地震発生から4日目。これによって、災害対策本部への連絡、岩手県庁への連絡などが時間差なくスムーズに行えるようになった。その後、パソコンメーカーであるIBMからタブレットが届けられた。必要な物資をタブレットに打ち込んで、オーダーを出すようになった。通信環境が整うことで、情報の錯綜がなくなり、情報の整理も同時に進んだ。

Interview

感謝の言葉に背中を押されて

高木電気管理事務所　電気管理技術者
高木（たかぎ）　正基（まさき）さん

震災後に災害対策本部電気班が結成され、専用の部屋も用意してもらいました。私がリーダーとなって、電気工事店さん2人、弟が経営する家電屋さん2人、自転車屋さん1人というメンバーで活動していました。仕事は本当に山ほどありました。防災無線のバッテリー交換、テレビ配線、バンク修理など要請に応えられるものにはできる限り対応しました。

文字通り分刻みの業務で、朝出掛けて夜に中央公民館に戻る生活。しかし災害対策本部の大槌町職員とともに同じ釜の飯を食べ、その後、電気班の部屋に戻り、一日の労をねぎらい合いました。これだけ忙しい中でも、私自身は疲れたという感覚がなかったというか、まひしていたのかもしれません。電気がついたことで歓声が上がり、感謝の言葉を掛けられる。それが支えとなって、仕事を乗り切れたのだと思います。

犠牲者への対応

安置所確保に苦慮

発災翌日の3月12日から、犠牲者への対応が始まった。海水が引いた町内の路上や、浸水したり倒壊したりした家屋などで遺体が見つかった。

早急に遺体を安置する場所を確保しなければならず、浸水を免れた寺野地区の勤労者体育館、吉里吉里中学校体育館、旧小鎚小学校の3施設を使用することとした。しかし、次々に発見される遺体の収容に3施設ではスペースが足りず、やむを得ず、浸水した大槌中学校体育館も遺体安置所として使用した。

遺体の搬送は、主に自衛隊が担っていた。遺体は納体袋に入れられ、発見場所や遺留品などや歯型などの身体的特徴を紙に記載し、身内や知り合いの安否を確認に訪れる人のために手掛かりとして活用された。

数日後には棺桶が徐々に届き始め、身元が判明した遺体から順に納棺され、ドライアイスも準備された。このころから、徐々に他自治体からの職員派遣が始まり、遺体安置所の運営に携わることとなった。

また役場職員は遺体の検視や身元確認をサポートした。検視では、泥などが付着した遺体を洗浄する必要がある。水道が使えないため、職員がバケツに水をくみ、検視場所まで運んだ。身元確認は地元出身の職員だけでなく町民からの情報を基に、遺体の発見場所や所持品、身体的特徴などから、どこの誰であるかを特定。小さな町だけに顔見知りも多いという地域事情が身元特定に役立った。

しかし、火災などによる損傷が見られる遺体も多くあり、身元確認が難航した。何度も遺体安置所に足を運び、行方不明の家族や知人を探す人がいた。

追いつかぬ火葬

通常、大槌町の火葬場では1日4体を上限に火葬をしていたが、到底間に合わず、6体を火葬した。身元が分からない遺体の火葬には大槌町職員が立ち会った。

しかし、火葬場は元々老朽化が著しい施設だったこともあり、過剰な稼働で設備が故障。町内で火葬ができなくなったため、秋田県、奥州市や、北上市に協力を要請した。

増え続ける犠牲者に火葬が間に合わず、仮埋葬として、土葬が検討された。大槌町内の山手の地域に約400平方メートルの土地を確保。1.5メートルほどの深さに埋葬することにした。しかし、土葬は一時的な措置であり、後に掘り返し、火葬を行わねばならない。人的パワーが限られ、困難な作業になることが予想されたが、実施直前に火葬場の機械修理が終わり、火葬が再開。他自治体での火葬受け入れも徐々に整ったため、土葬の計画は回避された。

Interview

犠牲者を思い つらい任務乗り切る

大槌町社会福祉協議会　事務局長
中村（なかむら）　一弘（かずひろ）さん

当時は教育委員会の生涯学習課にいました。あの日、夜が明けると、町の被害状況はもちろん、人的被害の状況もだんだん分かってきました。大槌町の職員は約3分の1が命を落とし、多くの町民の方々が亡くなりました。3月12日から遺体安置所の担当をさせてもらいましたが、これは精神的に非常につらい任務でした。それでも誰かがやらなければならないという強い使命感がありました。行方不明の家族を探すために何度も訪れる方々の姿を見るのは、忍びないものがありました。

最初は交代しながら、火葬場に向かう車へのご遺体の積み込みなどを行う予定でした。しかし、要領が分かっている人間がそのまま続けた方がはかどるだろうという考えから、一度担当した人間は外れず、任務に当たりました。担当した職員はだんだん無口になっていき、朝起きるのがつらいという者も出てきました。亡くなった方々のことを何よりも大事に考え、この任務をよく乗り切ってくれたと思います。

遠野市の後方支援

2011年3月19日の朝、遠野市職員による被災地支援派遣隊の出発式が行われた（遠野市提供）

歴史に倣い災害対策

発災当時から継続して、大槌町は遠野市による多大な支援を受けた。同市は地震で本庁舎が被災して使用不可能になるなど、被害は大きかった。しかし、事前に災害発生時の後方支援対策が練られていたことで大槌町を含む県南の沿岸地域への支援体制をすぐに整えることができた。

遠野市は岩手県のほぼ中央に位置しており、古くから内陸と沿岸を結ぶ拠点だった。明治三陸地震津波（1896年）では、同市が被害の大きかった大槌町に対し迅速な支援を行った記録が残っている（『遠野市史』）。その歴史的背景に倣い、同市は大規模災害に備えて以前から沿岸地域への支援体制を整えてきた。2007（平成19）年に「後方支援拠点施設整備構想」をまとめ、同年9月には県や自衛隊など、87機関と連携した岩手県総合防災訓練を実施。同年11月、三陸地域地震災害後方支援拠点施設整備推進協議会を設立し、県沿岸南部の8地域と共同で災害発生時の対策を講じていた。発災直後、同市はこれまでの訓練を生かし、自衛隊や警察、消防、医療従事者などでつくる救援隊の準備など、いち早く後方支援拠点としての体制づくりを進めることができた。

発災翌日に現地入り

遠野市による大槌町への後方支援は、発災から11時間後の12日未明、1人の大槌町の男性が遠野市の災害対策本部へ飛び込んできたことから始まった。避難所になった大槌高校から土坂峠と立丸峠を越えてやってきたという男性は、現地の凄惨な被害状況を話し、助けを求めた。同市は備蓄してあった物資を車に積み、明るくなるのを待って大槌町に向かって出発。大槌高校に避難している500人に向けて食料、燃料、ブルーシートなどを搬送した。こうして遠野市は、いち早く大槌町に対する支援を行った。

遠野市が大槌町を含む被災地に届けたおにぎりの数はおよそ14万個に上る（遠野市提供）

13日には、被災地への後方支援活動の本格化を図るために遠野市東日本大震災後方支援活動本部が設置された。その後も大槌町への食料や水、燃料などの物資支援を継続。同月19日からは、大槌町に3～5人の遠野市職員を派遣し、継続的に現地での復旧支援を行った。同月28日には、さらに活動を継続するため、沿岸被災地後方支援室を設置。大槌町をはじめ各被災地に支援物資を届け、現地を視察して情報を得て戻り、翌日の支援物資を手配する日々を続けた。

大槌町への支援は、発災から1カ月間で29回、ほぼ毎日行われた。食料や生活用品などの物資支援と、被災した家屋の清掃や物資の仕分けなどを行う人的支援を継続した。大槌町から同市内へ避難してきた人々には、食料や灯油、日用品などの物資を配布し、長期化する避難生活への定期的な支援を行った。

官民一体の支援活動

遠野市の後方支援は、行政のみならず多くの市民と心を一つにして行われた。地域の人たちが持ち寄った米を日赤奉仕団や地域婦人団体協議会などが炊いて、おにぎりを作った。被災地へ提供したおにぎりの数はおよそ14万個。応援メッセージと共に各被災地へと届けられた。物資の仕分けは高校生も手伝った。10日後からは各被災地へ市民ボランティアが派遣された。4月4日にはボランティア活動が支援団体「遠野まごころネット」に統合され、やがて全国各地から災害ボランティアを受け入れる一大拠点となり、被災地の復興活動を支えた。

各自治体と協働

遠野市による被災地への継続的な支援については、全国各地の自治体が大きな役割を果たした。防災の危機管理体制整備が進んでいる静岡県や、遠野市の友好都市である東京都武蔵野市など、多くの自治体からの協力によって物資が遠野市に集まり、被災地への継続的な支援が可能となった。

これらの後方支援活動を今後に生かすため、13（平成25）年に『遠野市後方支援活動検証記録誌』を発行。15（同27）年には消防本部の隣に、「3・11東日本大震災遠野市後方支援資料館」を開館した。後方支援活動を行った人々の思いや足跡を伝え続け、防災・減災につなぐことを目的としている。

Interview

人員不足で混乱の中 災対本部で自発的に支援

当時・遠野市教育委員会事務局教務課　課長
現・遠野市　副市長
飛内（とびない）雅之（まさゆき）さん

震災直後の3月19日から、遠野市職員による人的な後方支援を始めました。私は第一陣のチーフとして大槌町に行きました。壊滅状態の町を見て、このがれきをどうやって処理すれば普通の生活に戻れるのだろうかと、切ない思いでいっぱいでした。

約1週間しかたってないので、みんな混乱状態でした。3割の町職員が亡くなっているし、残っている人も被災しているわけですから。「何をすればいいですか」と聞くこともできないような状態だったので、私たちで気付いたところから手を付けるようにしたのです。災害対策本部がある中央公民館に届いた物資を運んだり、仕分けをしたりして、賞味期限が早い食料から先に出すなど、物資整理や管理をしました。それすらも、人が足りていない状態でした。

遠野は大槌に親戚がいる人も多いし、場所も近い。あの状況を見ると、何かできることはないか、何かしなければならないと考える。だから職員も市民も一生懸命になって、できることをしたのです。

第6章

直す、立ち上がる 復旧期の町

水道、電気などのライフラインの復旧をはじめ、
仮設商店街の立ち上げや
震災後に来町した応援職員の活動など、
大槌町の復旧の経過を多面的に追う。
また、古里の復旧に向けて立ち上がった
町民たちにインタビューを行い、
当時の出来事について語ってもらった。

仮設の復幸きらり商店街に掲げられた「ひょっこりひょうたん島」の歌詞の一節（2011年12月17日撮影）。誰もがこの歌を口ずさんで自らを奮い立たせた

Episode file
～避難所の日々～

手探りで必死に動いた 避難所で感じた人のつながり

当時・大槌高校2年生
真壁（まかべ） 香利（かおり）さん

震災で千人近くの人々が避難生活を余儀なくされた、県立大槌高校の体育館。そこでは、同校の生徒たちが主体的に行動し、避難者たちを助けた。当時2年生だった真壁香利さん(25)は「その場で何ができるかを考え、必死に動いた」と振り返り、避難所での経験が自己肯定感を高めたという。

―当時高校生だった皆さんは、避難所となった体育館でどういう行動を取っていたのですか。

地震の後すぐ、高校に人が集まってきたので、倉庫にたまっていた新聞紙や段ボール、教室のカーテンを体育館に運び、暖を取れるように体育館にいる皆さんに配りました。その後も、炊き出しや避難者名簿の作成など、その場で必要なことをそれぞれ行動に移していましたね。

先生から指示をもらうこともありましたが、個人で目の前のことをやる、というのが基本でした。「ここでできることはなんだろう」と手探り状態で必死に動いていました。

―震災に備えた訓練や、事前の対策などは何かありましたか。

地震が来たという想定で校庭まで逃げるような、学校の避難訓練には参加していました。逃げるのももちろん大事だけど、本当に大変なのはそこからでした。その後の炊き出しの訓練なんてやったことはなかったわけで。

ただ、私は部活動で経験したことが生きたと思っています。大槌高校には「インターアクト部」という部活動があり、当時からボランティア活動などに取り組んでいました。小さな子どもからお年寄りまで、幅広い年代の皆さんと触れ合えた経験のおかげで、避難所の皆さんとも積極的にコミュニケーションを図ることができました。

実は、ボランティア活動をする前の私は引っ込み思案で、とても表に出るようなタイプではなかったんですよ。それでもボランティア活動を通して明るくなれた。そして、それを震災の時に生かすことができたんです。今までとは違う自分を、好きになることができました。

―印象的だったことはありますか。

同級生や先生の行動を見て、感動しました。普段は少し頼りない同級生が想像以上に動いていて、「こういうことをするんだ」と驚いたし、とにかく走り回って情報共有をしてくれる先生の姿も印象的でした。

後は、避難所で過ごしていると、「隣の人が避難したのを見てないけど、どうなったかねえ」、「あの人はあの避難所に避難したっけえ」というような会話が聞こえてきました。自分のことで大変な時期に、お互いを心配し合えるのは大切なことだと感じました。

大槌はもともと人と人とのつながりが強い町だから、そのような光景が見られたのだと思います。これは大槌が培ってきた良さです。それに加えて、大槌の人は立ち直る姿もすごいと感じます。復興が遅いとか言われることもあるけれど、「次の災害に備えよう」と前向きに取り組む人がたくさんいます。あの津波を経験しても、この土地に帰ってくる人たちもたくさんいます。復興が進んだり、町が変わったりしても、今までみたいに人のつながりが多い町でいてほしいです。

（取材／2018年12月）

がれきの撤去

がれき撤去のために重機が大量に必要となった（2011年4月27日撮影）

町内で66万トンを撤去

東日本大震災では災害廃棄物、いわゆる「がれき」が大量に発生した。一瞬にして町中ががれきの山と化し、かつての町の面影は消えうせた。そのような状況の中、支援物資の受け入れなど、外からの支援を受けるためにも、一刻も早くがれきを撤去して道を切り開くことが求められた。

発災から1週間後、がれきの撤去作業が始まった。大槌町は他の市町村よりも初動が遅かったといわれている。作業に必要な重機を持つ民間事業者が被災し、さらに被災を免れて残った数少ない重機を稼働させたくても燃料が不足していた。

本来は役場の地域整備課（当時）の技術系職員が作業の指揮を執るはずだったが、職員の多くが津波の犠牲となったため、臨時で他の課の技術職経験者を起用した。国や県のほか、自衛隊、地元の建設会社、重機を取り扱う企業などの協力を得て、作業やエリアを分担してがれきの撤去を進めた。

作業の中で配慮すべき点が幾つかあった。他の市町村で積み上げたがれきの内部での発酵で熱がこもり、火災が発生した事例があったことから、がれきをかき混ぜて熱を逃がすなどの処置により火災予防に努めた。また、町有地には限りがあり、がれき置き場となる土地を早期に確保する必要があった。必要な土地面積を割り出して早めに用地交渉を行い、沢山地区の薬王堂付近、吉里吉里フィッシャリーナ付近などを置き場とした。

置き場に集めたがれきは2段階で分別を行った。1次分別では木くずや土砂、鉄くず、コンクリートがらなどの7～8種目に分けた。2次分別は大槌町が土地を用意し、岩手県の協力を得てさらに細かく分別。その後、県内の焼却施設に協力を要請、盛岡市や奥州市などの複数の施設に受け入れてもらい焼却処分した（表6-1）。

他の市町村から重機の支援が進み、それまでがれき撤去の主力となっていた自衛隊の撤退時期に合わせ、重機を大量投入した。人手や重機を計画的に用いて作業を進めた結果、初動の遅れを挽回し、10月末に建物以外のがれき撤去が完了した。撤去されたがれきの総量は約66万トンに上る（表6-2）。

許諾得て取り壊し

一言で「がれき」と言っても、その一つ一つはもともと、ここで長く暮らしてきた町民の大切な思い出の品である。国の方針では、津波で大きく損壊した建物に関しては、持ち主の承諾を得なくても取り壊しを許可していたが、他の市町村では「勝手に壊された」などの声が上がった例もあった。大槌町では、被災した建物や船、車などの取り壊しに関して、避難所巡回や町発行の広報で知らせるなどの方法で、所有者やその家族、親戚などに直接確認し、極力個人の意向を尊重して作業を進めた。

解体前の建物の周辺や屋内のがれきを処理する自衛隊

■ 表6-1　災害廃棄物焼却受け入れを行った県内内陸・沿岸部の焼却施設

施設名	処理能力（トン／日）	余剰能力（トン／日）	処理実績（トン）
盛岡・紫波地区環境施設組合ごみ焼却施設	160	11	3,733
胆江地区衛生センター	240	10	3,226
大東清掃センターごみ焼却施設	147	50	1,776
いわて第2クリーンセンター（民間）	80	10	15,496
岩手沿岸南部クリーンセンター	147	50	30,515

「東日本大震災津波により発生した災害廃棄物の岩手県における処理の記録」岩手県2015年から　※大槌町以外の被災市町村の災害廃棄物処理量も含む

■ 表6-2　大槌町の災害廃棄物の品目別市町村処理実績等（単位:トン）

津波堆積土	コンクリートがら	不燃系廃棄物	柱材・角材	可燃物	金属くず	漁具・漁網	その他	合計
206,469	256,301	111,271	1,604	53,562	28,437	1,824	596	**660,064**

「東日本大震災津波により発生した災害廃棄物の岩手県における処理の記録」岩手県2015年から　※端数処理のため合わない場合がある

Interview

安全な砂浜目指し丁寧にがれき撤去

大槌町復興推進課　課長
中野（なかの）　智洋（ともひろ）

震災当初は企画財政課に所属しており、避難所の運営などをしていました。しかし、町の技術系職員が多く亡くなって町の復旧事業を行う人手が足りず、ハード整備事業の経験者である私が、がれき撤去や道路啓開（切り開くこと）などを行う担当者となりました。

初期は携帯電話がつながらなかったため、建設作業員が毎朝8時に同じ場所に集合することに決めて、がれき撤去の状況や作業内容の確認・指示をしました。食料もない中で体力を使う仕事だったため、せめてもの食料をと、少量のおにぎりやパンを支給して動いてもらう状況でした。

「大槌町のがれき処理は遅れている」と言われていましたが、多くの人の協力があって計画的に作業を進めることができました。中でも気に掛けたのは、吉里吉里海岸のがれき撤去。海開きを意識して、特に丁寧に行いました。以前のように、子どもたちがはだしで歩いてもけがをしないような浜にしようと。明るい話題も提供したかったものですから。

道路

がれきを取り除いて通行可能になった、安渡一丁目付近の県道大槌小鎚線

主要道路の作業優先

海沿いに位置する地域全ての幹線道路は、津波による浸水とがれきで外部との交通を絶たれ、地域ごとに孤立した状況となっていた。そこで国土交通省は、大槌町の南北を貫く国道45号で、町内2カ所の道路啓開（がれきなどの障害物を除去し、道路を切り開くこと）を行った。家屋などのがれきが吉里吉里地区の国道45号をふさいでいたが、啓開作業により3月15日に2車線の交通路が確保された。また、浪板地区にある長さ25メートルの浪板橋は、両端部分から海側の盛り土が流出したため、緊急的に補修され、同17日に通行できるようになった。

国道に比べ、県道、町道の開通は時間を要した。町民から道路復旧の要望が相次いだが、遺体搬送や燃料確保などに利用する重要度の高い道路から作業に入ったため、全ての要望に対応することができなかった。3月21日時点での道路開通は、国道45号は全て通行可能だったが、県道は20%、町道は10%という状況だった。

町内では各地域で、町民が自主的にがれきを取り除く作業を行い、支援への道を切り開いた。例えば、吉里吉里地区の場合、地元の建設業者や造園業者が重機4台を持ち寄り、道路のがれきを除去した。赤浜地区では、男性50人が県道の復旧作業をするなど、いずれも自衛隊が到着する数日前までに、住民の緊密な連携によって、集落内の往来を可能な状態にしていた。道路啓開と並行し、大槌町では国の災害査定を受け、災害復旧事業を進めた。町民が専門家や町職員と意見を交わしながら時間をかけて丁寧にまちづくりを行い、復興計画を策定。その後、個別に地区の事業計画を立て、それに基づいて区画整理事業などの都市計画を設計した。

危険な箇所から優先順位を決めて修繕しつつ災害復旧の仮道路を造り、通行路を確保した。復興基本計画の策定後、仮道路を撤去して、区画整理に沿った本道路工事を進めた。

自衛隊による道路啓開作業

災害に強い道路網を

東日本大震災を教訓に住民の要望が高まっていた津波からの避難路が桜木町に整備され、2017（平成29）年4月に竣工した。同避難路は、城山林道1号線に接続することで、津波警報発表時などに災害対策本部が設置される中央公民館や、町指定避難所である城山公園体育館への避難が容易になった。

さらに、小鎚地区の三枚堂側と大ケ口地区を結ぶトンネル工事が完了すれば、津波の浸水区域を避けて、通行できるようになるなど、災害に強い道路網の整備が進む。

また、青森県八戸市から仙台市までをつなぐ三陸沿岸道路の一部となる釜石山田道路の工事が進められている。17年には同道路の町内四つの全てのトンネルが開通し、19（同31）年1月には大槌インターチェンジが完成。全線開通によって国道の渋滞緩和、非常時の避難路・救援路などの役割が期待される。

沢山地区に整備された大槌インターチェンジ

Interview

誰もが未経験
自分を信じて判断

大槌町復興推進課　課長
中野（なかの）　智洋（ともひろ）

本来であればそれぞれに別の担当者が付くものですが、圧倒的に人手が足りなかったので、がれきの撤去や道路の啓開、下水道など、さまざまな分野の担当を各自でしなければならない状況でした。こんな経験は誰もしたことがなく、判断が難しいことばかりでした。

それでも、自分がどうしたいのかを信じて判断するしかなかった。明るい話題を提供したい。津波で被災していない人たちにも配慮したい。復興作業が進んでいることを示したい。効率的な作業をしたい――。そういう気持ちを大切に作業しました。

特に意識したのは、津波で浸水していない地域への配慮です。海側の地区の被害がひどかったため、内陸の金沢、小鎚の皆さんが支援してくれていましたが、同じ被災者ですよね。浸水区域外でも道路が傷んでいたし、住民にも配慮したかったので、ある程度優先して作業しました。

水道・ガス

避難所の城山公園体育館で展開された神戸市水道局の給水活動

上水道の被害と復旧

大ケ口地区の大槌町水道事業所にも、高さ約50センチメートルの津波が押し寄せた。津波そのものによる直接的な被害はなかったが、停電となった。すぐに発電機で電気を復旧し、災害対応に当たった。3月13日から町内の水道施設の被害状況を調査すると、浪板ポンプ場と赤浜ポンプ場、筋山ポンプ場に津波の冠水被害が確認された。また、送水管が架けられた安渡橋は落橋しており、同じく吉里吉里海岸付近の道路に埋設された水道管も流失していた。

津波で破壊された安渡橋。同時に水道管も破損した

町内で浸水被害を免れた地域では、電力会社から復旧時期を随時聞き取りながら、作業していった。送配水施設の復旧が終わった地域でも、通電が開始されていない場合もあり、通水には電力の復旧を待たなければならなかった。居住者がいる町内の全地域に通水したのは、発災から2カ月後の5月16日だった。

各家屋の漏水を止める作業にも苦労が伴った。道路上のがれきは撤去されていても、給水管は各家屋の敷地内にあるため、がれきが堆積し、どこに止水栓があるか分からなかった。被害を心配して集まった地元水道事業者も加わり、土地勘を頼りに止水栓の位置を推定し、がれきを除けながら止水作業を進めた。

支援受け給水活動

水道事業所前にある井戸からポンプで水をくみ上げることはできたが、町にはもともと給水車がなく、水を届けることができなかったため、水道事業所に来れば水があることを各避難所や世帯に伝え、応急給水を行った。

■ 表6-3　給水活動の概要

区分	受け入れ数等	備考
活動事業体	48事業体	・日本水道協会関西支部加盟43事業体 ・同東北支部加盟５事業体
給水タンク車	425台	90日間の延べ台数
給水量	2,305㎥	90日間の合計水量
対象地区	町内全域	３月停電時は全地区、その後避難所および在宅避難

3月17日から、公益社団法人日本水道協会加盟の48事業体が支援に入り、避難所や在宅避難者への応急給水活動を展開した（表6-3）。特に、独自に大槌町を支援先に定めた神戸市水道局は、応急給水活動の開始当初から最終の2カ月半後まで職員の派遣を継続。6月25日には給水タンク車を町に無償譲渡し、避難所が閉鎖されるまでの間、給水活動を行うことができた。

持続可能な水道を

2012（平成24）年9月に水道事業の復興計画が策定された。スローガンは「災害に備え、持続可能な水道づくり」とした。同計画では、中継ポンプ施設や主要管路を浸水区域外に設置。復旧に主眼を置いた計画とすることもできたが、国や県に要望し、再度津波が来襲しても水道を供給できるような内容とした。復興計画作成の際にも神戸市水道局の多大な協力を得た。

下水道の被害と復旧

下水処理場施設である大槌浄化センターは、津波によって電気設備が全壊したが、13（同25）年1月31日に復旧が完了した。ポンプ施設については、桜木町雨水ポンプ場、栄町雨水ポンプ場、大町雨水ポンプ場が稼働停止となったが、14（同26）年3月の大町雨水ポンプ場の復旧で、全て再稼働した。

峠越え仕入れたガス

大槌町のガスは、プロパンガスであり、電力と比べて復旧が早かった。がれきが取り除かれ、車両の通行が可能になったことにより、ガスの復旧に向けた動きが活発化。土坂峠を越えて盛岡市にある業者へ出向いて交換用ガスボンベを仕入れ、避難所、公民館など、災害弱者が多く、優先順位の高い箇所から随時補充していった。地下のガス導管を通じて供給される都市ガスと異なり、ガスボンベを交換すればすぐに使用できるプロパンガスだったことが早期復旧につながった。

Interview

経験に基づいた「寄り添う支援」に感謝

大槌町水道事業所　所長
田中寛之（たなかひろゆき）

大槌町の上水道がここまで復旧できたのは、全国からの応援があったからだと思っています。発災直後の3月16日には神戸市水道局の先遣隊が効果的な支援先を求め、自主的な判断で大槌に来てくださいました。また、地元水道業者や水道事業の経験が豊富な役場OBも応援に駆け付けました。復旧作業や漏水の止水作業をしていると、町民からねぎらいの声を掛けていただくこともありました。

神戸市水道局の方々からは、阪神・淡路大震災の経験に基づいた、非常に力強い支援を頂きました。被災している役場職員の心情や大変さを身をもって理解し、寄り添って一緒に作業してくれました。「こういう支援もできますが、いかがですか」というように、決して押し付けるような支援の姿勢ではなかったこともありがたかったです。その後は堺市上下水道局から職員を派遣していただいています。堺市で大槌への派遣を募集すると、すぐに手が上がるということも聞いています。本当に感謝しています。

教育

間仕切りされた吉里吉里小体育館で学ぶ大槌北小の児童たち

失われた学びの場

大槌町では町立小中学校の7校中5校、幼稚園・保育園（所）の5カ所が被災したが、教職員らの的確な判断で、ほとんどの児童・生徒はいち早く避難して助かった。津波被害に加え、上町の大槌小や源水地区の大槌中は津波火災の類焼で校舎が使えなくなった。被災を免れた吉里吉里地区の町立吉里吉里小・同吉里吉里中、沢山地区の県立大槌高校は避難する人であふれ、教育を行える環境ではなかった。

大槌町教育委員会の伊藤正治教育長（当時）は、中央公民館に設置された災害対策本部で責任者としての職務に忙殺されていた。子どもたちのために一刻も早く学びの場を整える必要があると考え、武藤美由紀・町教育委員会指導主事（同）に学校再開への取り組みを指示。同指導主事を中心に、早急な教育再開を目指して動き始めた。

学校再開に向け奔走

震災後初の町校長会議は3月20日に開かれ、同月29日までに町内の全小中学校の卒業式を行うことを決めた。避難所になった安渡小は校庭で、同じく吉里吉里小は視聴覚室で挙行した。その後、町教委と各校長は会議を重ね、学校再開の時期や場所、登下校時の交通手段や教育課程の編成など具体的な事柄を検討し、準備を進めた。

中でも、被災5校（小学生450人、中学生290人）の受け入れ先の選定は困難を伴った。大槌中は被災していない大槌高校に来春受験を控えた3年生の教室を優先的に確保、1・2年生は吉里吉里中の空き教室を借用した。安渡小と赤浜小は吉里吉里小へ、沢山地区の大槌北小は避難所となっていた吉里吉里小体育館をパーテーションで間仕切りして教室を作った。大槌小は山田町船越にある県立の研修施設「陸中海岸青少年の家」の研修施設や体育館をパーテーションで区切り、教室を確保した。こうして震災から約1カ月後の4月20日に小中学校が再開した。この日、大槌中を迎えた吉里吉里中は昇降口に歓迎の横断幕を掲げ、体育館で開かれた交流会で両校生徒がエールの交換などを行った。大槌高校では、発災直後から500人を超える避難者が集まっていたため、学校再開の遅れが懸念されていたが、避難者に他の避難所へ移動してもらうなどの調整を行い、4月25日に本格的に授業を開始した。

新しい教育への一歩

同年9月、被災した町立学校5校（大槌小・安渡小・赤浜小・大槌北小・大槌中）が入居する仮設校舎が小鎚地区の大槌ふれあい運動公園に完成。これを受けて、子どもの数が年々減少傾向にあることや、被災した全ての校舎を復旧するためには膨大な時間と費用がかかることなどが検討された。その結果、大きな校舎を一つ建てて、震災以前から構想のあった小中一貫教育を行う方針を決定した。

2013（平成25）年4月、被災した小学校4校を統合し、新しく「大槌小学校」として再編。さらに15（同27）年4月から大槌小と大槌中を「大槌学園」、吉里吉里小・吉里吉里中を「吉里吉里学園」として小中一貫教育の本実施がスタートした。16（同28）年に大槌学園が「義務教育学校」に移行。同年9月には大槌高校の隣に大槌学園の新校舎が完成し、小中一貫教育校として新たな一歩を踏み出した。

子どもの心に寄り添う

学校外からも多くの支援があった。スクールカウンセラーが各小中学校へ支援に入り、フラッシュバックによるストレスや家族を亡くした悲しみを抱える子どもたちに寄り添い、心身の負担を軽減するために活動した。また、スクールソーシャルワーカーも早くから町に入り、学校・家庭と関係機関をつなぎながら環境面などのサポートをした。さらに11（同23）年12月、NPO法人カタリバ（本部・東京）が「大槌臨学舎」を設立。これは、主に震災で自宅や塾を流されて十分な学習環境を得られない小中高生を対象にした、学習指導と心のケアを行う被災地の放課後学校（コラボ・スクール）である。

翌年4月には、NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン（本部・東京）の支援により、子どもたちの安心・安全な居場所の確保を目的とした「大槌町こどもセンター」が開所。これと大槌臨学舎の二つの機能を統合し、放課後の教育施設として17（同29）年3月に「大槌町こども教育センター」が発足した。愛称である「OLAI」は大槌弁で「私の家」という意味を持つ。こうして、震災を経験した子どもたちが安心して教育を受けることができる環境が整えられた。

Interview

大槌の子どもたちのために学校再開へ奔走

当時・大槌町教育委員会派遣　駐在指導主事
武藤 美由紀さん

当時、伊藤教育長に「学校再開については任せる」と託され、大槌の子どもたちのために自分がすべきことを全うすると決意しました。避難所には多くの方々が避難していましたが、避難所の中でも先生と子どもたちのいる空間は、形のない『教室』の雰囲気が醸し出されており、一刻も早い学校再開をしたいと考えました。

しかし、学校の再開を決めたものの、再開場所の調整が必要でした。多くの方のお力添えを頂きながら、町外の陸中海岸青少年の家が借用可能となり、町内全小中学校の再開を無事に迎えることができました。

再開の後は、これからの大槌町の教育システムを検討する段階に進みました。古里の良さを学び、これからの自分の生き方を見つめ、大槌の町の復興に貢献するような人材育成につながる「ふるさと科」を中核にした小中一貫教育です。これからの大槌町で学ぶ子どもたちの成長を心から願ってやみません。

医療

県立大槌病院は2016年5月に新築落成式を行い、開院した

被災した県立病院

大槌町には、県立病院1カ所、民間診療所7カ所、歯科診療所6カ所、調剤薬局6カ所の医療機関があったが、その全てが被災した。

新町にあった震災前の県立大槌病院は、大槌町の医療の中心としての役割を果たしていた。

しかし、津波の被害により町内の医療機能はまひ状態で救護所は薬を求める患者が詰め掛け、早期の診療所開設が求められた。

場所の確保は地元民の協力により、集会施設の上町ふれあいセンターを借りて、4月25日から診療を開始した。4月末にはコンテナ式診療所の寄贈が決定。建設工事を経て6月27日に仮設診療所を開設した。診察台や机などの備品も寄付され、医療機能の復旧に向けて前進した。

釜石病院と連携

大槌町の医療体制の立て直しは、大槌病院が中心となり、津波で被災しなかった県立釜石病院と連携することが大きな鍵となった。釜石病院は同じ釜石地域の保険医療圏の中核病院として位置づけられており、平時から協力関係にあった。

大槌病院で全ての患者の対応をするのではなく、急性期治療や専門的な治療が必要な場合は釜石病院を中心に受け入れ可能な病院に搬送し、より多くの患者に迅速な医療対応ができるようにした。

紫波と花巻による支援

大槌町を支援した日本医師会の災害医療チームJMATは、6月18日を最後に撤収。その翌日には、釜石医師会が町での活動を終えた。その後、医療体制の補完が求められたため、当時の釜石医師会会長が岩手県医師会に支援を要請した。

これを受けて県医師会は、紫波郡医師会と花巻市医師会に働き掛け、7月3日から土・日曜、祝日を利用した診療支援が始まった。2012（平成24）年3月25日までの間で、支援医師は延べ61人に上った。

震災5年で再建

大槌病院の仮設診療所は、受付・診察室・処置室・放射線検査機器などを備え、1日90人近くの患者を診察した。状況の改善はあったが、医師不足は深刻で、町内の開業医をはじめ県内外の医師が交代で診療に当たった。

寄贈された仮設診療所（コンテナ式）に11（同23）年6月に移転し、12（同24）年6月には全身用コンピューター断層撮影装置（CT）が設置され、稼働した。

本設の大槌病院は場所を小鎚寺野地区「ふれあい運動公園内」とし、病床数は1病棟・一般病床で50床程度、診療科は内科・外科を基本に、これまでの外来機能を維持するとした整備の基本的な考え方が13（同25）年に示され、16（同28）年5月に開院した。これは、被災した三つの県立病院で初めての復旧となった。

大槌病院の仮設診療所となった上町ふれあいセンター

新しい大槌病院は過去の津波が到達しなかった寺野地区に再建された

仮設診療所内では、町内外の医師らの活動により備品が整備されていった

Interview

行かないと後悔する「触る」を大事に診療を

元・大槌病院心療内科医
日蓮宗僧侶
宮村 通典（みやむら みちのり）さん

あの日、私は故郷の長崎県にいました。長女の義母が大槌在住なので、大槌のことが気になっていました。9月になって大槌に行った時に、被害状況を目の当たりにした衝撃は忘れられません。何かしなければと思い、翌年の4月から大槌に移住し、医師として活動しました。行くことを決意した理由の一つに、「行かないと後悔する」という思いがありました。阪神・淡路大震災の時に博多にいたのですが、当時はすぐ動けなくて……。また、僧侶としての使命感もありました。

いざ診察してみると、まだ自分の気持ちを言葉にできなかったり、3・11が近づくと胸の痛みを訴えたりする患者さんがいました。特に小さいお子さんを亡くした人は大変でした。診療のときに、私は必ず脈をとるようにしています。「触る」っていうことはすごく大事で、脈をとりながら、傾聴しました。

今後は、取り残された弱者、独居のお年寄りや酒浸りになったような人たちをどう支えていくかが課題ですね。

心のケア

心のケアの支援者育成研修会の場面（「認定NPO法人心の架け橋いわて」提供）。被災地で自立的な支援ができるよう、人材育成が行われている

環境一変、心に負担

東日本大震災の被害による急激な環境の変化により、大槌町では多くの人が精神的な負担を抱えていた。発災後から応急対応に追われていた町職員らも、心身ともに疲弊していて、精神面のケアをする必要があった。

町は震災から1カ月半後の4月23日から5月8日、町民の健康状態を把握するため、保健師による全戸訪問調査を実施した。

元町役場勤務の保健師で岩手看護短期大学教授の鈴木（すずき）るり子（こ）さんが、保健師の全国組織などに呼び掛けて実現。ボランティアの137人が2人1組で各避難所や個人宅の約3700世帯・5082人と対面し、心身の健康に関する相談に応じるなどした。これによると、被災者や住民は年齢・性別を問わずに血圧が高く、不眠やPTSD（心的外傷後ストレス障害）、サバイバーズ・ギルト（生還者の罪悪感）に悩む人が多かったという。

鈴木さんは「震災時に幼少で言葉を発せなかった子どもたちが学齢に達し、トラウマが現れるケースも。発達障害などと誤認されることがあり、注意が必要だ。震災の影響はこの先もずっと続く」と懸念する。

発災後、精神科医師を含む保健師、看護師、臨床心理士などで構成された「こころのケアチーム」が全国から派遣され、「震災ストレス相談室」も、大槌を含めて沿岸7カ所に開設された。大槌町にも同ケアチームが訪れ、避難所などを巡回し被災者の現状把握を行った。

被災者には、近親者の喪失や住居の損失などの急激な環境変化によるストレスや不安により、不眠やうつなどの症状が見られた。治療という名目だと抵抗がある人も多かったため、避難所や仮設住宅を訪問し、健康相談やアドバイスという形で支援した。また、町職員向けに、定期的な健康チェックが行われた。

多岐にわたる不安

応急仮設住宅への入居や自宅再建が増えた2012（平成24）年4月以降は、こころのケアチームの活動は岩手県こころのケアセンターに引き継がれた。大槌町では、釜石地域こころのケアセンターの専門スタッフらが現在も活動している。

相談内容は、身近な人を失ったことによる喪失感の増幅や、ローン、生活資金、家族関係や仕事のことなど、多岐にわたった。そのため支援者側は、行政や社会福祉協議会など、地域に根付く団体と連携し、相談内容によって関係窓口につなぐ必要があった。自殺を考える人が増えることを考慮し、自殺予防の活動にもつながっている。

震災を経験した子どもの中には、体調不良や夜泣き、赤ちゃん返りなどの症状が見られることもあった。これを受け県は沿岸地域に「子どものこころのケアセンター」を設置し、児童精神科医による相談やケアを行った。親族や里親に育てられることになった震災孤児・遺児は、児童相談所などが定期的に巡回し、養育環境を確認する体制を整え、支援金や奨学金などの経済支援制度の周知も行った。また、学校ごとにスクールカウンセラーが入り、子どもたちの心をサポートした。

地域でできる支援を

持続可能な支援を目指し、地域が独立して心のケアに取り組むことができる環境を整える必要があった。「認定NPO法人心の架け橋いわて（こころがけ）」は、震災当初から長期的な支援を目指して活動していた。誰にも言えない思いを抱える人たちが寄り添い、話ができる場所をつくろうと、15（同27）年に旧植田医院仮設診療所にコミュニティー・カフェを開設し、支援を継続している。ほかにも心の支援事業を行う地域団体が立ち上がり、音楽や物づくりを通した心のケアサロンなどを行った。

また、被災して大槌町を離れ、内陸の盛岡市に移り住んだ被災者へ向けたコミュニティー支援も行われている。「もりおか復興支援センター」では、被災者の悩みに合わせた相談室を設置。週1回「お茶っこ飲み会」を開催し、被災者や支援者が集う機会を設けている。

「認定NPO法人心の架け橋いわて」が運営するコミュニティー・カフェ

Interview

「話を聴く」大切さ
今後もケア継続

岩手医科大学
医学部神経精神科学講座　教授
岩手県こころのケアセンター　副センター長
大塚（おおつか）耕太郎（こうたろう）さん

発災1年目、こころのケアチームは、岩手医科大学や県立病院、そして他県から応援に入った医師や専門家も含めて30チームが岩手県内で活動しました。現在も岩手県こころのケアセンターでは、地域のスタッフ、役場職員の方々や社会福祉協議会の方々と連携し、こころのケアの活動を続けています。

こころのケアで重要なのは、「話を聴くこと」です。話を聴き、寄り添うことが被災地の人々の安心につながります。特に、被災された方々が安心して相談できるように、丁寧に温かみをもって接する姿勢を心がけております。

こころのケアは、県の復興推進プランが示すように、今後も継続していく必要があります。地域でもこころの支援に関わる地域の従事者やボランティアのスキルアップ研修や住民への啓発活動に取り組んでいます。現在も復興事業に携わる地元の職員や派遣職員の方々が一生懸命がんばっておられ、私たちもまだまだ支援を続ける必要があると思っています。

応急仮設住宅

浸水区域外の小鎚地区には、町内で最も多い849戸の仮設住宅が建設された

入居地希望通らぬ人も

2011(平成23)年8月をめどにした避難所の閉鎖に伴い、被災者の応急仮設住宅への移行が進められた。津波によって住宅が損壊し、住居を失った人が入居の対象となった。

仮設住宅建設に関しては、岩手県が主体となり、一般社団法人プレハブ建築協会と調整を図って建設を進めた。4月には吉里吉里中学校のグラウンドに町内初の仮設住宅が完成。その後、町内各地区で建設が進められ、12(同24)年7月時点で、2106戸の仮設住宅が建設され、4600人余りの町民が入居した。

岩手県では以前から「応急仮設住宅建設可能用地リスト」が作成されていたが、候補地が被災しているケースも見られ、活用できなかった。そのため各市町村職員と連携し、用地の検討から始めなければならない状況だった。大槌町では、町民への意向調査をはじめ、仮設団地となり得る土地の検討や用地交渉、入居に関する手続きや振り分けなどを行った。小さな子どもがいる世帯、身体障害者がいる世帯などの優先枠と、一般の公募枠でバランスを取り、抽選などの方法を取りながら入居の管理を進めた。

町民への意向調査を行う中で、課題が出てきた。仮設住宅を建てる土地は、浸水しない場所であることが第一条件である。しかし、沿岸地区には平地が少なく、仮設住宅を早急に建設できる場所が限られた。赤浜地区では、地権者に地区住民が直接交渉し、9割の住民が震災前と同じ地区内で生活することができた。一方、安渡地区は、一部損壊も含め562戸分の住宅が必要となったものの、地区内に確保できた住宅は、4カ所67戸と必要戸数の12%にとどまり、町内48カ所だけでなく町外の仮設住宅への入居を余儀なくされた。

吉里吉里中学校のグラウンドに建設されるプレハブの仮設住宅

居住環境の問題多く

入居後にも問題が生じた。建て付けの悪さから起こる、雨漏りや隙間風などに対するクレームが相次いだ。寒冷地対策が不十分な所もあり、冬には水抜きをしても水道管が凍るケースもあった。大槌町の仮設住宅に居住していた元大槌町副町長の大水敏弘(おおみずとしひろ)さんは著書で次のように書いている。

〈入ってみての第一の感想は「寒い」ということだった。特に床が冷たい。真冬でもないのに、歩くと床の冷たさで足が痛くなる。体育館を歩いているかのようだ。室内には鉄骨が露出し、触れると冷たさが身に染みる。〉―『実証・仮設住宅　東日本大震災の現場から』

また、入居に伴い仮設住宅は各地区から入居した住民たちの〝寄り合い所帯〟となった。かつてのコミュニティーが解体し、高齢者の孤立も懸念された。これらの課題の解決に向け、町内外から100人単位の「仮設支援員」が入り、団地内のコミュニティー形成を支援した。各仮設団地に設置されている集会所や相談室で、お茶会を開いたり高齢の入居者を訪問したりして孤立を防いだ。さらに、大槌町では複数のNPO団体がコミュニティー支援のために立ち上がった。サロンの開設や、気軽に参加できるイベントの開催などによって、コミュニティーづくりを支援した。

仮設住宅への入居は当初、自宅を失った被災者に限定していたが、大槌町は、U・Iターン者や復興に貢献したい移住支援者にも門戸を開放しようと、県や国に要望を続け、14(同26)年4月、地方自治法で規定のある「目的外使用許可」が認められた。

仮設住宅の居住期間は原則2年とされたが、震災から約8年を経た19年2月末日現在でも242世帯が入居している。阪神・淡路大震災の仮設住宅解消は5年後だった。

■ 表6-4　町内の応急仮設住宅の入居状況

区分	2013年5月31日時点（入居者数最多）	2015年3月30日時点
住宅戸数	2,106戸	2,100戸
入居戸数	2,057戸	1,767戸
入居世帯数	1,867世帯	1,607世帯
入居者数	4,610人	3,564人
入居率	97.6%	84.1%

Interview

普通の生活を取り戻すため進むしかなかった

当時・大槌町地域整備課　課長
土橋(どばし)　清一(せいいち)さん

震災当時は技術職の経験者として応急対応をしていました。仮設住宅に関しては、町内の地権者を訪ねて用地交渉をしました。

お盆前には避難所から個々の住まいへ移動することが町民や職員の願いであり、目標でした。仮設住宅建設に適した土地を見つけると、近所の方に地主を聞き、その足で地主のところへ交渉しに行き、承諾を頂くことが多かったです。皆さん、とても協力的でした。テレビで土地を探し歩いている様子が放送された時には、大槌に土地を持つ全国の人たちから「土地を提供したい」とご連絡をしていただき、そのお気持ちが本当にありがたかったです。地主の約8割である108人と交渉し、ほぼ承諾を得ることができました。

業務に関してつらさや苦しさは感じなかったです。やるしかない、普通の生活を取り戻せるように、進むしかない。そのことしか頭になかった。周りからは「だいぶ疲れた顔をしている」とよく言われましたが、自分では気付かないものですね。

災害公営住宅

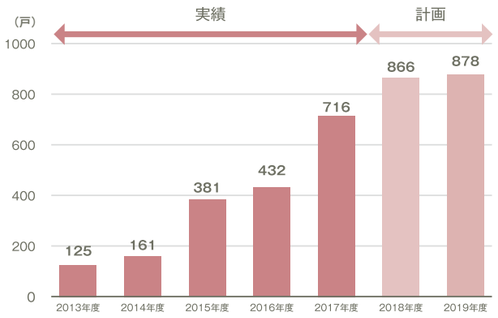
大ケ口地区に立ち並ぶ災害公営住宅の全景

7割の家屋に被害

大槌町の家屋被害は、全壊・半壊、一部損壊を合わせると、4375棟だった。この数は全家屋のほぼ7割に上る。この被害を受け、町と岩手県は被災住民の恒久的な住宅を確保するために災害公営住宅の建設を進めることとなった。災害公営住宅は、被災して住宅を失い、自ら再建することが困難な町民に対し、安定した生活を送ってもらうための公営住宅である。

調査で計画戸数調整

2012(平成24)年1月に、土地利用計画策定の基礎資料とするため、震災後初めてとなる、今後の住まいに関する意向確認調査を実施した。自力再建、高台への移転、災害公営住宅への入居、町外への転出などの希望を把握した。この調査を基に、1035戸の整備目標を立てた。12年12月から翌年3月にかけて再度意向調査を実施し、14(同26)年12月から翌年3月には「仮申し込み」を受け付けた。仮申し込みでは団地を決定し、「本申し込み」で宅地や住戸を決定する流れとした。本申し込みは供用開始の半年から1年前に実施され、仮申し込みで事前登録を行った世帯が優先されることとした。その後も仮申し込みと意向調査を実施し、計画戸数は当初の1035戸から878戸まで削減した。



■ 図6-1　災害公営住宅の整備戸数

18(同30)年10月時点での整備完成戸数は797戸となっており、19年度までに全計画戸数の完成を目指している。

検討委員会の開催

12年8月、町の災害公営住宅の整備計画について総合的に検討を行うため、学識経験者、町議会議員、社会福祉協議会、森林組合、建築士、弁護士、UR都市機構、民生委員、岩手県、大槌町で構成される「大槌町災害公営住宅整備計画検討委員会」が設置された。

同委員会は同月から翌年3月まで計6回開催され、家賃や支援制度、払い下げ価格、供給計画とスケジュール、入居優先基準、入居要件と入居スケジュールなどについて協議。大槌町災害公営住宅整備計画を策定した。

同委員会内には、デザイン部会も設けられ、「大槌町災害公営住宅設計ガイドライン」が策定された。このガイドラインは、全戸バリアフリー設計などとする「大槌町災害公営住宅の基本整備方針」に基づき、建設される戸建て、長屋、集合の各タイプの配置、建物、外構などの計画・設計の参考としてまとめられた。

大ケ口が町内初

大ケ口災害公営住宅は町が建設する災害公営住宅としては第1号となり、15(同27)年8月30日から入居が開始された。同住宅は地元産木材を活用し、周辺との調和を意識した低層の和風建築。車いすの使用や高齢者に配慮したバリアフリー設計で、集会所やベンチが設置された広場、大槌町の水資源を生かした井戸を配するなど、随所に工夫が施された。

16(同28)年5月には、大ケ口一丁目町営住宅の自治会設立総会が開かれ、ごみ集積場の清掃、団地内の草刈り、盆踊りや新年会の開催などを決めた。各仮設住宅から転居してきた住民らが集まる機会を増やして交流を深め、自治会設立に向け、気運を高めた結果だ。災害公営住宅の入居者は、発災直後の避難所とその後の仮設住宅を経て、生活環境と人間関係が二度、分断されている。コミュニティーの再構築は、非常時から平時への移行期における課題の一つである。

地元産の木材を使った温かみのあるデザインの大ケ口災害公営住宅

Interview

震災から8年
独居高齢者が心配

大槌町環境整備課　技師
(東京都武蔵野市から派遣)
伊藤(いとう) 聡(さとし)さん

災害公営住宅は、単身世帯の入居を見込んで1DKの間取りの部屋を用意しましたが、あまり人気がありませんでした。町外に住む家族や親戚が泊まることができるようにと、最低でも2DKの間取りを望む人が多く、現在は1DKの空き部屋が増えています。また、ファミリー層は長屋タイプよりも、戸建てタイプの意向が強い傾向があります。そのため現在、町が建設する災害公営住宅については、長屋は2DK、戸建ては3DKとしています。

管理上、家賃制度が複雑であるため、町民に対してどのように制度を把握していただくかが課題でした。2019(平成31)年度以降、家賃の減免制度が終わるため、家賃が高くなる住民の方もいるでしょう。

震災から8年が経過し、入居時は元気でしたが、入居後亡くなった高齢の方もいました。独り身で家族や親族がいない方もおり、死亡届の作成に苦慮することがあります。このようなケースは今後も増えると予想されます。

水産業

2012年9月、新おおつち漁協が発足して初めて定置網の水揚げがあった

被害額は51億円超

震災は町の主要産業である水産業に深刻なダメージを与え、大槌と吉里吉里の両漁港、魚市場や養殖施設、漁船などが大きな被害を受けた。被害総額は51億2792万円に上る。

大槌漁港と吉里吉里漁港は震災後、防潮堤や水門の復旧整備工事を行い、魚市場は2011(平成23)年11月に再開された。大槌町に限らず、三陸沿岸の復旧対応で漁業者に対し相対的に優遇された施策が集中的に投下されたことは、特色的だった。しかし、漁船は672隻の被害に対して、計画数の100%である237隻の整備にとどまり、漁業者数そのものが激減した。その要因の一つは、大槌町漁業協同組合が震災前に5億円の負債を抱えていた上に、震災被害で特別損失が発生し財務状況が悪化した結果、自主解散したことである。新おおつち漁業協同組合が12(同24)年3月1日に発足したものの、組合員数は震災前の11年3月1日時点では859人だったのに対し、震災後の18(同30)年3月31日時点では259人と、3分の1に減った。これは、震災前に漁業権のみ保有し実質的な漁を行っていなかった人たちの整理も兼ねた結果である。養殖施設は540カ所の被害に対して、整備計画数の100%である580カ所が復旧し、微増している。

水産加工業者は震災前の11年3月1日時点で18社だったのに対し、震災後の18年3月31日時点では、新規立地業者を含み震災前を超える20社が営業している。

2018年3月31日時点での町内の水産加工業者

ナカショク、伊藤商店、浦田商店、ゼネラルオイスター、平庄、小豆嶋漁業、及順商店、たかのり海産、六串商店、あさひ堂、石山水産、小野食品、壮関、中里商店、越田鮮魚店、芳賀鮮魚店、魚よし、タイヨー、ひょうたん島苫屋、河合商店

民間支援で漁船復興

新しい定置網漁船瀬谷丸(19トン)は、町の水産業を支える定置網に必要な漁船で、横浜市瀬谷区の住民らの募金活動により3625万円が寄せられ、建造費の一部に充てられた。進水式は13(同25)年6月15日、大槌漁港で行われた。瀬谷区の住民とは、区内七つの小学校でこの漁船が水揚げしたサケを給食に提供するなど、現在も復興支援目的の交流が行われている。また、新定置網漁船第一久美愛丸は、公益財団法人国際開発救援財団(FIDR、ファイダー)からの支援で建造され、13年8月23日に大槌漁港で進水式が行われた。

今後の水産業

震災後、漁業生産の一定量の回復は見られるものの、水産業を取り巻く環境は厳しさを増している。豊かな漁場に恵まれた三陸沿岸も、近年は温暖化の影響などで海が「やせて」きている現状がある。例えば、夏以降に海水温が下がらないなどの原因で、サンマやサケが接岸せずに不漁傾向が続く。17(同29)年度のサケの水揚げ量は約180トンで、震災前の10(同22)年度の2割にも満たなかった。

養殖を含む沿岸漁業は単に生業を支えるだけでなく、漁場の管理や環境保全活動、おすそ分け文化に貢献するほか、漁港周辺を祭りやイベント会場で活用するなど、地域活動を支える社会基盤としての役割も大きい。

町は地方創生事業の一環として、生産や養殖、加工、販売を一体的に進める「六次産業」的な施設の建設や、水産物や製品に高い付加価値を付ける方策を進めている。生産量自体は減少しているが、漁業が果たす機能を廃れさせないために、漁業者と地域の理想的なあり方について官民挙げて模索が続く。

■ 表6-5　水産関係被害

区分	被害額(千円)	被害数
被害額合計	5,127,927	—
水産施設	1,177,644	6カ所
漁船	2,204,486	672隻
漁具(定置網)	874,460	3カ所
養殖施設	543,859	540カ所
水産物	327,478	1,876t

2013年6月15日、晴れて進水した瀬谷丸

Interview

悲観せず販売促進に尽力

越田鮮魚店　代表　越田(こした)　俊喜(としき)さん

越田鮮魚店は、1978(昭和53)年に開業した鮮魚店です。震災で安渡の店舗が流失しました。その後、金沢地区の一軒家を借りて、沢の水を利用して水産物の加工と販売を再開しました。その時は、「山の中の魚屋さん」と呼ばれていましたね。安渡と金沢は、車で30分ぐらいかかるけど、海と山がある大槌ならではの特徴だし、これをもっとPRしてもいいと思う。2016(平成28)年7月に現在の安渡の魚市場の近くに本格再建しました。

私は、以前は別の加工会社に勤めていましたが、震災を機に商品の需要も増え、商売の付き合いも広がりました。家族総出で対応に当たらないとお店が回らないこともあり、両親が営んでいた店で一緒に働くことにしました。あの時ほど、家族の力強さを感じたことはない。震災後は、特に以前はよく獲れていたサケなど、時季のものが当てにならない状況だけど、悲観することなく、三陸ならではのもので新商品開発に挑戦し、インターネット販売にも力を入れていきたいです。

農林業

原発事故被害から復旧した、大槌町の特産品である原木シイタケのほだ木（2019年4月撮影）

農地15ヘクタールに被害

大槌町では、水田と畑を合わせて15ヘクタールが津波被害を受け、災害査定が行われた。復旧対応で人員が不足している町役場に代わり、県職員や岩手県土地改良事業団体連合会、岩手県土地改良設計協会などの専門技術者で構成されている「農地・農業用施設災害復旧支援隊（通称NSS）」が災害査定を行った。その後、農地の復旧や除塩が行われた。

避難路となった林道

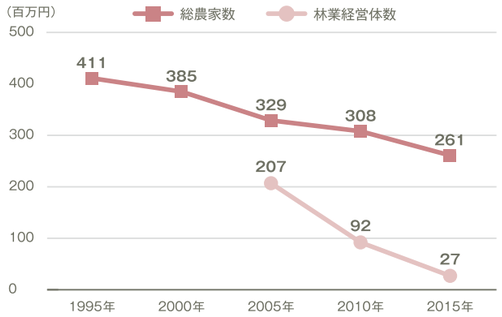
大槌町では、6路線16カ所の林道に被害があった。そのうち3路線（古廟伸松線・吉里吉里線・五本松峠線）は、国の災害査定を受けた後、復旧工事を行った。『東日本大震災林道の被害と復旧の記録』（発行・岩手県農林水産部森林保全課）によると、釜石市栗林町と小鎚地区を連絡する林道である五本松峠線は、小鎚地区から遠野市および釜石市方面への避難路として機能した。また、小鎚地区から城山公園を経て大槌地区に連絡する城山1号・2号線は、中央公民館付近まで及んだ火災を逃れて小鎚地区や金沢地区へ移動する人々の2次避難路となった。さらに、国道45号のがれきが撤去されるまでの間、中央公民館に設置された災害対策本部につながる唯一の道路として活用された。

■ 表6-6　農林関係被害

区分	被害額（千円）	被害場所
被害額合計	881,741	—
水田	424,000	10ha
畑	175,000	5ha
用水路	4,000	20カ所
道路	7,000	20カ所
林野	225,000	301ha
林道	46,741	6路線

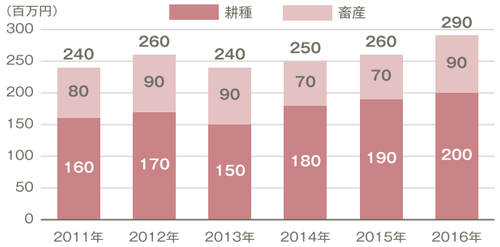
経営者は減少傾向

町内の農家数、林業経営体数は減少傾向にある。2015（平成27）年における農家数は1995（同7）年と比較して150戸減少、林業経営体数は2005（同17）年と比較して180戸減少している（図6-2）。大槌町内の16（同28）年の農業産出額は、11（同23）年に比べ5千万円増加している（図6-3）。



■ 図6-2　農家数・林業経営体数の推移

農林水産省「農林業センサス」を基に作成
※各年2月1日現在



■ 図6-3　大槌町農業産出額の推移

平成25年までは東北農政局「被災市町村別農業産出額」、平成26年以降は農林水産省「市町村別農業産出額（推計）」を基に作成
※合計と内訳が一致しないのは、表示単位未満を四捨五入しているためである

農業拠点の開設

16年1月15日、沢山地区に「大槌町沿岸営農拠点センター」がオープンした。復興交付金を活用して町役場が建設し、花巻農業協同組合が管理運営を担う、町内の産地直売所の拠点施設である。センター1階には農産物直売所、レストラン、JAいわて花巻大槌支店、2階には研修室を配置。農作物の卸しから、販売、金融などの農業に関する相談までを1カ所で行うことができる施設となっている。

シイタケに原発被害

東日本大震災の二次災害である福島第一原子力発電所の事故は、大槌町の農作物にも影響をもたらした。特産品である露地栽培の原木シイタケから基準値を超える放射性セシウムが検出され、12（同24）年4月25日、国による出荷制限指示が出された。また、この年に生産された干しシイタケは、同年5月23日に県による出荷自粛要請が行われた。牧草についても町の南部地域に対し、県による出荷自粛要請が行われた。

15年4月10日から、露地栽培の原木シイタケに関しては、生産物の安全が確認できた生産者のみ出荷できる一部解除が行われた。18（同30）年9月18日現在、15軒の生産者が出荷解除の対象となった。

Interview

規制値以下の環境探し
原木シイタケ栽培を再開

原木シイタケ生産者
兼澤平也さん

震災があって、放射線の影響で原木シイタケが全部出荷停止になった。採っていたものも、全部廃棄。もうショックよ。だって作ったものを売れないんだもん。栽培をやめた人もいっぱいいた。それから不安なまま1年間過ごした。栽培できないなら、われわれはこれからどうやって生活するのって。

それで当時、県の職員と、国で決めた放射線の規制値以下の木を使って栽培できる場所を探したら、たまたま金沢地区に場所があった。その山を買って、また栽培を始めることにした。

2013（平成25）年に植菌を再開したけど、やってすぐ採れるわけじゃない。環境が整って安定して採れるまで、6年かかった。だから、ようやっと最近、完成したのよ。でも、自分が歳を取ってしまった。これから10年はシイタケが採れる。それまで健康で働ければいいですけど、そうでない場合は、全部捨てなきゃいけない。今から子どもに任せるのも厳しいから、80歳まではやらなきゃない。

商工業

被災したシーサイドタウンマストのリニューアルオープン日は多くの人でにぎわった

被害額、140億円超

大槌町の商工業は震災で建物や設備に大きな被害を受け、商業関係と工業関係の被害額合計は140億円を超えた（表6-7）。

商業の状況を見ると、震災後の2012（平成24）年は、07（同19）年と比較して事業所数、従業員数が8割以上減少。年間商品販売額も8割近く減っている（図6-4）。

工業については、11（同23）年は、10（同22）年と比較して事業所数が6割以上、従業員数は7割近く減少。その後は徐々に増加し、15（同27）年の事業所数は24カ所、従業員数は555人。製造品出荷額は、前年に比べて4億9500万円の増加となった（図6-5）。

人口減続き、難局も

震災前の大槌商工会の会員は442事業所であり、その8割に当たる387事業所が被災した。

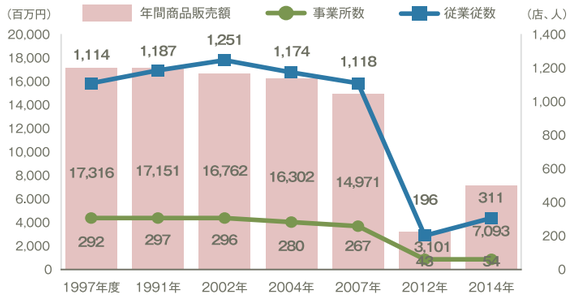
町中心部の大町にあった同商工会の建物は、津波により全壊した。11（同23）年3月28日から、大ケ口地区で被災を免れた場所にあった商工会長の菊池良一さんの自宅を間借りして業務を再開。商工会員のデータは津波によって流失したが、岩手県商工会連合会が所有していたデータを活用し、会員の安否情報の確認と事業再開の意向確認作業を実施した。

それから1年間、同商工会では、①店舗再建支援②金融支援③商工業復興ビジョン策定――の三つが事業の柱となった。①は、会員に対し、独立行政法人中小企業基盤整備機構（中小機構）による仮設店舗の入居支援や、グループ補助金活用事業者支援を行った。②は日本政策金融国庫融資補助や二重ローン対策などを行った。③は大槌駅前から城山までのエリアに図書館や公共・公益施設、商業施設が配置された計画となったが、その後の復興まちづくりで、御社地に町文化交流センターなどが建設されたため、実現には至らなかった。

震災直後から同商工会に勤務していた若生剛さんは、今後について、「特に三陸自動車道が完成すると、商業を中心に人の流れが変わり、購買形態の変化が予想される。販路開拓やイベント開催などを実施してPRを続けていくことも重要だ」と話す。

「マスト」再開

大槌商業開発株式会社が運営する「シーサイドタウンマスト」は、1993（同5）年10月に小鎚地区にオープンした複合型のショッピングモールである。津波により大きな被害を受け休止したが、リニューアルして、11年12月に営業を再開した。岩手県中小企業等復旧・復興支援事業費補助金（通称グループ補助金）の1次公募で採択され、比較的早期の再開にこぎつけた。

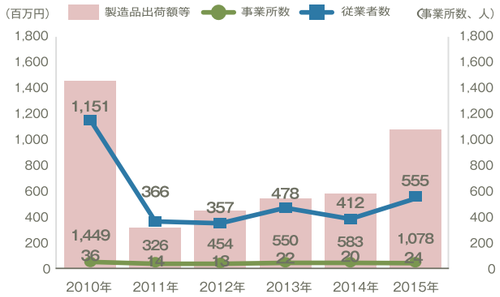


■ 図6-4　商業の年間商業販売額・事業数・従業員数の推移　震災前後の商業の比較

■ 表6-7　商工関係被害

区分	商業関係	工業関係
被害額合計（千円）	14,039,490	
土地（千円）	—	—
建物（千円）	4,405,350	2,102,300
什器備品・機械設備等（千円）	1,793,610	3,643,390
商品・原材料製品等（千円）	995,290	1,099,550
小計（千円）	7,194,250	6,845,240

※2012年2月1日現在



■ 図6-5　工業の製造品出荷額等・事業数・従業員数の推移　震災前後の工業の比較

Interview

若い世代の新しい挑戦に期待

大槌商工会　会長
菊池良一さん

2018（平成30）年9月の町の広報誌に、町民アンケートの結果が掲載されていました。町への定住意向について、60％が「このまま住み続けたい」、10％が「町外に住みたい」、約25％が「分からない」という結果でした。町外への移住を検討している人が予想以上に多く、さらに減ることが予想されます。

工業は、復興事業により建設業を中心に復興してきましたが、商業の復興はまだまだという印象です。特に、中心街の町方に食料品や日用品の店が少ない印象があります。震災前は歩いて何でも買い物をすることができましたが、今は車がないと買い物ができません。町の中心に人を増やすためには、買い物環境を改善する必要があります。高齢者が多くなることを考えるとなおさらです。

後継者の問題もあります。私が知る中で末広町商店街で後継者がいるのは、菓子店のエルマーノさん1軒のみ。若い世代には、新しい事業にどんどんチャレンジしてほしいと思っています。

仮設商店街・事業所

福幸きらり商店街オープンの様子

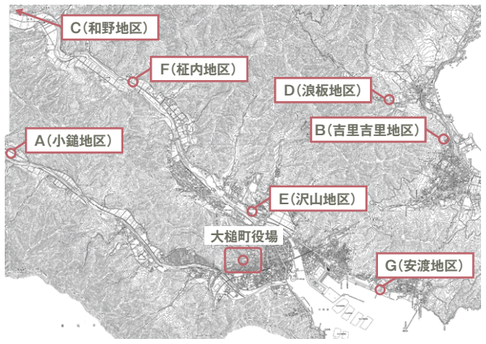
事業者への支援

被災した店舗や事業所の再建を促すため、国は「仮設施設整備事業」を展開した。同事業は、市町村からの要請に基づき、中小企業基盤整備機構（中小機構）が仮設施設（店舗・事務所・工場など）を整備し、市町村を通じて事業者に貸与するものである。大槌町でも同事業が活用され、仮設商店街と事業所の建設が行われた。

建設までの流れは次の通り。2011（平成23）年4月23日に中小機構が大槌商工会を訪問し仮設店舗制度の概要を説明した後、5月6日に第1回の中小機構仮設店舗説明会が開催された。会場の役場仮庁舎会議室は参加者120人であふれた。この場で「中小機構仮設店舗ニーズ調査票」が配布された。同調査で、希望する地域や広さ、階数などを把握。出店を希望する事業者の数は109だった（表6-8）。

7月以降、仮設商店街・事業所の建設に向けた動きが本格化した。建設着工までは、被災を免れた用地の確保が課題だった。仮設住宅団地から比較的近い内陸寄りの遊休地などの地権者に交渉。次の7カ所の仮設店舗・事業所の用地を確保し、12月までに全てがオープンした。

わらびっこ商店街（図6-6A）▽ニコニコ出会いの広場（同図B）▽恵水（えみず）講スマイル商店街（同図C）▽浪板真心SHOP（同図D）▽大槌北小福幸きらり商店街（同図E）▽大槌町産業復興団地（同図F）▽大槌町漁港地区仮設施設（同図G）。



■ 図6-6　仮設商店街・事業所の位置

開設から閉鎖まで

11（同23）年10月以降、各仮設商店街・事業所の建設が急ピッチで進んだ。最も早い完成は、吉里吉里地区のニコニコ出会いの広場（3区画）と浪板地区の浪板真心SHOP（2区画）で10月3日。同年12月までに全ての仮設商店街・事業所が完成した。

大槌北小福幸きらり商店街は、44区画の町内最大の仮設商店街。旧大槌北小学校のグラウンドに造成された敷地は、駐車場が中央部にあり、その周りを施設がコの字型に取り囲むように配置された。12月にはオープニングイベントが開催され、大勢の人が集まって抽選会や郷土芸能の披露、餅まきなどの催しが行われた。

その後、大槌町産業復興団地（柾内地区）と大槌町漁港地区仮設施設（安渡地区）は、16（同28）年8月から9月に、最も早い撤去期限を迎えた。その他の仮設商店街は、18（同30）年の9月が撤去期限となった。ただし、大槌北小福幸きらり商店街については、町の復興事業や業者手配の遅れなどによって、撤去期限内に再建が困難な事業者に限り、20（令和2）年3月まで延長されることとなった（表6-9）。

■ 表6-8　仮設店舗・事業所事業所までの開設の流れ

月日		内容
2011年	4月23日	中小機構が大槌町役場に来訪し、仮設店舗制度の概要を説明
	5月6日	大槌商工会主導で中小機構仮設店舗説明会を開催。出席者約120人
	5月6日～5月19日	中小機構仮設店舗ニーズ調査票のとりまとめ。希望数109店
	5月20日	中小機構仮設店舗ニーズ調査票を大槌町役場に提出
	7月13日	第2回中小機構仮設店舗説明会を開催。入居事業者への説明会
	7月以降	仮設店舗建設へ向けた動きが本格化（用地交渉と取得、店舗の配置等）
	10月～12月	各仮設店舗・事業所が随時完成

大槌商工会提供資料を基に作成

■ 表6-9　仮設商店街・事業所一覧

施設名称	施設用途	区画数	完成日	撤去期間
わらびっこ商店街	店舗、事務所	10	2011年11月9日	2018年9月
ニコニコ出会いの広場	店舗、事務所	3	2011年10月3日	2018年10月
恵水講スマイル商店街	店舗、倉庫	4	2011年11月7日	2018年10月（2018年4月に撤去済み）
浪板真心SHOP	店舗	2	2011年10月3日	2018年10月
大槌北小福幸きらり商店街	店舗、倉庫	43	2011年11月25日	2020年3月（許可された事業者に限り、2018年9月から延長）
大槌町産業復興団地	店舗、事務所、工場	19	2011年11月14日	2016年8月（2017年2月撤去済み）
大槌町漁港地区仮設施設	工場	8	2011年12月26日	2016年9月（2016年2月撤去済み）

中小機構提供資料を基に作成

Interview

仮設商店街が子どもたちの居場所に

岩喜酒店　店主
岩間（いわま）　充（みつる）さん

恵水講スマイル商店街に約5年半入居していました。恵水講スマイル商店街には、私たちの店のほかに、鮮魚店と美容室、飲食店がありました。私たちの店と鮮魚店は本設再建ができましたが、美容室と飲食店はまだできていません。仮設商店街の近くには、町で最も多くの被災者が入居する仮設住宅団地があります。震災前は、町方に住んでいた方も多かったので、顔見知りも多く安心しました。近くの仮設住宅に住む子どもたちが、仮設の部屋が狭いために、宿題を持ち込んで利用することもありましたね。そのために、駄菓子を置いたりもしました。

子どもがいる世帯の自宅再建や災害公営住宅への入居が進んで、仮設住宅を離れるようになり、子どもの利用もどんどん少なくなっていきました。町内には、未だに本設の店を再建できない事業者もいます。再建しようとしても土地がなかったり、資金が不足したりしている人もいます。その人たちにも早く再建してほしいと思っています。

郷土芸能・祭り

2011年、被災後も途切れることなく行われた大槌まつり

震災の年、祭り敢行

町内には21の郷土芸能団体がある。多くの団体は津波で道具や衣装、山車などが流失、さらに津波の後の火災で拠点が焼けた所もあった。

「大槌まつり」は毎年9月、町内にある二つの神社（大槌稲荷神社・小鎚神社）の例大祭を行うものである。メインの神輿渡御行列では、神輿を中心に大神楽、鹿子踊、虎舞などの郷土芸能団体のほか、各地区の手踊り団体などが連なって町中に繰り出す。

小鎚神社の宮司松橋知之（まつはしともゆき）さんは、「震災直後、大槌まつりは10年くらい開催できないのではないかと思っていた。震災から2カ月後の5月、神輿を担ぐ人たちでつくる『社人会』の関係者が訪れた時に、境内の中だけでも神輿を出したいと私が話したところ、その方に『宮司がその気なら、俺がなんとかする』と言われ、祭り実行に向けて動き出した」と振り返る。他の郷土芸能団体からも祭りに参加したいとの要望があり、9月24日と25日、避難所になっていた大槌稲荷神社は祭りを取りやめたが、小鎚神社のみで開催した。小鎚神社祭典には町内11の郷土芸能団体が参加し、境内の中だけで行われた。松橋さんは「祭りの実行については反対の声もあったが、圧倒的に『やってほしい』という声が多かった。皆さんが涙を流しながら神輿を担いだり、踊ったりしていたのが印象的だった」と語る。

2011年の大槌まつりで披露された郷土芸能の鹿子踊

2012（平成24）年からは、例年通り大槌稲荷神社と小鎚神社で開催されている。18（同30）年には、桜木町の手踊り団体が復活し、震災前と同数の21団体が参加した。また、漁の安全と大漁を祈願して大槌稲荷神社で古くから行われている「引き船」が8年ぶりに復活した。吉里吉里地区の「吉里吉里まつり」も震災の年の8月に敢行された。

蓬莱島の復興

大槌湾に浮かぶ蓬莱島は、赤浜地区から最も近い小島であり、震災後の13（同25）年に町の名勝第1号に指定された。作家の故井上ひさしさん原作の人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルとされる。蓬莱島弁天神社は「弁天様」とあがめられる弁財天像を祀り、赤い灯台と共に、漁の安全と豊漁を祈願する、町のシンボルだった。しかし、震災で灯台や神社の社殿、鳥居が崩壊するなどの大きな被害を受けた。

赤浜地区に住む岡本大作（おかもとだいさく）さんは、震災から2カ月後、初めて蓬莱島に船で渡った。鳥居などは流失していたが、弁天様は傷つきながらも社殿の中に残っていた。岡本さんら地元の有志が集まり、蓬莱島を復興させるため、13年5月に「ひょうたん島復興プロジェクト」を立ち上げ、全国から支援金を募った。集まった多くの支援金は、弁天様や鳥居、参道の修復に活用された。弁天様は仏師が約8カ月かけて修復し、14（同26）年8月に町に戻った。16（同28）年4月には、震災で休止していた「ひょうたん島まつり」が復活。改修を終えた社殿に弁財天を再び安置する遷座祭が行われた。また、12（同24）年には海上保安庁が灯台を、14（同26）年には岩手県が赤浜地区から蓬莱島へ歩いて渡ることができる防波堤をそれぞれ再建した。

岡本さんは「蓬莱島は大槌の象徴のような場所なので、再興がとてもうれしい。ご恩を忘れず、皆さんの支援のお陰で祭りを再開できたということを伝えていきたい」と話す。

灯台や防波堤の整備、弁天様の修復を経て、今も町のシンボルであり続ける蓬莱島（2017年撮影）

Interview

自分にできることは「神主であること」

小鎚神社　宮司　松橋知之（まつはしともゆき）さん

震災の翌朝、避難していた中央公民館から小鎚神社を見下ろすと、火事のため煙で何も見えず、神社は燃えてしまったのだと思いました。しかし、3月14日の午前中、神社が無事であるという一報が入り、近所の方と一緒に神社に戻ることを決めました。山を越え、神社が見えた時はとてもうれしかったです。神社は奇跡的に津波の被害も火事の被害も免れました。後から聞いた話ですが、私が中央公民館に行った後も5人ほど神社に残っており、沢水を使って消火活動をしたそうです。最後は祈ったとも聞いています。

その後、何もなくなった町で自分に何ができるかと考えたとき、神主の仕事しかないと思いました。4月1日に「月次祭」を行い、震災後初めて装束に袖を通したことが印象に残っています。

大槌まつりは続けていくことに価値があると思います。郷土芸能が継承されていくことで、地域にもつながりが生まれると感じています。

応援職員の活動

2012年9月28日に赴任した応援職員への辞令交付式

業務増大で職員確保

震災で多くの町職員が犠牲となり、被災した町の復旧業務は思うように進まなかった。当初は岩手県沿岸広域振興局や同県市町村会が調整を図り、3～4日のローテーションで県内各自治体から職員が派遣され、職員数が不足している部署の業務を補った。4月からは被災者の対応や復旧業務に加え、通常業務も再開したため業務量が増大。長期間常駐できる応援職員の確保が必要になった。

職員派遣は、総務省を通して全国市長会や全国町村会、提携関係にある自治体などに要請。これに応じた自治体とそれぞれ職員派遣協定を結ぶ形で派遣を実現した。現在でも職員が不足しているなどの事情から派遣要請をしているが、全国自治体での慢性的な人材不足や近年の自然災害の多発もあり確保が難しい状況にある。

大津波で役場庁舎が被災し、あらゆる文書が流失したため、派遣自治体の文書や事務マニュアルを参考に業務の流れを整理した。また、地域整備課の正職員9人のうち7人が犠牲になり、復旧業務のノウハウを持つ職員が不在だったため、同業務を担う土木系職員の確保が急務となった。2013(平成25)年度からは、専門的な知識や技能を持つ人材の確保を目的に、最長5年の任期で任期付職員の直接雇用も始めた。

応援職員の役割は多岐にわたった。一方、現場で求められる技能・知識と派遣職員の専門分野がうまくマッチしないケースもあった。応援職員は環境も風土も異なる大槌で、被災者の抱える深刻な問題に連日向き合って苦悩や葛藤に囚われ、心身の不調を訴えることも少なくなかった。「岩手こころのケアセンター」は12(同24)年から役場内に定期的に相談会場を設け、職員のケアを行っている。

段階で異なる理想像

復興の各段階で求められる職員の技能は自ずと異なる。緊急対応期は、あらゆる行政業務の能力を兼ね備えるオールラウンダー型の職員が理想的なのに対し、復興事業が本格化してくる時期では、各事業に対応できる専門技能を持った職員が求められる。

プロパー(正)職員と応援職員が大規模災害の中、手探りで協力しながら行政運営に当たるという取り組みを分かち合ったことで、新たな縁も生まれている。現役と元の応援職員らによって「応援職員の会」が13(同25)年3月に設立された。同会は応援職員が派遣元に帰任しても、大槌町職員との交流の輪を広げながら町の復興を支援する目的で活動。派遣元の自治体で大槌町特産品の販売会を開いたり、末広町商店街の「よ市」など町内で行われる各種イベントに参加したりしている。

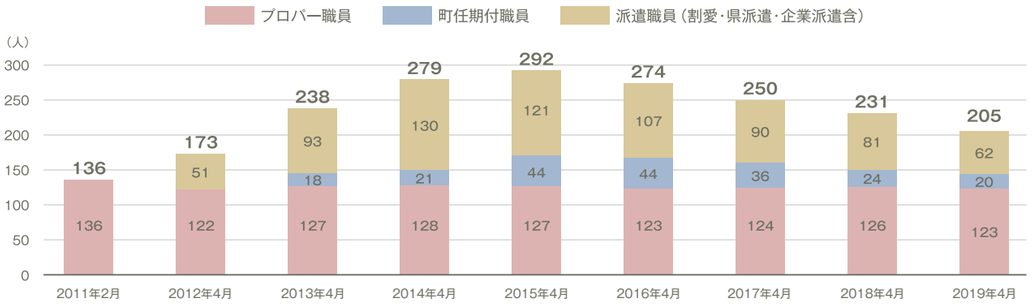
民間からの職員派遣

町は自治体からだけではなく、民間企業などからも応援職員を受け入れた。採用した企業は時系列順に▽新日鉄住金ソリューションズ株式会社(当時)▽日本ユニシス株式会社▽鹿島建設株式会社▽東京大学(一企業として採用)▽独立行政法人都市再生機構――であり、各企業から1～2人を任期付きおよび派遣職員として受け入れた。システム構築や都市計画など、各企業の専門的な知識やノウハウを活用し、町の復旧・復興を支えた。

特に、情報システムに関する専門知識を持つ日本ユニシスの派遣職員は、震災後に混沌としていた情報の整理に大きく貢献した。県の「被災者支援システム」を活用して被災者情報の入力・管理を行い、復興に向けて増えていった各種補助金の支給手続きの効率化につながった。

応援職員の派遣元の自治体の一つである川越市で行われた、大槌町の物産販売会(小林武さん提供)

2013年3月、「応援職員の会」の設立総会が行われた



■ 図6-7　大槌町職員数の推移

Interview

大槌をまるごと好きになった1年間

現・埼玉県川越市都市計画部
都市計画課　課長

小林（こばやし） 武（たけし）さん

震災直後に宮城県東松島市に保健師と共に行く機会があって、町が壊滅している状況を見て衝撃を受けました。次の年の1月に川越市役所の上司から区画整理経験者の被災地派遣の打診があった時、すかさず応じました。そしてその年の4月から1年間、大槌町の復興担当として、新設された都市整備課で町方地区と沢山地区を担当する班長をしていました。

当初のスケジュールは「9月までに都市計画を決定して年度内に事業認可を取る」。合意形成もあるし、通常の手順でいけば2年はかかる。経験のないタイトさに、不安な気持ちでスタートしました。用地交渉の相手が被災者だというところが難しかった。一日も早く復興計画を立て、将来への道筋を示していくのが必要だと思いました。仮設団地を毎日回ったり、遠方に避難している方のために各地で説明会を開いたりしました。遅れも出ましたが、曖昧な言い方は避けました。

川越に戻ってきてからも「うちからできる支援はないか」と考えて、ワカメとか新巻きザケとかを大槌町の事業者から買い付けし、川越で大槌町の物産展を開いています。当時の派遣仲間や川越に住む大槌町出身の方たちと集まる場ができて、みんなで大槌町の話ができるのが楽しくて。こういった出会いがとてもうれしいです。大槌町で過ごした1年でたくさんの方と出会い、大槌町が大好きになりました。なかなか忙しくて行けないのですが、行くたびに変化していく町を見るとうれしいです。

私は、大槌と川越の絆は永遠だと思っています。みんな思いはずっと続いているし、ずっと応援しています。

Interview

大槌で出会った人たちはこれからも大切な友人

現・二戸市総務部　総務課　主任

近藤（こんどう） 歩美（あゆみ）さん

震災の時は二戸市役所の子育て支援グループにいました。大槌に派遣職員として入ったのは、震災から約1年後の4月。震災直後に「何か支援したい」と思い、派遣職員の募集を見ていたのですが、自分にできる仕事がなくて。1年後にやっと保育所関係の仕事の募集を見つけて、「これなら自分のやってきたことが生かせる」と思い、応募しました。派遣先は福祉課で、業務は主に保育所の入所手続きや運営費の支出事務などでした。

大槌は三つの園が被災して全壊状態で、福祉課はイレギュラーな対応が続いていました。そのため、次に担当になった人が通常業務を行える環境を整えたいという思いで1年間仕事しました。被災前と同様、誰が来ても引き継げるように仕事の流れを作り、資料も残していくということが第一でしたね。

福祉課の人たちとはとても仲良くさせてもらいました。また、派遣仲間とのつながりも深くて、今も親交が続いています。みんなで大槌に集まったこともあります。交わるはずのなかった全国各地の人とつながるって、とても不思議。震災をきっかけにして得たつながりを今後も大事にしていきたいです。

どこまで行けば「復興した」と言えるのか分からないけれど、一人一人が「復興したな」と思えるまで、できることがあれば協力したいと思っています。それまで無理せず一緒にやっていきましょうと、皆さんに伝えたいです。地域のつながりを大切に、みんなでささやかな幸せをつくっていけるような町になってほしいですね。

Interview

これまでの業務経験を生かし古里の復興に向けて一歩ずつ

現・岩手県農林水産部競馬改革推進室（新庄駐在）
主任主査

佐藤（さとう） 達哉（たつや）さん

私は大槌町出身で、生まれ育った古里の復興に携わりたいと思い、震災の年の5月から約1年間、岩手県からの派遣職員として大槌町に入りました。

前半の半年間は総務課で、人手が足りていない業務があればなんでも進んで対応しました。まず5月末に秋篠宮ご夫妻が被災地のお見舞いにご来町された際には、宮内庁、県、関係市町と連携して日程や訪問先などの調整を行いました。また、被災された町民の皆さんが避難所から応急仮設住宅に移られた後は、「広報おおつち」配付の機会を通じて、要望や相談事をお聞きし、役場担当者と情報共有するよう努めました。後半の11月からは、教育部長兼教育次長を拝命し、小中一貫教育、学校再編に関する説明や学校建設場所の提案を行いました。

出身地とはいえ、町の業務は初めてのことでしたが、大切なご家族を亡くしたり、ご自宅を失ったりしながらも町民に寄り添い懸命にがんばる職員の姿に、できる限り力になりたいと思っていました。これまでの業務経験やつながりを生かし、町民、役場職員、他の自治体からの派遣職員の皆さんにご協力を頂きながら業務に取り組みました。

私は応援職員として大槌町に入った身ではありますが、役場職員の皆さんにとって、県内外から来た応援職員の方々と一緒に業務に当たることは、進め方やノウハウを吸収することができる貴重な学びの機会であり、今後の財産になっていくものと感じています。古里である大槌が、震災からの復興を成し遂げ、全国に誇れる町となることを祈念し、これからも応援していきます。

Interview

「また一緒にがんばりたい」だからここへ帰ってきた

現・大槌町都市整備課　課長

川野（かわの） 重美（しげみ）

鹿児島県南さつま市から大槌町への派遣職員第1号として、2012（平成24）年4月から1年間着任しました。当時、鹿児島県庁から被災地への職員派遣を要請する通知が来ていて「私にできることがあるなら」と手を挙げました。その後、大槌町への派遣が決定しました。

私が着任した時には、すでに復興計画が完成し、実務が動き出すところでした。主な仕事は都市計画事業の手続きや工事の進捗管理、町民の方の意向調査などです。防災集団移転促進事業では、赤浜や安渡、吉里吉里で、それぞれの移転先の用地確保に動きました。法的な手続きで反対意見が出ると労力は要りますが、それらが大事に反映されるよう計画の練り直しもしました。

1年間の派遣業務が終了して鹿児島に戻ってからも、大槌のことが気になっていて。大槌の職員も不足していて、宅地整備も終わっていない状況を知っていたので、定年後、18年4月に再び大槌に戻ってきました。自分が携わってきた計画の行方を、見届けたいなという思いですね。

最初の派遣では町づくりがメインでしたが、今回は被災した旧役場庁舎の解体作業に携わることになりました。震災遺構の役割を巡って、早い段階で町の方針が出ていたら、もう少しよい解決方法があったんじゃないかという思いはあります。解体、保存、どちらも正解。複雑な気持ちです。

災害はどこでも必ず起こる。被災した自治体の支援に行けば、いつか自分たちの有事のときに返ってくる。お互い助け合って、協力者になることが大事です。震災当時、一緒に働いてきた大槌の職員たちと、またがんばっていきます。

おおつちありがとう ロックフェスティバル

東日本大震災で大槌町を支援してくれた全国の人たちに「ありがとう」の気持ちを伝えたい。
その思いから、2012（平成24）年6月に開催された。それ以降、毎年連続で行われ、
音楽を通してたくさんの人が大槌町に集う場となっている。

Interview ｜ おおつちありがとうロックフェスティバル　元実行委員長　古舘（ふるだて） 王士（きみお）さん

2012年に開催された「おおつちありがとうロックフェスティバル」には多くの人が訪れ、熱気に包まれた

自分たちは元気だ そして、ありがとう 気持ちをフェスで伝えたかった

震災後は、暗い気持ち、悲しい気持ちが大槌に蔓延していた。避難所にいても気持ちが暗くなるばっかりだし。浪板に漁師の資材置き場が流されず残っていて、俺は仲間とそこに集まって、メッセージ性の強いロックばかり聴いていた。音楽で気持ちを紛らわすことができたし、ずいぶん癒やされた。

被災地の夜は早いんだ。停電が続いていたし、遊びに行くような場所も当然ない。仲間と話をする時間が必然的に増えていく。そんな中で、いつかフェスみたいなものをやりたいねなんて勝手に盛り上がっていた。先が見えない中で、夢とか、希望とかを持ちたいんだよね。それが、俺たちにとってはフェスの開催だった。あの当時の大槌では、自分たちは困っています、支援してくださいとか、お涙頂戴みたいなものばっかりだった。自分たちだってそういう部分はあったと思う。でも、もらうだけじゃ駄目なんだと。俺たちは自分たちで立ち上がることができる。全国の人に元気にやっているぞと、そして、支援への感謝の気持ちを伝えたいというのが「おおつちありがとうロックフェスティバル」の原点。

なんとか開催にこぎつけた第1回。いっぱいの人が来てくれて感動したよね。このフェスの大きなテーマは、大槌の人たちが感謝を伝えるにはどうすればいいのかということ。ありがとうの気持ちを伝えるための花火を上げることを考えた。そして、そのお金は大槌町民の募金で賄おうと思ったんです。被災地の人たちからお金を集めるということも非常識と言われた。ただ俺たちが望んだのは、大槌の人たちに行動してほしいということ。もらうだけじゃなく、自分たちも出しましょうと。その大人たちの背中を子どもたちが見ている。その子どもたちが未来の大槌を支えていくんです。

大槌保育園の子どもの太鼓と大槌高校の吹奏楽部が、この日のために一生懸命練習して、フェスのステージに立ってくれている。おじいちゃんたちがお酒を飲んだり、その周りで子どもたちがはしゃいでいる。ロックもあるけど、民謡もあって、フラダンスもあって、子どもたちの合唱もある。もちろん東京から来るアーティストのステージもある。そういういろいろな人たちが集まる、間口の広いものにしていきたい。

大槌は、人は少なくなってきているけど、情熱は少なくなってない。この町の未来を明るくしていきたいよね。そういう人間がいれば、この町は大丈夫だと思う。もともと郷土愛の強い町だし、あの震災をきっかけに大槌を思う気持ちはさらに強くなった。これからも新しいことをやっていきたいし、面白いことをしていきたい。真剣にふざけていきますよ。

初開催のころを懐かしみながら語る古舘さん

一頁堂書店（いちページどう）

店主はサラリーマンから転身した木村薫さん。震災後の2011（平成23）年12月22日に開業。
地元に根ざした書店にふさわしく、店頭の一番目立つ場所には地域の本が並べられている。
店名には、新しい道を歩み出した店主自身の「一頁」、そして、復興に向かう大槌町の「一頁」という意味が込められている。

Interview ｜ 一頁堂書店　店主　木村 薫（きむら かおる）さん

「お客さんが求めるものに応えていきたい」と話す店主の木村さん

自分が売りたいものよりも お客さんが欲しいもの 地元に密着したお店でありたい

震災前は化学品のメーカーで働いていました。その会社は小鎚川の河口の堤防沿いにあり、事務所の前にはアスファルトの大きな駐車場があったんです。あの日、地震の揺れが収まった後、社員は駐車場に出たんですが、地割れがすごくて、水が噴出していた。以前、義母から川から水がなくなっていたら、津波が来るからすぐ逃げろと言われたことを思い出して、近くの川を見に行ったら、水が全くなくなっていた。それでみんなですぐに避難しました。事務所は津波にのまれて跡形もなくなり、目に映る全てがなくなっていた。

親会社は大阪を拠点にしていて、関西エリアの事務所に異動したらどうだという話も頂きました。息子は春から県内大学への進学が決まっていたし、先祖のお墓もある。悩みに悩んだ結果、岩手に残ることを決めました。次に何をしようか考えている時に、本屋はどうだって声を掛けられたんです。大槌で仕事をしたいという気持ちはもちろんありました。ただ素人の自分が、災害に見舞われた町でちゃんと商売として成り立たせることができるのかという思いもありました。ショッピングセンターのシーサイドタウンマストの再開が決まり、まずは説明を聞いてみたらと説明会に誘われたんです。行ってみるとそこには本の卸しのトーハンの方も来ていて、なんだか本屋を始めるムードが出来上がっている。大規模なチェーン店の数は増えているけれど、逆に小さな本屋が新しくできるのは珍しかった。トーハンの熱心な応援もあり、本屋をやることを決断しました。

本屋を始めて7年になりますが、まだまだ自分は素人だと思っています。だから自分が売りたいものを売るというよりも、お客さんが欲しいものを会話の中で探っていく。うちのスタッフも全くの素人から始めた人ばかり。それでも毎日真剣に向き合いながら、本屋という仕事を学び続けています。こういう企画をやってみたいとかアイデアも積極的に出してくれます。お店の中に「大槌学園の棚」というコーナーを設けることもあります。高校受験の面接で、どんな本を読んだか聞かれるそうなんです。どんな本を読んだらいいかと中学生に質問された先生が、自分が良いと思った本を冊子で紹介することを考えたそうなんですが、それをうちの店で実際の本を並べてやってみたんです。この「大槌学園の棚」は、毎回趣向を変えながら継続しています。他にも大槌でやるイベントにちなんだ本をそろえてみたり、地元に密着したいという気持ちは強い。

正直、毎日のことで手いっぱいですが、将来的には本屋であると同時に、待ち合わせの場所を一頁堂にしようとか、とりあえず一頁堂に行ってみようとか、生活の一部のように人が集まる場所にしていきたいです。

大切な意味を込めた店名、「一頁堂書店」の看板

大槌陣屋（じんや）

大槌の伝統・文化を知り、大槌の魅力を再発見する活動をしている。
地区を越え、老若男女問わず町民が活動に参加する大槌陣屋は
昔ながらの子どもの遊びを楽しむイベントや大槌に詳しい町民の話を聞く会合、自然と触れ合う活動を行う。

Interview ｜ 大槌陣屋　会長　佐藤（さとう） 加奈絵（かなえ）さん

子どもたちが「陣屋」という秘密基地を作って遊んでいた昔の文化に倣い、力を合わせて陣屋を作る「陣屋まつり」（2019年4月撮影）。
前列左から3人目が佐藤さん、4人目が藤原テエ子さん

大槌の良さを再発見
震災後につながっていった
新しい〝町民の輪〟

「こんなにいいものがたくさんあるのに、どうして生かさないんだ」と、町外から来た人に言われたことがあるんです。私たちは生まれてからずっとここにいるから、大槌の良さに気付いていないんですよね。

人の話や体験を通して、大槌の良いところを知ることができる。それが「大槌陣屋」です。昔ながらの子どもの遊びをみんなで楽しむ「陣屋まつり」をはじめ、伝統芸能の「鹿子踊（ししおどり）」で使われるドロノキの植樹の知恵を学んだり、マタギの人の体験談を聞いたりして、大槌の歴史や文化に触れるんです。ちなみに、私たちは誰かの話を聞く集まりを、「きっかけ話」と呼んでいます。みんながが集まる「きっかけ」になるからね。

震災前って、小さな集まりの活動は盛んだったけど、町全体で集まって何かをするとなるとお祭りの他になかった。陣屋に各地域から人が集まって、輪が広がっていったっていうのはあると思います。

例えば、小鎚地区にお料理上手な藤原テエ子さんっていう方がいて。陣屋で郷土料理を楽しむ会を開いた時にテエ子さんのお宅にお邪魔して、昔のようにお膳でテエ子さんの手料理をいただきました。その時にテエ子さんが私の同級生のお母さんだっていうことに気付いたんです。

改めてつながるのを感じましたね。孤立していた個々のものが、震災後につながっていくような感覚です。

ボランティアの皆さんに支えてもらっていた陣屋も、住民だけでやっていくことになりました。最初は、いっぱいいっぱいですよ。「やめたい」って思ったこともあります。そんなとき、テエ子さんが「陣屋が好きで、楽しみなんだ」っていう話をしてくれたんです。「ゆっくりでいいよ、やれるときにやろう」と。それから、「陣屋は強制じゃないし、できるときにやろう！」と思えるようになりましたね。

震災から3年くらいは、なんとかがんばらなきゃっていう思いでやってこれた。でも、思うように復興しなかったり、住む場所が定まらなかったりした6年目くらいが一番つらかったです。最初はとにかく「がんばっていれば、どうにかなる」っていう希望があったんですけど、困難にぶつかり過ぎて。落胆の方が強くなるというか。

無理がたたってるんですよね。がんばり過ぎていたんだと思います。それでも、心のどこかには、「運よく生き残ったんだから、亡くなった方のためにもがんばらなきゃ」っていう気持ちもある。山あり、谷ありですよね。日々葛藤しながら、皆さんに支えられ前を向いて歩くことができています。

安渡地区で美容室を経営する佐藤さん

はまぎく若だんな会

震災を機に「愛する古里のために逆境に立ち向かう」という志のもと立ち上がった、町内の若手経営者の集い。
2012（平成24）年から、砂浜で砂像作りを楽しむ「砂の芸術祭」の開催や、「海と森の映画祭」への協力、
防犯パトロール「地域見守り隊」など、自分たちの住む町をより良くしようとさまざまな活動を行ってきた。

Interview ｜ はまぎく若だんな会　代表　芳賀（はが） 光（ひかる）さん

吉里吉里海岸に勢ぞろいしたはまぎく若だんな会のメンバー

自分の町のことを こんなに真剣に考えたのは 初めてだった

大槌の商売人たちは震災で店も商品も失って、借金抱えて、不安ばかりだった。これからどうすればいいのか途方に暮れた。でも、なんとかしなきゃならないから、若い経営者で集まって話し合った。自分たちがどうすれば生きていけるかを考えていたはずなのに、何度も話し合ううちに、「大槌のために、子どもたちのために、自分たちはいったい何ができるんだろう」と考えるようになった。8社の経営者たちが集まって、真剣に、必死になって「大槌のこれから」を話し合っていた。これが、俺たちの活動の始まりだった。

もともとは「大槌地域コミュニティグループ」って名前だったんだけど、知り合いから「光君、あんたたち『若だんな』だろ」って言われて。そこに、大槌を代表する花「はまぎく」の名も付けて。はまぎくの花言葉って「逆境に立ち向かう」だから。

発足の翌年には1回目の「砂の芸術祭」を吉里吉里海岸で開催した。震災後に子どもたちが感じていた、海は怖いもの、近づいちゃいけないものっていう気持ちを少しでも払拭したかった。翌年には「大槌お宝マップ」を作って、町内の小中学校に配布した。震災で失われた宝も、津波に流されず残った宝も、どうにかして子どもたちに伝えたかったから。大槌にすむ生き物、郷土料理、海の遊びとかを盛り込んで、子どもたちが自分たちの住む大槌の魅力に気付いてもらえたらって願いを込めて。

このマップが町の教育委員会の目に留まって、「小中一貫教育校の『ふるさと科』の教材にぴったりだから、授業をしてくれませんか」って声を掛けてもらって。それからふるさと科の授業に携わるようになった。子どもたちと接する中で、防犯パトロールもあった方がいいと考えて警察に相談した。まだ街灯がない時期だったし、「地域見守り隊」として、自分たちの仕事の車にパトロールの青い回転灯を付けて、メンバーが夕方道に立って子どもの帰りを見守った。子どもたちは「若だんなの車だ！」って声を掛けてくれたし、安心してたみたい。ほかにもいろんな団体を受け入れたり、校舎ができる前の大槌学園に、木彫りの特製看板を寄贈したりもした。とにかく地元が盛り上がってくれればいいと思ってやってた。

震災から8年。若だんな会の活動は続いているけれど、今は以前ほどみんなが集まる機会は多くない。でも、何かやりたいと思ったときに気軽に相談できて、一緒にやれる仲間。緩やかにつながっている。

今の大槌は、みんなすごく先を急いでいる気がする。何百年とかけてできた町を、10年やそこらで元通りにっていうのは無理がある。元に戻さなくてもいい。新しい考え方も取り入れながら、でも、大槌の人が持っている優しさや思いやりは決して忘れず、常に言葉を掛け合いながら、これからもここで生きていく。

海に親しみながら町に活気を取り戻そうと開催された「砂の芸術祭」

おらが大槌復興食堂

2011（平成23）年11月11日にオープンし、13（同25）年に惜しまれつつ閉店するまで、
多くの人に愛された「おらが大槌復興食堂」。ボランティアや観光で訪れるお客さんが、地元の人と交流を深める場となった。
当時、岩間さんは食堂の「みんなの母ちゃん」として親しまれ、阿部さんは食堂の立ち上げに携わった。

Interview

一般社団法人　おらが大槌夢広場　理事　岩間（いわま） 敬子（けいこ）さん

Ce-Café（シー・カフェ）（一般社団法人　おらが大槌夢広場　元代表理事）　阿部（あべ） 敬一（けいいち）さん

復興食堂の取り組みが評価され、2012年度地域づくり総務大臣表彰の団体賞を受賞した

支えてくれたたくさんの人に感謝を込めて大槌の元気な姿を発信したい

阿部さん　震災後はいろんな場所で炊き出しがあったんですよ。その時に支援で大槌に来ていた人とつながって、「大槌が盛り上がることをやろう」と話していました。何度も話して、今の大槌には何が必要かを考えたときに、「食べる場所」だなって。

岩間さん　ボランティアや復興事業で外から来る人はゆっくり座って温かいものを食べられる場所がなかった。大槌のおいしい料理を食べてもらいたかったので、復興食堂を立ち上げた。

阿部さん　メンバーがたまたま元土木関係者や営業マン、水産関係者とかで、食堂の立ち上げに必要な専門家が集まっていた。食堂完成まで2週間しかない状況だったけど、なんとか完成させた。あのメンバーじゃなきゃできなかったよ。

岩間さん　「できるわけがない」と担当の行政の人に反対されたよね。私も旦那に「食堂をやるから手伝ってくれ」って言われて、無茶だと思ったし毎日のようにけんかした。でもみんながんばってるのを見ていたし、懇願されたもんだから折れました。

阿部さん　そうでしたね。11月11日に食堂をオープンして、今度は運営でバタバタ。そんな中でお客さんに来てよかったと思ってもらえるように必死でやってた。あの時の食堂は、来れば誰かとつながれる場所だったんじゃないかな。

岩間さん　外から来た人たちと地元の人との意見交換の場だった。たくさん人が来て、いろんな話をしたよ。でも、2年たってまちづくりも進んできて、お店がある場所も盛り土をしなきゃいけなくなって。移転するために貸してくれる土地は見つけたけど、被災事業者ではないので補助金もなく、お金のめどが付かなかった。結局お店を閉めなきゃいけなくなった。

阿部さん　でも縁があって、震災後から物資を届けてくれているボランティア団体「飛行船」が、意志を受け継ぐ形で運営してくれることになった。今は栃木県で復興食堂が続いています。

岩間さん　今も月1回、野菜、果物など届けに来ながら、地元商店さんから食材を仕入れ、震災を忘れないために変わっていく復興の状況を伝える場として食堂を運営してくれて。大切なつながりだよね。

阿部さん　震災後に出会った人たちとは、ずっとつながっていくと思う。

岩間さん　私もいろんな人に本当に支えられたなと思う。だからたくさんの方に感謝の思いがあって、できることは少しでも協力したいと思う。それに、今も大槌を気にかけてくれる人たちに「ここまで元気になりました」って発信していかなきゃ。そうやっていくことが復興だと思う。

阿部さん　震災当時中高生だった子たちが社会に出た今、経験を生かし新しい風を起こすリーダーが生まれてくるとわくわくしています。彼らを応援していくことが、僕たちの役目だと思います。

二人は今も町内のイベントなどで顔を合わせている

第7章

集まり、支える ボランティアの活躍

東日本大震災では、多くのボランティアが大槌町を訪れ、
支援の手を差し伸べた。
その一方で、ボランティアに来た人と
それを受け入れる側とのギャップで、葛藤も生まれたという。
ここに記すことで、災害ボランティア活動の今後に役立てる。

震災直後の町はボランティアを受け入れる体制を整えるのも苦労があり、町外からの応援が不可欠だった。写真は町社会福祉協議会職員と応援に駆け付けた町外社協職員（2011年3月25日撮影）

Episode file
～広報おおつち～

大槌町の元気あふれる姿をたくさんの人に伝えたい

現・総務課総務広聴班　主事
花石（はないし） 均（ひとし）

現・環境整備課管理班　主任
小笠原（おがさわら） 佑樹（ゆうき）

大槌町に関わりのある人は、一度は読んだことがあるであろう広報誌「広報おおつち」。震災直後にその制作に携わった役場職員の二人に、広報づくりを通して感じたことを聞いた。

―震災直後、広報は町の皆さんに情報を伝える重要な役割を果たしましたね。

小笠原　震災直後に情報が錯綜していた中で、3月28日から「大槌町災害対策本部情報おおつち」を発行しました。最初は配給や炊き出し、電気・ガス・水道の復旧などの生活情報を知らせました。その後、機材などの制作環境が整ってきたこともあり、大槌まつりの写真を表紙にした通常版の「広報おおつち」を10月5日に発行しました。「いつも通り」が戻ってくることが安心につながると感じていたので、元気に活動している姿をたくさんの人に見せたいという思いでした。

―広報を担当する中で印象に残っている出来事はありますか。

花石　震災後に成人式の記事を書いた時ですかね。大槌町の成人式では同級生の遺影を持った成人を毎年見かけます。それこそ、みんな笑顔で、姿はなくても一緒に成人したという仲間意識を強く感じたんです。そういった思いを胸に記事を書いたことが印象に残っています。

小笠原　震災の日は町外向けの広報の集荷日で、広報は被災した郵便局で水をかぶりましたが配達されたんです。その後、郵送料金の払込用紙が送られてきて、余白に大槌町への応援メッセージが書かれたものもありました。震災直前の広報でしたが大槌町の情報が少ない時だったので、非常に喜んでいただいたことを覚えています。

―広報を作る上で大切にしていることはなんですか。

小笠原　町民の皆さんに情報をお伝えすることが第一ですが、大槌町出身者や大槌町への支援者の声もしっかりと紹介するようにしています。地元から離れている人ほど、大槌町の状況が見えず非常に心配していたことを痛感していたからです。離れていても地元を心配し応援し愛する気持ちは変わらないことや、仲間がたくさんいることを伝えていきたいです。震災をきっかけに生まれた大槌町を思う気持ちや絆を大切にして、これからも大槌町の情報をたくさん届けていきたいです。

―花石さんは現在お仕事をする上で大切にしていることはありますか。

花石　私たち役場職員は、さまざまな状況で困っている人たちが通常の生活を取り戻せるまで、あらゆる方法で助けるお手伝いをすることが使命だと思っています。誰も経験したことのない震災だったので、挫折や遠回りをしながら復興しています。時間がかかることもありますが、自分たちで立ち上がり進んでいくことが必要であり、それが生きていく力になることを実感しています。まずは私自身が何事にも挑戦し、子どもたちや若い世代を勇気づけることができたらうれしいです。

（取材／2018年4月）

ボランティアセンターの運営

2011年11月のボランティアセンター。ボランティアの窓口の役割を果たした

社協がつなぎ役に

東日本大震災で甚大な被害を受けた大槌町の復旧・復興は、全国各地から駆け付けたボランティアたちによって大きく後押しされた。

町を支援しようと遠くから足を運んだ人々の力を効果的に生かすためには、ボランティア活動者と町民との「つなぎ役」の存在が必要になる。その役割を担ったのは大槌町社会福祉協議会(町社協)が運営した災害ボランティアセンター(災害ボラセン)である。

町社協は、福祉や介護、地域福祉活動などを通して、町民が安心して暮らすことができるようにサポートする民間の福祉団体。平時からボランティアの支援・サポートを行っているが、震災後にはボランティアセンターを運営し、町民のニーズの集約とボランティアたちの窓口業務を行った。事前に用意された災害対応マニュアルなどはなかったが、臨機応変に対応していった。

ボラセンの立ち上げ

発災直後の町社協職員が最優先で行ったのは、運営している介護福祉施設の利用者の避難対応。自力で生活をすることが困難な利用者の安全を確保することに心を砕き、数日間、利用者と共に避難所で不安な日々を過ごした。町社協の事務所は津波で流失し、多数の幹部職員が犠牲になったため、活動の拠点探しと運営組織づくりが急務だった。

3月19日、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(支援P)から、町社協に2人の職員が派遣されたことをきっかけに、ボランティア活動者の受け入れ態勢づくりが始まった。当時町社協の総務課主事だった川端伸哉(かわばたしんや)さん(38)は、「災害ボラセンを立ち上げる必要があることは分かっていました。しかし、具体的な立ち上げ方法が明確ではなかった。そんな時に、支援Pの職員が来て、私たちを助けてくれました」と話す。

支援Pの職員は町社協職員に対して、組織の仕組みや支援の内容について細かく説明した。その後、町内の状況を把握するために2日間の視察を行った。町社協職員と支援P職員、駆け付けた東海ブロックの社協職員らと話し合い、拠点となる災害ボラセンを設置する必要があると判断。町社協を今後、どのように立て直し、拠点を立ち上げていくかについて協議を始めた。

支援Pや東海ブロック(岐阜県・三重県・名古屋市・長野県)の社協職員、岩手県社協の助力で3月25日、町中央公民館に災害ボラセンを立ち上げた。ガソリンや携帯電話、筆記用具など、必要最低限の資機材を用意し、27日に拠点となるテントを城山公園体育館前に設置。29日から本格的にボランティアの受け入れを開始した。

川端さんは、支援Pの職員らの柔軟な対応が印象的だったと言う。「支援Pの職員は、私たちに指示をするのではなく、状況を見て『こうしてみましょうか』と提案するように支えてくれました。主体は町社協で、それに寄り添うように立ち回る支援は勉強になりました」

町内の被災状況を確認しながら活動した

災害ボランティア活動支援プロジェクト会議

略称「支援P」。企業・社会福祉協議会・NPO・共同募金会が協同するネットワーク組織。災害ボランティア活動の環境整備をめざし、人材、資源・物資、資金を有効に活用するため、現地支援を行う。2004(平成16)年に発生した新潟県中越地震をきっかけに発足した。

4カ所に中継拠点

災害ボラセンの本格始動と同時に町中央公民館にボラセン本部を設置し、その後、4月10日に大槌保育所跡地へ社協事務所(仮設)と共に移転した。しかし、いずれも実際にボランティア活動をする地域と本部の距離が離れてしまい、活動に支障が出ることが懸念された。さらに、ボランティア志望者が多く、一つの窓口で受け入れるのには限界があった。

そこで町社協は、適切な地域にサテライト(中継拠点)を4カ所設置することで、それらの問題を解消しようと試みた。ボランティアの受け入れが本格化した3月29日、サテライトをさらに大ケ口地区と桜木町に、その後、町の被災状況を踏まえ、

3月29日に設置された桜木町のサテライト

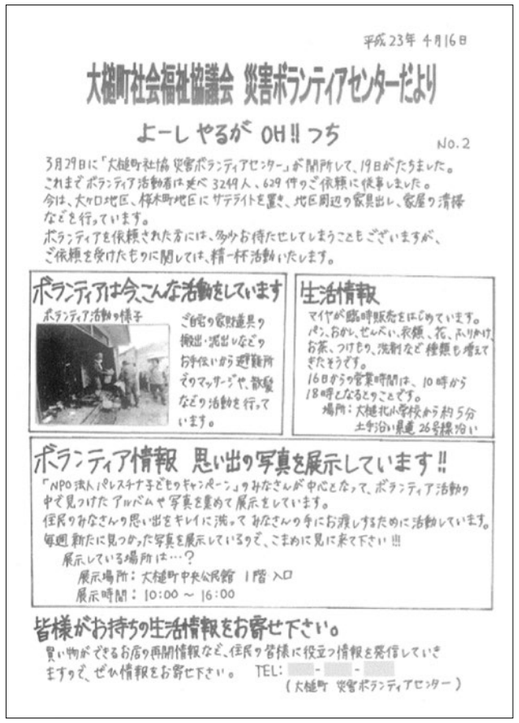
4月10日に移転したボラセン本部

沢山地区と吉里吉里地区にも設置した。

これにより、町民のニーズを地区ごとに把握し、ボランティア活動者の受け入れを分担することができた。

情報紙で活動周知

ボランティアセンターを立ち上げると、町外から多くのボランティアが集まってきた。次は、町民にボランティアを要請できることを知ってもらう必要があった。そこで、ボランティア活動者の情報や要請方法を手書きでまとめた「よーしやるがOH!!つち」を作成し、4月13日から町民に伝え始めた。町社協職員が対象地区のキーパーソンと一緒に住宅一軒一軒に配り、「要望や困りごとがあれば教えてください」と、災害ボラセンの存在と活動内容を住民に周知。ニーズを吸い上げ、支援者とのマッチングを図った。



平成23年 4月16日

大槌町社会福祉協議会 災害ボランティアセンターだより

よーしやるが OH!! つち No.2

3月29日に「大槌町社協 災害ボランティアセンター」が開所して、19日がたちました。
これまでボランティア活動者は延べ 3249人、629件のご依頼に対応しました。
今は、大ケロ地区、桜木町地区にサテライトを置き、地区周辺の家具出し、家屋の清掃などを行っています。
ボランティアを依頼された方には、多少お待たせしてしまうこともございますが、ご依頼を受けたものに関しては、精一杯活動いたします。

ボランティアは今、こんな活動をしています

ボランティア活動の様子

ご自宅の家財道具の搬出・泥出しなどのお手伝いから避難所でのマッサージや、散髪などの活動を行っています。

生活情報

マイヤが臨時販売をはじめています。パン、おかし、ぜんざい、飲料、花、ふりかけ、お茶、つけもの、洗剤など種類も増えてきたそうです。
16日からの営業時間は、10時から18時となるとのことです。
場所：大槌北小学校から約5分 土手沿い県道26号線沿い

ボランティア情報 思い出の写真を展示しています!!

「NPO法人パレスチナ子どもキャンペーン」のみなさんが中心となって、ボランティア活動の中で見つけたアルバムや写真を集めて展示をしています。
住民のみなさんの思い出をキレイに洗って、みなさんの手にお返しするために活動しています。
毎週、新たに見つかった写真を展示しているので、こまめに見に来て下さい!!
展示している場所は…？
展示場所：大槌町中央公民館 1階 入口
展示時間：10:00 ～ 16:00

皆様がお持ちの生活情報をお寄せ下さい。

買い物ができるお店の再開情報など、住民の皆様に役立つ情報を発信していきますので、ぜひ情報をお寄せ下さい。 TEL: [redacted]
（大槌町 災害ボランティアセンター）

大槌町社協発行の災害ボランティアセンターだより「よーしやるがOH!!つちNo.2（4月16日発行）」

マッチングや活動指示のため、ボラセン本部に人が集中した

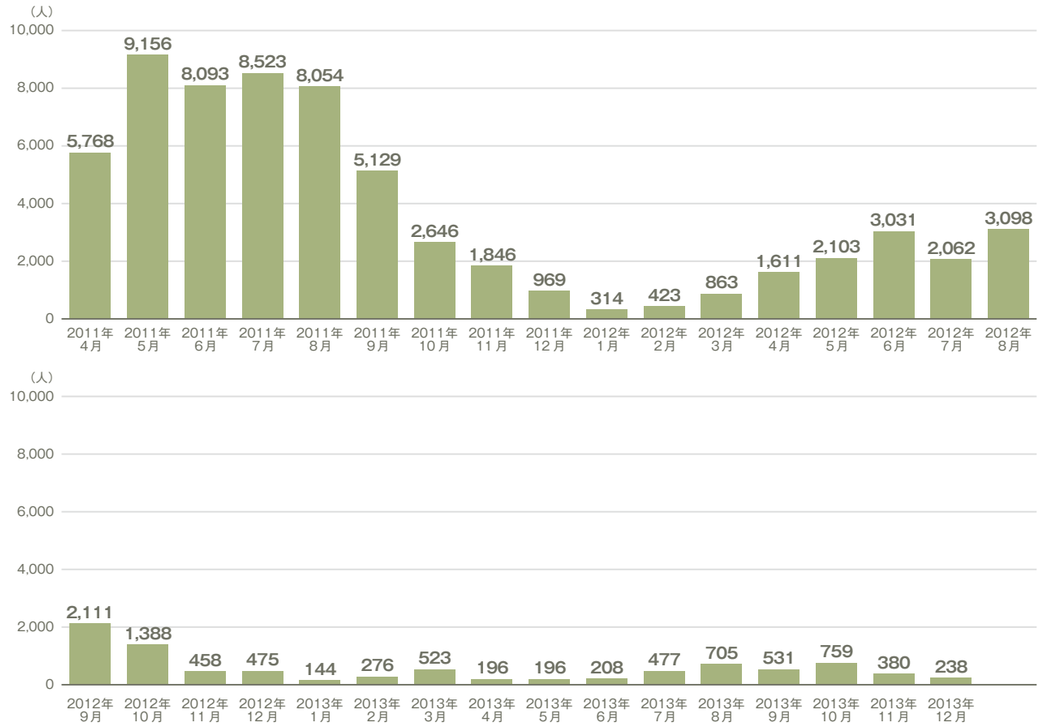
町と社協の連携必須

当時、災害ボラセンの担当を任された渡辺賢也（わたなべけんや）さん（31）は、町役場と町社協の連携について「うまくいっていたと思います。『ボランティアのことは社協に』と町がきちんと位置付けをしてくれたし、震災後の情報共有の場にも毎日参加したので、町とのつながりを大事にできました」と話す。

川端さんも次のように語り、役場との協力関係を重視する。

「例えば、ボランティアで建物内の泥かきをするとき、使えなくなった家財道具を外に出します。それらを町に『片付けてくれませんか』と頼むと、次の週には行政の力で片付いていくんです。これは、震災前から町と社協がつながりを持ってきたから。縄張り争いをするのではなく、町民の皆さんが暮らしやすい町をつくるという考えがお互いにある。日ごろから顔の見える関係づくりが必要だと感じます」

ボラセン本部は避難所のニーズを集約する役割も担った。避難所ごとのニーズを手書きで壁に張り出し、対応に尽力した



■ 図7-1 ボランティア参加活動人数 『大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」』から

■ ボランティアセンター運営の経過

2011（平成23）年

3月19日	災害支援ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）から、大槌町社協に2人派遣される 今後の大槌町社協の立て直しについて協議をする
3月25日	「災害ボランティアセンター」立ち上げ 災害支援ボランティア活動支援プロジェクト会議、岩手県社協職員、東海ブロック社協職員の助力で立ち上げた
3月27日	「災害ボランティアセンター」活動開始 城山公園体育館入り口前にテントを設置した
3月29日	「災害ボランティアセンター」活動本格化 本部機能を中央公民館へ集約。サテライトを大ケロ地区、桜木町へ設置し、全国からのボランティアを受け入れる
4月10日	本部を大槌保育所跡地へ移転
4月13日	広報誌の発行を開始 災害ボランティアセンターだより「よーしやるがOH!!つち」を発行し、ボランティアの情報を伝える役割を果たした
4月中旬	生活支援班の立ち上げ 社協職員による避難所のニーズの把握、在宅の見守り活動などを行う
4月21日	沢山地区にサテライトを設置
5月3日	吉里吉里地区にサテライトを設置
7月下旬	サテライトを1カ所に統合 大槌保育所跡地に集約した
8月下旬	サテライトを移動 パチンコ店「パーラーR45」に移動した
9月1日	「復興支援ボランティアセンター」と名称を変更

2012（平成24）年

4月1日	「大槌町社協ボランティアセンター」と名称を変更

初期の活動

床下にたまった泥をかき出すボランティアら（沢山地区）

半年間は住宅清掃

発災から2週間後、大槌町社会福祉協議会の態勢が整い、「災害ボランティアセンター」という名称で支援者の受け入れを開始した。川端伸哉さんは「初期は泥出し。センターの立ち上げから半年くらいは、桜木地区や大ケ口地区、吉里吉里地区や沢山地区といった、ボランティアが作業しても危険が少ない物件が多い地区の泥出しが主な活動内容でしたね」と言う。

多様な支援と、葛藤

住宅の清掃をはじめとした町の復旧を支援する活動のほかにも、避難所運営の援助や、町内外の人々が協力して大槌町の魅力を取り戻す活動、被災した町民を精神的に支える活動など、さまざまな支援が行われた。

これらの活動には、町外の支援者と町民が共に行った活動もあった。その一例が、「NPO法人グッドネーバーズ・ジャパン」の協力を得て行った「鮭プロジェクト」。鮭が遡上（そじょう）できるきれいな川をよみがえらせるために、大槌川、源水川、小鎚川の清掃作業を行った。ほかにも、源水川に生息するイトヨを守るために河川清掃を行った「イトヨプロジェクト」、町民が協力して町に花を植える活動「花いっぱいプロジェクト」や「菜の花プロジェクト」、仮設住宅入居者のコミュニティー形成や引きこもりの防止、孤独死を防ぐ目的で行われた「お茶っこ隊」など、町内外の人が参加し活動を繰り広げた。

支援を受け入れる中で、活動内容が時期に適しているかどうかを考えなければならないこともあったという。例えば、「NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン」が行った写真洗浄の活動がある。発災約2週間後から始まり、がれきの中から発見された写真を収集し、洗浄するという内容だった。「最低限の生活すらままならない状況だったので、実際は『今、そんなことをしている余裕はないのでは』と思う人もいたと思うんです。でも、いざ整理された写真の数々を目にして、心が救われる人も多かったと思いますよ」と渡辺賢也さんは話す。

支援は態勢整ってから

町社協は初期の問題として、受け入れ態勢が整う前に来町する支援者がいたことを挙げている。

泥かき作業に必要な資材を、旧大槌中学校で管理した

「受け入れの態勢が整っているのか、素人が立ち入ってもいいレベルなのか。現場の状況を理解した上で来てほしい」と渡辺さん。川端さんはその点について、「資材もないし、ガソリンもない。泊まる所もない。そんな中で来ても、受け入れる側は混乱すると思います。助けたいという気持ちはうれしいですが、態勢が整ってからが望ましいです」と話す。

町民の気持ちを配慮

受け入れ態勢が整い支援が可能になっても、町民によるボランティアの依頼は予想外に少なかった。そうした状況を変えようと、町社協職員らは、各地区の自治会長と共に、各住宅へ出向いてボランティアの利用を案内する情報紙「よーしやるがOH‼つち」を配布。当時「ボランティア」という言葉になじみのない住民も、自分が知っている人が間に入り説明することで、安心して依頼できるようになることが分かった。

■ 表7-1　ボランティア受け入れ団体・人数（2011年4～8月）

月		団体	人数	泥出し（がれき）	炊き出し	花いっぱい	鮭P（イトヨ）	菜の花P	写真整理	掃除	引っ越し	イベント	お茶っこ	海岸清掃	草刈り	その他
2011年	4月	332	5,768	5,244	276	0	0	0	71	3	0	33	0	0	0	141
	5月	716	9,156	8,115	541	0	0	0	151	23	0	121	0	0	7	198
	6月	587	8,093	6,825	605	106	0	0	124	17	81	75	0	0	0	260
	7月	464	8,523	5,836	227	0	758	140	77	0	388	876	0	0	0	221
	8月	428	8,054	3,983	81	46	593	1,895	92	0	85	151	298	0	0	830

『大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」』から
※「花いっぱい」→「花いっぱいプロジェクト」、「鮭P」→「鮭プロジェクト」、「菜の花P」→「菜の花プロジェクト」

Interview

あっという間の清掃で「人の力」を実感

大槌保育園　園長
八木澤（やぎさわ）弓美子（ゆみこ）さん

被災した園舎は泥だらけでした。泥を掃除しようにも家具類を移動しなければならなかったので、何日もかけて職員たちが外に出しました。

当時の自分たちは「ボランティアって何？」っていう状況。ボランティアの話を聞いても、最初は頼まなかったんです。そういう支援を頼むにはお金がかかると思っていましたし、「ボランティアです」って訪れた方を不審者じゃないかと疑っていました。それに、「自分たちの園のことは自分たちで」という気持ちが強かったので、そもそも人を頼るっていう考えがなかったんです。

それでも、無償で依頼できることや、ボランティアの皆さんの話を聞いて、依頼を決めました。実際に頼んだら「こういうことだったのか」と。3～4日間に各日50～100人もの方が園舎に来ました。すると、「この1カ月、私たちは何をしていたんだろう」と思ってしまうくらい、あっという間にきれいになったんです。「人の力ってすごいな」と思いましたね。

中期の活動

仮設住宅へ引っ越す住民の支援も行われた

公共的支援にシフト

発災から約半年がたった9月1日、災害ボランティアセンターは「復興支援ボランティアセンター」に名称を変更し、支援者の受け入れを続けた。この時期からは、避難所から仮設住宅への引っ越しの支援など、「個人への支援」も引き続き行われたが、道路の側溝や海岸の清掃のような町を整えていく活動が徐々に増加した。

また、仮設住宅への入居がほぼ完了し、新たに地域コミュニティーの再生が課題になった。そのため、地域の町民が共に参加して会話やイベントを楽しむ「サロン活動」も主な支援の一つになった。

町民の「慣れ」

この頃になると、あまり本来的でない要望を町社協に持ち込む町民も出てきた。町社協職員や支援者に慣れてきたことや、震災直後の緊迫した状況から脱却し、町民が身の回りや将来のことを具体的に考えられるようになったことが要因と考えられる。

渡辺賢也さんは「自分たちの生活に即したニーズ、例えば病院の送り迎えや、お墓の掃除など。本来、自分たちでできるはずのことをボランティアに頼みたいという声が増えました」と、町民の態度に変化があったことを語る。

川端伸哉さんは、中期の問題点について次のように指摘する。「ボランティアと個人的につながっている人も出てきて、そういう人たちは社協を通さずボランティアを頼んでいました。平等性がなくなるのは問題ですね。うまくないなと思いましたよ」

仮設住宅入居者のコミュニティー形成や孤独死を防ぐ目的で開始したサロン活動「お茶っこ隊」

泥がたまった側溝を清掃するボランティアの人々

子どもたちの遊ぶ場所を確保するために開催された「わくわく子供広場」

2011年12月10日に開催された「大槌鮭復興帰願祭」。震災後「鮭プロジェクト」に参加した人々も駆け付けた

■ 表7-2　ボランティア受け入れ団体・人数（2011年9月～2012年3月）

月		団体	人数	泥出し（がれき）	炊き出し	花いっぱい	鮭P（イトヨ）	菜の花P	写真整理	掃除	引っ越し	イベント	お茶っこ	海岸清掃	草刈り	その他
2011年	9月	342	5,129	1,756	36	0	1,290	304	1	18	113	56	635	0	20	900
	10月	178	2,646	905	6	1	737	0	15	0	0	101	400	0	0	481
	11月	144	1,846	494	86	0	304	0	6	0	0	63	520	0	0	373
	12月	89	969	179	0	0	0	0	189	0	75	0	388	0	0	138
2012年	1月	98	314	38	0	0	0	0	201	0	9	45	0	0	0	21
	2月	148	423	162	5	0	0	0	151	0	0	0	0	0	0	105
	3月	163	863	440	40	0	0	0	52	8	6	89	0	0	0	228

『大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」』から
※「花いっぱい」→「花いっぱいプロジェクト」、「鮭P」→「鮭プロジェクト」、「菜の花P」→「菜の花プロジェクト」

Interview

親睦を深めるイベントにありがたい協力

小鎚第8仮設自治会　元会長
芳賀（はが） 廣安（ひろやす）さん

当時120戸あった小鎚第8仮設で、私は自治会長を務めていました。町内でも大きい仮設団地だったので、4班に分けて自治会の運営に当たっていました。

自治会では、団地住民の親睦を深めるために、イベントやサロン活動を行いました。住民の協力もあり、みんなで協力して企画・運営しました。その時、町内外のいろいろな団体に助けていただいたおかげで、イベントを企画できたんです。

例えば、「カリタスジャパン大槌ベース」という団体には、物品や食材の支援、当日の運営協力をしていただきました。自治会として物が十分にそろっていないころであり、人員も不足しており、大変ありがたかったです。

ボランティア以外にも、自治会の役員に応援職員の方、町役場や岩手県保守管理センターに各種対応していただき、感謝しています。外部からの支援に関して困ったことはないですね。

後期の活動

「花いっぱいプロジェクト」は、町民のボランティア参加を促すとともに大槌町に彩りを添えた

これからは自分たちで

2012(平成24)年4月、町社協が震災前に行っていた受け入れ態勢に戻り、「大槌町社協ボランティアセンター」に名称を変更した。

このころには、多くの支援者を必要とする時期は過ぎ、町民がボランティア活動に参加することで町民同士が支え合う町を目指す段階に入った。

「自分たちの力で町のためにできることを考える場が必要だと感じます。住民さん向けにも『ボランティアってなんだろうか』ということを知ってもらうために、自分たちで助け合えるような勉強会や研修会を企画しています。ボランティアって、そんな難しくないんだよっていうことを知ってもらいたいです」と渡辺賢也さんは話す。

町民の意識変えたい

町社協は、震災前からボランティア団体を受け入れる態勢を整えていた。しかし、町民がボランティアを理解しているとは言えなかった。渡辺さんは、大槌町とボランティアの関係について改善すべき点があると考える。

「町内全体として『ボランティア』という用語自体、知らない人が多かったと思います。今も『ボランティアは、無料で何でもしてくれる人』という認識を持っている人は多いと思うので、意識を変えていくために必要な取り組みを考えています」

ネットワークを形成

同じ目的を持っているにもかかわらず、複数のボランティア団体が情報共有をせずに活動していることが多く見受けられた。そこで、必要な情報や人手を共有し、互いに助け合いながら効果的な活動ができるようにネットワークを形成した。それが12年7月に町社協が立ち上げた「大槌町NPO・ボランティア団体連絡協議会」である。町民で構成された16のボランティア団体をまとめて組織化された。

川端伸哉さんは次のように語る。

「地元の団体には高齢者が多いので、ゆっくり、細々とやりたいんです。その一方で、町外から来た人は『あれやりたい、これやりたい』と毎日話し合いをするような人たちもいるんです。この町外の団体さんの熱に地元のおじいちゃん、おばあちゃんたちはついていけない。強く押されるとやる気がなくなってしまうのです」

また、渡辺さんは「いずれ町外の団体は、数も活動も少なくなってしまうので、町民がメインの団体だけで構成しましょうという話になりました」と話す。

助け合い、自発的に

その都度、町の状況に合わせて形を変えてきた大槌町のボランティア。これからのことについて、渡辺さんはこう話す。

「住民がお互いに助け合っていけるようなことを続けていきたいですね。それが町社協の目指す理念につながっていくことになります。こちらがお願いしなくても、自発的に自分たちで必要なことをやっていけるような町にしたいです」

「吉里吉里海岸清掃プロジェクト」で吉里吉里地区の砂浜を清掃する人たち。町内外から多くのボランティアが参加した

■ 表7-3　ボランティア受け入れ団体・人数（2012年4月～2013年3月）

月		団体	人数	泥出し（がれき）	炊き出し	花いっぱい	鮭P（イトヨ）	菜の花P	写真整理	掃除	引っ越し	イベント	お茶っこ	海岸清掃	草刈り	その他	男性向けサロン
2012年	4月	219	1,611	640	0	21	0	0	53	489	4	57	30	125	0	192	
	5月	497	2,103	341	0	83	0	58	91	244	14	61	73	753	30	355	
	6月	437	3,031	789	0	218	0	157	0	380	4	90	105	650	251	387	
	7月	468	2,062	248	0	211	0	105	0	190	10	155	182	547	241	173	
	8月	698	3,098	361	24	379	0	199	15	90	17	174	139	826	373	501	
	9月	450	2,111	314	20	230	0	62	0	36	25	97	65	584	344	334	
	10月	320	1,388	292	0	94	0	101	0	0	6	105	42	291	212	245	
	11月	72	458	98	0	47	0	49	0	0	7	53	65	0	23	97	19
	12月	42	475	15	33	15	0	24	0	74	0	88	173	0	0	36	17
2013年	1月	24	144	0	0	0	0	45	0	0	0	16	54	0	0	15	14
	2月	38	276	0	0	0	0	56	0	0	0	81	68	0	0	45	26
	3月	47	523	0	29	0	0	80	0	28	15	128	68	0	0	153	22

『大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」』から
※「花いっぱい」→「花いっぱいプロジェクト」、「鮭P」→「鮭プロジェクト」、「菜の花P」→「菜の花プロジェクト」

Interview

高齢者が多い地域で入居者の交流を

屋敷前アパート自治会　会長
佐々木　睦子（ささき むつこ）さん

屋敷前アパートは、2016(平成28)年6月に設立された災害公営住宅です。ここの入居者は、高齢者が多い。部屋に閉じ込もって孤立してしまうことが懸念されるため、なるべく部屋の外に出て入居者と交流してほしいと思い、行事やイベントに力を入れています。主な内容は、健康づくりのイベントや映画鑑賞会、クリスマスや忘年会などの季節行事です。月1回の頻度で民生委員による見回り活動の報告会もしています。

大規模な災害公営住宅であり、運営が難しい面もあることから、他の市町村の災害公営住宅自治会と連携し、取り組みを参考にしています。

震災から年月がたっていますが、今でも支援をしてくださるボランティア団体もあります。それらの団体と常に情報を交換して、交流を図っていくことも重要です。今の大槌町は復興が落ち着いてきて、徐々に普通の生活に戻ってきている段階ですが、その中で住民のことを考えた支援をしてくれる団体、われわれ住民の心に寄り添ってくれる団体と一緒に活動していきたいと思っています。

私が岩手に来てから大きな地震は何回かありましたが、あの震災の恐ろしさは想像もつかなかったです。電気が回復して、テレビで津波の映像を見た瞬間に「これはすごいな……」と。

従業員の家族も被災しているし、何か少しでも手助けできないか。そう思っていたときに、県職員の方から金ケ崎町の工場に「沿岸へ行くのに車を出してほしい」という依頼が入りました。当時の工場長に相談したところ、「車の生産が再開できるまでは、地域のために活動しよう」と決断してくれ、大槌町内の活動に、各職場から選抜した従業員が輪番制で加わりました。

約1カ月後、私たちの工場は少しずつ通常稼働に戻りましたが、それからも定期的に大槌に行き、泥出しやがれき撤去、仮設住居の引っ越しの手伝いなど、いろいろなボランティアをしてきました。当社では、KYTという危険予知訓練をしてから作業に入ります。けがをしないための対策など、安全に気を付ける会社だったからこそ、災害現場でもスムーズに作業することができたのかなと思います。

大槌ではたくさんの人との触れ合いがありました。仮設住居で支援物資を配っていた時には、休憩中に避難者のおじいちゃんおばあちゃんが「今日はありがとう！ 暑いからこれ食べてって！」と言って、冷凍したバナナを差し出してくれた。あの時のことは本当にうれしくて、一生忘れられません。

この震災を経て、地域に対する企業の関わり方を学びました。あと1年で私は定年を迎えますが、少人数でもいいから今後も支援を続けてほしい。当社が大槌と内陸を結ぶパイプになればいいですね。

忘れられない大槌の人との出会い
ボランティアで学んだ地域との関わり方

トヨタ自動車東日本株式会社 岩手工場

工務部　工場管理室　楽山（らくやま） 勲（いさお）さん　取材協力／工務部　部長　村杉（むらすぎ） 英記（ひでき）さん

グッドネーバーズ・ジャパンは世界35カ国で支援を行っている団体です。本部はアメリカにあり、日本事務局が設立されたのは2004（平成16）年でしたが、日本での活動は東日本大震災が初めてでした。

私たちは発災の3日後、目的地も決めずに、レンタカーで被災地方面に向かいました。山形で支援物資を調達しながら情報を集めていると、岩手の釜石・大槌で被害が大きいと知り、実際に足を運んでみることになったんです。特に大槌は役場も被災し、被災者の支援が大きく遅れていた。それから、まずは北上市の短期賃貸マンションを借り、大槌に通うようになりました。がれきの撤去や、砂浜の清掃活動、心のケア、そして漁業再開支援などを行いましたが、初めは現地に知り合いがいたわけではなく、まったく知らない横文字の団体が入ってきたということで、皆さんに受け入れてもらえるだろうかという不安はありましたね。

町社会福祉協議会が前面に立って復興活動を行うようになってからは、ボランティアの受け入れ、事務作業など、皆さんの手が回らない部分を補うようになりました。社協や役場の方々は被災者でもあり、当時は自分たちの生活を続けていくのにも大変な状況。一方で私たちは途上国駐在の経験もあったので、想定外のことが起こったときの対応には慣れていた部分もありました。皆さんをサポートすることができ、少しはお役に立てたのかなと思ってます。

さまざまな支援を続けていくうちに、私たちの活動を理解し、一緒に活動してくれる人も増えました。

ただ、いずれは地元の人たちが主体となって、町を復興させなければならないと考え、私たちは13（同25）年の9月をもって東北での復興支援活動を終了しました。いつまでも被災地と呼ばれないよう、意見をどんどん言いながら、皆さんで前を向いて、本当の復興を目指してほしいです。

知らない自分たちを受け入れてくれた大槌町
地元の人たちがつくるこれからの町に期待

認定NPO法人グッドネーバーズ・ジャパン

広報部長　飯島（いいじま） 史絵（ふみえ）さん（左）　国内事業部長・国内災害対策室長　武鑓（たけやり） 史恵（ふみえ）さん（右）

建学の精神で復興支援 明治学院大学の活動

「他者への貢献」実践 学生ら、町民と交流深く

2018年6月、町文化交流センターおしゃっちの開館行事を手伝いに訪れた明治学院大生。右から大根さん、桑山さん、荻野さん、橋田さん、寺西さん、渡辺さん

明治学院大学（本部・東京都港区）は震災直後から、主に吉里吉里地区で積極的にボランティア活動を展開してきた。建学の精神に基づく、被災地の復興支援活動「Do for Smile（フォースマイルアウト）@東日本」プロジェクトの一環。活動は緊急期の炊き出しや物資の仕分け作業、今も続く小中学生が対象の学習支援など多岐にわたり、2019（平成31）年3月現在で延べ1380人の学生が現地に足を運んだ。町民たちとの触れ合いから学んだものは何か。現役生6人と卒業生1人に聞いた。

現役生6人は震災当時、小学6年～中学2年。1人を除いて関東地方に住んでいて、一様に大きな衝撃を受けた。社会学部2年の荻野（おぎの）満帆（まほ）さん（19）は「その時から何かしたいという思いがずっとあった」。高校で「ボランティア部」に入り、被災地行きを希望したが、かなわなかった。法学部3年の寺西（てらにし）なつみさん（20）も募金しかできず、「無力感」に囚われた。問題意識の受け皿になったのが、同大のボランティアセンターだった。

夏休みに学習支援

学生らは主に、小中一貫教育校の吉里吉里学園での学習支援や地区行事の手伝いをする。荻野さんは18（同30）年8月、同学園小学部で夏休みの宿題を見る「コラボ・スクール」に参加。児童たちと姓でなく名前で呼び合い、笑顔が弾ける。荻野さんは「地域の方々は『来てくれるだけでボランティア』と言ってくれる。私たちのやっていることは間違いじゃないと確信しました」と成果を強調した。

法学部3年の橋田（きつだ）樹（みき）さん（22）は太平洋岸の浜松市で育ち、小学生の頃から東海地震の危機を身近に感じてきた。進学した高校には津波から逃げる安全な避難場所がなかった。「浜松は台風など災害が多い町。僕も東日本大震災の被災地と比較することがよくある」

橋田さんは、経済的な事情などで塾に通えない中学生に勉強を教える東京のNPOでアルバイトをしている。「学習の格差は、原因の違いはあっても社会的な課題。被災地の生の声を遠く離れた東京にも伝えられたら」という。

好きだからできる

現役生たちはボランティア経験を将来にどう生かしたいのか。

法学部2年の渡辺（わたなべ）芽依（めい）さん（19）は、被災者との交流に「どこまで踏み込んだ質問をしていいのかとか、人との距離感を学んでいます」。そうした学びを糧に、司法書士を目指す。社会学部2年の大根（おおね）萌花（もえか）さん（19）は、震災を経験していない児童との触れ合いから、事実や教訓を次世代に伝える難しさを痛感。町民との語らいを「自分が経験していないことを聞ける大切な機会」と捉える。

文学部2年の桑山（くわやま）紗也香（さやか）さん（20）は、在籍する英文学科で学んだ英語を武器に「いろんな所でいろんな人と関わりたい」。ボランティアを通して「コミュニケーション力」を培い、ホテルスタッフなど観光関連の業種に就くことを夢見る。

寺西さんは通うたびに「どんどん吉里吉里が好きに」なる一方、大学の活動とプライベートな交流との線引きをどこにするか、悩みもした。しかし今は「好きだからこそ、実際に足を運んだ自分だからこそできることがある」と悟り、「関東でも震災の風化が進んでいる。ずっと（被災地を）考えていくことが大事」。いずれ「地域おこしの団体などで働ければ」といい、「大槌で？」と水を向けると「そうですね」とほほ笑んだ。

ほれ込んで移住

震災の年にボランティアを体験してこの町にほれ込み、当地で暮らすまでになった卒業生がいる。会社員の生田（いくた）みずきさん（26）。釜石市が本社の水産加工会社で営業を担当し、三陸産の新鮮な魚介類を無添加で調理した冷凍食品を学校給食用などの販路に乗せる。

大槌への愛情が高じて移住した卒業生の生田みずきさん

震災は、大学入学が決まり、実家のある京都市にいた時に起きた。津波の映像を見ても現実と思えず、「東京より上に行ったこともなかった」。仲良くなった男子学生が宮城県出身で、足しげく被災地に通っていた。影響を受け、同大ボランティアセンターの門をたたく。がれきの隙間に夏草が青々と生い茂る7月、初めて町に下り立ち、支援物資の仕分けを行った。その後は毎月のように吉里吉里を訪れ、森林再生を促すNPO法人「吉里吉里国」で間伐の手伝いなどをした。

人と食が魅力

「自分の中で吉里吉里に色が付いた」瞬間がある。岸壁でアイナメやドンコ（エゾイナメ）を釣り、地元の調理法を教わった。「震災だけじゃないんだ。ここに住んでみたい」。卒業後、専門商社で2年働いたが、人と食の魅力にあふれる大槌が忘れられず、今の会社に転職した。「吉里吉里の人たちが私にしてくれたように、将来住んだ土地で食べ物や食べる知恵を誰かに分かち与える生活ができれば幸せです」

（取材／2018年6、8月）

明治学院大の震災ボランティア

「ヘボン式ローマ字」の考案で知られる、同大創設者で米人医師・宣教師のJ・C・ヘボン（1815～1911）の教育理念Do for Others（ドウ フォー アザーズ）（他者への貢献）の意をくみ、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災を契機にボランティアセンターが設立された。東日本大震災の発生翌月に大槌町や宮城県気仙沼市で活動を開始。翌年3月に大槌町とボランティアの「協働連携協定」を結んだ。津波で大部分が流された、吉里吉里地区の方言を収載する『吉里吉里語辞典』をテキストデータ化し、復刻本の出版を後押しするというユニークな支援も行った。

第8章

「新しい町」をつくる

大槌町の復興まちづくりでは、
住民と行政が対話を重ねながら
都市計画を練り上げていった。
計画策定の段階から関わってきた住民に
自分たちの暮らす町をどのように思い描いてきたのかを聞いた。

高い防潮堤に頼らない町づくりの方針を打ち出した赤浜地域復興協議会

Episode file
～ボランティア～

よりよい世の中をどう作るか 深く考えるきっかけに

震災直後のボランティア
巌洞（がんどう） 秀樹（ひでき）さん

震災時に泥出しのボランティアをした場所で

大津波でダメージを受けた町や人を助けようと、全国から多くのボランティアたちが駆け付けた。北九州市門司区で焼き肉店を営む巌洞秀樹さん（44）もその1人だ。震災から2カ月後、吉里吉里（きりきり）地区で側溝の泥出しに従事した経験が「人生を大きく変え」、現在は防災関連のビジネスにも取り組む。

―震災から間もなく、大槌でボランティアをしたきっかけは。

妻の母親が所属する宗教団体で要員を募集しており、即座に「行きます」と返答しました。僕は港湾土木の現場監督だった経歴があり、教団側はそういう人材を派遣したかったようです。釜石のボランティアセンターで「吉里吉里に行ってください」と言われ、その時は吉里吉里って素敵な名前だなと思いました。

―大槌に入ったのが5月下旬。

焼け野原に焦げた臭いが漂い、言葉が出ませんでした。自衛隊の車両や全国のバトカー、そしてボランティアのお坊さんたちの姿。それらが最初に目に飛び込んできた光景です。

吉里吉里では、海岸から100メートルぐらいの浸水地域で、幅1メートルほどの側溝にたまった泥を土のうに詰めて脇に積み上げ、水はけを良くする作業をしました。3日間、4人がかりでスコップを振るい、50メートルぐらい掘り進みました。

僕らが作業をしていた辺りに、流された美容室がありました。お店の女性が来て、仕事道具を見つけたら取っておいてほしいと頼まれました。疑似餌がいっぱい出てきたので、そのことを伝えると「隣がイカ釣り漁師さんです。今は生きているのか、死んだのかも分からない」と言い、とても印象的でした。

吉里吉里小学校の子どもたちは僕らにあいさつしてくれました。その時に、ボランティアセンターの人から「児童の3割くらいは親を亡くしているが、元気でがんばっている」という話を聞いて、思わず涙が出ました。僕も今、子どもが5人いますので。

―その3日間で学んだことは。

二つあります。それが僕の人生を変えたといっても過言ではない。一つは「世の中、思うようにうまくはいかない」。もう一つは「天災は善人も悪人も区別しない」ということです。そこから、なぜ自分がこの世に生まれてきたのか、子どもたちのために、どうやったら良い世の中を作っていけるのかということを深く考えるようになりました。自己完結するのはもうやめようと思ったんです。

―大津波で全てがいっぺんになくなった。

その時に撮った写真を地元でプリントしました。写真屋の86歳のおばあちゃんは「昭和28（1953）年に門司で起きた大水害にそっくりだ。あなたはこの水害で犠牲になった1人で、生まれ変わって震災を見る使命があったんだ」と。見えない縁があるのかなと感じました。

お金よりも大切なものがあり、それは目には見えない。そのことを伝え、防災教育にも貢献しようと、今、阪神・淡路大震災の被災者が立ち上げた、楽しみながら行う次世代型の防災訓練の事業を九州で展開しています。この活動をぜひ大槌町でもやりたいです。

（取材／2018年6月）

町民主体のまちづくり

2011年10月に行われた第2回安渡地域復興協議会

復興計画策定への道

震災によって当時の加藤宏暉（かとうこうき）町長が犠牲となり、町長不在の期間が2011（平成23）年8月まで続くことになった。その間、復興計画策定に向けた準備として、4月に災害復興室、5月に大槌町震災復興計画準備室が設置され、震災復興基本方針素案などの協議が行われた。同計画策定は、8月29日に碇川豊（いかりがわゆたか）新町長が就任した後、本格的に動き出し、9月30日に大槌町災害復興基本条例と大槌町災害復興基本方針が制定された。同基本条例の大きな特色は、4条3項に「町長は……復興対策の実施に当たっては、町民等及び復興町民組織の適正な合意形成に努めなければならない」とあることだ。同基本方針にも「町民の声が届く、町民による町民のためのまちづくりを行います」と明記するなど、町長不在による復興事業の空白を住民主体で埋めることを宣言する形になった。

三つの会議体設置

11年10月以降、主に「地域復興協議会」「復興まちづくり創造懇談会」「再生創造会議」という三つの会議体で復興計画に向けた話し合いが進められた。

地域復興協議会は、地域住民が参加して合意形成を図ることを目的とした組織である。全町民を対象とした全体会と、町内を10の地域に分けて復興まちづくりについて議論し合う協議会を設置した。10地域の協議会には、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻の中井祐教授ほか8人の学識経験者が入り、議論のコーディネートを担当した。

復興まちづくり創造懇談会は、町長の求めに応じて専門家が意見・提言をする場として設置。新しい大槌町の展望や早期解決が望まれる短期的課題から、5年先、10年先を見通した中長期の課題に至るまでアドバイスを行った。

再生創造会議は、学識経験者や町議会議員、行政機関、町の各界代表者で構成し、復興計画について幅広く意見交換する場として設置された。

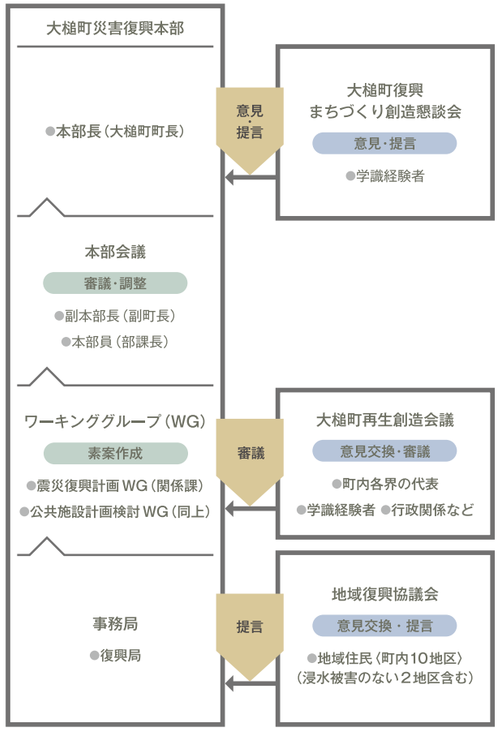
これら三つの会議体の議論結果を踏まえた「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」が、11年12月26日の町議会で審議、承認された。

計画策定後の動き

復興計画はその後見直され、14（同26）年3月、「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画改定版」が公表された。改定版では、安心して暮らせる住環境の下で、①充実した医療・福祉や子育て、コミュニティーなどの「社会生活基盤」②安定的な生業を確保する「経済産業基盤」③次代を担う人材を育成する「教育文化基盤」――の三つの基盤が一体になったまちづくりを進めることをうたっている。

12（同24）年以降、地域ごとに復興事業の進捗状況を説明する場として、「復興まちづくり懇談会」が設置された。13（同25）年度からは、地域復興協議会が再開され、復興計画の見直しに合わせ、各地域のソフト施策（自治会活動などの地域活動）について話し合った。14年度以降は、ソフト施策の議論を継続するとともに、各地域の復興事業の進捗状況に基づいたハード整備（街路や集会施設のデザインなど）が議題になった。

13年3月に設置された「大槌町デザイン会議」では、各地域の復興まちづくりにおける公共施設や公共空間のデザインについて議論。各地域住民が主体的に参画し、学識経験者をコーディネーターに迎え、役場やコンサルタントも交えた体制となった。14年に議論した内容や結果が「大槌町デザインノート」として取りまとめられ、復興事業の空間形成の指針として位置付けられた。



■ 図8-1　町災害復興本部と各会議体の関係

『東洋大学PPP研究センター紀要 No.3 2013』「岩手県大槌町の震災復興の現状と課題」から引用

Interview

難しかった意見集約　町民との関わり深く

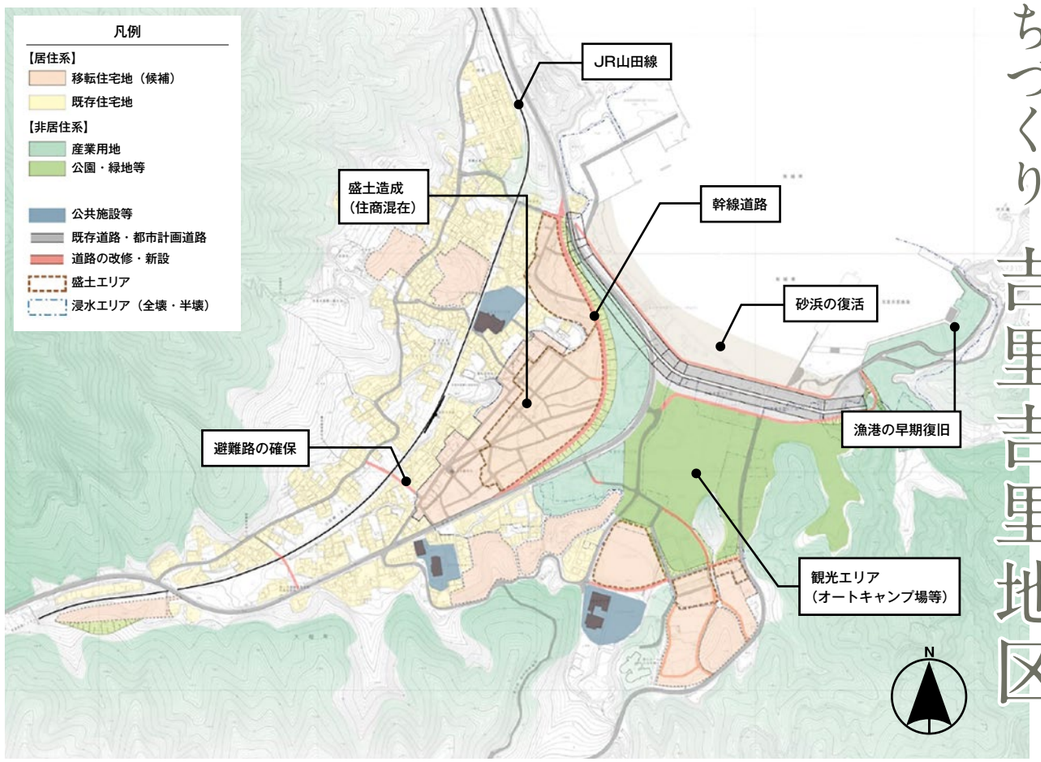
大槌町役場　総務課総務広聴班　班長
小國（おぐに）晃也（こうや）さん

震災前は福祉課で障害者関係の業務をしていました。震災後は災害復興室に異動になり、復興計画策定や情報系の復旧に携わりました。まちづくり協議会の運営、町のホームページの復旧や更新が主な業務でした。大槌の状況を外部へ発信する必要があったからです。

協議会の議案は、町長と素案を作ってすり合わせ、それを基にたたき台を作り、町民の方々に意見を出してもらう形式でした。協議会の全体的な課題は、参加者が少なく、いつも同じメンバーだったことです。若者がおらず意見がなかなか聞けなかった。また、高台移転か町を残すかなど、意見が分かれたときのまとめ方が難しかったです。

町民説明会では、町民との関わりをより深く持ててよかったです。しかし、町外の市町村や他県からの応援職員が矢面に立つことも多く、本当に苦労を掛けました。でも、応援職員を含めた私たち役場職員は、よい意味でタフになれたし、困難を乗り越える力が付いたと思います。

まちづくり 吉里吉里地区



■ 図8-2　2011年12月時点の吉里吉里地区の復興イメージ図

「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」から

検討会で民意反映

吉里吉里は、白い砂浜が広がる海水浴場に漁港やフィッシャリーナ（プレジャーボート係留施設）などが隣り合わせ、内陸には小中学校のほか高齢者福祉施設が立地する地域。地区内の宅地は、海岸から山にかけて緩やかな傾斜が続く土地の形状を生かした場所にあったが、標高10メートル程度の中心街は津波で浸水した。

同地区の復興計画策定は、町が主催した地域復興協議会から始まった。第1回協議会では、従来の地域の中心部を再建しつつ、旧JR山田線より山側の高台に新たな移転住宅地を造成する案が町から提示された。住民からは、「生命を守る防潮堤も大事だが日々の生活も大事。吉里吉里は年間5～6万人が訪れる観光地であり、防潮堤の高さを検討する際には景観を十分考慮してもらいたい」などと観光地の再興を念頭に置いた意見が出された。

住民主体の復興まちづくりは第1回協議会終了後、大きく動き出し、住民独自で企画した復興計画を検討する会を3回実施した。顔なじみの住民同士が自由に発言できる場となった独自検討会では当初、いずれも町が示した、防潮堤の高さを従来の海面から6・4メートルとする案と、12・8メートルとする案の二つの選択肢の間で意見が分かれていた。従来の高さを希望する住民からは「高い防潮堤は生活していて圧迫感がある」「観光地の景観としてどうか」などの意見が出された。これに対し、「住民や観光客の安全を確保するために防潮堤は高い方がよい」という声が台頭。両者は一時拮抗したが、独自検討会での対話を経て、人々の安全を最優先するなどの観点から防潮堤の高さは12・8メートル案が採択された。

こうした意見を受けて、第2回以降の協議会では、砂浜再生のための下水道整備など、海の水質に配慮した観光地化を核とするまちづくりが住民から積極的に提案された。砂浜を再生することは、子どもたちの遊び場の整備にもつながり、吉里吉里の誇りである美しい砂浜の復元を目指す方向で住民合意が図られた。

海岸に至近で津波で浸水した住宅地の高台移転は行わず、国道45号を山側に移設、その周辺に位置する従前の中心地に盛り土をして、宅地や商業地を造り出すことにした。この判断は、高台移転で従来のコミュニティーを分散化させず、居住地を少しでも高い場所にコンパクトに集約することを選択したものだ。背景には、昭和三陸地震津波（1933年）の後、住民が独自に復興計画を立て、地域の中心を残しながら居住エリアを移すことで安全とコミュニティー維持を図った過去の教訓の継承があった。吉里吉里地区のまちづくりの方針は、このように、▽自然や環境に配慮する▽地域のコミュニティーを大切にする▽安全を最優先とする――ことでまとめられた。

公民館を地域の核に

吉里吉里地区は震災以前から、故井上ひさしさんの小説『吉里吉里人』に登場する「吉里吉里国」を連想させるような、独立性の高いコミュニティーが形成されていたと言ってよい。発災直後に地域主導で「吉里吉里地区災害対策本部」が発足し、避難所の運営や重機を活用したがれき撤去、ガソリンなどの燃料確保、支援物資の受け入れと配給を行うなど、行政に頼らずに対応した。

さらに、避難所が閉鎖された後も、吉里吉里地区体育館が、流失した町中央公民館吉里吉里分館の仮施設として運営された。2014（平成26）年7月、吉里吉里海岸海水浴場が震災後初の海開きを行い、同年10月には地区の運動会が震災から約3年ぶりに復活した。また、当地を訪れる大学生らを対象に震災語り部によるガイド活動を行っている。いずれのイベントも吉里吉里分館が中心的な役割を担っている。

18（同30）年2月、被災した吉里吉里分館が地域の中心部に再建され、コミュニティーの核として利活用されている。

2014年夏、吉里吉里海岸海水浴場で震災後初の海開きがあり、多くの人でにぎわった

Interview

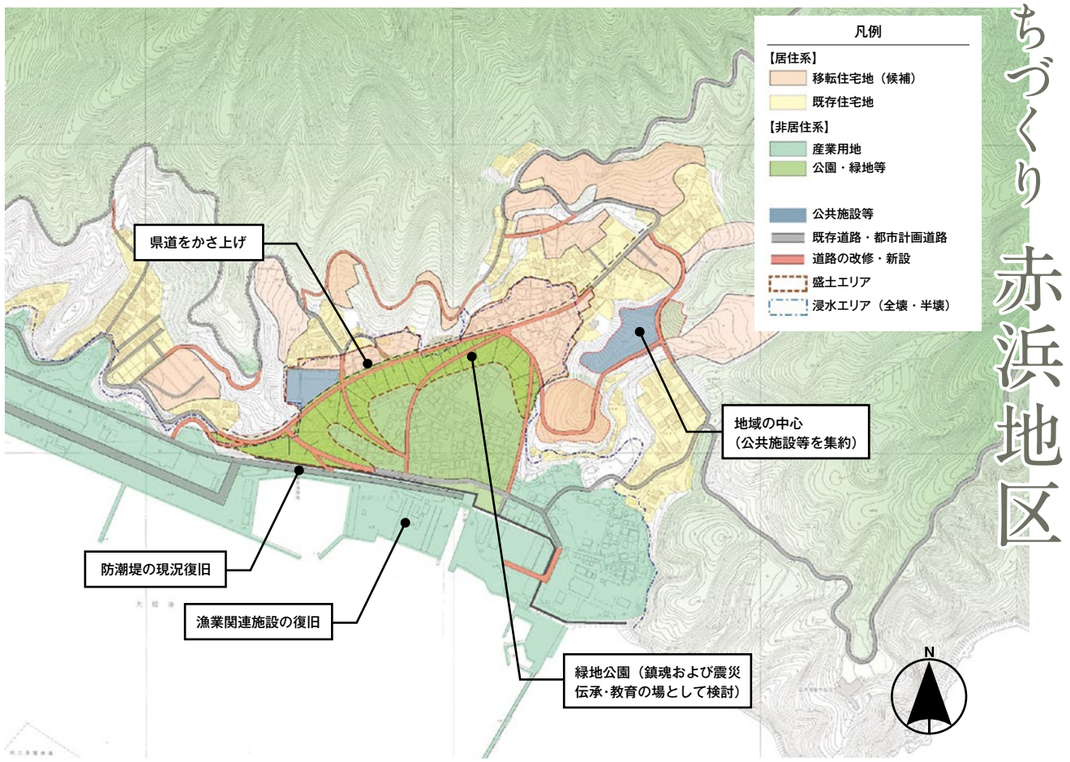
震災の教訓を今に生かす

吉里吉里地域復興協議会　会長
藤本（ふじもと）俊明（としあき）さん

吉里吉里の復興計画を策定する中で、砂浜を残そうという意見が出された。そのために国道の位置を山側に変え、防潮堤の高さは12・8メートルに決まった。地区の民意を示して独自のまちづくりをした。住宅の移転先については、山を切り崩して造れば早いという意見もあったが、今若い人でも20年、30年経てばみんな高齢者になってしまう。高台の住宅地では車がないと孤立してしまって大変だからやめよう、浸水区域だけれど移設した国道に接する既存の住宅地に寄り添う形で造成しようということになった。

震災は嫌な経験だけど、その経験にふたをするのではなく、必要に応じて生活に生かしていくことが大切。3・11の教訓を無駄にしてはいけない。また、地域の次代を担う若者、子どもの育成も大事なこと。祭り、運動会、お茶っこの会もずっとできればいいなと思う。海と砂浜はもちろん、日々の営みを大切にしたい。

まちづくり 赤浜地区



■ 図8-3　2011年12月時点の赤浜地区の復興イメージ図
「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」から

住民主導で景観守る

赤浜地区はもともと浜辺の水深が深く、大きな漁船が接岸しやすい好条件を備えていて、江戸時代から造船所があった。震災前には二つの造船所や水産加工場などが立ち並ぶ漁業が経済基盤の地域であり、三陸の多様な海洋生態系を育む海域に臨んで、東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターも立地する。町の代表的な観光資源で大槌湾に浮かぶ蓬莱島は、漁業者が豊漁を願う場であり、地区住民にとって、島のある景色は何気ない日常生活の一コマだった。

同地区の復興計画は、この蓬莱島が見える景色を取り戻そうという住民の共通認識に支えられた「住民主導モデル」として、全国から注目された。県が提案した海からの高さ14・5メートルの防潮堤建設計画に対し、津波襲来時に海が見えない危険性などを指摘して防潮堤の高さを従来の6・4メートルに変更させ、海辺の景観も守った。

このモデルをけん引したのは、2011（平成23）年8月に発足した地区の住民有志26人でつくる「赤浜地区の復興を考える会」（川口博美会長）である。「考える会」は同年10月16日午前、第1回赤浜地域復興協議会が開かれるのに先立ち、地域住民を集めた総会で、12項目にわたる独自の復興計画案を住民に示した。この中には、「防潮堤は所詮人間の造るもので、必要ない。津波警報が出たときにすぐ逃げられるように、防潮堤より高台移転を選ぶ」との声に代表される、防潮堤は従来の高さでよいとする提案も含まれた。具体的には、海側に高潮対策としての防波堤を震災前のように修繕復旧させ、住民は最低でも海抜15～18メートルの高台に移転することを基本とする内容である。「考える会」は総会で、この独自案について住民の賛同を得た後、同日午後開かれた第1回赤浜地域復興協議会で、住民の総意に基づく計画案として行政側に提示した。以後、同協議会は、住民作成の復興計画案をベースに議論が進んでいった。

同協議会で住民たちからは、行政側が提示した高さ14・5メートルの防潮堤を整備する案に対し、「その高さだと今の2倍以上となる。毎日海を眺めながら通勤しているが、景観はどうなるのか。〝すり鉢〟の中で暮らすようで圧迫感を覚えるのではないか」という声が複数上がるなど、海が見える生活を求める住民の意思が協議会で明確に示された。2回目以降の復興協議会では、考える会の案を踏まえた発展案が示され、盛り土の上に県道を建設してスロープを作り、防潮堤代わりの擁壁として、浸水した土地を公園に利用する避難道を新設することなどが盛り込まれた。住民からは「考える会の住民案をより具体化した発展案がよい。蓬莱島の眺望など、景観も赤浜の大切な財産だ」という発言もあり、高い防潮堤に頼らないまちづくりを行うことが了承された。4回目の協議会では、住宅地の土砂災害などの危険性や用地取得について意見交換を行い、最終的には、発展案に基づく復興基本計画がまとめられた。

防潮堤の高さを変えず、高台に住宅地を造成するという当初の復興基本計画との大きな変更はなく進んでいる。赤浜地域の復興を考える会の事務局長中村誠一（なかむらせいいち）さんは「住民主導で復興計画を作成し、それをベースに行政と議論できたので、防潮堤に頼らない町ができた。今、海が見える高台の住宅が出来上がっているのを見ると、この復興計画でよかったと思う」と振り返る。

赤浜自治会の設立

赤浜地区には、古くからの住民自治組織がなく、代わりに震災の2年前に発足した自主防災組織や公民館運営委員会が地域運営をけん引してきた。また、震災後に発足した「赤浜地区の復興を考える会」は、復興関連事業に活動を限定していたこともあり、多くの住民からは、避難所生活で醸成された地域の結束を維持させ、住民の意識をリードする運営組織の結成を模索する声が次第に出始めた。

そんな矢先、震災前に地区住民が共同出資して改築した集会施設「旧常楽院」が、復興事業の区画整理対象となり、施設の解体・移設が必要になった。この移設に関する補償金の受け皿組織として、自治会が結成されることになった。地区住民は、11回にわたる役員会と8回の住民説明会を実施し、15年（同27）年4月に赤浜自治会が設立された。自治会加入世帯は、当時222世帯の93％に達し、町中央公民館赤浜分館と連携して地域活動を進めていく体制が整えられた。旧常楽院は同年10月に赤浜自治会館として移築され、大黒柱には蓬莱島で津波に耐えた松の木が使われている。

Interview

海と共に生きるために独自の復興を

赤浜地区の復興を考える会　会長
川口博美（かわぐちひろみ）さん

民意を示して独自のまちづくりをしました。

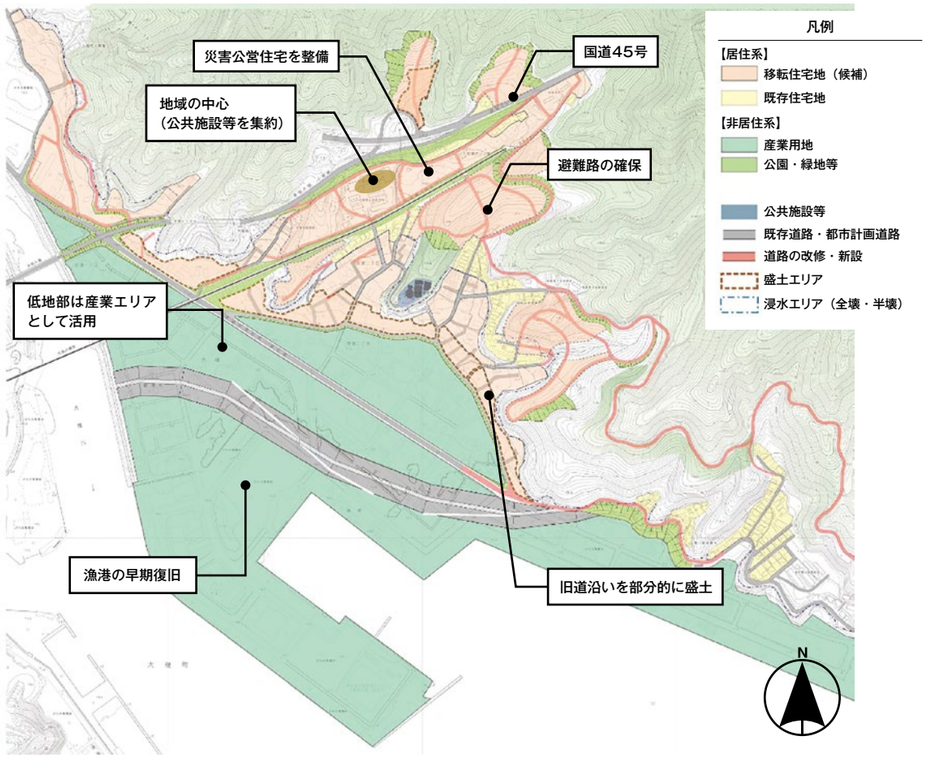
防潮堤を高くせずに土地のかさ上げをしたのは、大槌では赤浜だけです。赤浜は漁師町だから、3・11の地震の後、海の様子や船を見に行った人がいます。

海が見えないと何が起きているか分からない。いつでも海が見えるようにしたかったのです。海からの恩恵を受けて育ってきた地域だからこそ海を大切にしたかった。人は自然の力にかなわない。

この町で生き残るための最善策が、「防潮堤がない海の見える町」でした。これはこれから先の未来と、震災で亡くなった赤浜の93人に報いたいという気持ちです。

防潮堤を高くすると、もし次に津波が来たとき、防潮堤で波が跳ね返り、さらなるダメージがあるとの指摘もあります。コンクリートの耐用年数は持って50年といわれています。さらに、潮の流れが変わるため漁業にも影響が出る。海と共に生きてきた町だからこそ、海という大きな自然と共存するための独自の復興が必要だったのです。

まちづくり　安渡地区



■ 図8-4　2011年12月時点の安渡地区の復興イメージ図
「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」から

「想定外」のない町に

安渡地区は、大槌漁港に面して魚市場や漁業協同組合、水産加工場など、14の水産業関連施設が集中する産業開発の機能を備えた地域である。同地区はまた、防災・減災に関する取り組みの先進地域でもあった。とりわけ安渡二丁目町内会は、2005（平成17）年に現在の自主防災組織に当たる自主防災事業部を設置。年に数回、防災訓練を実施しており、地区住民の9割近い人が津波時の避難経路や指定避難所を把握していたという。

こうした背景もあり、震災で地区住民の1割を超える217人の犠牲者を出したことについて、住民は「想定外」と表現。同地区の地域復興協議会では初回から、二度と犠牲者を出さない復興まちづくりのため、行政が提示した海抜14・5メートルの高さの防潮堤建設を前提に高台移転を要望する声が上がった。

安渡地区は地理的条件などから防災面に不安があるといわれる。同協議会では「指定緊急避難場所の大徳院（県道沿いの高台にある寺院）への避難道は、階段状で勾配もあって、いざというときに逃げられない」として安全な避難路の整備や、120人収容の安渡小体育館に震災時最多で800人が避難したことから機能の充実した施設の建設を求めるなど、防災や減災を強く意識した意見が出された。

同協議会をけん引したのは、いずれも当時33歳の若手3人だった。震災の年の5月末から1カ月で町内6カ所を回って「大槌復興まちづくり住民会議」を主導し、町に復興のあり方を提言した赤崎友洋（あかざきともひろ）さんと、赤崎さんの同級生で安渡地区の地域復興協議会を担当した役場職員、コーディネーターを務めた当時東京大助教で都市・地域計画が専門の尾崎信（おさきしん）さんである。この3人が安渡地区の復興像を描くために主体的に動いた。

協議会では、防潮堤の高さについて従来通りでよいとする意見もあり、一人でも多くの住民が納得するまちづくりを模索するために、堤防の高さと住居の場所がテーマの独自の会合も開かれた。こうした議論を経て、安渡地区は海の見える高台を中心として地域住民ができるだけまとまって居住し、▽高さ14・5メートルの防潮堤を設けた上で低地を産業用地などとして用いる▽震災後閉校した安渡小については、子育てや高齢者福祉、生涯学習など多用途・高密度に利用し、国道45号と合わせて地域の中心として整備する――方針が示された。

公民館核に地域再生

12（同24）年4月29日には、震災前三つに分かれていた町内会が合併し、新生「安渡町内会」が発足した。特に安渡一丁目の家屋は2軒を残して流失し、住民の3分の2が地域外の仮設住宅へ転居するなど、町内会運営が困難になっていた。一方、震災時の助け合いで再確認された「結いの精神」を生かすとともに、外部支援者の視点や情報も地区再生に向けて必要だと判断。新しい安渡町内会では会員資格について画期的な制度を導入し、地域に居住する者だけではなく、元居住者、さらに町内会の趣旨に賛同する者も会員とすることとした。

また、同地区では、高齢者など避難時に支援が必要な要援護者を誘導して犠牲になった消防団員や民生委員が少なくなかったことから、町内会が中心となって12年6月から月に1度、地区の防災計画づくりに向けた検討会を開催。生存者296人への避難行動などのアンケート結果を踏まえ、なぜ多くの犠牲者が出たのかを検証し、要援護者の支援は発災から15分以内に限定するなど、自助共助を住民自らが考えてまとめた「安渡地区防災計画」を13（同25）年10月に発表した。

防災・減災の発信基地としての公民館建設に関しては、特に活発な議論が交わされた。同地区は、震災前の利用者が07（同19）年以降は1万人を超えるなど、公民館利用率は県内でも有数の高さを誇っていた。背景には、町内会という住民自治組織と並行して、大槌稲荷神社（二渡（にわたり）神社）を核とする虎舞保存会、安渡大神楽会、手踊り会、雁舞道（がんまいどう）七福神会のほか、趣味の会や社会福祉系団体なども加えると、50の組織・団体が存在し、横のつながりを形成していたことがある。公民館は、地域住民にとってコミュニティー活動の重要な場であった。

新たな公民館建設の要望を聞く会は14（同26）年1月25日に開催された。会場となった旧安渡小体育館には50人近い住民が集まり、部屋の間仕切りや小学校の天体望遠鏡をどこに置くかなどの施設の使い方や今後の災害への備えについて熱心に協議。17（同29）年1月、コミュニティー活動の場としてだけではなく、災害時の避難所機能を併せ持つ「大槌町中央公民館安渡分館・避難ホール」がオープンした。

Interview

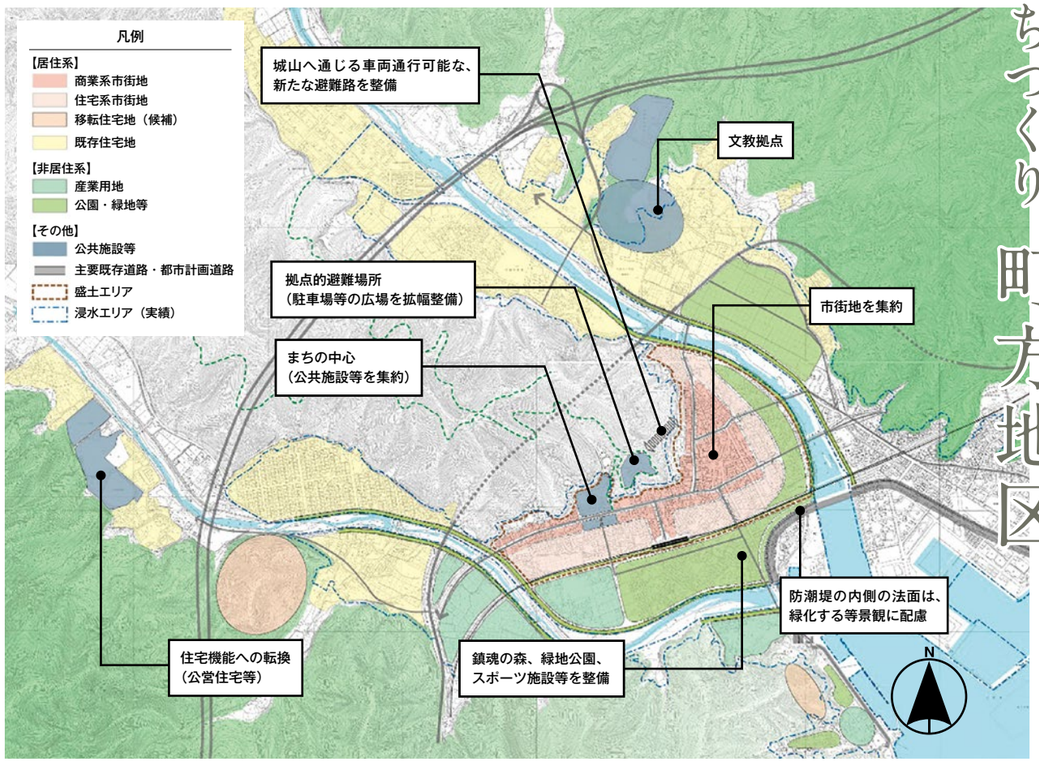
安渡小学校の閉校
地域に影響大きく

安渡町内会　会長
佐々木（ささき）慶一（けいいち）さん

地区の防潮堤について協議したのは震災後間もない時期であり、津波の脅威を身近に感じていたので、高い方がよいという意見が多かった。震災前の防潮堤が今回の津波で倒壊したため、より頑丈な台形になった。防潮堤のすそ野が広がり、元々人が住める所が少ない安渡ではかなりの面積が取られてしまうことになったが、「想定外」の事態を二度と繰り返さないために、県が提示した海面から14・5メートルの高さを受け入れた。

安渡は昔から近所付き合いが活発で暮らしやすい町だったが、避難所生活、仮設住宅、恒久住宅という段階でコミュニティーが作られては壊され、住民にとって精神的負担が大きかった。さらに、地域として残念だったのは小学校がなくなってしまったこと。小学校があると、子どもの行事などで親だけでなく、祖父母の世代も興味を持って集まり、地域に大人が出やすい環境が生まれる。そういった下地があると地域を巻き込んでの活動がしやすかっただけに、ダメージは大きかった。

まちづくり 町方地区



■ 図8-5　2011年12月時点の町方地区の復興イメージ図

「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」から

再び中心市街として

町方地区は、小鎚川と大槌川に挟まれた平野に宅地や商店街のほか、町役場をはじめ町立図書館などの公共施設が立地する大槌町の中心街である。震災前の人口は4483人と町全体の4分の1を占めており、上町・本町・栄町・須賀町・大町・新町・末広町の七つの区域に分かれていた。それぞれに特色があり、上町と末広町には町内会などの住民自治組織が形成されていたが、他の区域には自治会がなかった。また、新町と大町、末広町の住民らで組織された「御社地会」や、各区域にあった商店経営者の会など、町方地区は区域ごとのコミュニティー意識が強かった。

震災の年の10月に始まった計4回の地域復興協議会は、7区域のあり方について一つの枠組みの中で総括的に議論を進めることになった。これは、今後の人口減少を見据えたコンパクトなまちづくりを目指すためだった。行政が設置したこのような枠組みに対して、町方地区の住民はそれぞれの区域の被災前の事情や住民の意向を生かす必要があると考え、各区域の代表者による独自の会議体も同時並行で開催していた。

同協議会での議論は、防潮堤の高さを決めることが優先された。県は震災前の海抜6・4メートルよりも約8メートル高くなる、14・5メートルの案を提示。この案に対し、住民から「要塞のような高い防潮堤に囲まれた生活になることを考えると、その予算を盛り土造成に使った方がよいのではないか」といった高さに対する疑問や「自分たちの意見は県に通るのか。計画ありきの議論なのではないか」という声も上がった。

一方、防潮堤や盛り土よりも、商店や住宅再建の話がしたいという意見が出るなど、日常を取り戻すための具体的な議論を求める様子がうかがえた。同協議会を経て策定された基本計画で、町方地区は防潮堤の高さを14・5メートルとし、被災前と同様に行政機能や商業地を配置した中心市街地として位置付けられることになった。小鎚川の河口に面する須賀町と栄町は非居住区域に指定され、当該住民は他地区への移転を余儀なくされた。この一帯には、震災の風化を防ぎ、犠牲者を追悼する公園「鎮魂の森」や緑地帯が整備されることになっている。

「御社地」に施設集約

町方地区の住民が参加して、2013（平成25）年に開かれた「デザイン会議」では、11（同23）年の地域復興協議会のような同地区を総括的に捉えた議論と異なり、被災前の地域住民のつながりを意識した運営が行われた。末広町のワークショップでは商店街・松の下・御社地の三つのグループ、上町と本町のワークショップでは城内・四日町・八日町の三つのグループというように、さらに細かく地域を分けて議論。各地域5回にわたるワークショップで出された意見は、末広町では商店街の道路の配置や駐車場、祭りを意識したまちづくりに関するものが多く、上町・本町では水路の使い方や県道の位置、湧水のある生活を求める声など、地域ごとの特徴が明確に表れた。

このうち、末広町商店街は震災の年の7月から有志が集まり、元の場所で再建することで意見が一致。16（同28）年6月、同商店街を中心とする大槌町中心市街地復興商業グループに対し、震災復興の資金を援助する県の「グループ補助金」の交付が決まり、再建に向けて大きく動き出した。

町の中心部は、11年12月の復興計画案では上町の現役場庁舎付近に公共施設などを配置し、整備されることになっていた。その後、12（同24）年5～7月に開かれた町内事業者による中心市街地復興検討会で、末広町の御社地周辺に商業施設などを集約する意向が示され、町の復興計画にも反映されていく。

14（同26）年7月に策定された大槌町中心市街地再生基本計画で、被災した御社地周辺の公共施設の再建▽新しい商業施設の設置▽御社地公園の整備を一体的に行う内容が示され、町は同年8月25日、現在の御社地公園周辺を津波復興拠点区域とする都市計画を決定した。

同計画に基づき、震災前と同じ高さの地盤に御社地公園が整備され、同公園に面して18（同30）年6月、町立図書館や多目的ホール、会議室、震災伝承展示室を併設する大槌町文化交流センター（愛称・おしやっち）がオープンし、同時期に大槌郵便局も開業した。それに先駆けて同年2月にはコンビニエンスストアも誘致された。

Interview

議論の時間足りず 反省も

町方地域復興協議会　会長
小向（こむかい） 幹雄（みきお）さん

協議会の議論では町方を一くくりにしたが、個人的には地域ごとの意向を大事にしたかった。そんな思いもあって、地域の代表者と独自の会議も行ってきたけど、町方という対象エリアが広かったし、検討する問題が大き過ぎて、イメージが湧きにくかった。だから具体的な話し合いがなかなか進展しなかった。

町方の復興まちづくりは、人口が少なくなっていく中で、当初から商店街が中心になるやり方をしていくという考えがあった。町の人は、商店の周りに人が集まれるような場所を望んだと思う。でも、現時点でできているのは、家と家の間に店が点在する状況。こんなはずじゃなかったと思う。最初の頃は、夢や理想も含めて「こんな中心部にしたい」っていう思いを出し合っていたけど、時間がたつにつれて、出店しない人が出てくることも。復興を急ぐあまり、住民たちが「こういう町が欲しい」という思いを生かしたまちづくりを十分に検討する時間が足りなかったんじゃないかなと反省している。

まちづくり 沢山・源水・大ケ口地区

町の環境変化に対応

沢山・源水・大ケ口地区は、大槌川沿いに広がる低地部に位置し、町の中心である町方地区に近接する立地を生かして住宅地や商業地が形成されていた。沢山・源水・大ケ口地区地域復興協議会での主な議論のポイントは、大槌湾に整備する防潮堤の高さや、大槌インターチェンジなどの町の整備への対応についてだった。

防潮堤の高さについては、当初、「防潮堤は14・5メートルは要らない。10・5メートルでよいのではないか」という意見もあったが、この高さでは東日本大震災と同クラスの津波が来襲した場合、3地区の浸水が想定され、宅地のかさ上げが必要となる区域が発生する。残った家を取り壊して盛り土をすることになれば、復興までの時間がかかるため、同地区が浸水しない海抜14・5メートルの防潮堤整備を要望することとなった。

町の整備への対応については、▽小中一貫教育校となった町立大槌学園を県立大槌高校の近くに整備して教育機関をまとめる▽三陸縦貫自動車道大槌インターチェンジ付近に橋を設け、源水側に渡ることができるようにして往来をしやすくする▽被災した町方の住宅地の受け皿として津波被害に遭った大ケ口町営住宅跡と町立大槌中学校跡を盛り土して災害公営住宅を整備する――などが検討された。これらは復興計画に反映され、復興事業として整備が進められた。

子どもたちが安全に通学できるよう整備された、大槌学園付近の道路

大槌インターチェンジ付近に設けられた源水大橋

沢山・大ケ口地域復興協議会会長の阿部敬一さんは計画策定のプロセスについてこう振り返る。

「地域復興協議会には若い世代の参加が少なかった。そもそも復興協議会が土曜日の日中に開かれていて、若者は復興のために動いている時間なので、60～80代の高齢者しか集まれない開催日時の設定にも問題があったと思う。そんな中、少しでも若者に意見を出してもらおうと、都合が合わない、参加するきっかけがないなどの理由で協議会に出ていなかった若者たちが集まって話す機会を設けたが、計画策定まで時間がなく、意見をまとめて提出することはできなかった。『今から見直しは必要ない。復興が遅くなる。若い人の意見は10年、20年先に聞けばいい』と言っていた人もいるが、私は『若い人たちにしっかりと託していくことが大切じゃないか』と言ったこともある。とにかく、町民が主体の会議に、多くの町民、特に若い世代が不参加だったということが残念だった」

まちづくり 小枕・伸松・浪板地区

小枕・伸松の高台移転

小枕・伸松地区は、漁港と背後の山の間に住宅が集まっていた地域で、市街地へのアクセスには小鎚橋を通る必要があった。2011（平成23）年度に策定された復興基本計画では、小枕地区と伸松地区の間の高台に新たな宅地を造成することが示されていた。しかし、移転希望世帯が10戸に満たないこと、山を削って宅地造成することで生まれる危険や、高齢化による集落の維持が困難になるとの見解と共に、内陸部への集団移転案が町から提示された。

これに、地元住民から「住み慣れた土地で震災前の人とのつながりを大事にしたい」「考えてみてほしい。漁民はどこに住む、海か、山か」などという声が上がり、住民自ら町に高台移転の要望書を提出。度重なる話し合いを経て当初の計画通り宅地造成が決まり、震災前と変わらず海を臨むことができる高台団地へ、全24戸の移転が実現。団地の特徴として、各世帯が数平方メートルを供出するコモンスペースを設け、隣近所が快適に暮らせるよう図っている。

この団地に住む祝田榮一さんは、「復興基本計画の段階で高台移転が突然中止になり、かすかな望みで土地所有者の松村建設さんに相談したら、快く当該地の採石権を放棄してくださった。ありがたかったです。要望書提出後、先が見えない時期には、応援職員の皆さんや小枕のまちづくりに協力してくれた東京大学の先生の励ましが大きな支えになりました」と話す。

高台を造成した土地に建てられた小枕団地

景観を守った浪板

浪板地区は町の代表的な観光資源である浪板海岸に臨む集落で、震災前は白砂青松の美しい景観を誇り、海水浴やマリンスポーツが目当ての多くの観光客でにぎわっていた。そのため、地域復興協議会では、当初から風光明媚な景観を望める住宅地の確保と、津波で消失した砂浜の再生による観光の復興が主な議論となった。

この結果、防潮堤を震災前の高さで復旧し、住宅地は既存宅地のかさ上げや斜面に新たな宅地を設けることで眺望のよい住宅地づくりを目指すこととなった。砂浜再生については、震災前から浪板海岸でサーフショップを営む杉本浩さんを中心に「浪板海岸砂浜再生プロジェクト」を16（同28）年6月に設立。行政への働き掛けや浪板地区の資源を活用した観光事業に取り組んだ。18（同30）年3月、岩手県の浪板海岸砂浜再生技術検討委員会により砂浜再生は可能であると判断され、実現に向けて動き出した。

浪板地域復興協議会長の臺野宏さんは「協議会が開催された初期の段階から、海岸が再生されて海を眺めながら日常生活を送るのがこの地区の望みだった。議論の結果、高い防潮堤は造らないことになった」と言う。

砂浜がなくなった震災後の浪板海岸

新しい町の取り組み 町文化交流センターおしゃっち

子どもから高齢者まで、町民が気軽に利用できる施設「おしゃっち」

議論重ねた基本計画

震災によって全壊した中心市街地の集会施設「御社地ふれあいセンター」「大槌町立図書館」「須賀町栄町保健福祉会館」の再建に向け、2013（平成25）年度から本格的な議論が行われた。町役場は「大槌町メディアコモンズ検討委員会」を設置するとともに、住民ワークショップによる意向把握に努めた。同年度に基本構想をまとめ、14（同26）年11月に基本計画を立案、15（同27）年3月には、基本構想を再検討して新たにまとめ直した。

基本計画では、被災した三つの施設の役割を復旧させるだけでなく、それらを一つにまとめ、新しく求められる機能に応じた施設の建設が策定された。その機能を①情報が集まる空間②多目的でオープンな空間③創造的な活用ができる空間——の3点に集約。「未来の大槌人の育成」と「文化の再生の知の継承」を推し進める創造的復興の拠点となる複合施設を、末広町の旧跡である御社地周辺に整備することが決まった。その後、より具体的な諸条件を整理して御社地エリア復興拠点施設の基本計画を策定した。

旧跡「御社地」

江戸中期の仏教家菊地祖晴が1764（明和元）年に建て、後に大宰府天満宮の天神を祀った仏道修行の場「東梅社」の跡地。池のそばに鳥居や社殿、灯籠などがあり、町民憩いの場所だったが、東日本大震災の津波で流失した。

15年10月から、御社地エリア復興拠点施設の基本計画を前提とした新施設の設計・施工の検討が開始された。住民や高校生を対象としたワークショップも開催され、主な活動目的や効果的な設備に関する意見収集を行い、実際の計画に反映させた。町民からは、「飲食しながら話せる場所が欲しい」「明るく開放的な外観がいい」「町のシンボルになるような施設を期待する」など、多くの意見が集まり、それらを生かした施設が完成。愛称は公募によって旧跡にちなむ「おしゃっち」に決定し、18（同30）年6月10日にオープンした。

図書館や震災伝承室

純木造3階建ての「おしゃっち」は、1階に多目的ホールとレッスン場、2階に会議室、スタジオ、調理室、3階に図書館が配置された。また、震災伝承の機能として2階に震災伝承展示室、1階のホワイエ（ロビー）に震災後の大槌町の歩みがパネル展示された。

建設に当たり、次のような工夫がされた。まずは、井戸端会議のような小さなコミュニティーの場を大切にするという考え方である。大槌町には、近所の人や友人と気軽に集まって話す「お茶っこ」の習慣があることから、施設内にも気軽に飲食をしながら話ができるフリースペースを多く配置。敷地内にコンビニエンスストアを誘致するなど、利用者の便宜を図った。

また、建物の構造は「光」と「木」に重点を置いた。震災前に比べて施設周辺の建物が少なくなったことから、夜間にも町に光を届けるようなライティングを施すとともに、町および県産の木材を多く活用し、かつての日本家屋のように、梁（はり）が見えるデザインを採用。さらに、近接する御社地公園との連携も考慮し、壁一面をガラス張りにすることで、開放的な空間をつくりだした。

オープン以降、サークル活動やコンサートなど、施設はさまざまな用途で利用されている。特に施設前の駐車場は、町内外の各種イベントに利用され、多くの人が集まる施設となっている。

柱がなく、開放的な空間の町立図書館

震災を経験した町民の証言を紹介する震災伝承展示室

Interview

町民が集まる場所 津波を語り継ぐ場所

大槌町文化交流センター　所長　北田竹美（きただ たけみ）

施設を利用する町民の皆さんから「ほっとする」と言われることがあります。飲食ができるフリースペースを設けたことや、木をたくさん使用し梁を見せるデザインとしたことが要因かもしれません。大槌では一つの空間や「場」が醸成されることによって、コミュニティーができていきます。おしゃっちは、地域の方々が集まりやすい「全部ありのお茶っこの会」のような空間を目指しました。

今後は、現在のような町民利用はもちろん、町内外の交流の場としても活用してほしいと思っています。

また、この施設は震災伝承事業のコア施設でもあります。今後は、町職員や町民の手によって震災伝承事業を広げていくことが大切だと思います。行政のための伝承施設ではなく、町民が育てていく施設になってほしいです。これについては、大槌の子どもたちにも協力を仰ぎながら進めていきたいです。学校、行政、町民の三つの力によって、伝承事業を継続していくことが大切だと感じています。

新しい町の取り組み 小中一貫教育

全国の教育者から注目を集めた「小中一貫教育全国サミットinおおつち」

地域一体で教育を

大槌町では、震災後から、義務教育の9年間を通して系統的・継続的な学びを行う「小中一貫教育」を施行している。

大槌町教育委員会は、震災以前から小中一貫教育の導入を構想していた。当時の大槌町は、学力の向上や問題行動の改善、小学校から中学校へ進学するときに生じる学びのつまずきを解消することなど、さまざまな課題を抱えていた。

それらを解決するためには、小学校と中学校が連携を深め、学校と保護者、地域住民が協働して総合的に子どもたちを育むことが重要であり、方法の一つとして小中一貫教育の有効性が指摘されていた。その矢先、震災が発生し、町内の小中学校7校のうち5校が被災。浸水区域が広く、元の場所に学校を建てることが不可能になった。子どもたちの学習環境を新たに整える必要があったタイミングで、小中一貫教育を進めることを決定した。

町教育委員会は、町に2校の小中一貫教育校を開校した。施設一体型の義務教育学校である「大槌学園」と、施設分離型の小中一貫教育校「吉里吉里学園」だ。

大槌学園は、町立小学校4校と町立大槌中学校を統合し、新たな校舎を建設した。吉里吉里学園は、既存の校舎を活用し、これまでのコミュニティーを維持し、より豊かにしていくことを目指した。両校では、義務教育の9年間を3期に分け、小中学校のスムーズな接続を図る「4・3・2制」を導入し、「中1ギャップ」などの学力のつまずきをなくすカリキュラムを構築した。

また、大槌学園と吉里吉里学園は、学校だけでなく、家庭や地域住民と連携し、地域一体で子どもを育てるという考え方を持つ「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」の体制を取っている。そのため、学校は地域に対して情報や活動を開示するとともに、「大槌臨学舎」や「大槌町こども教育センターOLAI（おらーい）」など、放課後学習のサポートや子どもたちが安心して過ごせる居場所との連携などで、学校外でも地域で子どもを見守る体制を取っている。

ふるさとを愛する人に

大槌町の小中一貫教育の取り組みの一つとして、「ふるさと科」という全学年の特設科目を設けている。2年間の試行期間を経て、2015（平成27）年度から本格実施された。同科は、地域への愛着を育み、復興発展を目指す社会の中で自分の役割を果たし、自分らしい生き方の実現を目指す学習活動となっている。

ふるさと科では、「地域への愛着」「生き方・進路指導」「防災教育」の三つが学びの柱となっている。

「地域への愛着」では、町産の新巻きザケづくりやワカメの加工体験・販売、郷土芸能発表会などを行い、地域の歴史や特産物、郷土の文化、郷土芸能などを体験的に学ぶことで、地域社会への関心や郷土への愛着心を高めることを目指している。

大槌町の特産物であるサケをテーマにした体験学習

「生き方・進路指導」では、地域の企業や団体と連携した職場体験などを通して郷土の産業や経済を学び、自分の生き方や進路を考え、将来を切り開く能力を育成している。

「防災教育」では、地震の仕組みの学習、防災バッグの中身の検討、防災マップ作りなどを行うことで、郷土の自然や地形、災害や防災体制について理解を深め、災害時や防災に対しての主体的な判断力と実践力を育成している。

全国から注目集まる

18（同30）年11月に、2日間にわたって「小中一貫教育全国サミットinおおつち」を開催。全国から延べ1603人の教育関係者が訪れ、より充実した教育に向けた議論・検討がなされた。ふるさと科を含む各教科の授業が公開されたほか、被災地での開催が初めてだったこともあり、幼くして震災を経験した9年生による語り部の発表も行われた。ほかにも、地域住民による物産展なども開催され、充実したサミットとなった。前大槌町教育委員会教育長の伊藤正治（いとうしょうじ）さんは、「全国から来ていただいた方はもちろん、地域の皆さんにも教育に対する関心を持ってもらえて良かった」と話す。

Interview

新しい古里をつくる力になってほしい

大槌町教育委員会　前教育長
伊藤（いとう）正治（しょうじ）さん

震災前は、自尊感情が低い子が多かった。でも、小中一貫教育に移行して、町民みんなで子どもたちを育てていくようになってから、子どもたちの自己肯定感が育ってきています。地域の人たちが、先生が気付かないところを見てくれるので、子どもたちも「僕たちのことを思ってくれている」と感じているようです。それが一番大きな変化です。カタリバに来る大学生や高校生とも関わって、多様性に触れることが、子どもたちにとって良い経験になっていると感じます。

今の1・2年生は、震災後に生まれた子どもたち。だから、震災前の大槌をきちんと伝えていきたい。そして、新しい古里をつくっていく力になってほしいと思い、ふるさと科を作りました。将来大槌を出ることになっても、外から気に掛けてくれたり、戻ってきてくれたりするように、古里を好きだと思える学びにしたいです。きっと何年後かに、大槌に帰ってきたいと思う人が出てくると思う。それが楽しみです。

新しい町の取り組み　復興まちづくり大槌株式会社

早期復興を目指して

「復興まちづくり大槌株式会社」は、復興事業を早期に軌道に乗せることを目的とし、2013（平成25）年3月1日に設立された。同社は、行政をサポートし、官民連携および民間同士の連携を促進・調整する役割を担う第三セクターである。業務内容には、中心市街地の活性化に向けた事業計画、町の復興に関する情報発信、観光物産に関する企画・販売促進、宿泊施設の運営などがある。

宿泊施設の開業

同社の中心的な事業は、吉里吉里地区の宿泊施設「ホワイトベース大槌」の管理運営。復興工事の本格化による作業員の宿泊施設不足を解消するため、14（同26）年4月に5年間限定で開業した。平均稼働率は82.5％、宿泊者数は延べ11万3700人を達成し、当初の予定通り、19（同31）年3月に営業を終えた。

まちづくり会社の取締役だった石井満さんは、当時をこう振り返る。

「77室という部屋数と、長期滞在しやすいように全室をシングルルームにしたビジネス設計が良かったと思う。大槌の復興をなんとか加速したいという思いで営業していたが、開業当初は民業圧迫という声もあり、その時は何とも言えない切ない思いがあり苦悩した。しかし、結果として多くの方が宿泊し、30人の雇用を創出したことで、町の復興に貢献できたのではないかと思う。宿泊する方は、遠くから大槌の復興のために来てくださっていたので、おいしい食事を提供することとコミュニケーションを大切にした」

市街地再生と産業振興

まちづくり会社は、中心市街地の再生に向け、「中心市街地再生基本計画」の策定支援や、商業施設の建設に向けた事業者意向調査を実施した。しかし、商業施設の建設は、実現には至らなかった。その要因として、中心市街地に広い土地がないために核となる施設を誘致できなかったことや、行政や事業者との議論の積み重ねが不十分だったことなどが挙げられる。

そのほか、産業振興として「大槌町長杯大槌湾カレイ船釣り大会」の開催、町内事業者6社と協同したお歳暮用ギフト商品「利き鮭セット」の商品企画開発など、観光・商品開発事業を行った。

まちづくり会社は、19（令和元）年5月、復興事業の加速化の役割を終え解散した。

Interview

生まれ育った町の復興の最前線で働く

当時 復興まちづくり大槌株式会社　取締役
経営企画部長
石井 満さん

高校卒業後に就職で大槌を離れ、発災時は東京に住んでいました。震災前から、地元を離れていることに「長男なのに、いいんだべか」という思いを背負っていました。そんな時に震災が起こり、『本当の復興を大槌でやってみたい』という気持ちが生まれてきて、宿泊事業と生まれ育った中心市街地の復興プロセスに参加できるというこの会社に応募しました。復興の最前線といえるような職場で、行政と民間と一緒になって仕事ができたことは貴重な経験でした。

震災から8年が経過した現在の大槌を見ると、町内に仕事が少ないことが課題だと思います。復興が終わり、建設関連の仕事がなくなる中、地場産業を活用した働く場を作っていかないと、もっと人口が減っていくように思います。

全国には小さい町でも成功している例もあります。何かをやれば新しい動きが起こるはず。復興まちづくり大槌株式会社で取り組んできた、商品開発や販路拡大などの産業振興をもっと推進していくべきだと考えています。

新しい町の取り組み　コミュニティー形成支援

住民のつながりを支援

自宅再建や災害公営住宅の建設が本格的に進んできたことで、仮設住宅などから、ほかの場所へ移転する住民が増えた。そのため、移転先での住民同士の交流や自治会への加入、新たな自治会の設立など、町内では新たなコミュニティーづくりが行われた。

2016（平成28）年4月、町役場内に「コミュニティ総合支援室」が新設され、自治会の設立や運営を支援するための体制が整えられた。また、同年に「元気なご近所プロジェクト」を発足させ、各地域の住民組織の立ち上げや住民活動を支えるための「地域コーディネーター」を町内5地区に配置した。さらに、地域活動を指導・助言する「地域アドバイザー」を設置し、コミュニティーづくりの支援体制がつくられた。町内のコミュニティーづくりについて、大槌町コミュニティ総合支援室の越田実紀子は、こう話す。

「コミュニティーづくりは地域によって進め方が違うと考えている。例えば、震災後に新しくできた臼沢自治会では、小鎚川を挟んで対岸にできた四つの災害公営住宅団地も、同じ自治会として一緒に活動していくことができるよう体制づくりが進められている。中心部の町方地区については、震災前から全地区に自治会があったわけではないため、今後、地域の皆さんと協議し、地域活動を積極的に行う場合は自治会の設立も視野に入れている。吉里吉里地区では公民館が中心となり、復興した新しい町に合わせた自治会再編が行われた。このように、地域によってコミュニティーづくりの歩み方が違うので、行政としてもサポートを続けたい」

協議会の開催

14（同26）年度から、町内の自治会やNPO団体の関係者が集まり、町全体でのコミュニティー活動の課題共有や連携方法について協議を行うコミュニティー協議会が開催されるようになった。

初期は各支援団体の自治会との関わり方が議論の中心となっていたが、復興が進んできた18（同30）年度からは、地域主体でコミュニティーづくりを進める方法へと議論が移行していった。例えば、安渡町内会では会員数が減少したため、安渡地区単独での行事開催が難しい場合には近隣の自治会と連携して実施するなど、各地区の状況に合わせて課題を解決することがテーマとなった。

Interview

町民一人一人が安心して元気に暮らせるように

大槌町コミュニティ総合支援室
総合支援企画班　班長
越田 実紀子

住宅再建がやっと落ち着いてきた今、町民の皆さんから「近くに誰が住んでいるか分からない」「近所の人とのあいさつがなくなった」「仮設住宅にいた頃の方がみんなと話せた」という声を聞きます。住む家が新しくなっても、言葉に言い表せない寂しさのような心の隙間を埋めるには、日常的な人と人とのつながりが大切です。町民の皆さん一人一人が安心して元気に暮らしていけるコミュニティーづくりを役場として町民と一緒に取り組み、サポートしていく必要があると考えます。

震災によって、どの地域も状況が大きく変化しました。防災や福祉、環境整備などの取り組みを継続的に話し合い、合意形成につなげる地域の体制を築いていきたいです。

震災を経験して、地域によって育てられ、支え合って生活が成り立っていることを自分自身強く感じました。大槌らしいつながりの強いコミュニティーを取り戻し、時代の流れで新たに生じる課題に対応していきたいです。

おらほのまちは、おらほで——大槌町の復興まちづくり

大槌町「元気なご近所づくり事業」地域アドバイザー
東北大学大学院文学研究科
坂口 奈央

「行政まひ」が奮起促す〝住民力〟の裏に漁労文化

災害後の住民は、日常の利害関心から一時的に解放され、地域社会の中で一体感を生む効果が高まる。このような状況の下、被災地の住民は、自らの経験と人脈を生かしながら住民参加を促す創発行動をしたり、復興まちづくりを迅速に進めるための合意形成に働き掛けたりと、固有の特性が見られる。

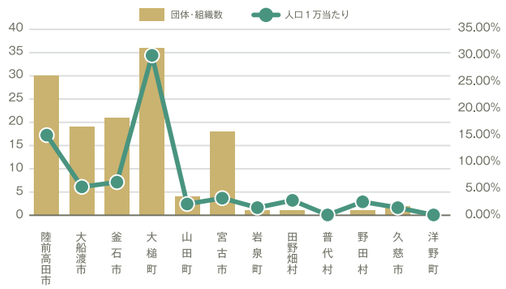
岩手県内において東日本大震災後、復興まちづくりを目的に発足したNPOや一般社団法人を主とする住民組織・団体の数などを調査した。なお、本分析における組織・団体の抽出は、被災地区の住民が主体的に関与していること、支援事業の拠点を被災自治体に置いていること、そして、草の根的かつ継続的な活動をしていることを条件とし、ボランティアは含んでいない。

住民団体の多さ突出

調査の結果、沿岸12市町村で震災後から2017(平成29)年にかけて発足した組織・団体の数は、大槌町が36と最も多かった。また、人口1万人当たりの組織・団体数も、30・92%と突出していて、次に多い陸前高田市の倍となった(図8-6)。

その要因として、次のようなことが考えられる。大槌町は、震災で行政の中枢にいた町長ほか幹部職員が多数犠牲になったり、役場の建物が被災したりして、行政機能がおよそ5カ月間にわたり、まひ状態となった。そのことで、各地区の避難所を中心にした主体的運営や活動が活発化した——。

大槌町は震災を契機に、「おらほ(俺たち)のまちは、おらほで復興させるんだ」とする、主体的に社会課題に立ち向かう〝住民力〟が、県内の他の被災地よりもパワフルに顕在化したと言ってよい。



■ 図8-6　震災後県内被災地に発足した住民団体数比較

県調査統計課「岩手県人口移動報告年報」、各自治体の社会福祉協議会データ、心の復興事業採択資料、ホームページ「いわて三陸復興のかけ橋」、同「いわて連携復興センター」を参照し作成

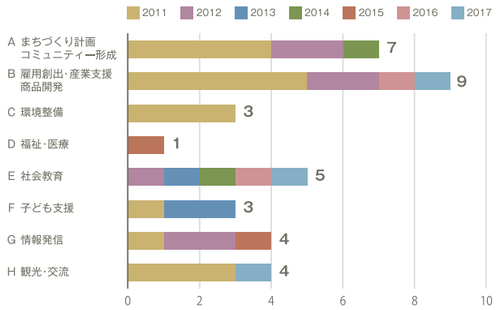
町民自ら積極関与

次に、大槌町内で発足した組織・団体の内訳を見ていく。震災前の町内における住民組織・団体数は6だったのに対して、震災後に発足した組織・団体数は7年間で36と6倍も増加した。このうち発足の主体は町民が25であり、外部支援者11の倍以上と格段に多い。震災後、被災地域社会は、外部支援者に触発された活動で満たされる傾向にあるが、大槌町の場合、決して外部支援者だけに頼らず、町民自らがまちづくりに対する積極的な関与を行動で示していた。特筆すべきは、17年度までに毎年コンスタントに組織・団体が発足していた点である(表8-1)。

■ 表8-1　震災後発足した年ごとの団体数

	発足団体数	町民主体	外部支援者主体
2011年	17	10	7
2012年	7	5	2
2013年	3	2	1
2014年	2	1	1
2015年	2	2	0
2016年	2	2	0
2017年	3	3	0

主な活動内容の内訳は、次の通りである。11(同23)年度に発足した組織・団体は、「雇用創出」関連の活動が最も多く、2番目に多かったのが「まちづくり・コミュニティー支援」であった。その後17年度までに発足した組織・団体の主な活動内容は、「雇用創出」関連、「社会教育」が継続的であるなど、活動内容からは、発災後の局面ごとに、町民がどのような社会課題の中にあるのかが読み取れる(図8-7)。



■ 図8-7　大槌町内住民団体活動内容分類(年ごと)

大槌町社会福祉協議会、大槌町総合コミュニティ支援室提供資料から

赤浜地域復興協議会で住民独自の復興計画案を行政側に説明するメンバー(2011年10月撮影)

東日本大震災における三陸沿岸漁村部の復興まちづくりの様相について、民俗学者の川島秀一氏が「かつての漁労集団が蘇(よみがえ)ったかのようだ」と表現しているが、大槌町にも同様のありようがうかがえる。

「船団」で目的達成

代表的な事例の一つは、行政が提示した高さ10メートル以上の巨大防潮堤建設案に対して、住民がノーを突きつけた赤浜地区の議論である。その過程では、昭和40年代から20年ほど大槌町の花形的漁業であった、北洋サケ・マス漁での漁民らの関係性をほうふつとさせる行動が見られた。それは、船頭のような強力なリーダーシップを発揮し住民合意をけん引する人、まちづくりに関する外部からの情報を入手する人、同じ地区内の住民に理解を求める役割の人などが、地域ごと一つの船団となって、大きな目的を達成するために必要な役割を明確に各自が認識し、忠実に実行するというものである。中でも、自らの事情や状況を省みず、地域のためにひたすら尽力した地域リーダーの行動力とそれに伴う発言は、説得力を増していき、漁村ごとで難局を乗り越えようとする強力な団結へと導いていった。

海沿いの地域では、普段まとまりが悪いという所もある。しかし住民の間では、海を介した日常生活の何気ない思い出や、漁村のおすそわけ文化、豊漁と無事を願う伝統芸能など、海と暮らしを基盤にしたつながりとそれによって形成される価値観が、震災前まで当たり前の日常として構築され続けていたのである。そして人々は、経験と地域で培ってきた関係性を原動力に、激甚災害という非常事態を住民主体で乗り越えるために必要な機能を、無意識的に潜在化させ発揮していた。大槌町は、非常時ほど発現する地域の原動力を、圧倒的に見せつけた被災自治体の代表と言えるのではないだろうか。

第9章

この町と、人と

東日本大震災から、8年以上が経過した。
今も大槌町で生きる人たちは、あの日に何を思い、
そして今、どのように過ごしているのか。
一人一人の言葉に耳を傾けた。
ここに登場する16人の町民にインタビューしてくれたのは
同じくこの町で暮らす大槌高校の生徒たちである。

町文化交流センター「おしゃっち」で、震災の現実に向き合った町民にインタビューする高校生たち（2018年8月8日撮影）

Episode file
～まちづくり～

町民主体のまちづくり 気持ちくみ取り意見を尊重

東京大学大学院工学系研究科社会基盤学科　教授
中井（なかい）　祐（ゆう）さん

大槌復興基本計画のコーディネーター、また大槌デザイン会議の座長として、大槌町の復興まちづくりに携わった中井祐教授（50）。当時、どのような思いでまちづくりの計画を進めていたのか。「町民と共に汗を流す覚悟を決めて取り組んだ」という中井教授に聞いた。

― 大槌町のまちづくりに携わることになった経緯を教えてください。

私の専門分野は公園や広場などの土木や都市空間のデザインなのですが、震災前に岩手で橋のデザインの仕事を受けていたつながりで、岩手県から「大槌を見に行ってほしい」と頼まれたのが始まりです。それから大槌のまちづくりアドバイザーとして携わるようになりました。当時の町長だった碇川豊（いかりがわゆたか）さんとまちづくりについて初めて懇談した時に「町民が主体となって復興計画を作る」という強い意志が伝わってきました。そこで、共に汗を流す覚悟を決めました。

― まちづくりに携わる中で大切にしていたことはありますか。

各地区に専門家をコーディネーターとして配置し、隔週で町を訪れて地区の住民の方々と議論をしました。その中で大事にしていたのは、どんな意見が出ても反論せずに聞き、いったん受け止めるという姿勢です。もともと大槌町の方々は、自分たちのことは自分で決めるという意識が非常に強い。さらに町の中でも地区ごとに地形、なりわい、生活スタイル、町民の性格も違う。ましてや当時は極限状態でしたから、まずは気持ちをくみ取ることが大切でした。

― さまざまな意見を受け止めてまとめることは、簡単ではないですよね。

碇川町長からは「海が見える町にしたい」と言われていましたが、さまざまな意見を踏まえ検討を重ねた結果、巨大な防潮堤を造らざるを得ない計画となりました。私も、町のどこからでも海が見える町になればと本心では願っていたので、碇川町長に「先生、この計画で本当にいいんですか」と尋ねられた時、言葉が出ませんでした。できることはやり尽くしたと思っていますが、やるべきことが全部できたわけではない。安心・安全は大前提ですが、被災前の日常から失われたものもある。コーディネーターとしての私の責任だと思っています。風景とか自然とか、そういった身近にあるものの価値を大切にする町として、復興が進んでいってほしいです。

― まちづくりを通して印象に残っていることはありますか。

計画が策定された後の打ち上げの場で、今、復興局にいる那須智局長（現環境整備課長）が、涙ながらに「中井さんたちのおかげで、元の場所に住み続けることができる」と言ってくださって、役に立てて良かったと救われました。私たちのようなよそ者でも、中に入って携わることで信頼感が生まれ、コミュニケーションが深まるということを教えてもらいました。普段なら出会うことのなかったであろう方々と出会い、話し合い、助け合ったのですから、人生は不思議だなと感じます。

（取材／2018年7月）

中井 祐さん／1968（昭和43）年1月埼玉県生まれ。専門は景観論、土木構造物、公共空間のデザイン、近代土木デザイン史など。土木学会デザイン賞最優秀賞、2011（平成23）年に自身が協力した大槌町の屋台広場がグッドデザイン賞（復興デザイン賞）を受賞。

大槌高校生が聞いた16人の東日本大震災

この町で生きていく

今回の取材・撮影に参加した大槌高校復興研究会の生徒

佐々木 朱里（1年）
瀬戸 翼（1年）
中村 海鈴（1年）
野﨑 悠矢（1年）
藤社 彩乃（1年）
菅野 雅也（2年）
櫻井 ことみ（2年）
佐々木 加奈（2年）
佐々木 慎也（2年）
前川 菜緒（2年）
六串 香穂（2年）
八幡 有香（2年）
山﨑 大陽（2年）
山﨑 光（2年）

※学年は取材当時

大槌高生が取材、撮影

「町民の声を集め、町民も参加する」――。この震災記録誌の大きなテーマの一つだ。

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災。あの日以降、大槌町で何が起きていたのか。そして、そこで暮らす人たちはどんなことを考え、どのように行動したのか。ここから始まる、あの震災を乗り越え、今を生きる町民の実像に迫るインタビュー企画「この町で生きていく」。これらの取材・撮影は、東北大学文学部社会学研究室の学生たちからサポートを受けた県立大槌高校復興研究会の生徒たちが担当したものである。

18（同30）年8月、町文化交流センター「おしゃっち」には、さまざまなプロフィールを持った16人の大槌町民が集まった。発災時にまだ幼かった高校生たちは、その16人に幾つもの質問を投げ掛け、同じく震災の「体験者」として、より深い部分の言葉を引き出していった。

震災後、町内180カ所で定点観測撮影を行うなど、町の移り変わりを見続けてきた大槌高校生だからこそできた取材。まさにテーマとして掲げた、「町民が参加する震災記録誌」にふさわしい内容となった。

大槌高校復興研究会

大槌町の復興に貢献し、町の現状と今後を内外に発信しようと、2013（平成25）年に生徒たちが自主的に創設。次の5班で構成する。年3回、町内180カ所で震災後の風景を写真撮影する「定点観測班」▽夏休みや冬休みに児童らの相手をする「キッズステーション班」▽主に県外から訪れる高校生らに復興状況を伝える「他校交流班」▽防災訓練の実施や復興まちづくりで提言する「防災・まちづくり班」▽同会の活動をホームページなどで紹介する「広報班」――。

全校生徒約160人のうち7割が会員。18（同30）年には町役場と震災伝承活動に関する協力協定を締結し、町文化交流センター「おしゃっち」で定点観測班の成果などを映像で紹介している。防災活動を効果的に展開する学校などを顕彰する18年度の「ぼうさい甲子園」（兵庫県など主催）の高校生部門で、優秀賞を受賞した。

取材／山﨑 大陽・撮影／佐々木 慎也

「生きていること」はどれだけありがたいか震災で気付いた〝幸せ〟

冷静に考えると、あの日、一言で言えば地獄を見たってことかな。お経の中で地獄の世界は分かったつもりだったけど、まさかこういうことが目の前で起きるなんて、これ、夢じゃないかな、いつか覚めるんじゃないかなっていうところから、お寺での避難生活が始まったの。

吉里吉里のお寺では、仏様に供えるお食事を作るためにお米を持ってくる風習があるんだよね。あの時、お米が大体150キロあって、避難所に入ってきた人は250人。当日の夜中の11時過ぎかな。ご飯を炊いて、小さいおにぎりを1人1個食べることができた。

昼間は大人たちが捜索活動とかがれきの撤去、自分の家の何かを探すとかで出て行くんだけど、残った子どもたちが、避難所の運営をすごく助けてくれたの。トイレの掃除を一生懸命やってくれたのが、中学生。その姿を見て、小学生たちがお手伝いをしてくれた。50日の間、一度もトイレが汚れることはなかった。誰が入っても次の人が気持ちよく使えるようにしてくれて、とても素晴らしかった。

吉里吉里でも、線路を境に家が流された所と残った所があったでしょ。そういう差のために、町内で支援物資の分配方法などで避難所に入った人と家が残った人とのトラブルはあったかもしれない。でも、地域全体が同じように痛みを伴っているということを忘れてはいけない。

それで、お寺がある吉里吉里四丁目の町内会の役員や民生委員にお願いして、一軒一軒回って安否確認して名簿を作ってもらった。総数だと1260人分。多い家だと1軒に25人ぐらいいたのかな。名簿を持って災害対策本部に行き、そういう家も「避難所」として認めてもらった。そして、自衛隊が撤収する7月まで、全ての家に支援物資が行き渡るシステムを作ったのね。私が言い出しっぺだから、物資をお寺にもらって、責任を持って各家に配布することを約束したの。

振り返って思うのは、生きていることがどれだけありがたいかということ。お母さんが命がけで産んでくれた命を、どう生きていくのか。自分の頭で考えて行動していくことが、どれだけ大切か。こういう学んだことを大槌の住民の財産として残してほしい。もう一つ、自然災害で命を落とすことがない町にしていかなければならない。経験を後の世代にどう伝えていくか。若い人たちに考えてほしい。

両親に感謝して生きる、家族を大切にしながら生きる。みんながそういう思いになってくださったとき、すごく幸せを感じます。本当の幸せは、人が人を思うこと。人から大切に思われるような生き方をすること。それは、誰からも奪われることのない財産だと震災の後に気が付いた。そのことをもっともっと伝えなければいけないなと思っています。

高橋 英悟（たかはし えいご）さん

1972（昭和47）年5月、宮城県生まれ。28歳の時に吉里吉里にある曹洞宗吉祥寺の第18世住職となる。震災当時、同寺に集まった多くの避難者と共に避難所を運営。発災から50日後に犠牲者の合同葬を執り行った。犠牲者の回顧録「生きた証」プロジェクトの推進協議会長や、旧役場庁舎の保存を求める「おおづちの未来と命を考える会」の会長を務める。

高校生の感想

山﨑 大陽

震災の時は小学校3年生で知らないことばかりだったけど、今日英悟さんのお話を聞いて、あの時、お寺に避難したのは英悟さんの声掛けがあったからだと分かりました。お寺が避難所として開設されていたことなど、自分が知らなかったことを知ることができた、良い機会でした。

取材・撮影／山﨑 光

地域のことは地域で決める
防潮堤、震災前と同じ6・4メートルという決断

生まれも育ちも赤浜。新日鉄釜石の関連会社に勤めていたころは、寝るだけに帰ってくるようなもんだったけど……。津波で女房を亡くし、今は娘と二人暮らし。7年間仮設にいて、つい最近、赤浜に家を再建しました。

「赤浜の復興を考える会」は、震災後の避難所で「意見のあるやつはこの指止まれ」みたいな感じで集まりました。俺もみんなも、責任感や使命感があったわけではないけれど、毎日毎日、がれきの山を目の前にしているとね。こう思うだとか、ああ思うだとか、意見のあるやつが自然に集まってきたって感じでした。

国や県から14・5メートルの防潮堤を造る話が出たのは震災の年の秋。そんなに高い防潮堤を造ってしまったら海が見えなくなる、そのことで津波から逃げ遅れるっていうのもあったけど、それは後から出てきた話だな。まずは土地の問題があった。15メートル近い防潮堤を造るってことは、その倍くらいの土台が必要になるんです。土地が広ければいいんだけど、狭い赤浜にそんなの造ったら人が住むとこがなくなってしまう。

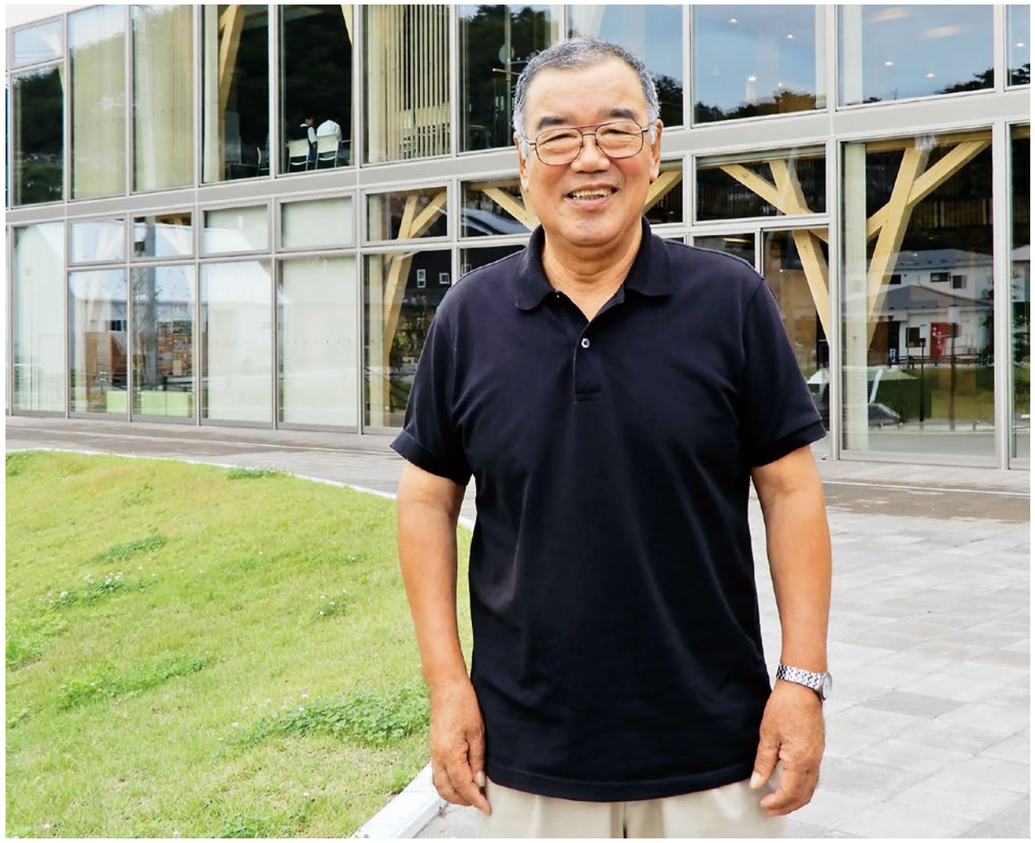
それじゃ大変だべと。それにもし15メートル以上の波が来て防潮堤を越えてしまったら、今度はその水の抜け道もない。内側に盛り土することで、土地も有効に使えるんじゃないかと。「赤浜はそうするべ」と意見がまとまりました。

もちろん、反対意見がなかったわけじゃありません。違う意見を持っていた人はつらかったと思うけれど、今はそれで正解だったと、震災前と同じ6・4メートルにしてよかったなと俺は思ってます。赤浜って所は地域柄、いろんな意見が出ても、話し合って最後はちゃんとまとまるってとこがある。ほかの地域ではあんまりないんじゃないべか。

「考える会」では防潮堤の他にも、どこどこの道路をつなげてくれだとか、道幅を広げてほしいだとか、避難所にいる人たちの声を吸い上げて要望書を町に出しました。半分も実現はしてないけど、今思い返すとある意味楽しかったかもしれないなあ。いろいろ言い合える場だったから。うん、何か、これからつくっていくっていう雰囲気がありましたね。

赤浜はもともと何があるって町じゃないし、これから大きく発展する地域でもない。でも、これまで住民みんなで仲良くやってここまで来たわけだから、それがこれからも続いていけばいいなと思ってます。特段何かが変わらなくてもいいの。みんなが穏やかに暮らしていけるこの地域が、ずっとここにあることを望んでいます。

最後に大事なものを三つ挙げろって？　赤浜と……娘だな（笑）。あとは何もねえなあ。



佐藤（さとう） 壽（ひさし）さん

1946（昭和21）年10月、大槌町赤浜生まれ。震災後避難所で立ち上げた「赤浜の復興を考える会」で、海と共に生きていくために防潮堤のあり方を考え、行政に働き掛けて震災前と同じ高さに計画を変更させる。現在は海が見える赤浜の高台に娘と2人で暮らしている。

高校生の感想

山﨑 光

防潮堤の高さについて深く質問できてよかったし、佐藤さんの答えに対してさらに質問することができました。話をしていると、佐藤さんがどれだけ大槌や赤浜のことが好きなのか分かりました。これからどんなことをしていけばいいのか、少しだけど分かった気がします。

取材・撮影／藤社 彩乃、佐々木 朱里

記憶を未来に残す 人々の暮らしと思いの記録を 写真と映像で後世に

昭和35（1960）年がチリ地震津波で、その時にカメラがあればいいなって思ったのね。22か23歳のころだったかな。その翌年にカメラを買ったの。ミノルタが初めて出した一眼レフ。それで病みつきになって、いろんなものを撮り始めたんだ。休みの日は、山に行ったり、泊まりがけで写真を撮ったり。十勝沖地震（2003年）の時の津波を8ミリフィルムで撮ってあったのが、今回の津波で全部流されたの、あれは残念。私は、風景とか行事、災害なんかも、今撮らなきゃ撮れねえんだっていうとこがあって、その様子を特に「残したい」っていうのが、震災前からあるなぁ。

写真や映像ってすごいものでね、百聞は一見にしかずっていうけれど、見れば、あっそうか、ってことになるからね。大槌高校復興研究会の皆さんも、定点観測やってるでしょ。すごいねぇ、あれは大事だ。先輩たちが撮ったものもあるでしょ。津波で何もなくなった所に家が建って町ができていく、それは町の記録だから。記録を保存していくことは、本当に大切だと思う。

私は、昭和32（1957）年から平成27（2015）年まで消防団に入っていたんだけど、地震に始まり地震に終わったって感じだね。平成13（2001）年に山火事があった時、消防団員と防災ヘリに乗って、町の中を撮った写真が、がれきの中から出てきたのよ。他にもいろいろあって、俺が小さいころは、産湯に使ってた愛着のある井戸があってね。その近くにあった箱山幼稚園で、真冬に裸になってね、乾布摩擦するの、毎朝。あれはすごかった。カメラっていうのは、好きで写真を撮るだけじゃなくて、記録性っていう強さを大事にしながら保存していく。まちづくりとして大事なことだよな。

震災後は、風景も変わったし、気持ちも変わっているけど、撮る意欲は変わってない。むしろ、なんでも撮りたいっていうかね。特にね、大槌まつりが特殊なもんで、町民は見にくるんじゃねえんだ、参加するために帰ってくる。そういう大槌の浜や祭りのあの「かまり」（当地の方言で匂い、香りの意）がね、フーッて来るんですよ。なんとも言われねえんだよなぁ。

何年か前に、娘の旦那がドローンを買ったんですよ。家がまだ建っていない辺りの町の様子を撮ったり、釜石のラグビー場とか、浪板の滝に行ったり。町としての復興は、まだだけども、俺の復興は、家を建ててこたつにあたって、お茶っこ一杯飲むの、あぁいいなって。それが私の心の復興だと思ってる。

高校生の感想

藤社 彩乃

話を聞いて写真を撮ることが本当に好きなんだなぁって思いました。写真について質問すると笑顔で楽しそうに答えてくれました。お客さんから「撮ってくれてありがとう」と言われるのがうれしいとおっしゃっていた時の笑顔が本当に素敵で、印象に残りました。

佐々木 朱里

カメラで写真などを撮るのが好きで、山に行ったり、泊まりがけで写真を撮ったりすることや、波や風の音を映像に合わせるのが一番楽しいと言った時の笑顔が印象的でした。

煙山（けむやま） 佳成（かなり）さん

1938（昭和13）年8月、大槌町末広町生まれ。安渡で薬店を営みながら57年間消防団員として活動。若くしてチリ地震津波を経験したことを契機に、安渡の町や人々の暮らしを写真に残す。2018（平成30）年に自身が記録してきた写真と映像約200点を「安渡地域アーカイブ展」で公開。

取材・撮影／瀬戸 翼、野﨑 悠矢

〝つながり〟が最大の財産
出会った縁を大切に、思いを後世につなぐ

大槌の人たちはお祭りになると大変な盛り上がりになるでしょ？そう思わない？　一つのイベントをすることで日常を一瞬忘れられる、その感覚が大槌の人たちに根付いている。いい例が郷土芸能。「ライトアップニッポン」もそういうところから始まった。

花火の原点は、亡くなった方に思いをはせるとか、弔うとか。当時はまだがれきもあって花火師さんにも難しいと言われていたけど、あれだけ大変な思いをして、やることが山積みの大変な時期に警察や消防が協力してくれたからこそ実現できた。花火を見ながら皆さん、涙を流しているんですよ。みんな、震災で家族を亡くしている。財産を失った人もいる。当時は涙が出なかったの。泣ける人はうらやましくさえ思えた。

今をどう生きるか、どうしたらいいかが先で、泣いている場合じゃなかったですよ。

そんな中で、普段は目にすることのないきれいな花火が目の前で上がっているわけ。一瞬だけど、何かきれいなものを取り戻せた瞬間だったんじゃないかな。あのころはまだ灰色の世界だよね。一瞬でも色のある世界が見られた瞬間に、自然とこぼれた涙なんだろうなって、私は今でもそう思っています。そもそもは鎮魂の花火でしたが、生きている人にとっても大きな意味を持っていたんです。

そして、児童や生徒の居場所となる「カタリバ」も力を入れた取り組みの一つです。これは学校が終わってから家に帰るまで気を遣うことなく話したり、勉強したりできる場所。文科省の方に「大槌の子どもたちに今、何が必要ですか」と聞かれて答えたのが「居場所」。学校が復旧しても避難所に帰ると、周りに遠慮しながら、大人の顔色を見ながら過ごす子どもたちがいっぱいいたんです。

そこで東京の「NPO法人カタリバ」が協力してくれることになって、小鎚神社の前にある集会所の上町ふれあいセンターを利用してスタートしました。やる場所とか、建物を建てる土地とか、その資金集めとか、さまざまな支援や協力してくれる人とのつながりで、カタリバが成り立っています。

そこに子どもたちが集まるようになったし、大槌町にとって少しずつ当たり前のような存在になってきた。支援や運営を続けてくださる皆さんに感謝しながら、日常的にちょっとの時間を過ごすだけでも違うと思うんです。復興が進むにつれて寄り添い方は変わるかもしれないけど、カタリバでいろいろな人たちと接することは、子どもたちにとって非常に大きな財産になると信じています。私が町議になったのも、子どもたちのために、自分に何かできることがあるんじゃないかと思ったからなんですよ。

それ以外にも本当にいろいろな方とのつながりを持たせてもらって、震災以来、ずーっと続いている。これが私の一番の財産。何かをするよりも、人と出会ったことを大事にするのが一番いいことなんじゃないかな。それによってその人たちが次の世代に影響を与えて、それがまた後世につながっていくんだろうなって思っています。

東梅（とうばい） 守（まもる）さん

1958（昭和33）年10月、大槌町小鎚生まれ。盛岡市や釜石市の新聞販売店に勤務していたが、震災を機に町議会議員に立候補して当選。震災の年の8月に始まった、打ち上げ花火で被災地を元気づける「LIGHT UP NIPPON」（ライトアップニッポン）、児童・生徒の居場所となる「カタリバ」のプロジェクトに携わるなど、復興に向けた取り組みに尽力している。

高校生の感想

瀬戸 翼

東梅さんが子どもたちのことを第一に考えて行動し、私たちのためにがんばってくださっていると思うと、とてもうれしかったです。

東梅さんの力がなければ、あのきれいな花火を見ることはできなかったと思いました。花火を見ている間だけでも、日常を一瞬忘れてほしいという思いを込めて取り組んだと聞いて、感動しました。

野﨑 悠矢

子どものために何かをやりたい、子どもたちを元気にしたいという思いに感激しました。大槌の子どもたちのために、こんなに熱くなってやってくれる人がいたことに初めて気が付きました。こういう人たちのおかげで私たちはいい環境で暮らしていくことができるのかと、感謝の気持ちが湧きました。

取材／六串 香穂、山﨑 光・撮影／佐々木 慎也

400年以上続く伝統と震災時に大きな力となった緩くて豊かなつながり

郷土芸能っていうのは門外不出でよそ者は入れないのが当たり前でした。でも、30年くらい前かな、それは違うよと、ちょっとずつ外へ開いていったのが結果的に震災後に役立った部分はあると思います。震災の年の7月31日まで臼澤鹿子踊（うすざわしおどり）の伝承館が避難所となり、震災発生直後から数日間は150人以上の人々が避難されたと思います。臼沢地区の人だけじゃなくて、安渡とか須賀町とかの小学生が練習で使ったりすると、そのお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんも来るわけでしょう。それで伝承館は山の方だから津波が来ても大丈夫って多くの人が感覚的に分かっていた。

地震直後に須賀町のおばあちゃんが車で「避難させてくださーい」って来て「この建物に避難していいんだ」ってのはこっちの方が気付かされて。それから車がどんどん来て、初めて「今夜、避難所としてここを開かさねばなんねえな」っていうことに気付きました。周囲の家を回って、ろうそく、米、発電機を持ち寄って、駐車場に止まっていたプロパンのボンベを積んだトラックにガスを提供してもらって。水は何十年も前から習慣的に使っていた沢水をくんで利用しました。

まちづくりでは、「おしゃっち」を建てる時のワークショップとか、いろんなものに参加した。私は震災で家も財産も被害を受けてない。被災して全て持っていかれた人たちに対して反対のことは言えねえっていう葛藤があります。例えば旧役場庁舎は今後生まれてくる人たちのために教訓として残すべきだと思うけど、今「見たくない」っていう人にそのことは言えないんだよね。

郷土芸能は生まれた時からある当たり前のもので、特別なことは考えずにやってきたのが正直なところです。でも、この震災でこれまで漠然と取り組んできた鹿子踊が、なぜ300年、400年伝わってるのかってことを考えさせられました。はやり廃りが早い世の中で、この郷土芸能っつう素朴なのは脈々と続いてる。なんでなんだべなぁって。要らないものは淘汰（とうた）されてどんどんなくなる。それでも郷土芸能がなくならなかったってことは、必要だったってことなんだよね。

なんで必要だったのかは、今でもうまく日本語としては表せないけど、普通に生活して目いっぱい稼いでも明日食うものに困る生活がざらだった過去には、唯一の非日常に没頭できる場であったし、頻度は少ないけど、中身は濃い貴重な時間だった。今回は震災後の避難場所として伝承館が使われたし、関わる人の安否確認の手段としても大きな役割を果たした。世代や性別を超えた緩くて豊かなつながり。これが郷土芸能の持つ一つの力だと思いますし、後世に伝えていきたいです。

東梅（とうばい） 英夫（てるお）さん

1945（昭和20）年10月、大槌町小鎚生まれ。臼沢地区に伝わる郷土芸能「臼澤鹿子踊保存会」の会長を務める。震災発生直後からほぼ半年間、避難所となった伝承館ではリーダー的な役割を果たした。震災後は国内外で鹿子踊の公演をサポートし、現在も伝承活動に努めている。

高校生の感想

六串 香穂

すごく、町のためにも郷土芸能のことを一生懸命考えている方でした。伝統や人とのつながりを大事に考え、震災当時、自ら伝承館を避難所として開き、自ら避難所運営を行い、大勢の被災者をまとめあげた。本当にすごい人だと思いました。

山﨑 光

東梅さんは、伝統だから鹿子踊を習い始めたと言っていたのですが、しっかりと鹿子踊のことや伝承館のこと、人のことをきちんと考えているんだなあと思いました。

私は伝統芸能について知らないことばかりでしたが、インタビューしてみて勉強になりました。

取材・撮影／瀬戸 翼、野﨑 悠矢

普通の人の汗と祈りが込められたこの町こそが本物
林業で次世代に〝恩送り〟

私の生まれは福岡なんです。縁あって吉里吉里の女性と結婚して、42年前に大槌に来ました。そのころは、「旅の人」（沿岸部で他地域から移住してきた人を指す言葉）って言われてたんですよ。ずっと海ばかり見ながら生きてきましたが、あの日大津波が引いた後に周りの山を目にして、震災前と全く同じ姿で残ってくれていることに気が付きました。山は、震災で助かった大事な命なんです。そんな山を生かそうと思い、「NPO法人吉里吉里国」を立ち上げました。昔は暖を取るにも料理をするにもまきが必要だったし、漁師の道具を作るにも木材が必要だった。山は昔から人にとってなくてはならないものだったんです。

私たちがやっている林業は、「恩送り」だと思っています。山は日本の経済成長の歴史の中で荒廃しましたが、昔の人がせっせと汗して植林してくれた木々が今、大きく育っています。先人の汗を、今の私たちは授かっているのです。その恩を、今度は私たちがそのままそっくり次代の人に送ろうとしています。それが活動の柱の大きな一つです。

震災直後、夜暗くなって、いろんな作業でくたくたになって避難所に戻った。さぁ眠ろうと思っても、眠れなかった。こっそり避難所を抜け出して、吉里吉里小学校の校庭の片隅のたき火の前でうずくまることしかなす術がなかった。でもね、炎を見ていると、心が落ち着くのが分かりまして。その時私は、いろんなことに気が付きました。全てのものを失くして、他に失うものがあるのかと。怖がるものはねぇべってことに気が付いた。犠牲になった人たちの悲しみも苦しみも背負って生き続けていこうと思いました。たき火の炎が諭してくれたんです。今でもね、背中にあるものが教えてくれます。「前に突き進むしかねぇべ！」って。

震災から7年がたちましたが、立ち上がれない人もいます。でもね、いろんな理由があるの。だから、立ち上がれない人たちを責めたりすることは、決して許されません。立ち上がることができた私たちが、その人たちの分まで、がんばって働くだけです。それでいいと思っています。

実はね、私は震災のすぐ後に全壊したわが家を見て、「福岡に帰ろう」と思ったんですよ。弱い人間なんです。でもね、女房の「この家にもう一度住みたい」って言葉で我に返ることができました。

あなたのすぐそばにも、冗談を言いながら、お酒ばかり飲みながら生きている人がいるかもしれない。そういう「普通の人たち」、彼らも正直に生きている。そういう人たちだって、本当に何かの力になる人たちなんだ、そういう人たちの「汗」と「願い」と「祈り」が込められてつくられたこの町が、「本物の町」です。また何かこの町にとんでもないことが起こったとしても、そういう人たちが体を張って町を守ろうとすると思います。

そういう人たちと共に、私は生きていこうって決めたんです。私も普通の人の一人として生きていくと思えば、何も怖いことはないのだから。

芳賀（はが） 正彦（まさひこ）さん

1948（昭和23）年1月、福岡県糸島市生まれ。漁師の家に生まれ、結婚を機に大槌町吉里吉里で生活を始める。震災後、「NPO法人吉里吉里国」を立ち上げ、町民と一体となって大槌町の森林資源の活用を推進する活動をしている。

高校生の感想

瀬戸 翼

芳賀さんは、林業は「恩送り」、次の世代へ恩を送ることだとおっしゃっていました。このことを聞き、自分も林業に興味を持ちました。行方不明者の捜索活動でつらい時も、たき火の炎を見ながら、亡くなった人が前に突き進めと言ってるような気がしたというエピソードに感動しました。

野﨑 悠矢

「恩送りの林業」という言葉に感動しました。昔の人が汗水流して植えた木を大切に育てたい、その恩を次の世代に、という考えがとても素晴らしいと思いました。芳賀さんの「残してもらった命」を誰かのために生かしたいという思いにとても感動しました。

取材・撮影／前川 菜緒、櫻井 ことみ

震災の経験を語るのは自分たち町と命を守る救急救命士に必ずなってみせる

自分が活動している「大槌バラエティーショー」は、2016（平成28）年にスタートした、劇や文化活動を通じて大槌町の皆さんを笑顔にしようっていう企画です。3回目の公演では主役の消防士を演じました。

「広報おおつち」に募集があったのがきっかけで中学2年生から始めたんですけど、最初はまあなんとなくやってみっかなーみたいな。友だちとしゃべってて、これ俺行ったらビッグなれんじゃね、有名になれんじゃねって。最高の瞬間は、幕が開いて自分が出たときと、自分のセリフでお客さんが笑ってくれたり、泣いてくれたり、反応してくれるときですね。そのために半年近く練習してきたかいがあるなって思います。

もともとは栄町に住んでいたんですけど、震災の年に引っ越す予定でした。本当にぎりぎりのタイミングで建設工事を始める直前に津波に流されました。周りに住んでた人がどこに行ったかも分かんないですし、誰が生きて誰が亡くなったのかも分からないです。地震の後は城山に逃げたんですけど、津波が来た時、目の前で何人も人が亡くなるのを見ました。棒一本を差し出せば引っ張れたかもしれないけど、小学生だったからできなかったし、沈んでくのを見てるしかなかったです。

こういう大きな震災は結局もう一回起きると思うんです。何年後か分からない。でももう一回起きるんですよ。そのときに自分の経験が何かの役に立てばいいなと。そしてそれを伝えていくのは経験した人の義務だと思います。

震災を通して感じた無念さみたいなのもあって、消防士になるという意志が前より強くなりました。5歳くらいまでは消防車や救急車が怖かったんですけど、救急の日のイベントでそのすごさを知って。それからは暇さえあれば消防署に行くような消防マニアですよね。たくさんの消防士さんに親切にしてもらいました。その中には震災で亡くなった消防士さんもいましたけど、町やみんなを守る姿は本当にかっこよかった。だから自分も資格を取って、救急救命士の資格を持った消防士になりたいなって。救急救命士の資格を持ったレスキュー隊員になって今度は自分がこの町で生きて、守っていきたいです。

やっぱ、大槌は自分の故郷だし、ずっとここで過ごしてきたこともあって、海がないと落ち着かないんです。震災の後も4カ月半ぐらい雫石町に避難していたんですけど、帰りたくてしょうがなかったですね。大槌が自分の生きていく上での最高、最強の環境なんで。友だちもいっぱいいるし、大槌じゃないとこじゃ生きれないですね。DNA的にたぶん、大槌じゃないと無理なんでしょうね。

齊藤（さいとう） 和希（かずき）さん

2001（平成13）年10月、大槌町栄町生まれ。釜石商工高校に通う高校生。16（同28）年にスタートした「大槌バラエティーショー」に当初から参加し、主役を演じるなど精力的に公演を重ねる。将来の夢は救急救命士の資格を持った消防士になること。

高校生の感想

前川 菜緒

和希さんは私と同い年だそうです。それでも、しっかりと将来の夢を持ち、その夢をかなえるために今後どうしていくかといった考えを持っていて、とても驚きました。

櫻井 ことみ

「みんなを元気づけたい」という気持ちを聞いて驚きました。当時の私は、そのようなことを考えることができなかったので、これから大槌に貢献していけるようにがんばりたいと思いました。

取材・撮影／六串 香穂

大槌で学ぶことがどこで学ぶよりも面白い僕は本気でそう思っている

僕は、被災地で生きる目的というか、幸せを見つけに行くと思って、大槌に来た。勉強していい大学に行けば幸せになれる、みたいな価値観をどこかで捨てるっていう思いがあったんだ。震災の時は、東京で働いていて、ビルの29階にいた。父の実家は、陸前高田市にあったけど、よく知らない場所だったんだよね。家に帰ってテレビ付けて、大変なことになっていることを知った。東京にいて、ここに本当の幸せがあるんだろうかって思う生き方をしていてもしょうがないなって思ったんだ。

被災地に子どもたちのための「コラボ・スクール」をつくることになった時、「大槌でそんな塾やったって、誰も来ないよ」って言われたの。でも、80人の申し込みがあったわけ。学びたい子たちがこんなにいるってすごく驚いたし、あんな真っ暗な中に、会場の「上町ふれあいセンター」だけ明かりがついてたでしょ。あの状況下で、町の人にとっては、子どもたちがあんなに学んでいるんだから、がんばらなきゃという気持ちになるんじゃないかと感じた。

今は、「おおつち型教育」というのに取り組んでいる。震災後、人が大槌からいなくなっている現実問題と、その一方で、都会では受けられない大槌ならではの教育、大槌だからできる教育をする。例えば、古里を学ぶとか、ここだけの自然を学ぶとか。大槌だからできなかったことを少しでも減らす。これは、都会のように外国人がいないから外国人と話す機会がないとか、良い塾がないとかじゃなくて、今の学校だけじゃなく、もっと地域の人から協力を得られるシステムをつくって、地域と学校、保護者と子どもたちと行政が一緒になって教育をつくっていこうというプロジェクトなんです。

これまでは震災で大槌町が大変な状況にあった。時間がたって、この町は、本気で変わりたいのか、よくなりたいと思っているのかっていうことを最近、聞きたくなることもある。外の人が大槌に来て仕事をするっていうのは、やっぱり並大抵なことではないことを感じながら、僕はずっと仕事をしてきたんだ。

大槌町を日本一教育がいい場所にしたいって、本気で思ってるんだよ。大槌ならではの、絶対これからの社会に求められる教育ができるって信じている。例えば、旧役場庁舎問題もそうだけど、答えがない問題に取り組むこととかさ。みんなで課題を出し合って、話し合って、みんなで納得できるような答えを見つける力を付けていく。それが大槌には、めっちゃ転がっているんだよ。

高校生の感想

菅野（かんの） 祐太（ゆうた）さん

1987（昭和62）年3月、横浜市生まれ。震災後に10代の人たちを支援する「NPO法人カタリバ」（本部・東京）に所属し、子どもたちが落ち着いて学ぶことができる環境をつくるため「大槌臨学舎」を立ち上げる。現在も大槌町教育委員会の教育専門官として大槌町の教育に携わっている。

六串 香穂

震災当時、東京都内で勤務していて、そこからわざわざ大槌に来て、大槌のために何かしようと活動を始めたのが、自分にはまねできないことかもなと思いました。

「おおつち型教育」というプロジェクトに携わっているそうで、大槌の小中高の教育をちゃんと考えてくれていて、すごくありがたいし、うれしかったです。菅野さんと久しぶりに会えてしゃべれて、すごくうれしかったし、楽しかったです。

取材・撮影／山﨑 大陽

自分たちの町は自分たちの手で全世代が集うまちづくりを

吉里吉里では、毎年10月の第1日曜が「吉里吉里大運動会」の日。みんなで楽しくわいわい集うコミュニティーの場だよ、と。小さい子からじいちゃん、ばあちゃんまで、昔は500人も600人も来てね。震災から3年がたった平成26（2014）年、他の地区に先駆けて「もう運動会やろう！」と。「もうちょっと後にした方がいいんじゃないか」とか、「仮設住宅にいる人たちが、そんな気持ちになれないんじゃないか」とかいう意見があったかもしれない。でも、やろうって決断したらばね、350人も来ていただいて。私も泣きながらあいさつした。今でも忘れられない。

でもね、各地域の町内会長さんががんばった。そこには震災前からの活動に対する住民からの信頼があったから。やっぱりリーダーは、何か事を起こそうとしたとき、突っ走ることも必要かなと思いますね。そして継続していくこと。この継続はね、大変なんですよ。でもリーダーたちも事務局も楽しんでやる。みんなで楽しむことが地域の住民に伝わると思います。

公民館運営委員会というのがあって、今は30団体の代表者で成っています。保育園の園長先生や保護者会、おまわりさん、長寿クラブの会長さん、小中学校の校長先生にPTA会長さん、震災後にできた「はまぎく若だんな会」や「NPO法人吉里吉里国」、民生委員の代表者、町内会長さん……。みんなで考えながら、まちづくりをやってきました。大事なことは、全て公民館の運営の中で決めてるんです。早朝の草刈りや防犯灯の管理などの環境整備も、役場を頼りにしない。よく、吉里吉里は特別だ、独立した「吉里吉里国」だって言われるけど、いや、普通ですよ。自分たちの町は、自分たちで住みよくする。それが、まちづくりだと思うの。

地域コミュニティーを作るには、昔も今も、やっぱり公民館は大切な場所であると実感しています。新しい公民館は、地域のためならばってことで、住民に協力していただいて、町のど真ん中に設置した。どういう設計にするかも、みんなで考えた。それが大当たりだよ。思い描いた通りになって、みんな喜んでましたよ。地域のみんなでつくった。そこがいいのよ。夏休みには小中学生が毎日、来る。じいちゃん、ばあちゃんも来て、自由にお茶っこ飲んで。震災前に盛んに行われていた三世代が交流できるような事業は、これからも必要かなと思っています。公民館を使ってにぎやかにね。

でもね、吉里吉里だけが良くなっても駄目だと思うのね。大槌町全体で、自分の町は自分たちで助け合いながらどうにかしていくんだと、特に若い人たちが本気になって考えるような仕組みづくりが必要。これからは、じいちゃんの時代じゃねぇ。どうしたら町は、みんなが楽しく集える場になるか。日々、考えるのも楽しいよ。その行動は、嘘つかない。絶対に花咲くから、いつかね。

芳賀（はが） 博典（ひろのり）さん

1951年（昭和26）年6月、大槌町吉里吉里生まれ。2013（平成25）年から大槌町中央公民館吉里吉里分館の館長を勤める。「吉里吉里大運動会」の第50回と東京五輪が重なる2020年に、地域で「ミニオリンピック」の開催を構想中。

高校生の感想

山﨑 大陽

とても吉里吉里のことを思っている方で、吉里吉里について一つ一つ丁寧に教えてくださいました。博典さんが一生懸命考えてくださっていることが話している間に分かり、自分もこのように、地域のために一生懸命何かをできる人になりたいと思いました。

取材・撮影／野﨑 悠矢、瀬戸 翼

みんなに元気と笑顔を
人と人、人と地域をつないだ
ラジオパーソナリティー

2012（平成24）年3月に開局した「おおつちさいがいFM」で約4年間、パーソナリティーをしていました。開局の第一声を任せられました。

まずは声を出して、みんなが元気になってくれればいいなっていうことで始めたのね。例えば方言とか、大槌の文化歴史とかを大切にね。とにかく、みんな情報欲しかったですよね。それで、情報をなんとか伝えようって。

家族を亡くして仮設で独りぼっちって人も多かった。その人たちに、一瞬でもいいから笑いが生まれればいいなと思っていました。残念ながら、奥の方にある仮設には電波が届かなかったんだけど、車の中でラジオを聞いてくれる人もいました。「あの人出でだったよ」と、ラジオが隣近所との会話のきっかけになることもありますしね。

開局から1年くらいたって、そろそろ震災のことを話してもいいんじゃないかと思って、町民の方に被災時の様子を聞く「金﨑伊保子としゃべって×2」という番組を作りました。「他の人よりも、私が一番つらい目に遭ったんだ」って、そのことだけ言って心を開いてくれなかった方もいました。でもそこを、いくらかでも、少しずつ、「みんな同じ思いをしてるんだよ」っていう感じで解きほぐして、傾聴みたいな形にもなったかな。

16（同28）年に閉局が決まった時は、「これからなのにな」って思いました。仮設から町の方に移り住んでラジオを聞けるようになった人もいたし、新しくできた災害公営住宅に入った人も多かった。さあ、これから新しい生活が始まるってときに、ラジオから地元の情報が流れていたらいいだろうな、心細い気持ちを励ますような音楽が流れていたらいいだろうなって。

情報はインターネットなどでも知ることはできますが、高齢者は見られない人が多いからね。誰かがラジオを聞いて、それが口伝えで広まる。そういうのがあればいいな、寂しい思いをしなくて済むなって思うんですけどね。

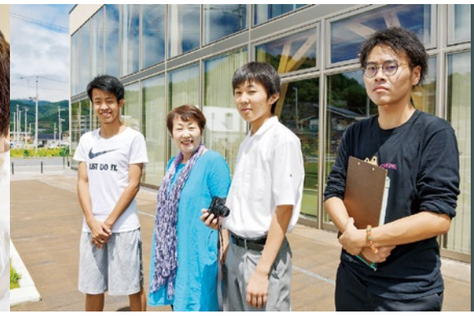
今の時代は、隣に住んでいる人も分からない、なるべくなら触れないで過ごしていきたいっていうのもあるけれども、昔ながらの「おせっかいおばあさん」がいるとか、そういうのも必要ではないかな。

これから大災害が起きたとき、「あ、あそこの人、逃げたべかな」と思うでしょ。だから、地域のことを知っているとか、地域の人たちと情報を共有して歩んでいっていれば、いろんなことが分かるんです。そういう「地域の力」がこれから大きな力になるんじゃないかな！

金﨑（かねざき） 伊保子（いほこ）さん

1951（昭和26）年11月、大槌町安渡生まれ。震災以前は平凡な主婦だったが、2012（平成24）年に「おおつちさいがいFMのラジオパーソナリティー」に抜てきされ、4年間明るい声を届け続けた。今もラジオネームの「マダム伊保子」と呼ばれ、多くの町民に親しまれている。

高校生の感想



野﨑 悠矢

自分も被災しているのに、みんなを元気にしたいという考えを持ってラジオをしていたのが、とてもすごいと思いました。伊保子さんのラジオを聞いて明るくなった人は多いだろうなと思いました。「マダム伊保子」、この愛称がとても似合う、とても明るくいい方だと感じました。

瀬戸 翼

伊保子さんから聞いて思ったことは、コミュニティーの大切さです。伊保子さんの笑顔や音楽などが多くの人を元気付けていたと思うと、本当に意味のあるラジオだなぁと思いました。これからは、町民から意見を出すことが大切になると思うというお話を聞き、自分でもできるだけ、地域を大切にしていこうと思いました。

取材／中村 海鈴、八幡 有香・撮影／佐々木 慎也

多様性を育みたい 多くの人と触れあう中でこそ 人は成長できる

最初に大槌に来たのが、2011（平成23）年4月、国際NGO経由で派遣されました。初めての大槌の印象で忘れられないのが、まだ上下水道が全然使えないころに、食堂「さんずろや」さんの店の中に入れてもらった時のこと。そこから見た景色が、めっちゃきれいだった！ 海や半島の緑が太陽の光を受けてキラキラ輝いて。それ見て腑に落ちたのね。大槌が良いのって、大槌の人がこの町に残りたいって思うこの景色や感覚がDNAレベルであるからなんだなって。

「おらが」がやっているのは、企業研修とか修学旅行などを受け入れる復興ツーリズム事業。大槌に来る人は、そこから何かを学びたい気持ちの人が多いね。最初は震災語り部も人の不幸で食ってんのかみたいな声も聞かれた。今もきちんと意識して活動している。

私たちの活動は、この町の人と、「一緒に育つ」ことを目的にやってます。かっこよく言うと、町民の人材育成です。復興計画が多少遅れても道路とか家はできる。でもきれいになった町に住む人も、変わっていかないと意味ないと思う。

震災後の町に集う人たちに食事を提供した「復興食堂」の2年間の活動でいっぱい人が来てくれて、私たちスタッフも成長したっていう意識があったの。私も海外でいろんな生き方とか価値観に触れたことで成長できた。外の意見や考え方が入らないまま、町が回っていく時代ではないし。触れ合いを通じて、今までなかった考えや価値観に気づき、町の人同士成長していく。人を呼び込む手段として、私たちはツーリズム事業の活動をしている。

安渡出身の旦那と結婚して、子どもが生まれて……。旦那のお父さんは、震災の犠牲になったんだけど、家は何代も大槌に住んできたのね。私は全然知らない人だけど、スーパー「みずかみ」とかショッピングセンターの「マスト」に行くと、旧知の知り合いかのように話し掛けられるの。お義父（とう）さん知ってましたよとか、お義母（かあ）さんと昔、近所だったとか。あったかいなぁって。周りの人が子どもの誕生を心から喜んでくれるのは、旦那であり、旦那のお父さんお母さんが、ここで毎日1個ずつ小さく小さく積み重ねてきてくれた人間関係の表れだなぁと感じる。ありがたいです。

長く同じ場所に住んでいると、そこにある価値観に縛られて、マルかバツかの二択になってしまう。今の旧役場庁舎の存廃議論とか。二択の間には、いろんな意見があるんだよっていう意識を若い人たちに持ってほしい。「おらが」を続けるからには、これからを担う若い子がやりたいことを拾い上げられるプラットフォームでありたい。成功するか失敗するかは別として、取りあえずやってみようと。若い世代の多様な意識を育てていって、大槌町をどんどん面白くさせていきたい。

一般社団法人 おらが大槌夢広場
神谷（かみたに） 未生（みお）さん

1975（昭和50）年8月、名古屋市生まれ。アメリカや東南アジアで看護師として活動していたが、震災がきっかけとなり2011（平成23）年に大槌町で復興支援に携わる。12年から語り部ガイドなどの復興ツーリズム事業を行う「一般社団法人おらが大槌夢広場」に所属し、現在は代表理事兼事務局長を務める。

高校生の感想

中村 海鈴

大槌にいる私たちがもっと成長しなければならない、そう感じました。自分が知らない大槌について学ぶこともできたので、とてもうれしかったです。

八幡 有香

神谷さんは「自分の大切な人を大切にできない人は、いろいろなことを大切にできない」というお話もしてくれました。周りの人を大切にしてきたことも聞いたので、とても印象的でした。良いお話をたくさん聞くことができました。

取材／六串 香穂、山﨑 光・撮影／佐々木 慎也

ここに来れば、みんなに会える 手づくりから広がった つながりを大切に

私たちは「おおつちおばちゃんくらぶ」。震災後にできたおばちゃんたちの集まりです。みんな大槌にいだったんだけど、震災前は全然会ったことも話したこともない人たちなんです。震災後に縫うことや編むことをきっかけに自然に集まりました。今はひょうたん島やサケのストラップを作ったり、ふきんを縫ったりしています。

参加してるおばちゃんたちってね、毎日来てくれるの。みんな皆勤賞だね。津波の後、近所の人たちがみんなバラバラになったでしょ。だから知ってる人たちがそばにいなくて、話し相手がいない。だから、ここさ来ると、いっぱいいろんな人たちがいるから、誰かに会える。震災後、初めて会えた時には涙流してね。「元気だった」「よかったねぇ」とかって。今ではみんなで「ああでもねえ、こうでもねえ」って言いながらやってますけど。

3.11の「Shake Hand（シェーク ハンド）」っていうのをやってるんですけど、面白いよ。魚のシャケと英語の「握手」を掛けてる。おばちゃんたちがサケの形の白いヌードザケを縫って作って、それを全国のみんなにデコレーションしてもらうんですよ。「デコ鮭」って呼んでるんだけどね。サケは必ず4年後に帰ってくるでしょ、吉里に。だから吉里に帰ろうってことで、みんなにサケにデコしてもらって、そして大槌に送ってもらうの。芸能人の方も作ってくれたりしてるんだよ。羊毛を使ったり、絵を描いてみたりして……。もうびっくりしちゃうくらい素敵なサケたちが集ってます。

あとは教室を開いて、地域の人たちと手芸教室をしたりしています。まぁ、他の団体さんみたいに直接町の役には立ってないかもしれないけどね、みんなで楽しくやってますよ。

私たちは、恩返しできたらいいなって思ってて。震災後にボランティアに来てくれた人たちとのつながりが今もあるんです。それで私たちはその人たちのことをね、すんごく大切に思ってるの。だからその人たちに「ありがとうございました」っていう気持ちを表したくてね。注文されたものを作ったり、イベントで販売したりしています。手づくりを通して、大槌の人とも他の遠い土地の人とも、いろんな人とつながっていることがね、うれしいの。

大槌で暮らすことの良さ？　なんだろうな、どこがいいんだか、嫌なことは出てくる。だけど、大槌のこと悪く言われると反発したくなる。おかしいもんだよね！

おおつちおばちゃんくらぶ

川原畑（かわらはた） 洋子（ようこ）さん

1955（昭和30）年8月、大槌町栄町生まれ。震災後に結成された町民団体「おおつちおばちゃんくらぶ」の「みんなのお世話役」として親しまれている。手芸活動を通して町民交流の場をつくり、イベントを開催するなどして町外の人々とのコミュニーケーションも図っている。

高校生の感想

六串 香穂

川原畑さんは、自分たちの活動は町のために役に立っていないと言っていたが、私はそうは思わなかった。町を盛り上げているし、大槌の仮設の孤独死を阻止してくれていると思うし、おばちゃんたちが作る手芸品もすごくかわいくて、自分もやってみたいと思った。

山﨑 光

おおつちおばちゃんくらぶの方々は、震災前は全く知らない人同士で話したことがないのに、仲良くなってみんなで手芸をしていることがとてもすごいことだと思いました。とても緊張したけど、おおつちおばちゃんくらぶの方々はとても優しく話してくれて、インタビューしやすかったです。

取材／藤社 彩乃・撮影／佐々木 慎也

人が行き交い、笑いがあふれる夏祭りの復活が僕たちの本当の復興の一歩

赤﨑さん　「よ市」は、昭和50年代から行っている、出店が立ち並ぶ末広町商店街の夏祭りです。震災の3カ月ぐらい後から商店街の仲間で集まって、震災の後どうしたらいいのかっていうのを、1カ月に1回ぐらい話し合いをしてたんですよ。そうしたら、やっぱり戻ってこようっていう人たちが多かったんですね。震災後は、町内のさまざまな場所の仮設店舗に入ったりして、バラバラになってしまったんです。区画整理事業が終わって、元の所に帰れるようになったんですけど、もちろん全員が帰れたわけじゃない。商売をやめた方もいらっしゃるし、前の所でできないので、まだ場所が決まってない人もいるんです。

今はまだ、5、6軒ですけど、戻ってこれる人は戻ってきたんですね。そして、やっぱりよ市っていうのが震災前も夏の一大行事だったし、町民の方々にも楽しみにしてもらってたんですよ。だからどういう形であれ、夏祭りを復活させるっていうのが僕たちの本当の復興の一歩じゃないかって思いがみんな強かったんで、2017（平成29）年に第1回を行いました。たくさんの人が来てくれましたね。とにかく僕たちにとっては、復興のシンボリックなことと思い、みんなで協力して、復活させようっていうことで、がんばってやってますね。

自分でもバンドをしているんですけど、大槌の人は踊りにしろ、お祭りにしろ、音の出るものが好きなんだよね。童謡、歌会、コーラス、民謡とかサークルもいっぱいあるんです。結構、音好きな人が多い町かなぁと思います。音楽は人が集まるっていう一つのツールであることは間違いないですね。

内金﨑さん　僕も「ウタカラユニット」っていうバンドを組んでまして。地域の宝を、歌の力で元気にしようと活動していますね。やっぱ音楽はいいっすよね。

これからの大槌について思うことですけど、みんな笑っていればいいかなと。そんな町にいて、そのお手伝いをできるのが、この商店の皆さんや僕の活動なのかな。にぎわいをつくっていけるというか。店のロゴはうちの双子の子どもの笑顔っていう意味もあるんですけど、大槌じゅうに広がればいいなと思います。

赤﨑さん　僕は、気軽に人が行き交って、買い物に来たり、休みに来たり、まずはそういう町に戻ってほしい。商店街から遠くて来られない人には、今まで二度ぐらいやってますけど、出張の商店街を開く活動も続けていきたいです。そういう手助けをしながら、町の人と一緒にやっていきたいなと思っています。

末広町商店街

内金﨑（うちかねざき） 大祐（だいすけ）さん（左）・赤﨑（あかさき） 潤（じゅん）さん（右）

赤﨑 潤さん　1964（昭和39）年5月、大槌町末広町生まれ。釜石南高校（現・釜石高校）卒業後、仙台の大学に進学。その後、地元に戻り家業である米穀店を継ぐ。現在は喫茶店「夢宇民」のオーナー。末広町商店街の活性化に努め、よ市復活の中心となった。ロックバンド「ムーミンズ」でギターとボーカルを担当。

内金﨑 大祐さん　1974（昭和49）年1月、大槌町大町生まれ。代々続く地元の自転車店だったが、震災後は自転車店にカフェを併設させた「Chari Café」として再オープンさせた。趣味は赤﨑さんと同じくバンド活動。「ギターの弾ける自転車屋さん」として町の盛り上げに大きな役割を果たす。

高校生の感想

藤社 彩乃

よ市を復活するために、いろいろ苦労されていたのが分かりました。よ市を復活させることは復興への第一歩だと言っていました。なので、私にも協力できることがあればもっとやってみたいと思いました。

赤﨑さんと内金﨑さんの話を聞いて、大槌町のことで初めて知ったことがあったので、もっと町について知ってみたいと思いました。

取材・撮影／佐々木 慎也、菅野 雅也、佐々木 加奈

心のつぼみが花開く日を夢みて この町で有意義に暮らす選択肢をみんなに

大久保さん　私たちが子育て支援事業を始めたのは、震災後にうちの長女が生まれたころから「大槌町にお母さんたちの居場所がない」っていうのをものすごく感じるようになったからです。不便というか、子どもを遊ばせられる場所がなかったりするから、「子育て世代の居場所をつくりたい」って。震災前はご近所付き合いがあったから、そこまで問題視されてなかったと思うんですけどね。それで、コミュニティーカフェの運営を始め、子育て世代を対象とするサロンや講座をやっています。今の大槌の課題は、働く選択肢が本当に少ないことだと思っています。

菅谷さん　そうそう、大久保が「選択肢」っていう言葉を結構使うんですけど、本当にそれを大事にしたいなっていうのは思っていて。私自身、正直、大槌で結婚して出産っていうのにポジティブなイメージってあまりなかったんです。どのお母さんを見ても大変そうで。田舎町で、しかも被災地だから、子どもを育てるための環境が整ってないのかなって。でも、職業や趣味などの選択肢を増やしていくことで、子育てをしていても住みやすさを感じられるようになってきたかなって思います。

大久保さん　子どもに合わせた働き方や、自分がやりたい職種がなかなかマッチしないのが現実。なので、私たちが商品開発をすることで、「Tsubomi（つぼみ）」として、その「働く選択肢」を広げたいって思ってます。だからハンドメードで個人が作っているものを、「フラワーキャンバス」で販売したりしています。

大久保さん　特に思い出に残ってるのは、「子育てフェス」っていうイベントを初めてやった時のことですね。最初は「人来るのかな」って不安で前日、眠れないぐらいでした。「これでちょっとしか来なかったらどうする？」って話したり。そしたら、1回目なのに400人近く来てくれたんだよね！ その時に、それぐらい子育て世代にとってフェス的な楽しいイベントって少ないんだなとも思った。みんな、そういうコンテンツを欲してるのかなって。

菅谷さん　こういう小さい町で400人も集まってくれたうれしさと同時に、課題も見つけたというか。

大久保さん　そうだね、やっぱりまだまだやることがある。本来の大きい目的は、子育て世代が「その日」を楽しめるコンテンツ、しかも子どもも親も家族みんなで楽しめるっていうところ。もう一つの目的は子育て支援をやっている団体さんたちと連携を深めることです。できれば日常的にお互いに情報共有をして、何かやるってなったら一緒にやりたいなって思います。

菅谷さん　私も高校を卒業して、こんな田舎じゃ何もできない、もう大槌なんか出てやるみたいな気持ちで仙台の大学に行った（笑）。でもね、戻ってきた今は、すっごい大槌大好きなんです。

高校生　大槌にこんなおしゃれな空間があるのってすごいなって思って。いとこの赤ちゃんを連れてきたいです。

大久保さん・菅谷さん　連れてきて！ 高校生に来てほしいよね！

一般社団法人 Tsubomi（つぼみ）

菅谷（すがや） 安美（あみ）さん（左）・大久保（おおくぼ） 彩乃（あやの）さん（右）

子育て中の女性が自分らしく輝く社会をつくることを掲げ、2016（平成28）年に設立。
地域コミュニティーカフェ「Flower Canvas」（フラワーキャンバス）や親子向けイベントの運営など、子育ての観点から地域の課題解決に向き合える場を提供している。
団体名称は「心に芽吹かせている思いのつぼみが花を咲かせられるように」が由来。
大久保彩乃さん（代表理事）　1990（平成2）年8月、大槌町大町生まれ。
菅谷安美さん（代表）　1990年3月、大槌町新町生まれ。

高校生の感想

佐々木 慎也

大槌に何か引かれるものがあるから、いったん外に出ても大槌に戻ってきたのだと感じ、感動しました。

菅野 雅也

大槌高校のOGの人が現在どのような活動をされているか知ることができました。お二人は、自分がしたいことを見つけ、壁を感じずに活動をしていて、とてもすごいと思いました。

佐々木 加奈

私の知らないところで大槌のために活動してくれる人がいることはすごいことだと思いました。私もそのような人たちのように自分からアクションできる人間になりたいと思いました。

この町を心に

さまざまな分野で活躍する
〝大槌人〟を訪ね、聞いた
古里への熱い思い。
遠く離れているからこそ、
生まれ育った町を慕う気持ちが強くなっていく。

2019年3月23日に開業した新しい大槌駅。町のシンボルである蓬莱島をモチーフにした大屋根が特徴となっている

若者たちの町民インタビュー

指導者はこう思う

「対話」が震災伝承に

東北大文学部社会学研究室　教授
小松（こまつ）丈晃（たけあき）さん
坂口（さかぐち）奈央（なお）さん

本章「この町と、人と」で、大槌高校復興研究会の生徒たちが聞き手とカメラマンを務め、東北大文学部社会学研究室の学生・大学院生がサポートしたインタビュー企画「この町で生きていく」。2018（平成30）年の夏、会場の町文化交流センター「おしゃっち」で町民と真摯な対話を重ねた若者たちの姿に、指導者は何を思ったのか。大槌高校復興研究会顧問の松橋郁子実習教諭、東北大学社会学研究室の小松丈晃教授と坂口奈央さんに感想を寄せてもらった。

目輝かせた生徒たち

大槌高校　実習教諭
松橋（まつはし）郁子（いくこ）さん

夏休みの8月6日から3日間、大槌高校復興研究会のメンバーたちが被災直後や復興関連の事柄について町内の方々から聞き取りをさせていただきました。今回このような企画で生徒たちを募集したところ、自主的に15人の生徒が参加しました。取材を楽しみにしていた彼らは、「震災について詳しく知りたい」という思いが強い生徒たちです。実際に取材を終えた彼らは、東日本大震災の事をあらためて学ぶ機会となったようです。

「なぜ、あの時、あの場所で避難の呼び掛けがあったのか、やっと理解できた」とか、「つらい経験の中で大人たちは何を思っていたのか、話してもらえてよかった。すごい人だった」等々。目を輝かせて私に報告してくれました。被災時の年齢が幼い高校生にとって、東日本大震災の記憶は薄いと思います。だからこそ、経験したわれわれ大人たちが伝え続けることが大切だと再認識した3日間でした。生徒たちに貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます。企画してくださった方々に感謝申し上げます。

震災記録誌のこの章は、大槌高校の生徒の皆さん・東北大学の学生と、今の大槌に生きる住民の方々との「対話」に基づいている。10代半ばの大槌高校生、そして国道45号でつながった仙台の大学生・大学院生たち（大槌町と関わりのある大学生も参加）は、大槌町の住民に問い掛け、お一人お一人が紡ぎ出す貴重な語りに耳を傾け、そして丁寧に記録していった。

この8年間の復興の過程への時には批判的な見解や過去の振り返りだけでなく、今後数年先、あるいはそれ以上先の未来をも見据えた展望や課題についても、率直に語られている。そして、過去を振り返るのはつらいけれども、これから自分たちで何ができるのか、この先の大槌町をどうするのか――これからを担っていくであろう若い世代へのこうした問い掛けとメッセージも込められているだろう。

この震災記録誌はもちろん、震災の経験を検証し、語り伝え、未来への糧にするためのものだが、しかしこのように考えると、この記録誌を作成するために高校生たちの行った3日間にわたるインタビューそのものもまた、一つの「伝承」の場であり、また逆に、高校生の皆さんから問い掛けられた住民の方々も、若い世代の思いや期待を感じ取り、その期待に応えていきたいとの思いを新たにする大切な機会だったのではないだろうか。

その意味では、このような「対話」は、本記録誌を作成するためだけのものにとどまらず、これからも、形を変えながら、大槌町のここかしこで継続されていくべき活動なのかもしれない。長時間にわたるインタビューにご協力くださった住民の皆さん、そして大槌高校の生徒の皆さんに、この場を借りて、あらためて御礼申し上げたい。

震災の苦境の中、
背中を押してくれた両親
「好きなことやれ」の言葉を胸に、
野球を続けた

地震が起きた瞬間は、おばあちゃんと父と自宅にいました。今まで経験したことのないすごい揺れで、これはただごとじゃないなと。急いで弟を保育園に迎えに行って、そのまま家族みんなで裏山に避難して、そこから津波が来るのを見ていました。自分の家は飲食店をやっていたのですが、第1波でお店が流されて、第2波では家が流されました。

吉里吉里小学校に避難していたのですが、避難所での生活は、自分の場合は1週間くらいでした。かなり人が多く、狭かったため、僕と父は津波被害を受けなかったおばあちゃんの家に移りました。1週間とはいえ、避難所での生活は強く印象に残っています。近くのコンビニから流れてきた商品があって、その中から汚れていない食料を見つけ出して、みんなで分けて食べたこともありました。そういう食べ物でもうれしくて、本当においしかったなと思い出します。夜はなかなか眠れず、長く感じられました。

自分は野球が大好きでした。できれば強い学校に進んで野球をやりたいと思っていましたが、正直無理だろうなと思っていました。町はめちゃくちゃになってしまったし、両親もしんどそうだったので。進学についていろいろ悩んでいたところに、両親から「お金のことは気にしなくていいから、好きなことをやれ、行きたいところに行け」と背中を押してもらって、盛岡大学附属高校に進むことを決めました。競争は激しいし、慣れない寮生活も苦労しましたが、両親の言葉を思い出してがんばることができました。そして、夢だった甲子園のグラウンドに立つことができました。

高校を卒業した後も野球を続けました。県内の大学進学も考えていたのですが、大正大学の監督さんに熱心に誘っていただいたこともあり、大正大学に進学することを決意しました。盛岡大学附属高校と大正大学、これらの学校で、多くの人に出会い、貴重な経験を積むことができました。経済的に厳しいにも関わらず、進学させてくれた両親には本当に感謝しています。

地元は、帰るたびに復興が進んでいて変わってきていると感じます。折れずにがんばっている地元の方々には、逆に力をもらっています。大槌町の人の温かさ、きれいな海、食べ物のおいしさなど、県外に出たおかげで気付いたことや魅力を感じることがたくさんあります。

今後は、岩手で高校教師をしながら、野球の監督をしたい。岩手県の野球部を強くして、能力のある選手が岩手に残れる環境をつくっていきたいと思っています。

前川（まえかわ） 剛大（たけひろ）さん

1996（平成8）年5月、大槌町吉里吉里生まれ。小学1年生の時に吉里吉里スポーツ少年団で野球を始める。中学3年生の時、捕手で県選抜入り。盛岡大学附属高校では主将としてチームを引っ張った。大正大学を卒業し、2019（同31）年4月から、同高校の国語教師として新たなスタートを切った。

ラグビーで古里を盛り上げたい
自然豊かで絆の深い吉里吉里が好き

ラグビーを始めたのは小学校1年生の時。父がラグビースクールのコーチをやっていたのがきっかけです。小学校のころは周りが男の子ばかりだったんですが、中学の時に「全日本に選ばれた女の子が青森にいる」って聞いて、「女の子は私だけじゃなかったんだ！」って、世界が広がったんです。一時期、ラグビーを離れたこともありましたが、中学3年生には練習を再開しました。釜石高校入学後も続けていて、東北ユースに選ばれたり、ラグビーの聖地・花園で行われる女子のエキシビションマッチに出場させてもらったりと、たくさんの経験をさせていただきました。

高校の卒業式が終わった春休み、東日本大震災がありました。吉里吉里にあった自宅は1階部分が流されてしまいましたが、家族は無事でした。一人暮らしをしていたおばあちゃんと避難所で会えた時は、とても安心したのを覚えています。

それから避難所で過ごしていましたが、ラグビーでもっと強くなりたくて進学を決めた大学の入学式が迫っていました。やっと電波がつながった時、大学に連絡したら「入学式を予定通り行う」と聞いて。新生活のために買っていたスーツや布団も津波で流されてしまったので一式買い直して、3月中に父の車で大槌を出ました。

当時の状況で家族と離れることは不安だったし、足が悪いおばあちゃんを守らなきゃと思っていました。でも、両親が「こっちは大丈夫だから」と言ってくれたんです。高校生の時に試合で悔しい経験をしたので「もっと強くなって、代表に選ばれたい」という思いでこれまでがんばってきました。だから、いい結果を出して応援してくれる人たちの思いに応えようという気持ちで大槌を出ました。

いつか大槌に戻って子どもたちにラグビーを教えたいという思いは、ずっと持っています。関東に来て、レベルの高さに驚いたんですよ。だから、もっと東北もラグビーで盛り上げたいです。それに私は生まれ育った吉里吉里が大好きなんです。自然も豊かで、「吉里吉里は独立国」って言われるぐらい、絆が深いんです。地域の人たちとの交流がたくさんあって、お祭りや運動会も楽しくやっていました。みんな〝吉里吉里愛〟が強いんですよ。将来、家族ができたら、吉里吉里で暮らしたいなって思っています。津波によって当たり前だと思って見ていた昔の景色がなくなったのは寂しいけれど、大槌全体がもっとにぎわう町になったらいいなと思います。

平野（ひらの） 恵里子（えりこ）さん

1992（平成4）年4月、大槌町吉里吉里生まれ。父の影響で小学生の時からラグビーに打ち込む。釜石高校卒業後、日本体育大学へ入学。卒業後はYOKOHAMA TKM所属選手となり、女子ラグビーワールドカップ2017の15人制女子日本代表に選ばれた。

音楽にも地産地消があっていいじゃないか
自分ができることで
吉里を元気に！

震災当時、東京で音楽活動をしていました。テレビでは甚大な被害を伝えている。でも、親や親戚と連絡が取れない。連絡を待っていられず、物資を車に積み、妻と兄と共に、大槌町吉里吉里に戻ってきました。到着したのは3月13日の夜。両親は無事でしたが、親戚6人が犠牲となりました。

全壊した実家周辺のがれきを片付けていた時、弦が1本切れたギターを見つけました。そのギターを弾いて作ったのが、「三陸に仕事を！プロジェクト浜のミサンガ『環』」のCM曲に起用された「歩きましょう」でした。

震災直後から音楽や表現活動を通して町を元気にしたいという思いはあったのです。それに、がれき撤去などに忙殺され、亡くなった家族や友人に線香を手向けることができない方もいてね。そこで、4月に「吉里吉里元気プロジェクト」を立ち上げ、物的支援も含めた応援活動を始めました。最初の活動が4月29日に吉里吉里の吉祥寺で催された合同葬儀。東京の店舗やミュージシャン、多くの人の協力で4545本の花を届けました。その後にミュージシャン仲間と避難所で演奏したのですが、吉里吉里にあるササキデンキが津波から難を逃れた音響機材を持ち出して協力してくれてね。その後は、8月14・15日の灯籠流しと鎮魂・御霊まつり、一周忌海岸供養での献花などにも携わりました。

その活動中にみんなが集まり町の未来について語れる場所が必要と思い、開店したのが「Cafe（カフェ）&Bar Ape（バー アペ）」でした（現在は閉店）。Apeとは、アイヌ語で「火」という意味。夜の明かりが消えた町の中で目印になればと。がれきを集めて店を造り、そこで母が地元の料理を作って出しました。

今はもう一度、音楽に立ち戻ろうかと。料理に地産地消があるなら音楽にもあっていいじゃないかと考え、大槌弁を駆使した曲を作ったのです。それが、2018（平成30）年11月にリリースした「ナンダ★モンセ」。大槌弁って、どことなくスペイン語っぽいじゃないですか。これに中南米の曲を乗せたら、いい感じで（笑）。地産地消なので、レコーディングは大槌町内で行いました。やりたいことがたくさんあって。シーカヤックのガイドもしているのですが、町の自然を生かしてできることはないかと考えています。もちろん、音楽で大槌と全国をつないでいくことも ね。

ノリシゲさん

1976（昭和51）年7月、大槌町吉里吉里生まれ。ミュージシャン、吉里吉里元気プロジェクト代表。1998（平成10）年上京し、バンドやソロ活動を行う。震災直後、音楽や表現活動を通じた復興応援プロジェクトを立ち上げる。「歩きましょう」がCM曲に起用され、全国的に注目されるなど、音楽を通して大槌町の情報発信を続けている。

第10章

「ありがとう」を今こそ

東日本大震災では、
全国各地や世界各国の皆さんから物心ともに支えられた。
時間がたった今だからこそ、
もう一度、ありがとうの気持ちを伝えたい。

ありがとう――。支援物資の運搬や捜索活動に尽力した自衛隊が撤収する日、町民たちは隊員一人一人に感謝を伝え、別れを惜しんだ（2011年7月26日撮影）

Episode file
～記録誌制作～

今を生きる町民インタビュー
東北大生が高校生に協力

東北大学社会学研究室のメンバー。
右から田中さん、木山さん、平澤さん、照井さん、曹さん、小松丈晃教授（仙台市の東北大構内で）

本章のインタビュー企画「この町で生きていく」では、東北大学文学部社会学研究室の大学生と大学院生ら5人が全面的に大槌高校復興研究会の生徒たちをサポートした。学生らの活動は、「社会調査実習」の授業の一環であり、主に研究テーマ「伝統芸能に対する町民の意識の高さや行動が復興まちづくりにどう影響しているのか」について同時に聞き取った。独自の勉強会などで問題意識を培ってきた学生たちは、延べ7日間の現地調査を終えてどう感じたのか、コメントしてもらった。

曹智涵（そうちかん）さん　私は偏見を持って大槌に入った。2年間で復興ができた四川大地震を経験した私にとって、大槌の復興は長かった。この町、大丈夫かなと勝手な心配を抱えて来た。しかし、「曹さん、ここに住まないか」と誘ってくれた芳賀正彦さん、照れながらも自分の意見を率直に町議の東梅さんに述べていた野﨑君、真面目にインタビューしていた六串ちゃん、あと、熱く伝統芸能を語っていた瀬戸君たちの姿を見ていくうちに、私は、とんでもないばかだと、素直に思った。

照井晴香（てるいはるか）さん　大槌の海は、祖父母が吉里吉里に住んでいた私にとって、子どもの頃には潮干狩りや船に乗せてもらったといった楽しい思い出ばかりある場所です。しかし、それも大槌の自然を生かし、ずっと守ってきた町民の方々がおられたからだと、この機会に大槌を愛する町民の方からお話を聞くまで、私は気付いていませんでした。震災前と変わらぬ豊かな自然、なにより変わらぬ元気な町民の方々とお会いできて、勝手にうれしく思っております。

平澤葵（ひらさわあおい）さん　大槌町民の温かい人情や、人とのつながり自体が、大槌町の「風土」だと思います。何があっても変わらないこの「風土」こそ、大槌町民の愛する大槌町ではないでしょうか。大槌町のこの7年間は、町民一人一人の困難や喜び……本当にさまざまなことの積み重ねだと思います。町民が築いてきた大槌町の「風土」や、一人一人の7年間の歩みを、本誌を読む後世の方々に感じていただきたいです。

木山裕望（きやまひろの）さん　町民の皆さまが「若者への投資、例えば高校生に町の外に出て成長する機会を提供するなどしたことが、どのような成果を生んだのか」という点に興味を持たれていたことが印象に残っています。まちづくりに欠かせない若者への投資は至極当たり前ですが、不動産などへの投資とは違い、成果は目に見えにくくなります。ハードからソフトの復興へ移行しつつあり、不可視なものを扱っている今だからこそ、以前の若者への投資の成果を共通見解として持つことはかなり重要になってくるのではないか、と感じました。

田中愛也（たなかあや）さん　町民の方々へのインタビューを通じて、多くの郷土愛に触れました。それは町の復興を願う気持ちだったり自然や郷土芸能を愛する気持ちだったりするのですが、大槌町にはその思いの下で今を生きている人たちがたくさんいます。そして彼らの姿は、人としての強さという形で私の中に残りました。これは町にとって最大にして最強の資源だと思います。この資源がこれから先も大槌町に残っていくことを願っています。

あの日、あの時の小中高生から

「わたしたちが今、思うこと～大槌の子どもたちの思いをつなぐ～」と題し、2012（平成24）年に大槌町教育委員会から発刊された第24号「心のぬくもり作文」。3·11を経験した大槌町の小学生から高校生までが「何を思い、どう生きたか」を200字でつづった文集の特集号である。その中から、震災を通して生まれた「感謝」の気持ちを豊かに表現している作文を抜粋して紹介する。

※原文のまま。学校·学年の表記は当時のもの

しえんぶっしをくれてありがとう

大槌小学校　1年生　齊藤 杏耶さん

わたしは、しずくいしのがっこうから大つちしょうがっこうにもどってきました。もどってきてから、たくさんしえんぶっしをもらいました。わたしは、えんぴつやけしゴムをもらってうれしかったです。えんぴつやけしゴムは、まだつかっていないけど、だいじにつかおうとおもいます。しえんぶっしをおくってくれた人たちに「ありがとう」とおもいました。わたしもこまっている人がいたらたすけてあげたいとおもいました。

おふろ、きもちよかったよ

大槌小学校　1年生　小笠原 瞳さん

わたしは、じえいたいさんのおふろに入りました。おふろは、ひろかったです。おゆはたっぷりありました。おゆは、青だったり緑だったりして、おもしろかったです。おかあさんと、「きもちいいね。」とはなしました。

おうちのおふろがつかえなかったので、とてもありがたかったです。

じえいたいの人は、かたぐるまとかもしてくれたので、うれしかったです。

いづみさん大すき！

安渡小学校　1年生　小國 ルナさん

わたしは、いま中村のかせつにすんでいます。学校まであるくのがたいへんです。でも、うれしいことがありました。毎日、スクールガードのいづみさんがいっしょにあるいてくれました。あるきながらいっぱいおはなししました。学校のはなしをきいてくれてうれしかったです。いま、いづみさんはちがうしごとをしているけど、みちであうとピッとなります。とってもうれしいです。いづみさん、いままでありがとうございました。

がんばろう

大槌北小学校　3年生　兼澤 大志さん

しんさいの後、ぼくは、吉里吉里小学校の体育館で勉強ができるようになったのでとてもうれしかったです。いろいろなところからランドセルや文ぼう具セットなどのしえんをしてもらいました。いちばんうれしかったのは新ぴんのランドセルをもらったことです。このランドセルは、とても使いごこちがよくて、ぼくたちのことを思ってくれている人たちのやさしさがつたわってきます。いつも、せ中から「がんばれ」とはげまされている様です。

ありがとう、二人組のお兄さん

大槌小学校　4年生　佐々木 陽音さん

三月十一日におきた東日本大震災の時、ぼくは、海の近くで働いているお母さんが心配で、恋しかったです。ひなん所でお母さんを思い、五千つぶ、一万つぶのなみだを流し泣きました。

その日の夜、お母さんと同じ会社で働いているお兄さんが友達と来てくれました。そして「お母さんは、大じょうぶだよ。」と言ってくれました。その時、ぼくはありがとうとつぶやきました。ぼくは今も思っています。「あの時、来てくれてありがとう。」

無事に生まれた弟

大槌小学校　5年生　小松 未来さん

津波がきた時、母のおなかの中には赤ちゃんがいました。城山に登るのは、とてもつらそうでした。その夜、山火事がせまってきて、金沢のいとこの家、さらにその四日後には、北上にひなんしました。仙台のおじさんから、ガスコンロやいろいろなものが届きました。みんなの事を心配してくれました。僕もできるお手伝いをしました。

六月一日、無事に元気な弟が生まれました。みんなの助けのおかげだと思います。

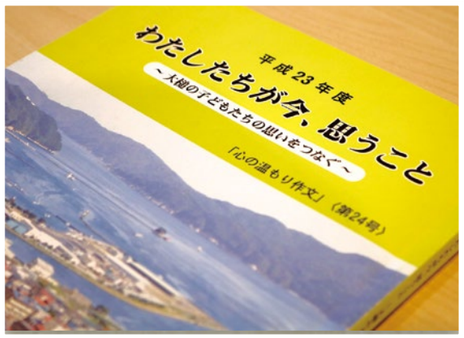
ウメさん、いとこありがとう

赤浜小学校　4年生　上野 竜太さん

ぼくは、津波があった日に黒沢ウメさんの家に泊めてもらいました。夜、お腹がへった時でも、おかしを二、三個くれました。

次の日、ウメさんの家にお母さんが来ました。弟と一緒にお母さんといとこの家に行きました。そこで一週間以上、お世話になりました。

もし、ウメさんやいとこの家がなかったら、山で過ごすことになったと思います。ウメさんといとこに感謝しています。



黒い飴玉

吉里吉里中学校　3年生　平野 節子さん

頭の中が真っ白だった。感情が抜けて、生きているのか分からない状態がずっと続いた。

雪が降っていたあの日、帰宅途中の私に声をかけた人がいた。服を見ると大阪水道局の文字。「飴ちゃんあげる。頑張ろな。」と言って四つ飴玉をくれた。

すごく甘い飴玉だった。かけてくれた言葉が「がんばれ。」じゃなく、「がんばろう。」だった。人を思いやることの大切さを知り、前に進む力をくれた。ありがとう。私、前より強く優しくなれたと思う。

ありがとうを大切に、smile keep

大槌中学校　3年生　兼澤 茜さん

「ありがとうを大切に、smile keep」この言葉は、私が部活動をしている時に立てた目標です。

たくさんの方々に支援して頂いたおかげで、用具も練習場所も全て確保することができました。そして、そんな方々に対して私達が返せる事は、「笑顔で元気にプレーしている姿を見せる事」だと考え、部員全員で毎日元気に練習に取り組みました。

感謝と笑顔、この先もずっと忘れないで。

東日本大震災を経て…

大槌高校　3年生　三浦 綾華さん

五ヶ月間の避難所生活の中で私が、友達や知り合いを亡くしたショックで一人で居た時、大槌町民の方に、「私はあなたの事は知らないけど、生きてて良かった。ありがとう。」と言われました。短いやりとりでしたが、とても温かく感じました。

そして十月に開かれた祭。開催することも厳しいと思っていましたので、とても嬉しかったです。また、大槌祭を見た時、この祭を残す為にも頑張らなきゃと思いました。

みんなから ありがとう

2018年8月5日、大槌町で行われた「第7回おおつちありがとうロックフェスティバル」。そこに集まった大槌町の皆さんに、支援してくださった方々への感謝の言葉を文字にしてもらった。

ありがとう
いっぱい
ありがとう。
りりのママ

しん災の時、支援してくださりありがとうございます。みなさんのおかげでいまも安全に暮らすことができています。本当にありがとうございます。
安渡 12才 ゆきな

自衛隊の皆様へ
大槌でもたくさんの御支援をいただき本当にありがたかったです
暑い中作業していたり
物資を届けていただいたり
今も忘れません
ありがとうございました
皆様も体にお気をつけて御自愛下さい 大槌高校 [illegible]

ありがとう
ちき りりより♡

ボランティアで来てくれた方々へ
震災当時みなさんが来ていっしょに掃除してくれたおかげですごく助かりました。ありがとうございました!!
今、みんな元気でやってます!!
よかったらまた大槌に来てください!
花輪田 17さい KAHO

支援してくださったみなさんへ
震災当時はお世話になりました。たくさんの支援本当にありがとうございました。そのおかげで今は安心して生活することができています。
藤社 彩乃

ありがとう
1960. カメ

ボランティアのみなさん!
~ありがとう~ 小鎚 じゅん

多くの皆様の
温かいご支援で
元気をとり戻しました。
ありがとうございます!
6/才 大久口 あや

感謝
大槌
岡野治子

いっぱい震災で
支援をしてくれなきゃ今の自分はいません。
震災でいっぱい支援してくれてありがとう。
支援してくれたおかげで今の自分がいます。
大槌町 13才 [illegible]

皆、ありがとう
大槌でがんばるぞ!!
6才
小国 大槌拓未

自衛隊の方々へ
震災の時に避難所に来てくださり、物資などを届けてくださりありがとうございました。そのおかげで、今はとても元気に過ごしています。本当にありがとうございました。
小鎚 16歳 ひかり

大槌のみんなへ

このイベントには町外から集まる方々も多い。
遠くから足を運んでくれた皆さんから、大槌町へ思いを。

共に復興
感謝です
久慈市より愛をこめて
Akira

大槌
がんばれ!!
宮古、67 高岩

みなさんありがとう!
奇玉県 44才

大槌のアリガトウ
イベント楽しい♪
ありがとう!!
久慈市 44才

秋田県潟上市、男

ありがとう
来年もこたい!!
北上市 [illegible]

大槌の皆様へ
「ありフェス」を通じて、沢山の友達ができました!! 本当に感謝します!!
ありがとうございます!
石川県 33才 [illegible]

感謝の言葉

ボランティア受け入れ、みんなが仲間に

ファミリーショップやはた　八幡（やはた）幸子（ゆきこ）さん

あの時、たくさんのボランティアの方が、大槌町を応援しようとがんばってくださいました。しかし、その方たちの宿泊場所がなく、自家用車で眠っている人も多かったのです。そのため、自分がやっている商店兼自宅とは別の建物を改修し、ボランティアの無料宿泊施設として開放しました。震災から2カ月半後のことでした。

全国から多くのボランティアを受け入れていくうちに、いろんな人の輪ができてきました。大槌を訪れ、支援してくださった皆さんには本当に感謝しています。私たちは皆さんからもらった思いをつないで、生きていくことが大切だと思います。

この震災によって、日本列島がぐっと短くなった感じがします。全国のネットワークが生まれ、みんなが仲間のように思えるんです。ボランティアでここを訪れた人から電話がかかってくることもあるし、いきなり訪ねてくることもあります。あの時助けてくれた皆さんと再会するたび、つながりの大切さを感じます。

この町に、希望の光が降り注ぎますように

金澤神楽　太田（おおた）未彩希（みさき）さん

神楽一家のもとに生まれ、幼少期から祖父に習い始めました。しかし、震災前は後継者不足のため、金澤神楽は存続の危機でした。津波で実家が被災し、道具の一部も流されました。そんな中、がれきの中から太鼓だけが見つかったのです。自分にできることは、「神楽を舞うこと」なのだと、強く感じました。

当時、大槌町を支えてくれた自衛隊の撤退が決まり、お別れ会が開かれました。そこで、感謝の気持ちを込めて神楽を披露しました。思いを持って舞うことで、支援してくれた方の心に届いたらうれしいです。

現在は、地区外からも会員を受け入れ、子どもから大人まで年代問わず、神楽の舞の指導に励んでいます。大槌まつりには、関東方面から毎年駆け付けてくれる方々もいます。

２００年前から受け継がれてきた尊い伝統を次の世代へつなぐ。それこそが自分の使命だとさえ感じます。鎮魂の祈りとともに、人々の心に、生まれ育ったこの町に、希望の光が降り注ぎますようにと、願いを込めて。

今、伝えたい

「大槌の漁業」を思う気持ちに、心から感謝したい

新おおつち漁業協同組合　代表理事組合長　平野（ひらの）榮紀（えいき）さん

震災で壊滅的な被害を受けましたが、多くの方々のご支援をいただき、「新おおつち漁協」としてがんばることができています。心から感謝しています。

震災後すぐに、被害状況を知って駆け付けてくださった団体からは、フォークリフト、トラック、製氷機などの資機材と、生産活動に必要な仮設の作業場・番屋、殺菌装置などをご支援いただき、水揚げ作業ができる環境をいち早く整えることができました。

一方、震災後、横浜市瀬谷区の方々が、熱い思いを持って支援を募っていただいたおかげで、定置船「瀬谷丸」を完成することができました。また、別の団体からは、漁協の主要な事業に対し、定置漁網、アルミ合金製定置漁船などにご支援をいただき、町の水産業復旧の基盤整備が大きく前進いたしました。

多くの方々が、海の町、大槌を「支援したい」という思いを持って行動してくださったことに「ありがとう」を伝えたいです。ご恩を忘れず、大槌の漁業を盛り上げてまいります。

大槌町の復興は、応援職員の皆さんのおかげ

大槌町総務課職員情報班　班長　濱（はま）英輔（えいすけ）

大槌町の復興がここまで進んだのは、全国からお越しいただいた応援職員の皆さんのおかげだと思っています。本当に感謝の思いでいっぱいです。

当時、応急対応で地元職員が疲弊している時、業務にご協力いただいたことはもちろん、精神的なサポートも頂きました。全国から来てくれた応援職員の方々が、慣れない環境にもかかわらず、私たち地元職員に対して安心して仕事ができるようにご尽力いただいたことは、忘れません。

ある時、応援職員の方から「私たちは、大槌の応援のために来ているのだから、もっと仕事を振っていいよ」と言われました。そのおかげで、遠慮せずに業務を分担することができました。

職員の新人研修の場で、私が必ず新人職員に語り掛ける言葉があります。「今も全国から多くの応援職員が来ている。これまでの皆さん一人一人の思いや熱意を感じて、成長してほしい」。全国で災害が起こったら、今度は私たちが応援職員となって駆け付け、恩返しをしたいと思っています。

第11章

忘れず、伝える

津波で激しく被災した大槌町旧役場庁舎は2019年1月、
人々のさまざまな思いが交錯する中、ついに解体された。
あの日、職員28人が犠牲になった旧庁舎の周辺で、
地震発生から津波襲来までの三十数分間に何があったのか。
生還した職員たちの証言を基に再現する。
この章ではまた、保存か解体かのはざまで揺れ続けた
旧庁舎に対する町民の「まなざし」に関する論考や、
震災の記憶の風化を防ぐ官民共同の取り組みを紹介する。

アスファルト舗装の撤去が進む旧役場庁舎前の更地（2018年12月3日撮影）

言葉以上の恩返しを

アスリートモデル　東（あずま）あずさ さん

あの日、高校1年生という繊細な年頃だった私が感じた恐怖や目に焼き付いた光景は、今でも鮮明に思い出されます。日本が大変な状況に置かれている中、「見ず知らずの人だけれど、何か少しでも力になりたい」と思って行動した方がたくさんいたことは忘れません。

東日本大震災の後も全国的に豪雨被害や震災などの自然災害がありましたが、私はすぐに何かをすることができず、誰かのために行動することの難しさを学びました。仕事でもボランティアでも、遠くから来て支援してくださる方がいたという事実は大変ありがたいことであると同時に、そんな美徳を備えた日本人の力を誇りに思います。

現在は東京でアスリートモデルとして活動しているのですが、幼少期の私は田舎育ちの普通の女の子でした。夏は友人と海へ泳ぎに行っていましたし、体を動かすことが大好きでした。ひょっこりひょうたん島（蓬莱島）が見える青い海の風景と共に暮らして成長してきた日々は、私の中で大切な思い出です。大槌にも伝えたい感謝の気持ちは山ほどあります。

支援してくださった方にも大槌町にも、「ありがとう」という言葉はまだ言えないような気もしています。その言葉で感謝の気持ちを収めたくないからです。ボランティアや自衛隊の皆さん、復興のために尽力した大槌の皆さんの活動を見て、子どもだった私は「これが大人になるということなのかな」と感じたことを覚えています。

その皆さんのバトンを受け取るのは私たちだから、「次は私たちががんばらないといけない」とやる気をもらいました。少しずつでもお仕事を頂けることが増えてきたので、アスリートモデルとして、そして「三陸♡おおつちPR大使」として多くの人に喜んでもらえるように活動していきたい。その活動を、いつか「ありがとう」の言葉以上の恩返しにできるようにがんばりたいと思います。

1994（平成6）年、大槌町赤浜生まれ。長年柔道で鍛えてきた体を生かし、17歳でモデル活動を始めた。現在は、ブラジリアン柔術のアスリートモデルとして活躍中。2018（同30）年に、大槌町の魅力や良さを全国に発信する「三陸♡おおつちPR大使」に任命された。

2019年3月に開業した三陸鉄道リアス線大槌駅で

旧庁舎で何があったか

「平成の大津波」が直撃した役場庁舎（2011年3月17日撮影）。正面玄関前におびただしい量のがれきが押し寄せている

大津波、災対本部を襲う
職員ら証言「庁舎倒壊恐れ、外に」

2011（平成23）年3月11日。激しい地震の揺れの後に役場庁舎を直撃したのは、高さ10メートルに及ぶ大津波の「黒い壁」だった。津波は庁舎前で災害対策本部を設営するなどしていた職員たちに容赦なく襲い掛かり、逃げ切れなかった28人と、役場に向かう途中などの11人を合わせた39人が犠牲になった。津波襲来までの三十数分間、庁舎前で一体どんな動きがあり、職員たちはなぜすぐに避難しなかったのか。ぎりぎりで生還した役場職員たちが7年前（取材当時）の記憶をたどった。証言によると、職員らは当時築57年で老朽化した旧庁舎の倒壊をひたすら恐れ、防潮堤を越える大津波を予測できないまま、戸外に出て災対本部を構えていた。当時の総務課長が津波の直前、職員らに高台への退避を命じていたことも分かった。

旧庁舎の「生い立ち」

あの日のことを振り返る前に、なぜ旧庁舎が過去の津波で浸水した場所に立地したのか、その「生い立ち」に触れておく。町役場は元々、震災前の大槌小学校で、現在の役場庁舎の立つ上町（旧四日町）の辺りにあり、1953（昭和28）年の火災で焼失した後、翌年に今の新町1番1号に再建された。

大槌町が発足した1889（明治22）年の建築とみられる木造平屋建ての町役場から火の手が上がったのは、冬の足音がひたひたと迫る11月21日未明のこと。『大槌町史』によると、好天続きで折からの乾いた風にあおられた火は瞬く間に燃え広がり、役場をはじめ隣接する大槌小学校や保育所などの建物をことごとく焼いた。

大槌町大火の復旧対策
公民館に仮役場
授業は寺や神社使用
役場の焼失か

町役場の火災を伝える1953年11月29日付の「岩手日報」

県紙「岩手日報」の当時の報道によると、出火原因は暖房用の火鉢の不始末で、総務課の書類箱に飛び込んだ炭火が午前3時ごろになって炎上した。けが人はなかったようだ。釜石市など周辺の1市1町5村から消防団が駆け付けてポンプ車などで消火に当たったが、町中は細い水路や民家の井戸ばかりで水利が悪く、激しい火勢に歯が立たなかった。

当時9歳で四日町に住んでいた野沢文雄さん（74）は、消防団員らが燃え盛る炎に向かって、小鎚川から引いた水路の水を数台の手押しポンプでくみ上げて放つものの、なかなか届かなかったことを覚えている。

21日午前9時には公民館に臨時町議会を招集し、善後策を協議。当時の金崎節郎町長（1895～1981）は失火の責任を取ろうと進退伺いを提出したが、慰留され、以後、先頭に立って町役場や小学校の建て直しに突き進むことになる。

町長が土地提供

町役場は火災から1年後の翌1954年11月、四日町の役場跡から東北東に約700メートル離れた、当時の地番で大槌第20地割字柏木堂の敷地に落成。大阪が本店の建設会社が前年の釜石市役所に次いで施工した鉄筋コンクリート造2階の建物（建築面積331平方メートル）で、低層の木造家屋ばかりが立ち並ぶ三陸沿岸の漁師町では珍しく、異彩を放った。

この年は、米国の水爆実験で遠洋マグロ船「第五福竜丸」が被ばくした事件や自衛隊の発足があり、巷では春日八郎さんの歌謡曲「お富さん」が大ヒット。1945（昭和20）年の米軍の艦砲射撃で甚大な被害を受けた釜石と共に艦載機の空襲に遭った大槌には、まだそこかしこに「戦後」のにおいが残っていた。

1956年発行の町勢要覧に掲載された完成間もない町役場の写真

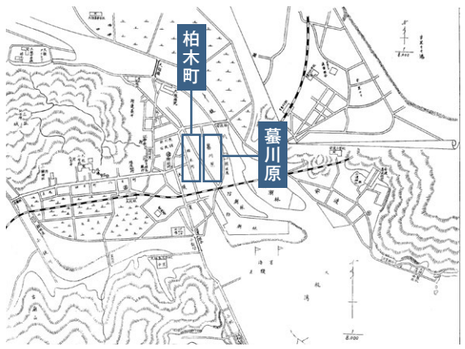
金崎町長の追悼出版の記述や遺族の話によると、建設用地は、火災の責任を痛感した同町長が自ら土地を提供した。『大槌町史』には、同年3月の町議会が179坪（約591平方メートル）の敷地に総工費1350万円で役場庁舎を建築することや、同町長ら町民3人から土地買収することを議決したとある。町議会で過去の津波浸水域に新庁舎を建てることの是非は論じられなかったのか。多くの関係者が物故し、東日本大震災の大津波で議事録の全てが流失してしまった今、その辺の雰囲気をうかがい知るのは難しい。

こうして、明治と昭和の三陸大津波（1896年、1933年）がきわどいところで到達しなかった旧四日町の役場は、二つの大津波と後のチリ地震津波（1960年）も押し寄せた旧柏木堂、今の新町に移転した。

町外れだった建設地

その時分、震災前は建物がひしめいていた旧柏木堂の一帯とは、どんな土地だったのか。「人家はほとんどなく、畑と雑草地でしたね。ススキとかアシみたいな草が多かった」と思い出すのは、1947（昭和22）年から8年間、末広町にあった引揚者向けの復興住宅に暮らした米城節子さん（72）だ。旧柏木堂一帯は、町の北西から南東に貫流し、太平洋に注ぎ込む大槌川の最下流が約200メートル東に横たわる、河川敷に近いさびれた場所だった。米城さんは役場庁舎が建てられる前、周辺に養蚕のエサになる大きな桑の木が何本も植えてあったのを記憶している。

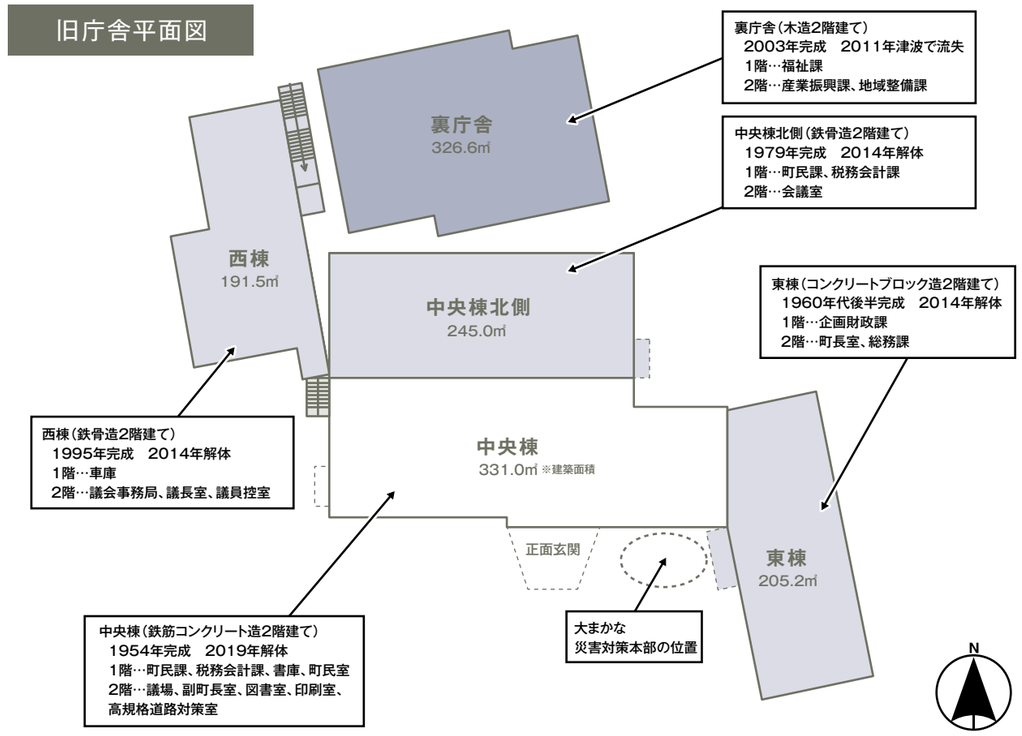
火災前年の1952年発行の町勢要覧に折り込まれた市街図では、柏木堂（同図では柏木町）の東側に隣接する土地は小河川を挟んで「蟇川原（ひきがわら）」と呼ばれており、ヒキガエルが数多く生息するような湿地帯だったのかもしれない。新町で生まれ育った郷土史家の徳田健治さん（68）は、江戸時代に罪人を「引き回した」のが地名の由来とみる。『大槌の民話』（1970年、大槌町役場刊）にも、この辺りは刑場だったとの記述がある。



1952年当時の市街図。役場庁舎は図中の「柏木町」「蟇川原」の境界付近に建てられた

近くの湧水が水源の小河川は「沼崎川」といい、徳田さんによると、小舟が行き来し、春になるとサケの稚魚が上ってきた。同川は暗きょとなって今も残る。近くには水産加工場が幾つもあり、肥料用のイワシやサバの天日干しをしていた。町が1961（昭和36）年に発行した『チリ地震津波誌』の表紙に使用された当時の航空写真でも、特に旧庁舎の東南方向、大槌川の流域一帯に建物らしい影はほとん

旧庁舎平面図



ど見当たらない。

旧庁舎から海岸までは直線距離で約400メートル。当時の海岸は広い砂浜と松の防潮林が続き、まさに白砂青松（はくしゃせいしょう）の風景が広がっていた。子どものころ海水浴や潮干狩りで海に親しんだ須賀町出身の吉見政志さん（63）は、冬の日差しの下、一面に養殖ノリが干されていたのをよく覚えている。

チリ津波で浸水か

1960年5月24日早朝に町を不意打ちしたチリ地震津波は、大槌川と小鎚川の河口付近の集落である安渡や小枕、須賀町に、家屋の流失や床上浸水といった比較的大きな被害をもたらした。新町の西に隣接する末広町では、当時を知る住民の赤崎幾哉さん（76）によると、役場に至近の東側の家々で主に床上浸水、西側で床下浸水に見舞われた。役場にも相応の被害があったと推測される。元役場職員で末広町出身の越田由美子さん（64）は当時小学1年で、避難した曹洞宗江岸寺の裏山から役場1階部分が水に浸かっている様子を見たという。

海岸地帯はこの津波を経て、埋め立て工事や防潮堤の建設が本格化し、砂浜は姿を消す。60年に約2万人だった町の人口は、ピーク時の79（昭和54）年までに約2150人が増えた。そのころ国道45号に面した役場周辺も宅地化が進み、民家や商業ビルが密集した。明治以降、3度の大きな津波が牙をむいた海は平地からすっかり見えなくなり、その「気配」を徐々に潜めていった。

役場庁舎は昭和に2度の大きな増築を重ねたほか、平成になってからも木造庁舎などを建て増し、その建築面積は震災までの57年間に当初の4倍近くに拡張していた。

「平成の大津波」記憶風化の町を直撃
県内最悪の死亡率

東日本大震災の「平成の大津波」は、チリ地震津波から51年の時が経過した町を完全に打ちのめした。1200人を超す犠牲者の数は当時の人口の8％に当たり、県内の被災市町村の中で最も高率を示す。津波常襲地帯の三陸沿岸にあって、町は昭和津波の起きた毎年3月3日を選んで全町民対象の津波避難訓練を行ってきたが、記憶の風化は防ぎ切れなかった。

町役場は職員の3割近い39人が亡くなった。そのうち加藤宏暉（こうき）町長＝当時（69）＝を含む28人は、庁舎前に設営の災害対策本部などで対応に当たっていたさなかに津波にのみ込まれた。職員たちはなぜ、過去の津波の浸水域、しかも戸外に災対本部を置こうとし、そこで何があったのか。津波に追われながら、庁舎の屋上に駆け上がるなどして助かった職員ら二十数人に聞いた。

> 生還した現職員・元職員の肩書きは震災当時、年齢は取材当時。「故」の表記がある職員は津波の犠牲者。現職員は敬称略

突き上げる揺れ

あの日、総務課総務広聴班主事で入庁1年目の三浦義章（31）は、編集を担当する町の広報誌「広報おおつち」3月号を町外在住の読者に発送する作業を終え、本庁舎（中央棟）の東隣に接し、町長室や総務課が入る2階建ての増築庁舎（東棟）の1階給湯室で一息ついていた。昼下がりの倦怠感が体を包む。午後2時46分、突き上げるような揺れに襲われた。

あわてて、勝手口から東側に面する道路に出た。電柱がしなり、居合わせた高校生たちが騒いだ。所属する総務課は災害対応の要となる部署だ。三浦は揺れが収まるのを待って、2階同課の自席に駆け上がった。室内ではデスクトップ型のパソコンが何台も床に転がっていた。大きな余震が起きた。「ここは危険だ。携帯（電話）や財布を持って外に出ろ」。上司らの声がした。

残った28枚の写真

2日前の3月9日にも三陸沖を震源とする地震で津波注意報が発表され、町は当時の地域防災計画の定めに従い災害警戒本部を総務課に設置した。三浦はその時の動きが頭をよぎり、先輩職員の判断もあって、庁舎入り口に掲げる「大槌町災害対策本部」と記された木製看板を担ぎ出そうとした。

「副町長室が大変だ。写真を撮っておいてくれ」。上司か先輩の誰かに指示され、一眼レフのデジタルカメラを手に中央棟2階東側にある副町長室に向かった。室内は、長い蛍光灯がカバーごと事務机に落下してガラスが散乱したり、大型の観葉植物の鉢植えやパソコンが転倒したりしている。続けざまに10回シャッターを切った。

さらに2度目か3度目の余震の後、正面玄関から庁舎前に出ると、すでに「災対本部をつくるぞ」という雰囲気になっていたという。三浦は津波に襲われるまでの約30分間、庁舎前で情報収集したり、災対本部を設営したりする職員たちの姿を、副町長室の状況と合わせて計28枚の写真に、時刻の記録と共に収めることになる。

地震の揺れで備品が散乱した副町長室（2011年3月11日、三浦義章職員撮影）

老朽庁舎から外へ

現町長の平野公三（62）は当時、総務課主幹と総務広聴班長を兼ね、危機管理や防災行政の担当者だった。金曜日の3月11日は新年度予算案などを審議する町議会定例会の会期中で、午前中に予算特別委員会を構成して散会。週明けの再開を控え、庁内にもどことなく平穏な空気が流れていた。そこに地震が襲った。自席で執務中だった平野は「2日前の揺れと同じぐらい大きいな」と感じ、昭和40年代前半の建築で老朽化していた東棟の床が抜け落ちるのではないかと恐れた。廊下や総務課の床には以前から複数の亀裂が入っていたからだ。

平野はサンダル履きのまま外に飛び出した後、総務課に戻ってスニーカーに履き替え、フリース素材のジャンパーをワイシャツの上に着込んだ。前後して最初の余震が起こる。町は災害の規模によって、災害警戒本部か災害対策本部を設置せねばならない。総務課員らは従来本部を置いてきた同課の部屋を後にして、階段を下りていく。平野の記憶では、外に出るように言った人物は「総務課長だった気がする。その声に呼応して、みんなが動いた」。

総務課長の故澤舘純一さん＝当時（56）＝は、前任者の碇川豊さん（67）が町長選立候補のため退職したのに伴い、11年1月に福祉課長からスライドする形で着任した。庁舎前の災対本部で最後まで陣頭指揮を執り、津波にのまれた。

震災当時、危機管理担当だった平野公三町長。庁舎の倒壊を恐れて戸外に出たという

モルタル剥がれ落ち

税務会計課課税班主任の森田英之（44）は、中央棟1階の同課の柱からモルタルが剥がれ落ちていたと記憶している。激しい揺れに驚いて庁舎前に駆け出すと、アスファルトが靴底の下で「豆腐のように」波打つのを感じた。森田は澤舘さんが強い口調で「庁舎は倒壊する危険がある。戻るな、出ていろ」と命じたのをはっきり覚えている。

平野は、災対本部を建物内に設けなかった理由を「9日と合わせて地震が2回来ていた。（老朽化した庁舎が）倒壊する恐れを感じていた」と説明する。当時副町長で現場にいた東梅政昭さん（73）も「庁舎が崩れるのを考えてのことで、別段変だとは思わなかった」。東梅さんは地震の時、加藤町長と共に町長室にいた。サイドボードが危うく倒れそうになり、町長が手で押さえた。2人が災対本部の場所や運営について言葉を交わすことはなかった。

企画財政課財務班主事の菊池信也（32）は、東棟1階の同課で工事関係の契約書を作成していた。同課職員は課長の故木村圭治さん＝当時（56）＝に促されるなどして、ほぼ全員が戸外へ。庁舎前には東棟と中央棟に部屋がある総務課や税務会計課、町民課の職員たち40人ほどが出てきていた。「高い所に逃げろというより、建物が崩れるから外に出ろという共通の認識だったと思う」と菊池は回想する。

耐震補強されず

中央棟1階の町民課のカウンターでは、国保年金班長の故里舘ひろ子さん＝当時（57）＝と同班主事の平野正晃（37）が来客の町民らにすぐに建物から退避するよう呼び掛けた。1999（平成11）年採用の平野も、先輩たちに「役場に入った時から『大きな地震が来たら（旧庁舎は）耐えられないんだぞ』という話を聞かされていた」。実際、新耐震基準を盛り込んだ建築基準法改正（1981年）後も、旧庁舎に耐震補強工事は施されていなかった。

企画財政課の壁には地震計が据え付けられていた。同課企画班長の伊藤幸人（57）は、地震計から警報音と共に震度を印字したロール紙がどんどん吐き出されてくるのを見た。その後、東棟の玄関から庁舎前に出た。

気象庁は午後2時49分に大津波警報を発表した。東梅さんは職員の1人が携帯ラジオの放送を聞いて「3メートルの津波が来ると言ってまーす」と声を張り上げたのを記憶している。町は当時、海面からの高さ6・4メートルの防潮堤に守られており、津波が越えるはずはないと思っていたと東梅さんは言う。

混乱する庁舎前

ほぼ同じ時間帯、三浦が副町長室から庁舎前に下りて撮影した写真には、職員らが携帯電話を片手に情報を集めているらしい姿や、駐車スペースに運ばれた自家発電機が写り込んでいる。加藤町長は、津波の前兆と思われる、東棟脇の井戸水のポンプから水が噴き出る現象を観察していた。三浦によると、現場はかなり混乱していた。

「震度がいくらだったのか、津波は来るのかとか、避難指示を出さねばならないのかとか、その辺の情報を得るために、まず潮位計を動かせと。県からの情報はないのかとか、町内の状況はどうかという声も飛んでいた」

停電が起きていた。余震の中、東棟1階の倉庫から発電機やガソリンを持ち出すのに手間取り、「機械系に振り回されている感じだった」。ようやく発電機を始動させ、総務課にある潮位計の電源を入れた。

戸外の本部「当然」

この場所は明確に災害対策本部だったのか。三浦が庁舎前に集まる職員たちの姿を最初に撮ってから17分後の写真では、同じ場所にすでに三つの会議用の長机と少なくとも14脚のパイプいすが置かれ、さらに一つの長机が中央棟1階「町民室」の窓から運び出されようとしている。災害の状況とその対応を時系列で書き込む「災害発生即応対応表」がボードに張り出され、災対本部の木製看板も長机に立て掛けられている。さらに複数の職員が本部員であることを示す黄色い腕章を着けていた。

画像に記録された時刻は「午後3時20分」。庁舎に津波が直撃したのがその6分後になっている。しかし、三浦によれば、カメラの時刻は「初期設定のまま」で一度もアジャストしたことがない。後述する当時の学務課職員が携帯電話で津波を撮影した時刻などを考え合わせると、3分以上進んでいた可能性がある。

平野公三は「建物が大地震に耐えられないだろうと思ったので、外に災対本部を置くのは普通の流れで、誰も疑うことはなかった」といい、平野の目には習慣化した「スムーズな動き」に映った。

庁舎前では災対本部の幹部である各課長や職員たちがせわしなく動き回り、森田によれば「冷静さを装っていたが、混乱状態だったのは間違いない」。当時の状況は町地域防災計画にある避難指示の発令基準「大津波警報が発表されたとき」などを満たしていたが、災対本部からは「避難指示」を出さず、その広報もしなかった。

防災無線で警報告知

しかし、役場消防防災課を兼ねる大槌消防署は、午後3時前と津波が押し寄せる直前の2回にわたって、防災行政無線で大津波警報のサイレンを鳴らし、高台への避難を呼び掛けた。災害時の緊急放送は、役場より先に消防署が第一報を発するという慣行もあった。放送業務は通常だと消防署の初報の後、災対本部が引き継ぐ。今回、県内で被災した沿岸12市町村を対象に行ったアンケートや取材によると、大槌町のほかに、少なくとも4市町で消防署が最初の放送をしていた。

当日の大槌町の災対本部は混乱の中、「停電で放送できない」という思い込みが一部にあったり、「避難指示を出すための情報が不確定だった」りして、津波が来る前に防災無線を使わなかった。

役場と消防署の放送設備を保守管理する佐々木電機本店（盛岡市）によると、当時の設備は停電後に非常用バッテリーが働いていたはずだという。消防署の設備には遠隔制御装置が搭載されており、NTT東日本の専用線でつながれた役場（親局）に音声が伝わる。さらに役場から城山にある中継機に無線で送信された電波を、町内56カ所（当時）の鉄柱に据え付けられた拡声器（子局）が受信して放送する仕組みだ。津波の前、消防署発のサイレンやアナウンスが聞こえた地域では、子局などの設備に停電の影響は特になかったとみられる。

緊急一斉で放送

消防士の柏木渉（36）は地震の揺れの後、電源を復旧させようと、役場東側にほぼ隣接する消防署の西側に面した町道の路肩で自家発電機を動かした。1階の通信室で、通信業務の当番だった消防副士長の臼澤岳（39）は、テレビの映像に目を見張った。気象庁による大津波警報と予想津波高3メートルという字幕スーパーが流れていたからだ。

臼澤は即座に隣の放送室に飛び込んだ。町内全域の屋外拡声器から音を出す「緊急一斉」のボタンを押し、大津波警報のサイレンを鳴らした。「ただ今、岩手県沿岸に大津波警報が発表されております。海岸部の皆さんは、定められた避難場所へただちに避難してください」。臼澤は文例に従い、マイクに向かって3回アナウンスしたと記憶する。

役場に近い末広町や大町で避難を呼び掛けるアナウンスが流れる中、逃げ惑う人々の姿を車窓から捉えた映像が、動画投稿サイト「ユーチューブ」に残されている。撮影したのは米国のイルカ保護団体のメンバーだ。安渡の水産加工会社付近から県道吉里吉里釜石線に入った後、同大槌小鎚線の交差点を左折し、町立図書館の辺りに至る約1・5キロの沿道の様子を収めた。映像では断片的にレンタカーと思われる車内のデジタル時計の表示が見える。

アナウンスは15時前

これによると、午後2時55分、町民課の里舘さんとみられる女性が新港町の自宅前で車に乗り込んでいる。里舘さんは地震の後、家からペットの大型犬を連れ出して庁舎東棟脇の道路に駐車。三浦が庁舎前で最初に撮影した写真に写る里舘さんは、自家用車から降りた直後の姿だったと思われる。

イルカ保護団体の車は地震から10分後の同56分に吉里吉里釜石線を左に曲がり、大槌小鎚線を中心街に向かう。この時点で目立った車の渋滞は起きていない。「……ただちに避難してください。ただ今、岩手県沿岸に……」。車が約400メートル先の役場付近を通過した辺りで、臼澤のアナウンスが途切れがちに聞こえてくる。車のデジタル時計は映っていないが、臼澤が第一声を発したのは午後3時直前の時間帯だったはずだ。

大町の路上では、住民や自転車に乗った青いジャージー姿の中学生が避難を急いでいる。その中に当時安渡に住んでいた中村新太郎さん（78）もいた。津波を恐れ、子どものころから避難場所だった安渡の大徳院の墓地に徒歩で逃れようとしていた。左足が不自由で常に一定の速度で歩き、50メートル行くのに約50秒かかる。大徳院は中村さんが映り込んだ「つくし薬局大町店」の前から約800メートル東にあり、14分程度で到着する計算になる。途中、大槌大橋の上から大槌川の水がすっかり引いているのが見え、安渡トンネルを抜けてすぐの墓地に出た。しばらくたってから、眼下の安渡一帯に津波が押し寄せてきたという。

イルカ保護団体のビデオが捉えた、大町から安渡を目指す中村新太郎さん（写真中央）©2011 Brian Barnes For StormChasingVideo.com

大徳院墓地に立つ中村さん。「ここから大津波が見えた」という

2回目は津波直前

臼澤が次にマイクに向かったのは、当時の副署長が津波襲来を叫びながら走ってくるのを県道に面した通信室の窓から見たすぐ後のことだ。臼澤は再び放送室に入ってサイレンを鳴らし、住民に避難を呼び掛けた。3回アナウンスして放送室を出ると、釜石消防署消防副士長で非番だった故阿部宏勤（ひろのり）さん＝当時（29）＝が来ていて、すでに活動服姿だった。赤浜に自宅があり、地震の後、大槌消防署に駆け付けた。2人で2階に逃げ込むと津波のしぶきがすでに窓にかかっていた。2階では、同じく非番の大槌消防署消防士の故小笠原心（しん）さん＝当時（23）＝が活動服に着替えている最中だった。そこから屋外のらせん階段を津波に追いつかれそうになりながら駆け上がった。署員13人が屋上に避難したが、阿部さんと小笠原さんの姿はその中になかった。

この時の臼澤のアナウンスが、中心街の町方を襲う津波の様子を中央公民館の学務課の窓から捉えた映像に明瞭に録音されている。同課主任の小笠原純一（46）が携帯電話のカメラで撮った。撮影を開始したのは、内蔵の時計によると午後3時21分。25秒後に防災行政無線の放送がチャイムと共に終わり、直後にJR山田線（当時）大槌駅の背後まで津波が迫っているのが見える。その2分後に町方は完全に津波にのまれた。

税務課長が避難誘導

税務会計課出納班主事の佐々木和美（37）は地震の後、停電で薄暗い庁舎内から手提げ金庫を持って外に出た。「貸して。総務課の高い所に置いてきてやっから」。声を掛けてくれた同課主幹で出納班長の故佐々木庸介さん＝当時（58）＝に金庫を託した。

同課課税班主任の岡野治子（44）は、同僚ら3人と共に、役場から西に約100メートル離れた集会施設「御社地ふれあいセンター」で所得税の確定申告の受付業務をしていて地震に遭った。すぐ近くの実家に母親＝当時（64）＝の安否を確認しに行く途中、福祉課の職員数人が近隣住民に避難を呼び掛けながら、指定避難所の中央公民館がある高台の城山に向かうのを見た。実家に行く前か、センターに戻った後か思い出せないが、課長の故祝田眞悟さん＝当時（60）＝が役場からセンター前の広場に来て、来場者らの避難誘導に当たっていたという。祝田さんはこの後、役場に戻ったとみられる。

岡野は程なく、課税班主任の故上野芳子さん＝当時（34）、男性職員2人と、上司の指示を仰ごうと役場に行く。庁舎前で合流した佐々木和美は、上野さんが町中に住む親戚が心配だから見てくると言って役場を後にするのを「気を付けてね」と見送った。岡野は町民課の里舘さんが飼い犬を海沿いの家から車に乗せてきたことや、自宅周辺の「床上浸水は避けられないかな」と話していたのを覚えている。やがて男性職員らが長机やパイプいすを運び出し、災対本部を立ち上げていく。佐々木和美は「どうしていいか分からなくて」遠巻きに見守っていた。

防災手帳に見入る

三浦が撮影した写真では、災害発生即応対応表を背に総務課長の澤舘さんと総務広聴班主任の故藤原宏一郎さん＝当時（35）＝が並んで立ち、澤舘さんが携帯電話の画面に見入り、藤原さんがえんじ色の「大槌町職員用防災手帳」に目を落としている。当時の町地域防災計画と、そのダイジェスト版に当たる同手帳は、町の災害対応のマニュアルといえるものだ。

2004（平成16）年ごろの作成とみられ、震災前に職員らの手元にあった青い表紙の同計画は10（同22）年度に大幅な改訂作業を終え、新しく印刷した冊子を配布するばかりになっていたが、津波で流された。防災手帳はその改訂作業と並行して作られ、震災前年の10年に全職員に支給された。当時、改訂の経過を知る幹部以外の職員が認識していた災害対応の手引きは、改訂前の同計画と防災手帳ということになる。

地域防災計画で定める災害対策本部の位置は、改訂前も後も「上閉伊郡大槌町新町1番1号　大槌町役場」だ。ただし、「役場庁舎が被災し、本部としての使用に耐えないと見込まれたとき」には仮設本部を、かつて大槌城があった城山の中腹に立つ小鎚第32地割126番地の町中央公民館（1977年築）に設置することとしている。2013（平成25）年度以降の改訂版では、震災の反省と教訓を踏まえ、新たに「津波警報もしくは大津波警報が発表されたとき」を中央公民館への設置基準に加えた。

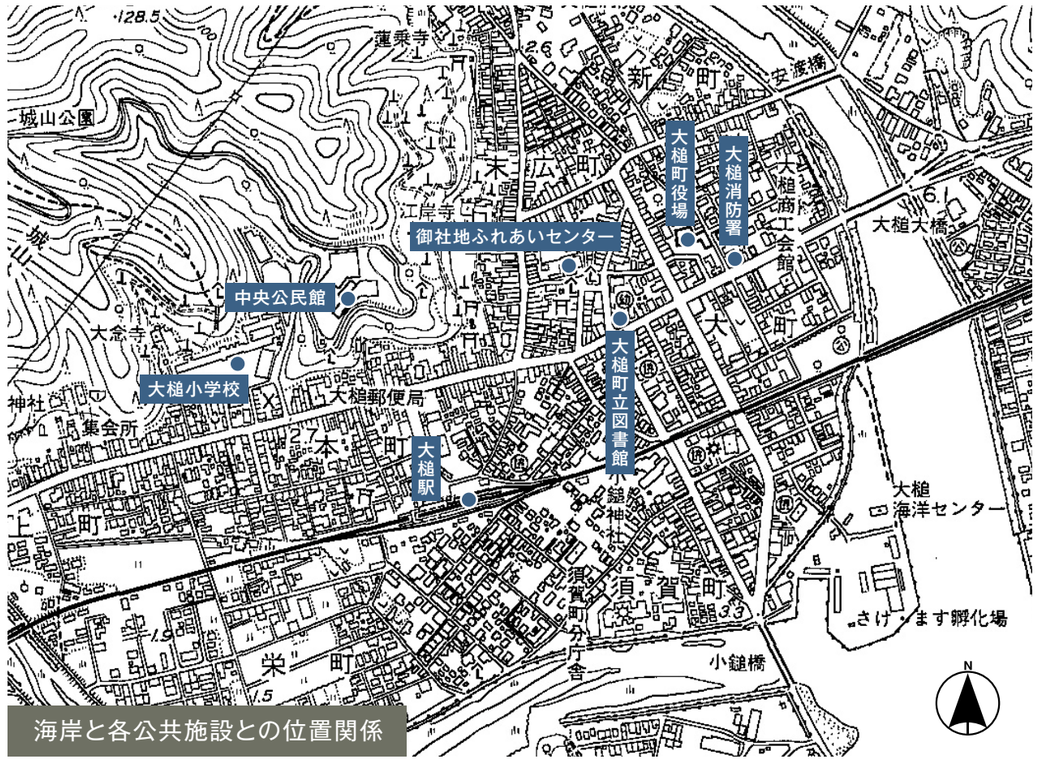
発災当日の状況は、防災手帳によると、全職員が参集する「2号非常配備」で災対本部を設置しなければならない「津波警報及び大津波警報が発表された場合」「震度5弱以上の地震が発生した場合」などの条件を満たしていたと思われる。

参集は「職務命令」

「われわれはなぜそこ（庁舎前）にいたのか、と問われれば、それは職務命令だから。（決まりでは）『役場に来い』です」と語気を強めるのは、津波が押し寄せる寸前まで災対本部付近にとどまった森田だ。あくまでも地域防災計画というマニュアルに従った行動だったという。「職員はぼーっとしていたとか、危機感がなかったということではなくて、身の危険を感じながらも、何かしなきゃという思いで庁舎前にいたんです」

災対本部で副町長と共に副本部長の職責を担う教育長（当時）の伊藤正治（しょうじ）さん（69）も、城山の中央公民館内にある教育長室で地震に遭った後、東に約400メートル離れた役場まで歩いて下りてきた。2日前に警戒本部を設置した経緯もあり、津波の恐れより「何かあれば役場に集まるという判断」が優先した。

揺れの直後、併設する学務課や生涯学習課などの各部屋、隣接する城山公園体育館の館内を見回り、外に出て、眼下の大槌小学校のグラウンドに集合した児童らが城山に避難してこようとしているのを確認。その反対側、江岸寺の墓地がある山腹のつづら折れの坂道を急ぎ足で下った。当日の伊藤さんと同じ移動経路をほぼ同じ速度でたどると、役場まで10分余りで来られる。午後3時を回るころには到着



海岸と各公共施設との位置関係

役場庁舎に向かった津波当日の経路をたどる伊藤正治さん。大槌小児童の安否を確かめた後、城山を下りたという

城山の中央公民館。震災当時の地域防災計画では、役場庁舎が災対本部として使用できない場合に仮設本部が置かれることになっていた

震災当時の災害対応マニュアルだった町地域防災計画（左）と職員用防災手帳

していたことになる。

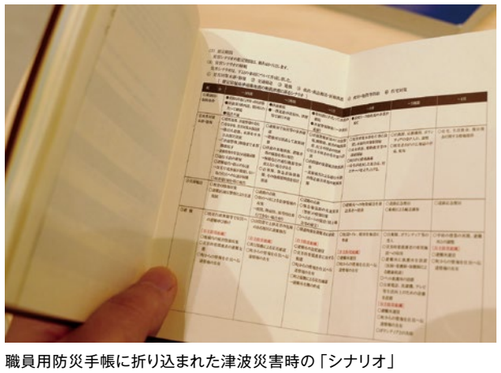
伊藤さんの記憶や翌12日に自身が書き留めたメモによると、役場に着くと加藤町長と共に東棟2階総務課の窓際にあった潮位計のモニターを観察。その時、大きな変化は認められなかった。そこから外に出て間もなく職員らが庁舎前に机やいすを運び出し、総務課の藤原さんが災対本部の看板を持ってきた。伊藤さんもこの動きに違和感を覚えず、「余震で（庁舎）倒壊の恐れがあるので、（災対本部は）ここだなと」。

「シナリオ」生きず

防災手帳には、改訂後の地域防災計画も載せていないページがある。「地震津波災害における行政と自主防災組織等の災害応急対策に係るシナリオ等」がそれだ。国の地震調査研究推進本部が2009（平成21）年に宮城県沖地震の10年以内の発生確率が70％などと発表したのを受け、同地震による大槌町の津波の大きさや被害を予想した上で、発災から1カ月間の災対本部や交通輸送、避難などの動きを推定。「岩手県地震・津波シミュレーション及び被害想定調査に関する報告書」（2004年）に掲載された地域別の「災害シナリオ」を基に作成した。

防災手帳のシナリオは、発災1時間までの災対本部の動向について「職員も避難、本部を中央公民館に設置」としている。県シナリオ沿岸南部の項にある「市町村職員も避難、本部を安全な場所に設置」に対応したものだ。手帳の製作は後に町長になる当時の碇川豊総務課長が指揮し、現町長の平野公三を中心に防災担当の総務課員が携わった。手帳は加藤町長名の前書きで、地震調査研究推進本部の発表や10年2月発生のチリ地震津波への「対応に視点を置いて」まとめたとしており、町がシナリオ掲載に力を入れていたのが分かる。

碇川さんは「地域防災計画の冊子は大き過ぎて不便。地震関連の特措法や県のシミュレーションを受け、大槌に津波が来ても職員たちが戸惑わないよう、同計画のエキスをポケットに入れられる形にした」と振り返る。



職員用防災手帳に折り込まれた津波災害時の「シナリオ」

しかし、今回取材に応じた職員の多くは、手帳にそれほど大きな関心を払わず、震災当時にシナリオの記述があったこともはっきり知らなかった。シナリオは、職員たちの意識の中で明確に「マニュアル化」していたとは言い難い。これとは別に、06（平成18）年ごろ、中央公民館での災対本部開設を想定した訓練が実施されたこともあったが、その経験は十分に生かされなかった。

平野は、「シナリオが血肉になっていなかったのか」との問いに対して、「それは確かにある」と認める。「（シナリオを）見ることはあっても、十分にものになっていなかった。大いに反省しなければならない」

「城山行くぞ」

庁舎前にいた職員の間では、情報が不足したり錯綜したりする中、災対本部についての認識が一定でなかったようだ。その場を本設だと思っていなかった者もいる。町民課の平野正晃と企画財政課の菊池は、それぞれ異なる捉え方をしていた。

平野は、庁舎前の本部は「とりあえず、いったん置いた」仮設であり、総務課長の澤舘さんが早い段階で城山の中央公民館への移動を模索していたのではないかとみる。平野と同じく役場近くに住居があり、災対本部要員になっていた福祉課介護班主事の故倉堀健（たけし）さん＝当時（30）＝は、澤舘さんの意を察し、津波襲来の少し前に城山に向かって歩きだした様子だったという。消防署の臼澤によると、倉堀さんは臼澤が防災無線の放送をするより前の時間帯に消防署に来て、情報収集に努めていた。

平野と逆に菊池は、初期の段階で城山に移ろうとする気配はなかったと感じ、「落ち着いたら（本部を）2階（の総務課）に戻す」といった趣旨の会話を本部周辺で聞いたおぼろげな記憶がある。

平野正晃と菊池を含む複数の職員の証言によると、津波の直前、澤舘さんは城山への移動を職員たちに命じた。「ここにいてもどうにもなんねえ。みんなで城山に行くぞ」。税務会計課の森田は、澤舘さんがこう言ったと記憶している。しかし、間近にいた平野公三はこのことを覚えていない。ただ、同じ時間帯に澤舘さんに対して「このままいては、やばいんじゃないでしょうか」と話し掛けたものの、災対本部の移設先がどこかについては、シナリオの記載にもかかわらず「（意識から）すっぽ抜けていた」という。

移設決めていた？

総務課の三浦が津波の直撃する1分前に撮影した写真には、澤舘さんが平野公三の前で城山方面を指さし、何か言っている様子が捉えられている。傍らには総務課職員情報班主事の故花石一（ちから）さん＝当時（25）＝が立ち、リュックサックらしいものの、ストラップを肩にかけている。リュックの中には、役場で毎日バックアップしていた住民基本台帳や戸籍、税などの住民記録の磁気テープ（DAT）が入っていたようだ。森田と企画財政課の伊藤幸人が、リュックを背負い「DATを取ってきました」と言って今にも動きだそうとする花石さんの姿を覚えている。津波の2週間後、東棟2階で流されなかった住基サーバーの中にDATが残っていなかったことが確認されており、写真に収まる前の花石さんが取り出したと思われる。遅くとも津波の数分前までに、澤舘さんは災対本部の移動を決め、花石さんに指示を出していた可能性がある。

一方、平野公三はDATを持ち出すのは非常時の「約束事」であり、本部移設を前提とした特別な動きではなかったとの見方を示す。

待機中に津波襲来

職員の犠牲者は庁舎前だけでなく、中央棟の北側に隣接する通称「裏庁舎」の2階にあった地域整備課に集中していた。2003（平成15）年増築の裏庁舎は木造2階建てで建築面積が約330平方メートルあったが、津波の威力で根こそぎ流された。当時役場にいた同課職員13人のうち課長と2人の臨時職員を含む11人が亡くなり、大半の人が室内で待機中のところを津波に襲われたとみられる。同課の様子をうかがうには、津波が来る10分ほど前に部屋を離れて無事だった管理班主事の久保晴紀（34）ほぼ1人の証言に頼るしかない。

久保によると、地震の揺れが収まって程なく、課長の故小川千里（ちさと）さん＝当時（58）＝が総務課方面に行った。5～10分後に戻ってきた小川さんは、課員らにいったん待機するように言い残して、再び出て行く。庁舎前の災対本部に向かったとみられる。同課は災害時、道路や下水道といった公共土木施設の被害調査と保全・復旧などを担当する決まりになっていた。

しばらくして中央公民館にある生涯学習課から電話がかかってきた。「避難者が集まってきている。屋外公衆トイレの鍵を開けてほしい」。公民館駐車場の公衆トイレが冬季で閉鎖されており、管理担当の久保は鍵を携えて同僚と2人で公用車に乗り込んだ。

役場裏の駐車場では、同課工務班主査の故三浦徳幸（のりゆき）さん＝当時（44）＝が道路パトロール用の四輪駆動車にエンジンをかけ、カーラジオを聞きながら車のそばに立っていた。三浦さんはこの後、主任技師の故八幡力（ちから）さん＝同（36）、技師の故川端大佑さん＝同（30）＝ら同僚と町内のポンプ場などを見回りに出掛けて津波に遭った可能性がある。副町長だった東梅さんは、庁舎前で小川さんから「ポンプ場もあるし、部下を被害調査に向かわせた」との報告を受けたという。

久保は中央公民館に向かって役場前の県道を走行中、末広町付近で福祉課地域包括支援センター班長の故阿部久美子さん＝当時（51）＝と同班社会福祉士の故小笠原裕香さん＝同（26）、同班臨時職員の故岩間成子（せいこ）さん＝同（44）、同班主任保健師の4人が乗っていたとみられる白い軽自動車とすれ違った。阿部さんらは釜石市であった介護支援専門員の研修会場で地震に遭い、役場に戻る途中だった。

「声掛けて逃げろ」

一方、福祉課は地域整備課と同じ裏庁舎にありながら、在室した多くの職員がいち早く城山に避難して助かった。

福祉班主任の黒澤直美（46）は1階の同課で本震と最初の余震をやり過ごした後、いったん本庁舎前の様子を見に行った。町民課の里舘さんが「停電で情報も入らないけどワンセグ（携帯）を見てるよ」と話していたり、加藤町長が井戸水のポンプを見ていたりした。

福祉班主査だった中野久実子さん（61）は揺れに驚いて課員7、8人と外に出た。大きな余震が起き、けが人に備えて救急用品が入ったバッグを取りに室内に戻ろうとすると、課長の故関郁夫さん＝当時（58）＝に制止された。「それは（後で）戻って来てからでもできる。町民に声を掛けながらまず避難しろ」

庁舎前から同課に帰った黒澤は、健康推進班長の女性（66）が「貴重品を持って逃げて！」と大声を出したのを耳にした。同班長は防災行政無線が大津波警報を告げるのを聞き、関さんの了解を得てから課員に城山への避難を指示した。関さんはこの後、「災対本部の会議に行く」と言い残し、かばんとコートを持って部屋を後にしたという。

介護班長だった前出（226ページ）の越田由美子さんもどう動いていいか迷ったが、健康推進班長の一声で我に返った。「そうだ、役場で対応できないときは中央公民館でやるんだ」。チリ地震津波の記憶と共に地域防災計画や防災手帳のシナリオが頭をよぎり、過去の訓練で同公民館に災対本部を置いたことを思い出したという。

車いす押し高台へ

健康推進班主査保健師の藤原純枝（58）は、班員5、6人と手分けして近隣住民に避難を呼び掛けながら御社地ふれあいセンター方面に向かった。藤原たちは片っ端から家々のドアを開けた。多くの人が在宅していて、すぐに逃げるよう説得した。センター前にも住民らが集まっていた。すぐそばの江岸寺の裏から墓地のある城山を上れば中央公民館に行ける。

「高台に上がりましょう」。保健師3人が裏庁舎に戻って車いすを運んできた。高齢者らを乗せ、急坂を上った。藤原は力尽きる。「上がれ、上がれ」。坂の上から大声が聞こえてきた。そばにいた男性たちが車いすごと抱えてくれた。振り返ると、町は津波にのまれつつあった。

津波が迫り、中央公民館に通じる墓地の坂道を逃げる人々（2011年3月11日撮影）。藤原純枝保健師は高齢者を助けながら急こう配を上った

黒澤と中野さんは行動を共にし、乳飲み子と一緒の妊婦を助けながら逃げた。江岸寺に近いすし屋「鮨辰」の角で、足早に役場に向かう教育長の伊藤さんと出会った。中野さんはとっさに伊藤さんの上着の袖を引いた。「行かないでください！」。海辺の須賀町で育った中野さんは、幼いころから家庭で津波の怖さを繰り返し伝え聞かされていた。伊藤さんは険しい表情で役場方面を凝視し、中野さんの手を振りほどいた。

緊張で文字書けず

総務課総務広聴班主事の四戸（しのへ）直紀（39）は、午後から休暇を取って自家用車で盛岡に向かう途上だった。地震は釜石市松原の国道45号、甲子（かっし）川にかかる矢の浦橋を走行中に襲った。車がバウンドするような激しい縦揺れ。防災担当の四戸は釜石の中心街を抜けて役場に引き返した。ほとんど渋滞はなく、20分ほどで着いた。庁舎前にはすでに長机が並び、総務課員らが「黙々と」立ち働いていた。

近くに止めてあった警察か消防の車両の無線機から「浪板川で軽自動車が流されている」という音声が聞こえてきた。四戸はその情報を災対本部に掲げた災害発生即応対応表に書こうとした。だが、心臓が早鐘のように打ち、緊張のあまり手が震えて文字にならない。そばにいた総務広聴班主事の故小笠原広樹さん＝当時（28）＝が見かねてペンを取り、代わってくれた。

その直前と思われる場面を同班の三浦が撮影していた。写真では、対応表の前で茶色のコートを着た同班主事の故佐藤一葉（かずは）さん＝当時（26）＝が青いペンを持ち、その左隣に赤いダウンジャケットの小笠原さんが立っている。後ろ姿でよく分からないが、小笠原さんは何かが書かれた白い紙に目を通しているようだ。

写真の対応表には、1行目に青字で「報発令」、2行目に赤字で「設置」、3行目に青字で「から救出済」の文字が見える。当時の状況を考えれば、1行目は「大津波警報発令」、2行目には「災害対策本部設置」と、それぞれの時刻と共に記されていると推定できる。3行目は無線で傍受するなどした何らかの情報だろうか。これらは、この5分前に撮影された対応表には書かれていない。

四戸の記憶では、対応表前でのことがあってすぐ、澤舘さんが「もうやめ、やめ、城山に上がるぞ」と声を張り上げた。

急告げた佐々木さん

「津波だー！」。寒空を切り裂くような叫び声が一帯に響いた。危急を告げたのは、税務会計課の佐々木庸介さんだった。今回取材した当時災対本部周辺にいた16人全員が佐々木さんと思われる男性の声を正面玄関付近で聞いて逃げ、そのうち4人は直前に澤舘さんによる避難指示をはっきり聞いたと記憶する。四戸は「庸介さんが叫ばなかったら、犠牲者はもっと増えていたと思う」と話す。

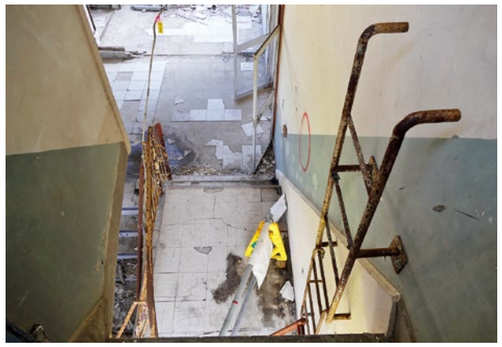
災対本部周辺にいた職員たちは一目散に、中央棟の正面玄関、あるいは東棟の玄関から階段を駆け上がった。

庁舎前に居続けた税務会計課の岡野は、海側の町並みを見通せる場所に立っていた。遠くの方の家が音を立てて崩れてゆく。「あれ、地震の揺れで今ごろ？」。同課の佐々木和美も町中に立ち上る土煙を見て、「あっ！」と声を上げた。2人とも佐々木庸介さんの声で我に返って走った。まっすぐ中央棟2階へ。南に向いた踊り場の窓辺から海の方を見る佐々木庸介さんの後ろ姿が視界に入った。

そびえる「黒い壁」

同課の森田は庁舎前で佐々木和美の声に振り返ると、県道に面して立つ県内最古のジャズ喫茶とされる「クイーン」の木造2階建ての店舗が津波でつぶれるのが見えた。反射的に中央棟の正面玄関に駆け込んだ瞬間、すぐそばで佐々木庸介さんの声がした。平野公三も佐々木さんが叫ぶのとほぼ同時に津波を目撃した。庁舎前から見えるはずの、いつもの町が見えない。「黒い壁」のような大津波が立ちはだかっていた。

中央棟2階の壁には計7段の鉄製はしごが垂直に取り付けてあり、屋上に通じる階段との間をつないでいる。取材した災対本部周辺の16人のうち10人がこれを上り切って屋上に逃れた。森田によると、自身が最も早くはしごに手を掛け、この後に平野公三が続いた。はしごの先には踊り場があり、幅約1メートル10段ほどの狭い階段を行くとノブ式でアルミ製のドアが現れる。その向こう側が屋上だ。ガチャガチャとノブを回したが、開かない。ガン、ガン。大柄で屈強な平野が肩口から何度か体当たりした。ドアを開けた記憶があるのは、平野と、その後に上ってきた産業振興課水産商工班主事の小笠原佑樹（36）だ。平野は「（ドアを）開けてみたら、（眼下は）海だった」という。



津波の日、職員の生死を分けた鉄製はしご（2018年6月18日撮影）。1979年以前は階段があったという

はしごで滞る避難

企画財政課の菊池がはしごに到達した時、前には2人ほどがいた。菊池が上っている最中にも、周囲にはみるみる「人があふれていった」。町民課の平野正晃は正面玄関から階段を上がってすぐ、2階南側の「高規格道路対策室」に飛び込み、窓の外を見た。土煙が上がり、津波が目前に迫っていた。はしごの向こう側の、会議室が並ぶ増築庁舎のフロアに「10人ほど」の職員たちと逃げ込んだが、はしごを上りづらそうにしている女性職員たちに気付いて引き返し、押し上げてやった。平野正晃が続いて上がると、踊り場から屋上へのドアにかけて人が数珠つなぎに詰まっていた。

庁舎に垂れ幕を掛けるなどたびたび屋上に行く用事があった平野正晃は、ドアに「癖があって」開けづらいのを知っていた。ドアはそのうち開いたが、平野正晃と森田らはそこからでなく、踊り場付近の窓から屋上に出た。

当時議会事務局長の赤崎仁一さん（67）は、東棟の階段を2階に上がってから中央棟に回り、はしごの前に至った。女性職員たちを先に上げたが、赤崎さんが来た時、人々が殺到している感じはなかったという。税務会計課の岡野は、町民課主幹で町民生活班長の故金崎健悦（けんえつ）さん＝当時（56）＝がはしごの所で女性職員の避難を助けていたと記憶する。

階段壊しはしご設置

このはしごは、元々あった2階から屋上へ続く階段を取り壊して設置された、という証言がある。確かに、はしごを伝って中空の踊り場に飛び移り、次は階段を上るという構造はいかにも不自然だ。元役場職員の山崎衛さん（67）や元副町長の東梅さんによると、1954（昭和29）年竣工の既存庁舎の北側に密接させる形で、79（同54）年ごろに鉄骨造2階建ての庁舎（建築面積245平方メートル）を増築した際、既存庁舎と増築庁舎の間の行き来を容易にするため壁をぶち抜いた。邪魔になった踊り場までの階段を撤去し、代わりに鉄製はしごを架けたようだ。

9歳まで新町に住んでいた釜石市の男性（68）は小学校低学年のころ、友達と階段で屋上に上がり、鬼ごっこなどをして遊んだ記憶がある。津波の時、役場職員がはしごを使って避難したという報道に接して、驚いたという。

総務課の四戸は、はしごの下まで来たものの、膝の高さまで達していた水の勢いで尻もちをつき、増築庁舎側に流された。とっさに廊下を挟んで正面にある会議室に入り込み、奥の長机の上に乗った。水をかき分けながら部屋に入ってくる人がいた。総務課長の澤舘さんだった。澤舘さんは入り口に近い長机に上がった。目が合って言葉を交わそうとした瞬間、どっと水の塊が流れ込んできた。水はたちまち天井まで達した。

ポンプ場に飛び乗る

四戸は水圧で「金縛りに遭った」ようになり、体が押しつぶされると感じた。息が苦しい。「もう駄目だ」。沈んでゆく。足先に何かが当たり、思い切り蹴り上げた。体が浮き上がり、水面に顔を出すと、屋上に避難した職員たちの姿が目に入った。四戸は水圧で破られた増築庁舎の壁の穴から抜け出られたらしい。澤舘さんと四戸を隔てた3メートルほどの距離が、2人の命運を分けたようだった。

近くで監査委員室監査班長の故前川正志さん＝当時（52）＝が漂流していた。さらに後方には黒髪の女性がいた。顔ははっきり見えなかったが、総務課の佐藤さんだったと四戸は思っている。

「また、津波が来たぞ！」。屋上の職員が叫んだ。四戸は近くを流れていた1・5メートル四方ほどの赤い屋根にしがみついた。その波で北西に約400メートル離れた大槌病院の手前まで持って行かれ、さらに流れの速い引き波に一気に500メートル戻された。城山のすそ野に流れ着いたがれきから火の手が上がっている。半分水没した大町雨水ポンプ場のコンクリート2階の建物が視界に飛び込んできた。この先はすぐ海だ。「早く飛び乗れ」。職員たちの声が聞こえた。四戸は意を決して立ち上がり、ポンプ場のバルコニーに足を踏み出し

大槌川沿いに立つ大町雨水ポンプ場。四戸直紀職員はバルコニー部分に飛び乗った

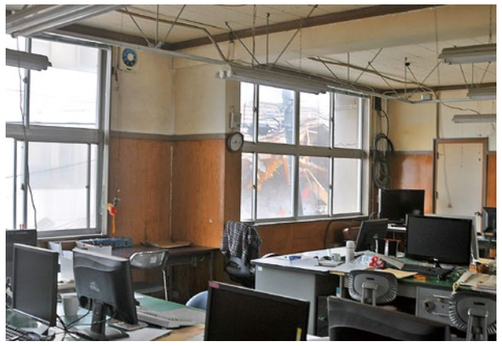
た。この場所で凍えるような寒さと風雪に耐えながら、一夜を過ごすことになる。

廊下で津波にのまれ

教育長の伊藤正治さんと企画財政課の伊藤幸人、総務課の三浦は、共に庁舎2階の廊下を逃げる途中、津波に巻き込まれた。

伊藤正治さんは庁舎前で災対本部の設営が始まるのを認識し、渋滞する周辺道路を見回った後、再び総務課に上がる。「2メートル10！」。先にいた加藤町長が大槌港で上がっていく潮位を読み上げて、窓から災対本部の澤舘さんに伝え、下りていった。残った伊藤さんが潮位計のモニターを見ると、計器は「2メートル56」の数値を示してから下がり始めた。窓の外で佐々木庸介さんが叫んだ。眼下に真っ黒い津波が押し寄せ、向かいの「大坂屋菓子店」の裏口付近にいた高齢男性に襲い掛かった。

カメラを首に下げた三浦と伊藤幸人が総務課に飛び込んできた。三浦は東側の窓辺から戸外にレンズを向け、3秒間に3回シャッターを切った。そのうち1、2枚目には、町民課の里舘さんが路上に止めた黒いステーションワゴンに津波が直撃し、水しぶきを上げる様子が写っていた。次の瞬間、三浦が撮影した最後の1枚は、窓辺から数歩下がり、総務課の室内を捉えた。窓枠のぎりぎり手前まで木造家屋のがれきや倒れた電信柱が迫り、今にも窓ガラスを突き破りそうだ。災対本部の対応表前で佐藤さんと小笠原さんの姿を写真に収めてから、わずか1分後のことだった。



津波が窓ガラスを突き破る直前の2階総務課の室内（2011年3月11日、三浦義章職員撮影）

割れた窓から外へ

伊藤正治さんと伊藤幸人、三浦は一列で総務課前の廊下を中央棟に向かって走った。この時、加藤町長と企画財政課長の木村さんが階段を上ってきていたという。伊藤幸人が東棟と中央棟の接合部の短い階段を上り切ったとたん、中央棟南側の副町長室の壁を押し破って水が入り込んできた。伊藤幸人とすぐ後ろの三浦は足を取られて、東棟北端のトイレの室内に流される。2人は個室のドアなどにしがみついた。水はみるみる天井に届いた。暗い。向かいの給油所が破壊されたせいか、ガソリンが臭う。「もう息ができない」。2人とも水に潜り込んでもがき、ガラスの割れたトイレの窓から東棟の北側に浮かび上がった。

三浦によれば、水面から顔を出す総務課の四戸と監査委員室の前川さんが少し離れた所に見えた。上背のある伊藤幸人は小柄な三浦をまず東棟の屋上に押し上げ、自らも続いた。町民課の平野正晃ら数人が中央棟の屋上から垂れ幕のようなものを前川さんに投げたが、届かなかった。

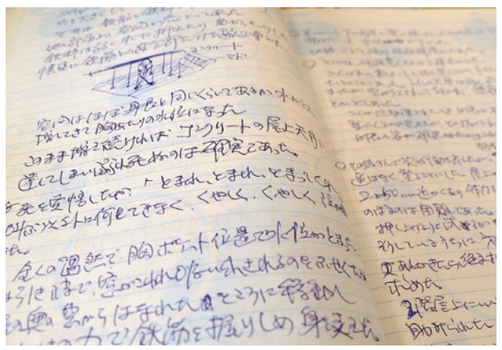
伊藤正治さんは破壊された副町長室の壁に左足を挟まれた。身動きできないでいる間に、水かさはどんどん増してくる。水圧でその壁が動き、廊下の天井にぶつかって穴を開けた。伊藤さんは穴を広げてよじ登り、副町長室の屋根裏に出た。大人の身長ほどの高さがある空間にも水は容赦なく上がってくる。幸運にも水位は胸の辺りで止まった。副町長室東側の高所にある窓からはい出し、隣接する東棟の屋上に下り立った。

屋上で出会った3人が沖合を見ると、蓬莱島の辺りに次の大きな波が迫っていた。「のまれたら助からない。そっちの屋上へ逃げよう」。中央棟屋上は東棟屋上より2・5メートルほど高く、段差を自力で克服するのは難しい。中央棟の避難者に助けを求めた。屈んだ伊藤幸人と三浦が踏み台になって伊藤正治さんを先に上げ、次に三浦が行った。伊藤幸人は電線をつかんで引き上げてもらった。程なくして大波が東棟の屋上をさらっていった。

中央棟屋上に移った伊藤正治さんは、水の中に沈んでゆく前川さんの姿を目の当たりにした。見ているだけの自分が「情けなく、悔しかった」。伊藤さんは翌日のメモにこう書き留めた。「前川さんの無念そうな最後の顔が目に浮かぶ。彼は『助けてくれ』の一言も発することなく、その姿を消してしまった」

平野正晃は、黒っぽいコートを着た後ろ姿の女性が近くの家屋のベランダのような所にしがみついていたのを覚えている。「もっと上に上がれ」と呼び掛けたが、返事はなかったという。

伊藤さんは左上の窓から隣接する東棟（写真では解体済み）の屋上にはい出した（2018年8月23日撮影）



「とまれ、とまれ、とまってくれ」。伊藤正治さんが津波の翌日、水かさが増す様子を思い起こして書き止めたメモ

吸い込まれた裏庁舎

屋上に避難した職員たちはさらなる津波の襲来を恐れ、階段室の上に突き出した「塔屋」にはしごを伝って上がる。平野公三はそこから、木造2階建ての「裏庁舎」が津波の威力で浮き上がり、北西の方角に流されていくのを見た。裏庁舎はこの次の引き波に戻されて既存庁舎の西側を通り過ぎ、大槌川河口付近で河川堤防が破壊された部分から沖の方に吸い込まれた。「誰かは分からないが、庁舎の中で職員が動いているのが見えた。堤防が壊れた辺りが渦巻き状になっていて、建物はそこにスーッと入っていってつぶれた。私は声も出せず、祈るしかなかった」

津波にさらされる役場庁舎（奥の建物）＝2011年3月11日、植田俊郎さん撮影。パラボラアンテナの付いた塔屋に役場職員が逃げ込んでいるのが見える

西棟屋根裏に逃れ

既存庁舎の西側に隣接する鉄骨造2階建ての増築庁舎（西棟）に逃げ込んで助かった職員もいる。西棟は1995（平成7）年に完成し、建築面積が約190平方メートル。1階が車庫で、2階に議長室や議会事務局など3部屋があった。

税務会計課収納班主任の太田和浩（49）は地震の後、須賀町の自宅の様子を見に行った帰り、庁舎前庭の西側で近くの商店主と釜石に到達した津波の高さについて会話していた。その最中、背後で佐々木庸介さんの声を聞いた。振り向くと、すでに土煙を上げて津波が迫っていた。目に入った高い場所が西棟だった。外にある金属製の階段を一気に駆け上り、2階で一番手前の議員控室に飛び込んだ。目の前の長机に乗った。みるみる水かさが増してくる。浮かび上がったロッカーか書庫のような物にさらに足を掛けると、そのまま天井に手が着いた。天井板をぶち抜き、屋根裏によじ登った。はりにつかまり、鉄骨の上に立って窓の外を流れる津波をやり過ごした。

同班主査の祝田茂（52）も庁舎前にしばらくいた後、歩いて5分ほどの本町の自宅との間を往復。役場への帰り道、庁舎前庭の西側に差し掛かったとたん、「津波だ！」という男性の切迫した声を聞いた。祝田は脇目も振らず、西棟の外階段へ。前には太田が走っていた。祝田は2階北端の議会事務局に駆け込んだ。「2階だから大丈夫だろう」。だが、初め北側の窓から見下ろせた津波は一気に水位を上げ、出入り口の引き戸から流れ込んできた。事務机に上ったのもつかの間、あごの辺りまで水が来た。手を伸ばすと簡単に天井板が外れ、太田と同じように屋根裏で水が引くのを待った。

「おーい、誰かー」。議長室を挟んだ議員控室の屋根裏で、太田が声を上げた。「ここだー」。祝田が応え、そろって2階に下りた。中央棟の北側増築部分の廊下に出たところで、暖を取るために燃やせるものを探しに来た、屋上の避難者たちと出会った。

祝田は地震の直後、いつの間にか背広のポケットに職員用防災手帳を忍ばせていた。庁舎前で読み返すことはなかったが、災対本部を高台に置く「シナリオ」を自覚していたという。この津波で、太田は母＝当時（70）＝を、祝田は母＝同（77）＝と妻＝同（42）＝を亡くした。いずれも、太田と祝田が安否を確かめに行った後、在宅し続けていたとみられる。

続く過酷な「闘い」

当時役場にいたとみられる職員約50人のうち、22人が屋上に逃げ延びた。

若手の職員らは水が引いた後、庁舎内を探索し、流れ着いた油缶や木の切れ端、段ボール箱に入った袋菓子などを拾ってきた。厳しい寒さの中、油缶に木っ端を突っ込んでライターで火を起こし、まんじりともせず夜を明かした。誰もが無言だった。城山の山際から発生した火災は上町や末広町で延焼を続け、夜空を赤々と焦がした。ボーン。時折、プロパンガスのボンベか車の燃料タンクが爆発する音だけが大きく響いた。

翌朝9時半ごろ、プロペラが二つある航空自衛隊の大型輸送ヘリが飛来した。ヘリは、早朝に消防署員の助けで役場隣接の「小笠原ビル」の屋上に移った四戸や周辺住民をつり上げて救助した後、庁舎の約100メートル東に着陸。役場屋上の職

がれきが散乱する中央棟北側2階の会議室（2011年3月18日撮影）。津波は天井近くまで達した

職員22人が逃げ延びた役場庁舎屋上（2018年6月14日撮影）。中央のくぼみは避難時のたき火の痕

員たちはがれきの中を歩いてヘリに乗り込み、西に約2キロメートル離れた寺野地区の屋内運動場に身を寄せた。職員らは疲れ切った体と心を休める間もなく、城山の学務課や生涯学習課の職員と合流。その後、中央公民館に設置した災対本部や配置先の各避難所で、長く過酷な「闘い」に身を投じることになる。

検証結果を生かして

町役場は多くの職員を庁舎内外で亡くした反省と教訓を、その後の津波対策にどのように生かしているのか。

町は同様の悲劇を繰り返さないことを目的として、識者が職員らへの聴き取りを基に作成した「大槌町東日本大震災検証報告書（平成25年度版）」を2014（平成26）年に、旧庁舎前での災対本部設営に焦点を当てた「東日本大震災津波における大槌町災害対策本部の活動に関する検証報告書」を17（同29）年に、それぞれ公表。これらから抽出した134項目の提案を、18（同30）年度改訂の町地域防災計画に反映させた。

同計画では、前述のように、津波警報か大津波警報が発表された場合、直ちに災対本部を高台の城山に立つ中央公民館に設置して全職員を集めることにしたほか、次のような方針を定めた。

震災前に割り当てていた各避難場所への職員配置を廃止。津波警報以上が発表され、行程上、職員が災対本部へ安全に移動できない場合は参集しない。いずれも当該避難場所や災対本部などに参集途中の職員が被災するのを防ぐためだ。

住民に対しては、危険地域からの素早い避難を促すため、これまで津波警報以上で発令していた「避難指示」を津波注意報のレベルに引き下げ、防災行政無線で放送することにした。さらに、震災後に本格運用が始まった国の全国瞬時警報システム（Jアラート）では、緊急地震速報や津波注意報以上が発表されれば、自動的に防災行政無線が起動し、サイレンの吹鳴と高台避難を呼び掛けるアナウンスが流れる。

「不変の教訓」伝え

町はまた、正職員などを対象に、中央公民館での災対本部設置や防災行政無線の緊急放送操作手順を学ぶ防災研修会（県総合防災室、盛岡地方気象台と共同）を震災後2回実施。同公民館では18年度、旧図書室（約147平方メートル）を津波時などに使用する災対本部として改修し、防災行政無線の操作卓や衛星携帯電話、会議スペースなどを備える。

災害時に職員が迅速に初動体制を確立できるよう、町地域防災計画の該当部分を分かりやすく要約した手引き「大槌町災害時職員初動マニュアル」も14年に作成された。A3紙両面とA4紙片面に、地震・津波と風水害の場合に分けて初動対応の流れなどを掲載。新年度の初めには、同マニュアルを教材に新採用職員や応援職員を対象とした研修会を開いている。

あの日、自身も旧庁舎周辺にいて、かろうじて津波から逃れた町役場危機管理室の田中恭悦室長（58）は「職員も必ず逃げねばならないということを、不変の教訓として口を酸っぱくして伝えていきたい」と話す。

東日本大震災では、災対本部が設置される町役場への参集を定めた当時の地域防災計画に従ったがために、多くの職員が殉職したと言っても過言ではない。町が作る災害対応の仕組みに対して、今後も検証を基にした不断の見直しが求められる。

（取材／主に2018年7、8月）

中央公民館の災対本部に設置された防災行政無線の操作卓

旧役場庁舎を巡る経過　保存と解体の間で揺れる

大槌町旧役場庁舎は2019（平成31）年1月、建物の存廃を巡って住民の意見が割れる中、解体された。15（同27）年8月に就任した平野公三現町長は「旧庁舎を見たくない人の心情に寄り添う」などとして解体の方針を貫き、震災遺構としての価値を主張する一部住民が解体差し止めを求めて訴訟を起こす事態にまで至った。被災から解体までのいきさつを年表で振り返る。

2011年3月11日	東日本大震災の津波により被災。犠牲になった職員39人のうち28人が庁舎内外にいた
2012年10月	町は職員遺族と職員に「旧役場庁舎の今後のあり方」に関するアンケートを実施。対象者は遺族40人、職員247人。解体すべきという回答が約半数を占めた
2012年12月 2013年2月	旧庁舎保存に関する町民からの意見・提言を募集
2013年3月15日	大槌町旧役場庁舎検討委員会が碇川豊町長に対し、鎮魂の場づくりや防災教育の実施を提言する報告書を提出し、活動を終了
2013年3月28日	碇川町長が臨時記者会見で「旧役場庁舎正面部分を一部保存する方向で検討する」意向を表明
2014年3月28日	町は「大槌町東日本大震災検証報告書（平成25年度版）」を公表
2014年4月10日	旧庁舎の一部解体工事に着手。同年7月末に完了し、中央棟を除く3棟、総床面積の約7割を解体した
2014年8月26日	復興交付金を活用した大槌町震災遺構保存調査事業を開始。旧役場庁舎の被害状況を詳細に把握し、震災遺構としての保存方法を検討することなどが目的で、2016年3月に報告書を提出
2015年10月22日	8月28日に就任した平野公三町長が、議会全員協議会と臨時記者会見で年度内の旧庁舎解体を目指す方針を発表。「保存コストがかかり、建物を見たくない住民感情にも配慮する必要がある」とした
2015年11月	「中心市街地と旧役場庁舎のあり方」に関する町長との意見交換会を、商工観光関係者、アーカイブ関係者、一般社団法人おらが大槌夢広場、大槌高校生との間でそれぞれ開催。商工観光関係者11人のうち解体が4人、保存が3人、寺院住職3人を含むアーカイブ関係者6人のうち解体が1人、保存が5人、大槌高校生10人全員が保存を求め、おらが大槌夢広場は「答えが出ない」
2015年12月4日	大槌高校の生徒105人でつくる復興研究会が「旧役場庁舎の取扱いの早期決定回避についての要望書」を町長に提出。全校で議論し、町に提案する時間が欲しいとの内容
2015年12月8日	議会全員協議会と定例記者会見で、平野町長が旧役場庁舎の解体予算を町議会12月定例会に提案する方針を発表
2015年12月15日	町議会12月定例会の2日目、町長が当定例会への旧役場庁舎解体予算提案を行わないことを発表。「本定例会には提案しないが、解体の気持ちに一点の曇りもなく、早期に解体予算の提案をしていく」
2016年 4月18日～28日	東日本大震災復興まちづくり特別委員会（町議会特別委員会）が旧役場庁舎の保存をテーマに、町内17カ所で住民との意見交換会を実施。参加者144人
2017年7月20日	町は「東日本大震災津波における大槌町災害対策本部の活動に関する検証報告書」を公表
2017年12月8日	町長が12月議会の行政報告で、「来年3月定例会で解体予算を補正予算として計上する方向で調整したい」と報告
2018年2月10日	旧役場庁舎の保存を求める住民団体「おおづちの未来と命を考える会」が発足。旧庁舎前で設立集会を開き、町長が来賓として出席
2018年2月17日	旧役場庁舎の解体予算計上に関する住民説明会を開催。参加者71人。発言者14人中、賛成7人、反対5人、中立1人、「時期尚早」1人
2018年3月15日	平成30（2018）年度当初予算可決後に、旧役場庁舎の解体予算に関する補正予算案を追加議案として上程。7対6で可決
2018年5月28日	「おおづちの未来と命を考える会」代表髙橋英悟氏が解体予算の計上が不当などとして、解体の執行停止を求める住民監査請求を提起
2018年6月1日	定例記者会見で、町長が18日ごろ解体工事に着手する方針を表明／5月28日付の住民監査請求が却下される
2018年6月4日	髙橋英悟氏らが解体の執行停止を求める2度目の住民監査請求を提起
2018年6月11日	髙橋英悟氏が大槌町旧庁舎の解体工事の差し止めを求める仮処分命令申立書を盛岡地裁に提出
2018年6月12日	旧役場庁舎の解体工事（足場設置）着手
2018年6月21日	町が建設リサイクル法に基づく県への工事事前通知を怠っていたことが発覚し、解体工事を中断
2018年7月2日	髙橋英悟氏ら仮処分申し立てを取り下げ。町の手続き不備で工事再開のめどが立っていないことから「緊急度が薄れ、工事を止めるという所期の目的を達した」
2018年7月9日	町議5人が解体工事の一時執行停止を求めた臨時議会で、解体工事執行停止の議案が反対多数で否決
2018年7月26日	旧役場庁舎の解体は震災遺構の価値を見誤った行為であるなどとして、解体予算の執行に対して必要な措置を講じるよう住民が申し立てていた6月4日付の監査請求について、町の監査委員が請求を棄却・却下
2018年8月1日	町が2016年8月から翌年にかけて行った震災の検証作業（17年7月公表の「検証報告書」）で役場職員から聞き取った内容を記録したメモや録音データなどの資料を、担当者が廃棄していたことが発覚
2018年8月17日	「おおづちの未来と命を考える会」の髙橋英悟氏ら2人は、町長に対して、震災遺構としての価値が十分に検証されていないなどとして、解体工事の差し止めを求める住民訴訟を盛岡地裁に提起
2019年1月17日	盛岡地裁が原告の請求を退ける判決
2019年1月19日	解体工事再開
2019年2月21日	職員遺族2組が町に第三者委による職員の死亡状況調査などを求める要望書を提出
2019年3月2日	解体工事（現場作業）終了
2019年3月11日	旧庁舎跡地で、町職員と職員遺族合同の初の追悼式を営む。8世帯10人の遺族が出席
2019年3月18日	旧庁舎跡地の緑地整備工事に着手
2019年6月28日	緑地整備工事終了

震災で逝った一人一人を忘れないために。官民共同で記憶の「風化に抗う」三つの取り組み。

納骨堂

被災地最多の身元不明者の遺骨を安置。遺族をはじめ誰もが共に祈りを捧げ、亡き人を思う。

2017（平成29）年2月19日、城山の町中央公民館の隣接地に完成した「納骨堂」で、東日本大震災の津波による身元不明の遺骨70体の納骨式が行われた。当時、町役場総合政策課で納骨堂建設を担当していた中村彬良は、骨壷を一つ一つ納めながら、これまでの思いが去来し、涙が止まらなくなったという。

納骨・慰霊の場の設置について検討するように指示があったのは、13（同25）年10月のこと。

「大槌町には町営墓地がないため、身元不明のご遺骨を安置する場所が必要だったのです」と中村は話す。

大槌町では津波後に大規模な火災が発生、遺体の損傷が激しかったため、DNA鑑定の困難な遺骨が多く、町内3カ所の寺院に保管されていた。その数は全被災地で最多とされる。月命日などでは3カ所全てを巡る遺族もいた。

町は、翌年7月に開催された議会全員協議会で整備方針について説明を行ったが、議員から納骨と慰霊の要素を一つにまとめることが必要なのか、高台の城山は高齢者には行きにくいなどの意見が出たという。

震災七回忌を迎える直前に営まれた納骨式

しかし、意見の集約がなかなかできず、仏教関係者からヒアリングなども行われた。

中村は、町と議会の調整役として、長い時間をかけて話し合った。時には、遺族や遺骨を保管している寺院の住職にも話を聞いた。

「計画が進まなくても、納骨堂は要らないと思う人はいませんでした。計画が具体的になってくると、震災との向き合い方、どのように弔っていくのか、新たにさまざまな意見が出てくるのです」

多くの人が弔いに対する深い思いを抱いている証拠でもあった。

建物に関しては、温かみが感じられる木造にし、開放性にも配慮。長期にわたり管理していくことも考えた設計となった。そして、七回忌を迎える直前に完成し、納骨式が催された。今後は追悼などの式典にも利用されるという。

その後、中村は他部署へ異動したが、定期的に納骨堂に足を運ぶ。

「花束が供えられているのを見ると、納骨堂を必要としている方がいらっしゃると実感する」と話す。

納骨式の後、身元が判明し、名前を取り戻した遺骨もあり、現在は61体の遺骨が安置されている。

鎮魂の森

記憶の風化を防ぎ、追悼の場としての役割も果たす、祈りの森を整備する。

「鎮魂の森」は、津波で犠牲となった町に関係する全ての人々の「追悼と鎮魂の祈りの場」として、2012（平成24）年から検討が始まり、整備計画が進められている。須賀町の一帯に、①追悼の場②復興の広場③花の森④記憶の森⑤望海の場――の五つのゾーンが造られる予定だ。

17（同29）年度には基本計画の検討（有識者委員会における審議）が行われた。その一環で町民の意見を取り入れながら検討を進めるためのワークショップや説明会、意見交換会を開催。小中学生と高校生を対象に5回、一般町民対象に2回の計7回行われた。

鎮魂の森基本計画のイメージスケッチ（今後の設計段階で変更可能性あり）

担当する町役場総合政策課（取材当時）の主事・山﨑鮎子は、「小学生からは遊具が欲しい。一般からは、町民や観光客のために大槌駅から鎮魂の森と町文化交流センターおしゃっちをつなぐ散歩コースを造るのはどうか、地域に昔から生育するクロマツなどを植えてほしいなど、さまざまな意見が出ました」と話す。多くの人が求めたのは、「日常的に来ることができる場所。震災を感じてほしいが、暗い場所ではなく明るい場所であってほしい」だったともいう。

計画検討委員会の委員として参加した町民の越田征男さんは、「犠牲者の魂を鎮め、町民の心を慰める場所として本当に必要なことは何なのかを考えることが重要。さらに、町外の方には東日本大震災について考えるきっかけの場所にする必要があると思います」と話す。

計画は現在も進行中だ。今西潤一郎さんは、大阪府箕面市から派遣され、技師として携わっている。「鎮魂の森には木々が植樹され、モニュメントなどが設置される予定で、長期間にわたり、維持管理が必要と思われます。維持管理に手がからないようにするためにどうすればよいのかを考えていきたい」と完成後のことを考えている。

甚大な被害の記憶を風化させないため鎮魂の森は、19年度から整備が予定されている。

生きた証

犠牲者の人生を回顧録に。621人分の『生きた証』事業。

町の犠牲者のほぼ半数に当たる621人の生きざまや被災状況などを収録した類例のない刊行事業が、2冊の回顧録『生きた証（あかし）』だ。2016（平成28）年度と翌17年度に1冊ずつ出版され、前者（A5判・1047ページ）に545人、後者（同・167ページ）に76人を掲載。生前の居住地別に氏名と顔写真、震災までの人生や当日の行動、遺族による追悼の言葉などを紹介している。

同事業は震災3年後の14（同26）年から、官民一体で実行委員会を組織するなどして展開。名簿などを基に遺族を訪ね、地域の顔役となる町内会関係者らが故人の軌跡を直接聞き取って文章に起こした。

担当した町役場総合政策課（当時）の中村彬良は、「一から作り上げる難しさと、ご遺族一人一人に寄り添い、傷つけないように配慮する緊張感が常にあった」と話す。聞き取りの方法について実行委員との間で慎重に議論を重ね、「人のつながりが強い大槌町だからできた」。

最初は「震災を思い出したくない」と聞き取りを辞退したものの、「大切な人の生きた証しを残したい」と気持ちが変化した遺族もいた。遺族自ら聞き取りをしたり、大手新聞社が協力したりした官民連携の事業。同回顧録を唯一の遺品として故人の仏壇に納める遺族もいる。

町民らの聞き取りでまとめられた『生きた証』

旧庁舎へのまなざし——保存と解体、二つの論理の背景にあるもの

大槌町「元気なこ近所つくり事業」地域アドバイザー
東北大学大学院文学研究科
坂口 奈央

被災から8年近くを経て、解体される旧役場庁舎（2019年1月19日撮影）

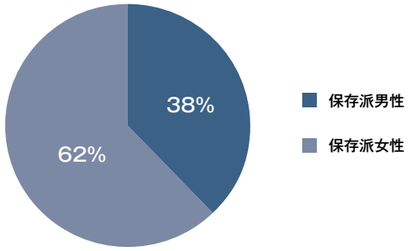
震災後、負の記憶の象徴として内外から注目された旧役場庁舎が、あの日から7年8カ月を経て、解体された。町民の方々にとっては、「やっと」なのか、「とうとう」なのか。しかし、解体によって、町の課題に決着は何もついていない。むしろ新たなまちづくりへの始まりであることを、どれだけの町民が意識できているだろうか。そこで、解体までのプロセスで見られた住民の葛藤を整理し、新たな大槌町を生み出す契機となるよう願い、以下考察する。

筆者は、議論が再燃した2016（平成28）年から2年間、旧庁舎に向けられるまなざしとその理由を、固有で多様な一人一人の人生を分析することで明らかにするため、総勢260人を超える町民に聞き取りを実施した。その結果、震災時に50代から70代前半だった人たちの主張に、一定の傾向が見られた。

保存派、女性に多く

まず、保存を望む人たちの声は、「一人の死を皆の死と捉え、生きていく指針として」（吉里吉里地区・50代女性）、「今後、何を目玉にして食っていくのか。町のランドマークとして」（沢山地区・60代女性）に整理され、特に女性に多い意見だった。

なぜこの世代の女性が、震災遺構の価値を前向きに捉えていたのか。震災遺構としてもう一つ注目された、釜石市の観光船「はまゆり」号が赤浜地区の民宿に乗り上げた印象的な光景を復元させようとした際に、婦人会メンバーが観光や雇用創出という意義を主張した理由とも重なる。この主張の背景には、夫の職業が「板子一枚下は地獄」と言われた北洋サケ・マス漁の乗組員であったことに起因し、日常生活の中で夫の死を意識しながら生きてきた女性の姿がある。1985（昭和60）年の統計によると、配偶者と死別した町の女性の割合は、2・35%を示すなど、岩手県平均や沿岸市町と比べて倍近く高く、当時、小中学校の卒業生名簿の保護者欄には女性の名前が多数を占めていたことからも裏付けられる。



■ 図11-1　保存を主張する町民の性別内訳（総数106）

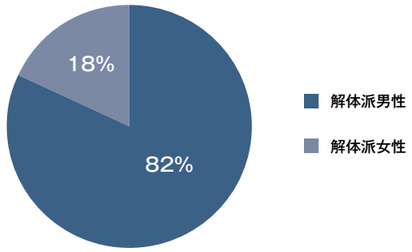
震災遺構を町の核に

このため、保存を主張する50代以上70代前半世代の女性は、世帯主として、または、不安定な夫の収入を補うための労働に従事し、夕食づくりなどの家事がおろそかになりがちだったという（1980年の町の成人女性就業率は8割に及ぶ）。また、ごみ捨て場の管理や規範形成、交通安全活動など、遠洋漁業で留守にする男たちに代わって地域を守り、にぎわいを創出する活動を主体的に担っていたのが、この世代の女性であった。彼女たちは、労働だけでなく地域活動も含めて精力的に行うことを「稼ぐ」という言葉で表現するなど、「稼ぐ」行為を介して、生活上の辛苦を乗り越える経験知が高かったことがうかがえた。

このような性別で分析することにジェンダー論的批判があるかもしれない。しかし、漁村に生きる女性の日常を見ると、男性の生産構造に伴う従属性や抑圧はなく、むしろ一目置かれた存在として生き生きと生活している。この世代の女性は、ウミとオカの性別役割分業をしたたかに、しなやかに、たくましく生き抜いてきた。こうした経験知から、上記の世代の女性は、震災遺構をまちづくりの核と捉えることで、非常時を乗り越える原動力に変換してきたのではないか。

「恥じて」解体望む

一方で解体を望む人の傾向もまた、震災時50代から70代前半世代に集中していた。このうち、同世代の男性の多くが解体の理由に「恥」という象徴的な言葉を次のように引用していた。「マスコミもいちいち騒ぎ過ぎ。外野にとやかく言われることが恥だし、それが後世に何を伝えられるのか」（赤浜・60代男性）。「恥」と表現するその社会的背景と住民の心意に迫る。



■ 図11-2　解体を主張する町民の性別内訳（総数108）

まずは、「恥」という用語の反意語にあたる「誇り」を形成してきた時代に着目する。高度経済成長に伴う漁港の大規模な近代化工事が進み、北洋サケ・マス漁とともに魚市場の水揚げが10～20億円へ推移する1960（昭和35）年から75（同50）年前後の社会の動きを見ていく。この期間は、震災時50代から70代前半の男性が青少年期を過ごした時代で、いわゆる「大槌プライド」が形成されたと言ってよい。

「大槌プライド」の原点は、漁業にある。遠洋船に乗れば、18歳で一軒家が建つといわれた時代で、この世代の男性にとって漁業は、一獲千金を実現する大槌の誇りだった。一方、一家に1台テレビが設置されるようになった72（同47）年、職業の選択肢が広がり、個人所得も5年間で4倍に増え、製鉄所勤務をはじめとする「釜石稼ぎ」など、経済的にも精神的にも安定したオカ仕事へ加速的にシフトした。こうして、この世代の男性の中には、首都圏で貿易会社や水産加工の流通業を起業するなど、都会での勝負に出る人も少なくなかった。

挫折経て誇り再構築

しかし、現実は厳しい。この世代の男性にとって「恥」につながる忸怩（じくじ）たる体験は、75（同50）年頃から始まった三陸沿岸を襲った社会変動である。新日鉄釜石の経営合理化に伴う事業縮小に始まり、オイルショックや200海里問題の影響で、漁業者でにぎわい発展した商店の数は、最も多かった76（同51）年に対し10年後には125店が閉店、販売総額は10分の1にまで落ち込んだ。

上京していたこの世代の男性は、実家から稼業の立て直しに対する

切実な訴えを受けてUターンし、生活立て直しへの覚悟を繰り返し迫られた。当時の様子について安渡の60代男性は、「都会みたいに外の人を入れずに、地域の中で何とかしようとして、大変な時なのに足の引っ張り合い。その結果、かまけぇ（夜逃げ）しちゃう」。75（同50）年の大槌町個人所得は、沿岸14市町村平均よりも高かったが、2003（平成15）年には、県平均より65万円低く、また沿岸市町村の平均も下回った。彼らは、低迷する地域経済の代わりに、自主防災組織の発足など地域住民とつながる組織的活動を積極的に仕掛けるなど、大槌町の誇りを、人とのつながりから再構築しようと尽力してきた。

旧庁舎に敗北感重ね

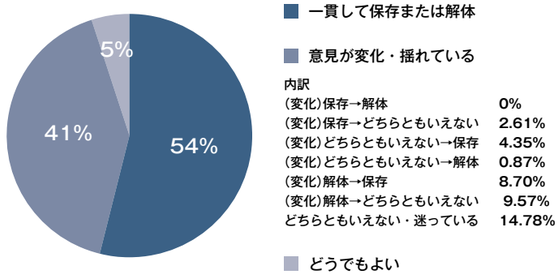
このような背景から、震災時60代前後の世代の男性にとって震災とは、多様な支援者が介入したことで大槌が新しい町に生まれ変わる契機になり得た。そこに水を差す格好となったのが、旧庁舎を巡る議論である。そもそも震災遺構の価値は、脅威を一目で伝えるインパクトにある。しかし、旧庁舎で多数の職員が犠牲になったことや解体を巡る行政の不手際が震災遺構の価値と混交して論じられたことで全国的な注目を集めた結果、「保存は正義」という論点にすり替わっていった。

特に、生活が根こそぎ変わる経験と覚悟を重ねてきたこの世代の男性ほど、旧庁舎被災を発端にした一連の過程によって、地域アイデンティティーを根底から否定されたような心境となり、結果「恥」という象徴的な言葉で解体を強く主張した。彼らにとって旧庁舎は、ダイナミックな社会変動を生き抜く中で経験した二重の敗北感や葛藤が映し出された象徴に見えた。震災遺構は、防災や減災のための伝承という観点が重要視されるが、生活者という視点で捉えたとき、住民が自らの暮らしとこれまでの生きざまという脈絡の中で遺構を観察していることが、この問題を通じて明らかになった。

揺れるまなざし

さらに、保存派と解体派のどちらにも共通する思いは、「しがらみのない新しいまちづくり」である。町民は、時間が経過すればするほど、そうした自らの思いを旧庁舎のあり方に重ね合わせて苦悩していることが、図11-3からも明らかである。特に、議論が再び動いた2016（平成28）年以降、旧庁舎に対するまなざしが揺れている、または変化した町民が4割いたことは、特筆すべき点である。

本稿で取り上げた震災時60代前後の世代は、復興まちづくりの中で精力的に活動し、住民主体のまちづくりに関する実績を重ねてきた。そんな彼らの「恥の場」という物言いは、一聴すると直感的で感受性が高いように捉えられるが、葛藤と覚悟を何度も重ねてきた生活経験を基に社会的に形成されたもので、他者を十分に納得させる生活者としての正当性がある。そんな生活者の論理は、複雑に見えるが、実はとてもシンプルなのである。震災遺構を巡って町を二分する論争となったが、それもまた大槌町らしい、新たなまちづくりへの通過点の一つではないだろうか。



■ 図11-3　旧庁舎の在り方について（総数263）　2016～18年調査

被災概要

東北地方太平洋沖地震の概要（気象庁発表資料等）

■ 東北地方太平洋沖地震の概要

地震発生時刻	2011年3月11日14時46分
発生場所	震央：三陸沖 （北緯38.06.2度、東経142.51.6度）
震源の深さ	24km
規模	マグニチュード9.0
最大震度	宮城県栗原市　震度7 大槌町の最寄り観測地点:震度6弱 （釜石市）
大津波警報の発表	2011年3月11日14時49分

■ 津波浸水高等

調査地域	最大波（m）
吉里吉里	16.1
吉里吉里港東側	22.2
赤浜	12.9
新港町	12.7
町役場付近	10.7
浪板※	19.1

国土地理院
※津波遡上高
痕跡高…痕跡高最大13.7m（安渡）（岩手県土整備部河川課）
津波浸水面積…4平方キロメートル（住宅地・市街地面積の52%）（国土地理院）

■ 県沿岸地域津波最大波

調査地域	最大波
釜石	15時21分　4.2m以上
宮古	15時26分　8.5m以上
大船渡	15時18分　8.0m以上
久慈港	15時21分　8.6m以上

※警報・注意報の発表
3月12日　20時20分　津波警報に切替
3月13日　7時30分　津波注意報に切替
3月13日　17時58分　津波注意報解除

■ 被災概要

被害の区分		被害	備考
人的被害	死者数	870人	関連死52人含む
	行方不明者数	416人	うち死亡届の受理件数415人
	計	1,286人	
家屋被害	全壊・半壊	4,167棟	2015年４月１日現在
	一部損壊	208棟	2015年４月２日現在
	計	4,375棟	
産業被害	水産業被害	5,127,926千円	水産施設、漁船、養殖施設等
	農業被害	610,000千円	水田、畑、用水路、農道
	林業被害	271,741千円	林野、林道
	商工業被害	14,039,490千円	建物、機械設備、商品等
	観光業被害	1,684,607千円	観光施設、自然公園
	計	21,733,764千円	
公共施設被害	役場庁舎等被害	9,555,102千円	建物、公用車等
	消防施設等被害	427,364千円	庁舎、機械、装備、消火栓等
	道路・海岸等被害	41,181,244千円	公共下水道等
	上水道施設被害	2,213,311千円	送水・配水・給水施設
	学校被害	3,044,796千円	建物、設備等
	社会教育施設被害	1,305,284千円	公民館、図書館、運動場等
	社会福祉施設被害	136,660千円	児童・障害・高齢者福祉施設
	計	57,863,761千円	
産業・公共施設被害（合計）		79,597,525千円	

1　人的被害

■ 地域別の死亡者および行方不明者数（単位:人、%）

地域	人口	身元判明者	行方不明者	死亡者数	死亡者率
町方	4,483	389	271	660	14.7
桜木町・花輪田	1,421	21	2	23	1.6
小枕・伸松	272	32	10	42	15.4
沢山・源水・大ケロ	3,104	61	13	74	2.4
安渡	1,953	170	47	217	11.1
赤浜	938	55	35	90	9.6
吉里吉里	2,475	72	23	95	3.8
浪板	404	14	10	24	5.9
小鎚	499	4	3	7	1.4
金沢	509	0	1	1	0.2
合計	**16,058**	**818**	**415**	**1,233**	**7.7**

※2019年6月現在。関連死を除く

■ 死亡者および行方不明者数

区分	内容（人）
身元判明者	818
行方不明者	415
死亡者合計	**1,233**
行方不明者数（死亡届未受理）	1
関連死	52
合計	**1,286**

※2019年6月現在

2　建物被害

■（2）地域別被害棟数（単位:棟）

地域	全壊	半壊	一部損壊	合計
町方	1,690	4	1	**1,695**
桜木町・花輪田	197	346	7	**550**
小枕・伸松	100	2	0	**102**
沢山・源水・大ケロ	197	162	99	**458**
安渡	665	18	17	**700**
赤浜	272	6	11	**289**
吉里吉里	395	38	34	**467**
浪板	63	4	12	**79**
大槌	0	0	5	**5**
小鎚	0	6	21	**27**
金沢	0	2	1	**3**
合計	**3,579**	**588**	**208**	**4,375**

※全壊は流失を、半壊は大規模半壊を含む

■（1）被害状況別棟数

被害区分	棟数（棟）	被災率（%）
流失	3,350	52.2
全壊	229	3.6
大規模半壊	486	7.6
半壊	102	1.6
一部損壊	208	3.2
被災あり（計）	**4,375**	**68.2**
被災なし（計）	**2,042**	**31.8**
合計	**6,417**	**100.0**

※2014年度に再集計を実施。事業所などを除く
※地震被害を含む

4　消防施設等被害

■ 消防施設等被害

区分	被害額（千円）	被害数
庁舎等	210,000	7棟
自動車ポンプ	75,000	3台
ポンプ付積載車	10,000	1台
消防無線電話装置	7,072	20台
機械　計	**92,072**	
装備（防火衣一式）	5,292	126人分
消火栓	120,000	120カ所
被害額合計	**427,364**	—

3　上水道

■ 上水道施設被害報告

被害施設名	被害額（千円）	被害箇所
送水施設	147,249	ポンプ場2カ所　L=1.62km
配水施設	1,732,102	ポンプ場1カ所　L=54.21km
給水施設	333,960	給水管　N=3,795カ所
合計	**2,213,311**	

※2012年8月1日災害復旧費調査時

5　土木関係被害

■ 土木関係被害

区分	県施設		町施設		計	
	被害箇所	被害額（千円）	被害箇所	被害額（千円）	被害箇所	被害額（千円）
道路	17	844,100	59	403,900	**76**	**1,248,000**
橋梁	5	290,000	3	295,000	**8**	**585,000**
河川	17	5,750			**17**	**5,750**
海岸	107	31,443,494			**107**	**31,443,494**
公共下水道			—	5,000,000	—	**5,000,000**
漁業集落環境整備事業			—	2,899,000	—	**2,899,000**
計	**146**	**32,583,344**	**62**	**8,597,900**	**208**	**41,181,244**

6 学校等被害

■（1）被災学校数

区分	施設数	被災学校数	備考
幼稚園	2校	2校	みどり幼稚園、おさなご幼稚園
保育園	6園	3園	大槌保育園、安渡保育所 吉里吉里保育園
小学校	5校	4校	大槌・安渡・大槌北・赤浜小学校
中学校	2校	1校	大槌中学校
高等学校	1校	0校	施設数１＝県立高等学校

■（2）児童生徒被害報告（単位:人）

区分	死者	行方不明者	備考	
			重症	軽傷
町内合計	**28**	**5**		
幼稚園	3			
保育園	17	2		
小学校	3			
中学校	2			1
高等学校	3	3		

※教職員には被害なし

■（3）学校被害報告（単位:千円）

	建物	工作物	土地	設備	被害額合計
大槌小学校	871,252	4,956	19,656	1,776	**897,640**
安渡小学校	88,853	3,011	13,161	695	**105,720**
赤浜小学校	297,206	1,009	10,773	483	**309,471**
大槌北小学校	648,618	7,556	25,263	1,522	**682,959**
大槌中学校	963,941	7,458	75,033	2,574	**1,049,006**
計	**2,869,870**	**23,990**	**143,886**	**7,050**	**3,044,796**

■（4）社会教育施設被害報告

区分	箇所数（カ所）	被害額（千円）	被害状況等
公民館	5	**199,223**	安渡分館、赤浜分館、吉里吉里分館全壊等
集会施設	7	**694,013**	小枕集会所、須賀町栄町保健福祉会館全壊等
図書館	1	**127,908**	全壊
運動場等	10	**284,140**	B&G海洋センター、農村広場全壊等
計	**23**	**1,305,284**	

※調査中の被害額を含まず

7 社会福祉施設被害

■ 社会福祉施設被害

区分	被害額（千円）	被害数
建物（全壊）	97,000	559㎡
建物（半壊・一部破損）	8,325	103㎡他
設備	16,335	9カ所他
土地	15,000	500㎡
被害額合計	**136,660**	—

8 水産関係被害

■ 水産関係被害

区分	被害額（千円）	被害数
水産施設	1,177,644	6カ所
漁船	2,204,486	672隻
漁具（定置網）	874,460	3カ所
養殖施設	543,859	540カ所
水産物	327,478	1,876t
被害額合計	**5,127,927**	—

9 農林関係被害

■ 林業関係被害

区分	被害額（千円）	被害箇所
林野	225,000	301ha
林道	46,741	6路線
被害額合計	**271,741**	—

■ 農業関係被害

区分	被害額（千円）	被害箇所
水田	424,000	10ha
畑	175,000	5ha
用水路	4,000	20カ所
道路	7,000	20カ所
被害額合計	**610,000**	—

10 商工関係被害

■ 商工関係被害

区分	商業関係	工業関係
被災事業所数（事業所）	332	128
被災授業員数（人）	482	720
土地（千円）	—	—
建物（千円）	4,405,350	2,102,300
什器備品・機械設備等（千円）	1,793,610	3,643,390
商品・原材料製品等（千円）	995,290	1,099,550
小計（千円）	**7,194,250**	**6,845,240**
被害額合計（千円）	**14,039,490**	

11 観光施設被害

■ 観光施設被害報告

区分	自然公園		観光施設		計	
	被害額（千円）	被害数（カ所）	被害額（千円）	被害数（カ所）	被害額（千円）	被害数（カ所）
上下水道			150,438	4	150,438	4
野営場施設	47,436	4	28,005	3	75,441	7
その他			18,728	2	18,728	2
公共施設　計	**47,436**	**4**	**197,171**	**9**	**244,607**	**13**
宿泊施設	1,300,000	1	140,000	12	1,440,000	13
民営施設　計	**1,300,000**	**1**	**140,000**	**12**	**1,440,000**	**13**
被害額合計	**1,347,436**	**5**	**337,171**	**21**	**1,684,607**	**26**

12 町指定文化財被害

■ 町指定文化財被害報告

種別	文化財の名称	被害状況
有形民俗	オシラアさま（上町）	焼失
有形文化財	江岸寺山門（末広町）	焼失
有形文化財	神明堂石灯籠（上町）	流失
有形文化財	神明堂獅子頭（上町）	流失
有形文化財	木造法華経三十部読誦供養塔（末広町）	焼失
有形文化財	絹本著色菊池祖睛画像（末広町）	不明　所有者宅全壊
有形民俗	マイリノホトケ（吉里吉里）	不明　所有者宅流失
有形文化財	金銅伝牛頭天王座像懸仏（上町）	焼失

13 庁舎等被害

■ 庁舎等被害報告

区分	建物		建物以外		公用車		合計	
	被害数（カ所）	被害額（千円）	被害数（カ所）	被害額（千円）	被害数（台）	被害額（千円）	被害数（カ所）	被害額（千円）
全壊	127	7,517,511	21	1,742,102	34	59,850	**182**	**9,319,463**
半壊	53	224,261	1	11,378			**54**	**235,639**
計	**180**	**7,741,772**	**22**	**1,753,480**	**34**	**59,850**	**236**	**9,555,102**

復興の歩み
―大槌町の8年―

2011（平成23）

3.15 寺野運動公園に自衛隊の車両が集まる

3.15 町立吉里吉里中学校校庭を臨時ヘリポートとして活用

3.25 大槌町社会福祉協議会によるボランティアセンターの立ち上げ

3.27 自衛隊が寺野運動公園に仮設銭湯「すずらん湯」を設置

4.20 各小中学校で始業式が行われる

4.25 町立大槌小学校の校庭に仮庁舎を移転

5.4 町内初の仮設住宅、吉里吉里地区で入居開始

5.10 民宿の屋根に津波で乗り上げた釜石市の観光船「はまゆり」が下ろされる

6.4 「やっぺし！大槌再興祭り」を町立大槌中学校で開催

6.18-19 東日本大震災犠牲者合同慰霊祭を開催
大槌中学校の校庭に延べ5,000人以上が参列した

7.26 自衛隊が撤収

8.11 全避難所を閉鎖

9.20 仮設校舎で授業開始

9.24 「大槌まつり」を小鎚神社で開催
震災前から続く大槌稲荷神社と小鎚神社の例大祭。被災から半年で開催にこぎつけた

10.5 町発行広報誌「広報おおつち」再開

10.10 町地域復興協議会始まる

10.11 大槌中学校で体育祭開催
震災後全校生徒がそろっての初めての行事

11.7 魚市場再開

11.11 「おらが大槌復興食堂」開店
「大槌町の復興を支援しに来てくれる人々に、おいしいものを食べて力を付けてもらいたい」という思いから、一般社団法人おらが大槌夢広場が立ち上げた食堂

12.17 仮設商店街の「福幸きらり商店街」オープン

12.22 ショピングセンター「シーサイドタウンマスト」リニューアルオープン
多くの町民に親しまれるショッピングセンター。被災し営業を停止していたが、新規店舗や銀行などが加わってリニューアルした

12.13 蓬莱島（ひょうたん島）の灯台点灯式
町民による新しいデザインに生まれ変わった灯台に光がともった

12.15 「おおつち鮭帰願祭」で鮭のつかみ取り復活
会場の福幸きらり商店街は、鮭をつかもうとする子どもたちの声で活気づいた

2013（平成25）

4.4 新大槌小学校開校
町立の大槌小学校、安渡小学校、赤浜小学校、大槌北小学校の旧4校を統合。2015年には大槌中学校との小中一貫教育へ移行

5.19 世界初の湧水一斉調査
町民や全国からのボランティアら210人が参加した

6.15 友情の「瀬谷丸」進水式
横浜市瀬谷区の住民の募金活動で建造され、新おおつち漁協に寄贈された最新鋭定置網漁船。瀬谷区の住民148人がバスで駆け付け、漁協関係者らと共に瀬谷丸の門出を祝った

6.16 町民楽団「大槌ウインドオーケストラ」初演奏
「町の元気を取り戻したい。そして支援してくれた多くの皆さんに音楽を通して感謝の気持ちを伝えたい」という思いから結成した町民楽団が演奏を初披露

6.20 新山高原の展望台に観光望遠鏡設置
大槌湾から早池峰山まで360度のパノラマが楽しめる

7.27 吉里吉里海岸で「砂の芸術祭」開催
海岸で砂像づくりを楽しむイベント。20年ぶりに復活し、15団体130人が参加した

8.8 蓬莱島を町の文化財に指定

8.23 2艘目の最新鋭定置網漁船「第一久美愛丸」。餅まきで進水式祝う

11.14 秋サケ定置網漁 瀬谷丸と第一久美愛丸で出港
三陸沿岸で有数の規模を誇る沖野島漁場の定置網。この日の水揚げは1,834匹、前日は2,891匹だった

2012（平成24）

3.1 新おおつち漁協発足

3.11-12 東日本大震災慰霊祭を開催
寺野ふれあい運動公園野球場に延べ3,600人が参列

3.31 「おおつちさいがいエフエム」放送開始
震災で失われた有線放送に代わって始まったミニFM放送局。町の情報や昔話、音楽番組などを放送

4.1 吉里吉里海岸清掃開始

4.30 「千年の杜づくり植樹祭」開催
がれきを混ぜた盛り土に16種類の苗木3,000本を植樹。約400人が参加した

5.2 大槌湾でウニ漁再開

6.30 「大槌ありがとうロックフェスティバル」開催
「大槌町を支援してくれた人々にありがとうの気持ちを伝えたい」という思いから開催。町民の募金により準備された打ち上げ花火が上がった

8.6 旧大槌小学校の校舎を改装した町役場で業務再開

8.30 大ケロ地区と吉里吉里地区で災害公営住宅入居開始

9.5 新おおつち漁協が初の定置網漁
ソウダガツオやサバが水揚げされ、総水揚げ量は3トン以上

9.29 安渡産大槌復興米の収穫
津波でどこからか流れ着き、安渡地区の住宅跡で実った三株の稲から始まった復興米

11.11 中央公民館上の駐輪場に「希望の灯り」点灯
神戸市の「1.17希望の灯り」から分灯された

3.18 大槌小学校、吉里吉里小学校で最後の卒業式

移行前の「小学校」として最後の行事となった

4.7 大槌学園・吉里吉里学園入学式。小中一貫校として初めての入学式

町内合わせて80人の1年生が、9年間の学園生活をスタートさせた

4.12 「復興グルメF-1大会」を福幸きらり商店街で開催

岩手、宮城、福島3県の商店街などがオリジナル料理を提供する大会。大槌町からは3団体が参加

7.1 第1回「町地方創生総合戦略検討委員会」が町中央公民館で開催

7.4 寺野臼澤団地でまちびらき式

入居予定者や地域住民などが新しい町のスタートを祝った

2016（平成28）

1.30 「おおつち感謝祭」初開催

ボランティアや応援職員などの復興支援者と町民が語らう交流会や、町民楽団によるコンサートなどが行われた

2.28 「おおつちバラエティーショー」開催

町内外の団体がつくり上げるイベント。会場の城山公園体育館では出演者200人、観客約600人の心が一つになった

4.17 「浪板海岸ビレッジ」オープン

浪板海岸の観光再生に向け、にぎわいを取り戻す拠点施設として完成

4.29 「ひょうたん島まつり」復活

地元海産物をふんだんに活用したイベントが開催され、訪れた人々は三陸の春の魅力を満喫

2014（平成26）

5.30 「生きた証プロジェクト」第1回実行委員会開催

震災で犠牲となった町民の人柄や被災状況を聞き取り、未来に残すプロジェクト。町民や全国からのボランティアら210人が参加した

6.15 震災後初の「新山高原まつり」

レンゲツツジが群生する新山高原での祭りが4年ぶりに復活。紙飛行機の滞空時間コンテストが行われ、神楽や虎舞、鹿子踊が披露された

7.9 吉里吉里小・中学校が合同で初の郷土芸能発表会

小中一貫教育の柱となる「ふるさと科」の授業の一環

7.26 吉里吉里海岸海水浴場で震災後初の海開き

4年ぶりとなる海開き。夏の日差しが照りつける浜辺に、子どもたちの歓声がこだました

8.31 被災した蓬莱島の守り神「弁天様」が修復を終え帰郷

11.2 初の「大槌町民大運動会」を大槌小・中学校仮設グラウンドで開催

大槌高校生がまちづくりに向けたコミュニティー戦略案として発案

11.12 震災後初のサンマ水揚げ

船籍港・根室の第六十三若竹丸（19トン）が入港。約25トンの水揚げがあった

12.10 小中一貫教育校「大槌学園」の校舎建設に着工

2015（平成27）

1.6 姉妹都市との交流を再開

米国カリフォルニア州フォートブラッグ市との姉妹都市交流を再開

2.5 広報おおつち600号発行

1957（昭和32）年創刊。半世紀を超える

3.8 安渡地区で町内会と町役場合同の防災訓練実施

県の防災ヘリによる訓練も行われた

11.11 「ふるさと大槌会」創立30周年総会開催

東京都内の会場に大槌弁が飛び交った。会員数は450人を超える

12.7 大槌町の「ふるさと科」の教育活動が評価され、大槌町教育委員会地域学校協働本部が文部科学大臣表彰を受賞

2018（平成30）

3.12 『生きた証回顧録』平成29年度版配布開始

6.10 大槌町文化交流センター「おしゃっち」オープン

11.4 産業まつり、8年ぶりに復活

商工会が主催し、地元の水産・商工業者ら41店が出店。サンマやホタテ焼き、サケ汁などのさまざまな地元の味が並んだ

2019（平成31）

1.12 釜石山田道路 大槌ー山田南IC間開通

3.2 旧庁舎の解体工事が終了

3.23 三陸鉄道リアス線が全線開通

震災で運休していたJR山田線が三陸鉄道に経営移管され、釜石―宮古間55.4キロメートルが8年ぶりに鉄路で結ばれた。大槌駅では町民らが盛大に一番列車を迎えた

5.22 「おおつち新山高原ヒルクライム」初開催

町役場前から新山高原山頂付近をコースとする自転車大会。県内外から約220人が参加した

9.26 大槌学園新校舎が完成

2015年春から本格実施されている小中一貫教育の拠点となる

11.5 震災後初の町内一斉大槌町防災訓練

津波防災の日（世界津波の日）に大槌町内で震災後初となる町内一斉の防災訓練が行われた。約1,900人が参加した

2017（平成29）

1.24 町内全てのトンネルが貫通

2.19 「大槌ジョイントコンサート」開催

音楽の力で大槌に笑顔を。町民の吹奏楽団体が一堂に会した

2.19 「東日本大震災津波物故者納骨堂」が城山地区に完成し、納骨式が行われた

身元不明の遺骨を安置して供養する場が完成

3.15 「生きた証回顧録」平成28年度版配布開始

4.6 大槌学園、新校舎に移ってから初めての入学式

4.17 桜木町地区避難路竣工式

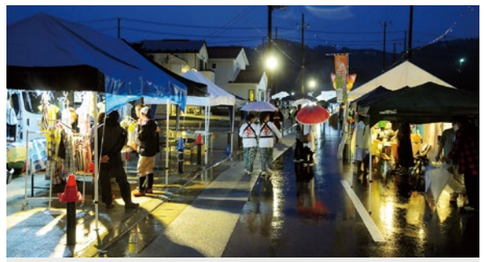
来賓のほか、住民約60人が参加。参加者はテープカット後に最上段まで上った

8.8 「大槌町震災アーカイブ～つむぎ～」公開

東日本大震災津波に関する画像や文書など、約1万4,000点を収録したウェブ上のアーカイブとなった

8.11-12 大槌駅舎デザイン総選挙

「ひょうたん島」をモチーフにしたデザインが選ばれる



8.22 「よ市～夏祭り～」復活

末広町通りで7年ぶりに復活。フリーマーケットやキッチンカー、地元の物産販売店などが並び、特設ステージではアマチュアバンドの演奏が披露された

参考文献

（五十音順）

【第3章】

『改訂保存版　東日本大震災津波詳細地図』原口強・若松暉　古今書院　2013年

「2011年東日本大震災火災等報告書（完全版）」日本火災学会　2015年

【第5章】

『岩手県トラック協会東日本大震災記録誌　心から心へ』公益社団法人岩手県トラック協会　2014年

『大槌の津波　その記録、そして出会った人々』植田俊郎・植田美智子　2013年

『強絆復興　東日本大震災対応の記録2011・3・11』一般社団法人岩手県医師会　2014年

「東日本大震災による被災現況調査（岩手3）B-5避難実態調査　地区・集落代表者避難行動調査結果概要【大槌町編】」東京建設コンサルタント・邑計画事務所共同提案　国土交通省　2012年

『猛威への挑戦　東日本大震災―釜石大槌消防活動の記録』釜石大槌地区行政事務組合消防本部・釜石大槌東日本大震災活動記録編集委員会　2012年

『2011・3・11　あの日の教訓　東日本大震災活動記録』釜石大槌地区行政事務組合消防本部・活動記録編集委員会　2013年

『3・11東日本大震災　遠野市後方支援活動検証記録誌』遠野市総務部沿岸被災地後方支援室編集　遠野市　2013年

【第6章】

『岩手県東日本大震災津波の記録』岩手県　2013年

『大槌町保健師による全戸家庭訪問と被災地復興』村嶋幸代・鈴木るり子・岡本玲子編著　明石書店　2012年

『大槌の津波　その記録、そして出会った人々』植田俊郎・植田美智子　2013年

『教育を紡ぐ―大槌町　震災から新たな学校創造への歩み』山下栄三郎・大槌町教育委員会編著　明石書店　2014年

『強絆復興　東日本大震災対応の記録2011・3・11』一般社団法人岩手県医師会　2014年

『実証・仮設住宅　東日本大震災の現場から』大水敏弘　学芸出版社　2013年

報道資料「直轄国道の道路啓開と応急復旧作業について～30日現在で、99％の通行確保、今後は本格復旧へ～」（http://www.thr.mlit.go.jp/Bumon/kisya/saigai/images/34032_1.pdf）国土交通省東北地方整備局道路部　2011年3月31日

『日精協誌第31巻第9号』日本精神病院協会　2012年「東日本大震災における岩手県の心のケアの取り組みを振り返って」大塚耕太郎・酒井明夫・中村光・赤平美津子・富沢秀光・佐藤瑠美子・伴亨

「東日本大震災誌　子どもたちの命を守るために」大槌町小・中学校校長会　2011年

【第7章】

『大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」』社会福祉法人大槌町社会福祉協議会　2015年

【第8章】

『東洋大学PPP研究センター紀要　№3』東洋大学PPP研究センター　2013年「岩手県大槌町の震災復興の現状と課題」関幸子

「復興まちづくり大槌株式会社について」復興まちづくり大槌株式会社　2019年

取材協力

（敬称略、五十音順）

大槌高校復興研究会

大槌町社会福祉協議会

東北大学文学部社会学研究室

明治学院大学ボランティアセンター

吉見　政志

制作スタッフ

（監修以外は五十音順）

【編集・執筆】

相坂　奈津樹

石川　晃

内澤　稲子

菊地　健二

木戸場　美代子

坂口　奈央

佐藤　孝雄

佐藤　文香

髙橋　拓磨

三宅　真由美

【撮影】

近岡　和彦

【デザイン】

相坂　織絵

加賀　寿美江

藤沢　優希

【表紙イラスト】

臼澤　洋巳

【アドバイザー】

坂口　奈央

髙橋　英悟

【監修】

大槌町教育委員会

北田　竹美

臼澤　洋喜

佐藤　孝雄

岩手県大槌町 東日本大震災記録誌

生きる証

2019年（令和元年）7月発行

企画・発行

岩手県 大槌町

〒028-1115 岩手県上閉伊郡大槌町上町1番3号

編集・印刷

山口北州印刷株式会社

本誌の著作権は大槌町に帰属します。

岩手県大槌町 東日本大震災記録誌 生きる証

岩手県 大槌町